

ソードアート・オンライン イン～The Parallel Game～ 《リメイク検討 中》

和狼

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

並行世界——それは、ある世界から『可能性』の数だけ分岐し、その世界と並行して
存在する別の世界。所謂『もしも世界』。

これは、正史——約四千人の犠牲者を出しながらも、第七十五層で『黒の剣士』キ
リトが終わらせる事に成功したSAOとは異なる、『もしも』なSAOの物語である。

【Attention】

- ・作者は本作が当サイトに於ける処女作となります。

・作者は文章力や表現力が下手くそかもしません。

・作者は『インフィニティ・モーメント』をプレイしていない為、原作以外のソードスキル、アイテム、モンスターの名前などは殆どオリジナルなものとなります。
・作者の手腕や都合上、更新に日数を掛ける場合がございます。

――以上の事を予めご了承の上で、本作品をお楽しみ下さいませ。

目次

| | | | |
|---------------------------|-----|------------------------------|-----|
| Prologue : 絶望へのリンク・ストート | 85 | Chapter. 6 : それぞれの思い | 71 |
| Chapter. 1 : 風の前の出会い | 1 | Chapter. 7 : 最初の激闘！ | v |
| 11 | | Chapter. 8 : 月夜の黒猫団 | 101 |
| Chapter. 2 : レクチャーのち異変の兆し | 22 | s 獣人の王！ | |
| Chapter. 3 : 悪夢の幕開け | 114 | Chapter. 9 : 会議と絶剣とビーストティマード | |
| 34 | | Chapter. 10 : 激震！ vs | 124 |
| Chapter. 4 : 義務と意思と宣言 | | Chapter. 11 : 加速する激闘！ | 136 |
| Interval : 和人と詩乃 | 63 | Chapter. 1 : 岩壁の巨人！ | 149 |
| Chapter. 5 : 第一層攻略会議 | | Chapter. 11 : 加速する激闘！ | |

| | |
|-----------------------------|-----|
| Chaprer. 12 : 十六の月夜に眠る黒猫と騎士 | 162 |
| Interval : シリカの悩み | 176 |
| Chapter. 13 : 聖夜にサチ有らん事を | 182 |
| Chapter. 14 : 攻略組最恐のブレイヤー | 194 |
| Interval : 剣士達の癒し | 213 |
| Chapter. 15 : 晴天下の攻防 | 224 |
| Chapter. 16 : 惨劇は突然に | 234 |
| Interval : 黒と絶剣 《前編》 | 318 |
| Chapter. 22 : 真実と想い | 304 |
| Chapter. 21 : 紅の殺人者 | 288 |
| Chapter. 20 : 解ける謎、迫る影 | 251 |
| Chapter. 19 : 幽幻の復讐者 | 266 |
| Chapter. 18 : 罪と罰 | 236 |

356

Interval : 黒と絶剣 『中編』

370

Interval : 黒と絶剣 『後編』 386

太陽と月 386

Chapter. 23 : 『笑う棺桶』 討伐

作戦会議

更新再開のお知らせ & 次作品サンプ

ル
428 408

Prologue：絶望へのリンク・スタート

『ソードアート・オンライン』——通称『SAO』。

全百層から成る、石と鉄で出来た空飛ぶ巨城『アインクラッド』……その浮遊城を舞台に、数多のプレイヤー達が、立ちはだかる数多のモンスター達を倒しながら頂上たる第百層を目指す、VRMMORPG（仮想大規模オンラインロール扮演游戏）。あらゆる物事がリアルに再現された仮想空間で行われるそれは、数多くのプレイヤー達によつて楽しまれる“はずだった”。……そう、“はずだった”的だ……。

——二〇一二年十一月六日、日曜日。

——その日、世界は大きく揺れ動き、多くのプレイヤー達が人生を大きく変えられた。

——絶望的な方向へと。



「ゞちそうさま」

一〇一二年十一月六日、日曜日、午後十二時二十分。

昼食を食べ終えた俺—綾野和也（あやの かずや）は、使った食器を流し台へと運び、言葉少なに自室の有る二階へと足を向ける。

「あたしも、ゞちそうさままでした！」

そんな俺を追い掛けて来るかの如く、我が妹—綾野珪子（あやの けいこ）も俺同様に食器を片付け、速足で階段を上がつて来た。

「もうすぐだね、お兄ちゃん！」

「ああ」

「すっごく楽しみだね！」

「そうだな」

そう、もうすぐ始まる。この後午後一時より、世界初のVRMMORPG『ソードアート・オンライン』……その正式サービスが。

「でね、お兄ちゃん……」

不意に、二階の廊下で俺を追い抜かした珪子がこちらへと振り返り、その大きな双眸

で俺を見つめて来る。こういう仕草をする時は、大抵何か頼み事が有つたりする。さて、今回は何をお願いしてくるのだろうか？

「ん？」

「始めるまでの間、お兄ちゃんが纏めたSAOのやり方ノートをもう一度読ませて？」

SAOのやり方ノート——それはその名の通り、SAOのやり方や敵モンスターなんかの情報を俺が簡単に書いて纏めた、所謂SAOの攻略ノートの事だ。

何故その様なものを書けたのかというと、それは、俺が奇跡的にも正式サービス開始前の稼動試験——ベータテストのテスターの一人に選ばれたからなのだ。

募集人数はたったの千人に対して、応募総数はなんと十万人。そんな中から選ばれたのだから、奇跡的だの幸運だと言つても過言ではなかろう。

「ああ、アレな。構わないぜ？」

「ホント！ ありがとう、お兄ちゃん！」

さて。俺がノートを貸す事を許可すると、珪子は俺に笑顔を向けてお礼を言い、俺の部屋へと入つて行く。遅れて俺も自室へと入ると、珪子は俺の机から目当ての物を見付け出し、傍に有る俺のベッドに腰掛けた所だった。

普通は自分の部屋に持つてつて読むもんじやねーのか？と思いつつ、開始までまだ大分時間が有るが、ノートを読む珪子の隣でSAOを始める為の準備を始める。余裕を

持つての行動だ。

「お前も早めに準備しとけよ?」

準備が終わつた所で、珪子にも早めに準備をする様にと声を掛ける。すると、珪子は「はーい!」と返事をしてから、直ぐ様行動に移るべく俺の部屋から出て行つた。

その様子を横目で見ながら、暇潰しに小説でも読もうと携帯を手に取り、サイトを開こうとした。が、その行動は途中で止められる事となつた。

ガチャリ

そう、珪子が再び俺の部屋に入つて來たのだ――

――その手に“SAOをプレイする為の準備一式”を抱えて。

「……何…してんだ…?」

頭の中に一つの明確な答えが浮かんでしまつてはいるが、そうではないと願いつつ、恐る恐る珪子へと問い合わせる。

「何つて、SAOの準備だよ? お兄ちゃんが早めに準備しろつて言つたんじやん

「……悪い、質問を変えよう。珪子…お前何処でSAOをやるつもりだ…?」

「お兄ちゃんの部屋でだよ!」

(……嫌な予感が的中したぜ。しかも即答かよ……)

どういう訳なのか、珪子は俺の事を異様なまでに好いている様で、それ故か俺と行動を共にしたがる。出掛けるにしろ、遊ぶにしろ、何をするにしてもだ。挙げ句、時々寝たり風呂に入つたりするのも一緒だ。流石に風呂に関してはお袋達も何度もそろそろやめる様にと注意しているのだが、一向にやめる気配が無い。

今回のSAOだつてそうだ。珪子は、俺がやるからという理由で自身もやる事にしたのだ。まあ、元から興味は有つた様だが。

余談だが、このSAOには十三歳以上推奨という年齢制限（レイティング）が存在するのだが、現在十二歳と制限未満であるはずの珪子は、「和也が一緒なら大丈夫でしょ」という、俺への責任の押し付けとも取れる様なお袋からの許可の許、プレイする事が出来ちまつたりするのだ。

閑話休題。

何が理由なのか未だに分かつていないが、そこまで好かれる様な事をした覚えは特に無い。精々優しく接してやり、よく一緒に遊んでやり、困っている時に助けてやつたり、時に珪子を虐める様な奴らから守つてやつたりと、その程度の事くらいしかしていないはずだ。

それは今は置いておくとしてだ。とにかく今は珪子を説得して、一緒の部屋でプレイ

するという状況を出来るだけ回避しなければ。

「そ、そ、うか。でもな、ベッドに二人で横になるには、ちょいとばかり狭いと思うんだが……？」

俺が一緒の部屋でプレイする状況を避けたい理由……それは、SAOをプレイしている間の身体の状態に有る。

SAOを動かすゲームハードたる『ナーヴギア』は、その構造状、脳から自身の身体に向けて出力される命令を遮断してしまう。つまり、プレイ中のユーザーは現実の身体を動かす事が出来なくなるという事だ。

そうとなれば、プレイ中は椅子に腰掛けるか、ベッドに横になるなどして、身体を楽な姿勢にしておくのが好ましい。で、二人で一緒の部屋でプレイするとなれば、必然的に二人でベッドに横にならなければならなくなる。嫌ではないのだが、出来るだけ避け方が良いと思うのだ。

どちらかが椅子や床でやれば良いのかもしれないが、やはりベッドの方が落ち着くだろうし、何より俺としては珪子に辛い姿勢はさせたくない。

「大丈夫！　何時もみたいにお兄ちゃんにくつづいて寝るから！」

「くつ……。け、けどなあ、そんなことしたら俺の匂いが付いちまうぞ？　……そこまで臭い訳でもないが」

「それも大丈夫！　あたし……お兄ちゃんの匂いなら付いても構わないから！」
「なつ……!?」

以上の理由から、色々と理由を付けて珪子への説得を試みるも、全く効き目無し。て
いうか、俺の匂いなら付いても構わないつて……い、色々大丈夫か、妹よ……。
「ねえ、お兄ちゃん……」

などと、珪子の発言に少しばかり引いていると、珪子が俺の許へ近付いて来て、両の
大きなお目々で俺を見上げています。ハイ、所謂上目遣いという奴ですね。……てかこ
れ、かなり不味くないか……？

「お願い、一緒にやろう？」

「うつ……!?」

「一緒に……やろう？」

「くつ……!?」

「——やろう？」

「ツ……!?…………ハイ」

「やつたー！　お兄ちゃん大好き！」

……ハイ、逆に見事に説得されました。これぞ珪子必殺の説得術『上目遣いで反復お
願い』である。

実を言うと、俺は過去殆どこの説得術に勝てていない。想像してみて欲しい。幼げの有る可愛い顔をして、大きな瞳で上目遣いされて、何度も繰り返しお願いされるという状況を……。

……どうして断る事が出来ようか？　いや、ほぼ出来まい。

とにもかくにも、許可してしまつた以上は覚悟を決めて、一緒に寝るしかあるまい。



その後、珪子も準備を済ませてからはそれぞれに時間を潰し、開始時間が近付いた所で、ヘルメット型のハードであるナーヴギアを被り、二人でベッドに横になる。……珪子は宣言通り、俺にくつづいてだ。

「いよいよだね、お兄ちゃん！」

「ああ」

「何だかドキドキして来た！」

「俺も、久々にやるからドキドキしてるよ」

今が今かと、開始時間になるのを興奮しながら待つ俺達。

そして、ついに――

ナーヴギアに表示されたデジタル時計が、S A O 正式サービスの開始時間たる午後一時へと変わった。

「んじや、始めるとしますか？」

「うん！ セーの——」

「リンク・スタート！」

そして、俺達は二人同時に、仮想空間——S A O の世界へと飛び込む為の魔法の合言葉を唱えるのだった。

——この時、俺達はまだ何も知らなかつた。

——俺達が唱えた合言葉が、禁断の呪文だつたという事を。

——仮想空間へと続く虹色のリングが、地獄への入口だつたという事を。

——一〇二二年十一月六日、日曜日……この日が、俺達の人生の大きな変わり目となるという事を。

——俺達は、何も知らなかつたのだつた。

Chapter. 1 : 嵐の前の出会い

「……また来れたぜ」

それが俺——綾野和也……否、プレイヤーネーム『カミヤ』の、SAOの舞台たる浮遊城『インクラッド』に降り立つての第一声だつた。

懐かしさから周りを見回す。

ベータテスト時代から大きく変わった様子は無さそうな、SAOのスタート地点にして第一層の主街区たる『はじまりの街』には、青白い光と共に次々と他のプレイヤー達が現れている所だつた。

「あ、あのう……」

ふと、隣……それも少し低い位置から、誰かに声を掛けられる。声のした方へと顔を向けると、そこには栗色の髪を左右で束ね、大きな瞳をし、幼げの有る可愛い顔付きをした、何処か珪子を彷彿とさせる少女が居た。

「もしかして……和也お兄ちゃん……ですが……？」

「……そういうお前は、珪子……なのか……？」

「あ、はい。……それじゃあ……!?」

「ああ。俺はお前の兄——綾野和也で合つてるよ」

「あつ、やつぱりお兄ちやんだつたんだ！ 良かつたあ。間違つてたらどうしようかと思つたよお」

その正体は、なんと我が妹の珪子だつた。

さて、何故兄妹であるにも関わらず、こうしてお互いの正体を確認し合わなければならぬのかと言うと、現在の俺達の容姿は現実のものではなく、各自の好みに合わせてカスタマイズされた仮想体（アバター）だからだ。因みに俺のアバターは、パークの掛かった黒髪に、ほんの少し浅黒い肌、角張つた顔に細目という、現実の俺に近いものにしてある。理由は、単に自分を飾り付けるのが面倒だつたからだ。

「あ、こつちでの名前を言つておかないとだね。あたしのはシリカつて言うの」

「シリカだな……了解。俺はカミヤだ。……まあ、どうせお兄ちゃんつて呼ぶんだろうけどな」

「あ、あははは……」

今度はこの世界で使うお互いのプレイヤーネームを確認し合う。尤も、俺の事を「お兄ちゃん」と呼ぶであろう妹——シリカには、教える意味はあまり無い様にも思えたが。因みに、『カミヤ』という俺のプレイヤーネームは、俺が何かと好んでいる動物——オオ

カミの『カミ』と、俺の現実での名前——和也の一部である『也(ヤ)』を組み合わせて出来たものだ。

「さてと。んじや、先ずはパーティーを組むとしますか」
「はーい！」

お互いの正体や名前を確認し合つた所で、そろそろ本格的にS A Oを始めるべく、先ずはパーティーを組む事にする。そうする事で、お互に助け合い、協力して戦う事が出来るからだ。

ベータテスト期間中に何度かパーティーを組んだ事が有る故に慣れた手つきでパーティー参加申請を出すと、シリカは迷う事無く『YES』のボタンを押す。すると、俺の視界左上に存在する俺のHPゲージの下に、やや小さい二つ目のHPゲージが現れ、その下にはアルファベットで『Silica』と表示されている。パーティー申請が受理された証だ。

「そんじやあ——」

「ねえ、ちょっと良いかしら？」

「次は武器を買いに行くか」と言おうとした所で、突然第三者より声を掛けられる。声のした方へと振り向くと、そこには無造作なショートの黒髪で、だが額の両側で結わえた細い房が特徴の、猫科動物を思わせる様な目をした少女が居た。

「……あんたは？」

「ああ、ごめんなさい。私の名前はシノンよ」

「カミヤだ。んで、こつちは妹のシリカ」

「こ、こんにちは」

「こんにちは。へえー、あなた達兄妹だったの」

こちらの質問に答えた少女—シノンに対し、こちらも軽く自己紹介をする。お互いの名前を確認し合った所で、俺はシノンに核心を突く質問を投げ掛ける。

「んで、俺達に何の用だ？」

「その前に、一つ聞いても良いかしら？」

が、返つて来たのは質問の答えではなく、こちらに対する質問……その提示確認だつた。まあ、「その前に」と言つたあたり、恐らくは質問の答えがシノンの用件に関係しているのだろう。

「……構わないぜ？」

「ありかと。それじやあ聞かせてもらうけど——」

そう考えた上で、シノンの質問を許可する。すると、彼女の口から思わぬ質問が飛び出した。

「あなた達って、もしかして元ベータテスターの人達かしら？」

「つ…!?

その質問には、一瞬「何でバレたんだ!?」と驚愕の念を抱く。各プレイヤーの頭上に表示されているカラー・カーソルに【β】のマークが付いているなどといった、ベータスターかどうかを簡単に見分ける術は無いはずだからだ。

一瞬、シノンも元ベータスターだったのでは? とも考えたが、直ぐに違うと判断した。彼女は今「あなた達」と…つまり、ベータスターではないはずのシリカをもベータスターだと推測したからだ。

「……確かに、元ベータスターだぜ。ただし俺だけな」

「あら、そうなの」

「で? 何を根拠にそう思つたんだ?」

特に隠す必要も無いだろうと、自分が元ベータスターだという事を明かした後、俺をベータスターだと見抜いた根拠について尋ねてみる。

「あなたの操作の手つきが慣れてる様に見えたからよ」

「ああ! 成る程な」

言われて納得。考へてもみれば、全体の九割は今日S A Oを始めたばかりの、操作の仕方も殆ど知らない素人ばかりだ。そんな中で慣れた手つきで操作を行つていれば、十中八九元ベータスターだと思われる事だろう。

シノン……どうやら彼女は、その猫の様な形に違わず、鋭い目をしている様だ。

「さて、元ベータテスターである俺への用件っていうねは、やつぱり……」

「ええ。レクチャーをお願いしようと思つてね」

「だろうな。素人が経験者にレクチャーを求めるのは、道理みたいなもんだからな」

「で、どうなの？ 引き受けてくれるの？」

シノンがベータテスターの質問をして来た辺りで、おおよそ見当の付いていた彼女の用件——即ち俺へのレクチャーの申し出。それは見事に違わず、そして、俺はそれに対する答えを既に決めてある。

「俺は構わないんだが、シリカ：お前はどうだ？」

特に断る理由も無いし、妹以外の女の子に頼られるというのも何気に嬉しいので、俺

はシノンの申し出を引き受ける事にした。

しかし、それはあくまで俺の意見。現在俺はシリカとパーティーを組んでいるので、彼女の意見を無視する訳にはいくまい。

「あたしも構わないよ？ シノンさん：あたし達と一緒にやりましょ！」

「ありがと。それじゃあ宜しくね」

だが、俺の心配は杞憂だった様で、シリカはシノンのパーティー入りを快く受け入れてくれた。

こうして、俺達のパーティーに新たにシノンが加わる事になった。



その後、正式にパーティー申請をした俺達は、当初の予定通りに武器を購入しに行く為、入り組んだ裏道に有るお得な安売りの武器屋へと足を運んでいる。ステータスは同じなので、それならば安い物を買つた方が良いに決まっている。

「なあ、頼むよ！」

そういう訳で、人で賑わう大通りから外れて裏道へと入り、しばらく歩いていると、少し先の方から他のプレイヤー——声からして恐らく男性——の声が聞こえて来た。断片的な内容から察するに、この先にはその男性プレイヤーを含めて二人以上のプレイヤーが居て、男性プレイヤーが何かを頼んでいるのだろう。

どの道俺達の進行方向なのでそのまま歩みを進めると、件の人物達は直ぐに見つかつた。

人数は二人。一人はこちらに背を向けているので顔は分からぬが、赤みがかつた頭にバンダナを巻いた、長身瘦躯のプレイヤー。そしてもう一人は、黒髪で、ファンタジーアニメの主人公の様なカツコイイ面をした、『見知った』プレイヤー……その名を——

「よう！ キリトじやねえか」

『キリト』——俺と同じ元ベータスターの一人だ。こいつとはベータ期間中に何度か攻略を共にしており、最初の方こそ大したコミュニケーションを取れなかつたものの、次第に打ち解け合い、最終的には親友と呼べる程の仲になれた。

「！ カミヤ！」

こちらから声を掛けてやれば向こうもこちらに気が付き、こちらへと歩み寄つて来る。

キリトに釣られる形で付いて来た事で、ようやくキリトと話していたもう一人のプレイヤーの顔も明らかになる。性別は男。切れ長の目に細く通つた鼻梁という、戦国時代の若武者の様な顔をしている。

「久しぶりだな、カミヤ」

「ああ。こつちでもまた宜しくな」

「ああ。こつちこそ宜しく」

再会を喜び、挨拶と共に握手を交わす俺とキリト。

ふと、キリトは顔の向きはそのままに、視線を俺から逸らした。釣られて俺もキリトの視線の先へと目を向けると、そこにはシリカとシノンの二人が居た。
それで何と無く察した。

何でも、キリトは自身曰く人付き合いが得意ではないらしい。俺と打ち解け合うのにはつたりするのだが。

で、人付き合いは得意ではないものの、シリカとシノンの事は気になる様子。つまるところ、キリトは俺に二人の事を紹介して欲しいのだろう。顔を戻せば、キリトがそんな感じの目で俺の事を見ていた。

「ああ、紹介するよ。こつちは妹のシリカで、こつちはシノン……レクチヤーを頼まれた」

「初めまして！ シリカって言います！」

「シノンよ。宜しく」

「んで二人とも……こいつの名前はキリト。俺と同じ元ベータテスターだ」

「宜しく」

キリトにシリカとシノンを、シリカとシノンにキリトをそれぞれ紹介した所で、今は俺がキリトにバングダナのプレイヤーを紹介する様に促す。

「んでキリト……お前の後ろに居るバングダナさんは誰なんだ？」

「あ、ああ。えーと……彼の名前はクライイン。お前と同じ様に、レクチヤーを頼まれた」「クライインだ。宜しくな……えーと……」

「ああ、俺はカミヤだ。宜しく」

「おう！ 宜しくな、カミヤ！」

キリトがバンダナさん——クラインの事を紹介すると、クラインはこちらに歩み寄り自身も名乗る。すると、クラインは急に歯切れを悪くしてしまった。

そこで直ぐ様気付く……そういえば、まだ自分からは自身の名前を名乗つていなかつたと。なので、こちらも自身の名前を名乗る。

因みに、クラインがようやく声を発した事で、先程頼み事をしていたのが彼であると判明した。

「ところでよお、あんたらもこれからフィールドに出るんだよなあ？」

「ん？ ああ。この先の武器屋で武器を購入したならな？」

と、不意にクラインがそう尋ねて來たので、俺は肯定の言葉と共にこれから予定を告げる。

「ならよお、此処で会つたのも何か縁つて事で……どうだ？ 一緒にやらねえか？」

それを聞いたクラインが口にしたのは、つまりパーテイーの勧誘だ。

「んー、まあ…俺は構わないかな？」

人付き合いが苦手であるが故に一瞬迷つたものの、ゲームだから良いかと割り切り、特に断る理由も無いので、俺はクラインの誘いに肯定の意を示す。

「お兄ちゃんが良いなら、あたしも構いません」

「私は二人のパーティーに入れて貰つた身だから、二人の意見に従うわ」

それに続く様に、シリカとシノンも自分達の意見を述べる。内容は他人任せなものではあるが、二人の表情からは嫌気や反感といった負の感情は見受けられないので、大丈夫だろう。

「俺も、構わない……かな」

最後にキリトも賛同。俺同様に人付き合いが得意ではないが故に迷っていたのだろうが、どうやら割り切った様だ。

「んじや、満場一致つて事で、改めて宜しくな！」

「ああ

「ん

「はい！」

「宜しく」

こうして、五人に増えた俺達のパーティーは、先ずは各々の武器を購入する為に、裏道を進んで武器屋を目指すのだった。

Chapter. 2：レクチャーのち異変の兆し

「どわつたつた…！」

第一層主街区《はじまりの街》の西側に広がるフィールド。

各々の武器を購入して街を出た俺達は、現在そこでそれぞれにレクチャーを行つている。俺がシノンを、キリトがクラインを担当だ。因みにシリカ——武器は短剣——はノートである程度知識を得てはいるので、自分一人で頑張つてみるとの事だ。

で、一方のクラインはと言うと、青いイノシシ——正式名称《フレンジーボア》——に攻撃を仕掛けるも、無茶苦茶に振るわれる彼の曲刀は空を斬るのみで、逆に、巨体な割に以外と俊敏な青イノシシの突進攻撃を喰らつて吹き飛ばされ、股間を押さえながら草原を転がる。

「大袈裟だなあ。痛みは感じないだろ？」

「あつ、そつか。ついな……」

「……ああはなるなよ？」

「……ならないわよ」

「クラインの叫びを聞いて振り向き、キリトとのやり取りをする彼の姿を端から見ていた俺とシノンは、その様な寸劇をやらない様にと軽くやり取りをするのだつた。

「そんじやま、もう一度レクチャーすんぞ？」

「氣を取り直し、俺はシノンのレクチャーに集中する。ジエスチャードでシノンをその場に待機させてから少し距離を置き、足元に落ちていた小石を拾う。

「重要なのは初動のモーションだ。んー……ほんの少しタメを入れる様な感じかな？」

言いながら、右手の小石を軽く振りかぶり、視線前方に居る青イノシシに狙いを定め、振りかぶった手をピタリと構えて止める。すると、システムがスキルのファーストモーションを検出したらしく、小石が仄かに輝き出した。

「こんな風にスキルが立ち上がつたら、後は——」

後はシステムの力に身を委ね、右手の小石を青イノシシへと投げ付ける。空中に光のラインを描いて飛んだ小石は見事に青イノシシの横つ腹に命中する。投剣スキル基本技《シングルシューート》だ。

攻撃を受けた青イノシシは、「ぷぎーっ！」という怒りの声を上げてからこちらへと振り向いた。

「システムが技を命中させてくれる。どうだ？ 大体理解出来たか？」

最後にそう締め括りながら、俺は自身の左腰にぶら下げる武器一片手用直剣を抜いてから、軽く構える。先程攻撃した青イノシシが、攻撃者である俺に突進攻撃を仕掛けたからだ。

「そゆ事。つー訳でやつてみそ」

「ええ」

剣を横にして青イノシシの攻撃をブロックしながらシノンに促すと、彼女は思い付いた様に攻撃の構えを取る。右足を前に出して腰を落とし、右手で水平に構えた短剣を左肩へと持つて行くという姿勢だ。

すると、規定のモーションが検出された様で、彼女の短剣が淡い水色に輝いた。
「おらつ、行つたれえ！」

「はあつ！」

それを見て、俺は叫びながら青イノシシを蹴飛ばし、青イノシシの進行方向をシノンへと向けさせる。一方のシノンも、俺の声を合図に気合いの籠つた掛け声と共に駆け出し、青イノシシとの距離を縮める。

そしてとうとうその距離をゼロにし、擦れ違い様に青イノシシの胴体の側面に水色の軌跡を描き、通り過ぎる。短剣スキル基本技『スプリット』だ。

今ので青イノシシのHPを削り取つた様で、青イノシシはガラスが割れる様な音を立

てて碎け散り、直後に俺とシノンの双方の前に半透明のウインドウが出現。経験値と賞金の加算報告が表示される。

「で、出来た……」

「おめでとさん」

直ぐにウインドウを消し、一人呟くシノンに祝辞を掛けながら歩み寄り、軽くハイタッチを交わす。

「やつたー！」

その時、俺の後方からシリカの歓喜の声が耳に——ナーヴギアはその構造状態そのものに直接接続しているので、正確には脳の聴覚野に——届いた。振り向いて見ると、シリカが笑顔でこちらへと駆け寄つて来ていて、俺に抱き着いて來た。

「やつたよお兄ちゃん！ あたし一人でイノシシを倒せたよ！」

「おお、やるじやねえか！ 何度もノートを読んだ甲斐が有つたな」

「うん！ えへへ♪」

嬉しそうに戦果を報告するシリカに対し、俺は祝辞を述べながら彼女の頭を軽く撫でてやる。すると、彼女は更に嬉しそうな顔をした。

「……あなた達って、相当仲が良いみたいね」

「ん？ まあ、悪くはねえわな」

突然シノンから投げ掛けられた言葉にそう返す。見ると、何故かその顔は呆れている様な感じだった。

「うおっしゃあああ！」

と、今度はクラインの歓喜の声が耳に届く。俺達が振り向いて彼らの許に歩み寄る中、彼らはハイタッチを交わしていた。

「おめでとう」

「へへっ！」

「けど、今のイノシシ：スライム相当だけどな」

「ええっ、マジかよ!! オレはてつきり中ボスか何かだと……」

しかし喜びも束の間、キリトの口から告げられた事実に、クラインは驚きの声を上げる。てか、突進攻撃しか出来ない様なイノシシが中ボスのゲームって……どんだけ難易度低いんだよ？

「そんな訳無いでしょ。それに、もしそうだとしたら、この辺り一帯に沢山の中ボスが居る事になるわよ？」

そんなクラインの認識の違いを指摘する様に、シノンはある一方を指差す。そこでは件の青イノシシがリポップしており、それを見たクラインは「ですよねえ……」と呟き、軽く肩を落とす。

が、直ぐに気持ちを切り替えて、ソードスキルの反復練習を始める。シリカとシノンも釣られる様に、思い思いに短剣を振り回し始めた。

「おおっ！」

「はまるだろ？」

「まあな！」

「はい！」

「そうね」

「クライインに掛けたであろうキリトの問い掛けには、クライインだけでなく、シリカとシノンも同時に返事をした。

「スキルってよお、武器を作つたりすんのとか色々あんだろ?」

「まあな。クライインの言う鍛冶や裁縫みたいな製造系統や、釣りや料理みたいな趣味の系統と、戦闘系統以外も含めて、多種多様なスキルが無数に有るって言われてる。……けどその代わり、魔法は存在しないみたいだけどな」

ふとクライインが口にした質問には、俺が具体的な例を挙げながら説明。付け加える様に、このゲームの斬新なシステムについても語る。

「RPGで魔法無しとは、大胆な設定だよな」

やはりと言うべきか、クライインはその点に食いつき、シリカとシノンもうんうんと頷

いている。

そう、このS A Oには、ファンタジーゲームの定番とも言うべき『魔法』の要素が存在しないのだ。

その代わりに、『ソードスキル』と呼ばれる必殺技とでも言うべき物が無限に近い数設定されている。その理由は――

「自分の身体を動かして戦う方が、面白いだろう?」

「確かに!」

「そうですね!」

「ええ」

自身の身体を実際に動かして戦うという、フルダイブ技術を最大限に体感する為だ。

「よし、じゃあ次行くか」

「おう! ガンガン行こうぜ!」

「はい! あたしも頑張っちゃいますよー!」

「ふふつ。あんまり張り切り過ぎて、疲れない様にね」

「あははは」

こうして、俺達は更なるモンスター狩りの為に、次の場所へと移動するのだった。



「何度見ても信じらんねえなあ。此処がゲームの中だなんてよお」

太陽が西に傾き、赤く染まり出した空の下、青イノシシを含めた複数のモンスターを狩り終えた俺達五人は、各々それぞれの姿勢を取つて休憩していた。

すると、不意にクラインが口を開いてそう咳き、シノンが「確かにそうよね」と相槌を打つ。声こそ出さなかつたが、シリカもうんうんと頷いている。

「作つた奴は天才だぜ。すつげえよなあ。マジこの時代に生まれて良かつたあ」

「大袈裟な奴だなあ」

後半はキリトの言う通りちよつと大袈裟かもしれないが、前半はクラインの言う通りだ。誰がゲームの世界に入れるなどと予想出来ようか？

「初のフルダイブ体験だもんよお」

「右に同じく」

「あたしもです」

クラインの抗議にも似た様な言葉には、シノンとシリカも味方する様に声を上げる。

その後、クライン、シノン、シリカ、そして実は俺もナーヴギア用のゲームはSAOが初めてである事、SAOを購入出来た事やベータテスターに選ばれた事が幸運だとい

う事などを話した。

「なあ、ベータの時は何処まで行けたんだ？」

ベータテスト繋がりで、期間中に何処まで行けたのかを尋ねて来たクライイン。

「途中から二人で協力して、二ヶ月で十二層だ」

「今度は最初から協力するつもりだから、一ヶ月も有りや十分行けると思う」「協力に関しては了解。けど、そんなに早く行けるかねえ？」

「大丈夫だよお兄ちゃん！　あたしも精一杯協力するから！」

質問に答え、今度はもつと早く行こうと意気込むキリトを見ながら、テスト期間中の事を思い出す。

相手の戦闘パターンについてお互いに情報を交換し、協力し、助け合つて、四苦八苦の末によく強力な敵を倒せた。もしも一人のままだつたら、十二層までなんて到底辿り着けなかつた事だろう。

「さて、もう少し狩りを続けるか？」

「たりめえよお！……つて言いたい所だけど、腹減つてよお。一度落ちるわ」

キリトが狩りの続行を提案するが、どうやらクライインは夕食を取る為に一度ログアウトするらしい。

「こっちのメシは、空腹感が紛れるだけだからな」

「へへつ、五時半に熱々のピザを予約済みよ！」

……何と用意周到な。

「んで、メシ食つたらまたログインするわ」

「そつか。三人はどうするんだ」

「俺とシリカはまだ大丈夫かな。と言つても、後三十分くらいだけだな」

「わたしもそのくらいかしらね」

対する俺、シリカ、シノンは、そこまで余裕は無いにしろ、まだまだ行けると表明する。

「じゃあ、今ログアウトすんのは俺だけか。あつ！ なあ、この後…オレ他のゲームで知り合つた奴らと落ち合う約束してんだけどよお。どうだ？ あいつらともフレンド登録しねえか？」

「えつ？ んー……」

「ああ、俺もちよつとなあ……」

去り際、ふと思いついた様にそう提案して来るクライン。だが、俺とキリトはその提案に対し、あまり乗り気ではない反応を返してしまう。何せ、俺達は一人とも人付き合いがあまり得意ではないのだから。

「およよ、勿論無理にとは言わねえよ！ そのうち紹介する機会も有るだろうしな」

そんな俺達の失礼な態度に対してクラインは気を悪くする事は無く、寧ろ氣まで使わせてしまつた。少しドジな所は有るが、根はかなり良い奴の様だ。

「ああ、悪いな……」

「わたしもちょっと、遠慮しておくわ……」

「折角ですけど、ごめんなさい、クラインさん……」

「誘つてくれてありがとな」

シノンとシリカも含めて四人で謝るが、それでもクラインは大きくかぶりを振る。

「おいおい、礼を言うのはこつちの方だぜ。このお礼は、そのうちちゃんとすつからよ。特にキリトとカミヤには精神的にな」

そして、俺とキリトの許に歩み寄り、俺達の肩を軽く叩いた。

この時、俺はクラインの事を本当に良い奴だと思つたのだつた。

「んじや、マジにサンキューナ。これからも宜しく頼むぜ」

「また聞きたい事が有つたら、何時でも呼んでくれ」

「おう！ 頼りにしてるぜ！」

俺達に背を向け、最後にそう告げて去ろうとするクライン。

——しかしこの後、思いもよらぬ衝撃がクラインを……俺達を襲つたのだつた。

「……あれつ？」

「ん？ どうしたんだ、クライン？」

「どうなつてんだこりや？ ……ログアウトボタンがねえぞ？」

Chapter. 3 : 悪夢の幕開け

「……は？」

今…クラインは何と言つた…？

「だからよお、ログアウトボタンがねえんだって！」

……ログアウトボタンが…無い？ おいおい、何だよそりや？ 穴談でも笑えねえぞ。

「んな訳ねえだろ？ もう一度よく見てみろつて。メインメニューの一一番下だぞ？」

ログアウトボタンは、この世界から離脱して現実世界に戻る為に必要不可欠なものだ。それが無いという事はつまり、現実世界に戻れないという事になつてしまふ。そうなつては不味いので、ログアウトボタンが無いなんて事は有るはずは無いのだ。

「やつぱりログアウトボタンなんて何処にもねえぞ？ おめえらも見てみろつて」「だから、んな事有る訳……」

しかし、尚も無いと言い張るクライン。しかもその顔は真剣そのもので、とても嘘や冗談を言つている様には思えない。

その真剣な雰囲気に嫌なものを感じ、慌ててメインメニュー・ウインドウを開く。釣られる様に他の三人もだ。そして、トップメニュー左側の、件の一番下の欄には――

「…………あれ？」

——ログアウトボタンは、存在しなかつた。

「……ログアウトボタンが、無くなつてる……」

「こつちもだ……」

「わたしも……」

「あ、あたしの所も……」

「な？ ねえだろ？」

「どうなつてるんだ？ 始めた時にはちゃんと有つたはずだぞ？」

「ま、今日はゲームの正式サービス初日だかんな。こんなバグも出るだろ。今頃GMコールが殺到で、運営は半泣きだろうなあ」

「そんな余裕かましてて良いのか？ ピザの宅配…五時半なんだろ？」

「うおっ、そうじやん！ オレ様のテリマヨピザとジンジャーエールがあああ！」

クライインは初日故のバグだと言うが、本当にそうなのだろうか？
とりあえず、気になるので俺自身もGMコールをしてみるが――

「…………どう？」

「……ダメだ。反応がねえ……」

何故か、運営側からの反応が全く無い。その旨を、俺は他の四人へと伝える。これは、何やら怪しくなつて来たぞ？

「おいおい、他にログアウトする方法つて無かつたつけ？」

クラインのその言葉に、ログアウトボタン以外でのログアウトの方法を必死に思い出そうとするが……

「……いや、無い。自発的なログアウトは、メニューの操作だけのはずだ」

その方法は、何一つ記憶に無かつた。マニュアルにも、この手の状況に於ける緊急切断の方法など載つていなかつた。

「んなバカな？ 絶対に何か有るはずだつて！ 戻れ！ ログアウト！ 脱出！」

何か有るはずだと、色々な方法でログアウトを試みるクライン。だが幾らやつてみても、当然ながら何の反応も見られなかつた。

「……言つた通りだろ？」

「ぬう……。そ、そうだ！ 頭からナーヴギアを引っぺがしや良いんじやねえか？」

尚も諦めていないクラインは、今度はナーヴギアを外す事に思い至る。が、それはシリカとキリトの言葉によつて否定される。

「け、けど、現実のあたし達の身体つて今動かせないんじや…？」

「そうだ。ナーヴギアが、俺達の脳から身体に向かつて出力される命令を、全部此処――延髓の辺りでインタラブトして、アバターを動かす信号に変えてるからな」

……万策尽きた。

「……じゃあ結局、このバグが直るか、向こうで誰かがナーヴギアを外してくれるのを待つしかねえって事かよ？」

「……そういう事になるな」

今の俺達には、そうする他ログアウトする手段は無い。今は…ただ待つしかないのだ。

「けどよお、オレ：一人暮らしだぜ。おめえらは？」

「俺らは両親が居るから、夕食の時間になれば気付いてもらえると思うけど、生憎とまだ掛かると思う」

「わたしも両親が居るけど、多分同じ」

「俺も、母親と妹が居る」

クライインの問い掛けに、それぞれ答えを返す俺達。すると、クライインはキリトの妹發言に食いついた。……うちの妹にはノーリアクションだった癖に。まあ、有つたとしても簡単にはやらねえけどな。

「キ、キリトの妹さんて幾つ!?」

「あ、あいつ運動部だし、ゲーム嫌いだし、俺らみたいな人種と接点無いって」

内心で「ザマア」と思いながら見ていると、身を乗り出したクラインを押し返したキリトが、「そんな事よりさ」と前置きを入れてから話し始める。

「何か……変じやないか？」

「そりや変だろ、バグなんだから」

「ただのバグじやない。『ログアウト不能』なんて、今後の運営にも関わる大問題だろ」
キリトも、何かがおかしいと薄々気付いた様だ。

「この状況なら、運営側も一度サーバーを停止させて、プレイヤーを全員強制ログアウトさせるはズだ。なのに……俺達がバグに気付いてからでももう大分時間が経ってるのに、切斷されるどころか、アナウンスすらない。どう考へてもおかしいだろ?」

「……言われてみりや確かに」

クラインのその一言を最後に、俺達は全員押し黙ってしまう。辺りが静寂に包まれた。

——リンゴーン！ リンゴーン！

「「「「「ツ…!」」」

だが、その束の間の静寂は、突如鳴り響いた大ボリュームの鐘のサウンドにより打ち破られたのだつた。



「んな…つ!?

「ツ…!?

「な、何だあ!?

「何なの…一体…!?

「な、何がどうなつて いるの…!?

突然青白い光に包まれたかと思えば、次の瞬間には視界が真っ白に。そして、ほんの二、三秒程で光が消えたかと思えば、目の前に広がつていた光景は——
「はじまりの…街…!?

——SAOのスタート地点たる《はじまりの街》……その中央広場のものだつた。
(て事は、今のは《転移(テレポート)》か)

フィールドから主街区、別の層の主街区同士を移動するのに使われるシステム……そ

れが『転移』だ。しかも、その為のアイテムやオブジェクトを使つていな事から、強制的なものなのだろう。

運営側がようやく動き出したのだろうか。だとしても、何故何のアナウンス無しにいきなり？

「どうなつてるの？」

「やつとログアウト出来るのか？」

「早くしてくれよ」

周りでは、俺達同様に強制転移させられたであろう他のプレイヤー達が、それぞれにざわめき合っていた。

「おいつ、上を見てみろ！」

そんな中、不意に誰かの声が広場に響き渡り、俺達五人は反射的に上を見上げた。

見上げた先——遙か上空にある第二層の底に、一枚の赤いパネルが点滅している。よく見ると、パネルの中では【Warning】と【System Announcement】という二種類の単語が、交互に表示されていた。

すると、突如赤いパネルが上空を埋め尽くし、そのパネルとパネルの隙間からどろりとした血液の様な物が垂れ下がつた。だが、それは広場まで落ちて来る事は無く、空中でその形を変えた。

現れたのは、全長二十メートルは有ろうかという、フード付きの真紅のローブを纏った巨人だった。ローブ 자체には見覚えが有り、あれは運営側が務めるGM（ゲームマスター）が必ず纏っていたものだ。だとすればあの巨人はGMという事になるのだろうが、ベータの時は違い、そのフードの中には何故か顔が存在しない。すると次の瞬間、遙か上空より巨人のものと思われる声が降り注いだ。

『プレイヤーの諸君、僕の世界へようこそ』

やや低めで落ち着いた、爽やかな好青年を思わせる様な声。だが何故か、俺はこの声に……声の主に好感を持てない。

『僕かい？ 僕の名前は茅場晶彦（かやば あきひこ）。今やこの世界をコントロール出来る、唯一の人間さ』

（ツ…!?)

そして、次に巨人が口にした言葉に、俺は驚愕の念を抱いた。

茅場晶彦……親父がルボライターをやっている為、俺達もある程度知っている。確か、弱小ゲーム開発会社だったアーガスを、最大手と呼ばれるまでに成長させた、若きゲームデザイナーにして量子物理学者。ナーヴギアやSAOは、そんな彼が開発したも

のだ。

だが同時に、強い違和感も覚えた。親父が撮った写真を見る限り、言つては何だが……茅場晶彦は好青年という感じではなかつたし、顔と今の声にギャップを感じる。

『君達は、既にメインメニューからログアウトボタンが消えている事に気付いている事だろう』

そんな俺の考えを余所に、茅場（？）は言葉を続ける。そして、彼は思いもよらぬ言葉を口にした。

『しかし、これはゲームの不具合なんかじやない。もう一度言うよ？　これはゲームの不具合ではなく、『ソードアート・オンライン』本来の仕様なのさ』
「し、仕様…だと…？」

不具合ではなく本来の仕様……その言葉に、クライインが声を漏らす。声こそ出さなかつたが、俺を含めた四人……いや、この広場にいる全員が、恐らく同じ気持ちだろう。
……意味が分からぬ。

『君達は今後、この城の第百層をクリアするまで、ゲームから自発的にログアウトする事は出来ない』

おいおい、この城つて……まさかアインクラッドの事か？　冗談だろ？

『また、外部の人間によつて、ナーヴギアの停止あるいは解除される事も有り得ない。も

しもそれらが試みられた場合、ナーヴギアが発する高出力マイクロウェーブが君達の脳を破壊し、生命活動を停止させる』

「な、何言つてんだアイツ？ んな事出来る訳ねえだろ？」

俺の……皆の気持ちを代弁するかの如く、クラインが声を上げる。が……
「……有り得なくも無いさ。原理的には、電子レンジとほぼ同じだ。充分な出力さえ有れば、脳を蒸し焼きにする事も可能だ」

キリトは、それが可能であるという過酷な事実を告げる。

「で、でも、ナーヴギアの電源コードを引っこ抜いちゃえば……」

「多分無理だろうな。ナーヴギアの重さの三割はバッテリセルだつて言われてるからな」

シリカの縋る様な咳きには、悪いが事実を告げさせてもらう。だが、もし万が一瞬間停電でも起こつたりしたらどうすると言うのだ？

『正確には、十分間の外部電源切断、二時間のネットワーク回線切断、ナーヴギア本体のロック解除または破壊の試み——以上のいずれかの条件によつて、脳破壊シーケンスが実行される』

……猶予付きつて訳か。親切なこつて。

『現時点で、警告を無視してナーヴギアを強引に外そうと試みた礼が少なからず有つてね、その結果、残念な事に二百十三名のプレイヤーが、既にアインクラッド及び現実世界からも永久退場してしまつていてる』

『に、二百十三…!? もうそんなにも被害が出てるのか…!?

「信じねえ…信じねえぞオレは！ ただの脅しに決まつてる！」

『そう叫ぶクライイン。俺だつてそうであると信じたい。だが、茅場（？）が告げた死者の人数があまりにもリアル過ぎて、本当なのではと疑つてしまふ。』

『現在、あらゆるメディアがこの状況を、多数の死者が出ている事も含めて、繰り返し報道している。今後、君達のナーヴギアが強引に外される事は無いだろう。加えて、君達の身体はナーヴギアを装着した状態で、二時間以内に病院やその他の施設へと搬送される事だろう。従つて、君達には安心してゲーム攻略に励んで欲しい』

『こんな状況で呑気にゲーム攻略をしろだと？ 何をふざけた事をぬかしているのだろうか？ 理解に苦しむぞ。』

『しかし、充分に注意してもらいたい。君達にとつて『ソードアート・オンライン』は、最早ただのゲームではない。もう一つの現実と言つても良い』
……もう一つの現実？

『今後、ゲームに於いてあらゆる蘇生手段は機能しない。ヒットポイントがゼロになつ

た瞬間、君達のアバターは永久に消滅し、同時に――』

その瞬間、俺は茅場（？）が言おうとしている事を予測出来てしまつた。

『――君達の脳は、ナーヴギアによつて破壊される』

……出来れば、当たつて欲しくはなかつた。

だがちよつと待て。そんな条件を出してしまつたら、死ぬ事を恐れて、誰も攻略に向かわなくなつてしまふ。

しかし、俺の……皆の思考を読むかの如く、茅場（？）は更なる宣告をした。

『君達がこのゲームから解放される条件はただ一つ。さつきも言つた通り、AINクラツド最上部――第百層まで到達し、そこに待つラスボスを倒してゲームをクリアすれば良い。そうすれば、それまでに生き残つたプレイヤー全員が、ログアウトする事が出来る』

……辺りが、静まり返る。

……無理だ。ベータテストの時は、俺とキリトで強力してもたつた十二層までしか行けなかつた。しかも、何度もHPをゼロにしながらだ。それを『HPゼロ＝死』の状況で、百層まで行つてラスボスも倒せだと？ 無理難題にも程が有るぞ！

『では最後に、君達にとつてこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。君達のアイテムストレージに僕からのプレゼントを用意してある。確認してご覧』

その謎の言葉の意味を知る為、俺はメニューを開き、アイテム欄を確認する。すると、リストの一番上に表示されていたそれは――

(……『手鏡』?)

「何故こんな物を?」と思いながらもそれを出現させ、恐る恐る覗いて見る。しかし、そこに映っているのは、現実の自分に似せて造った自身のアバターだった。

「うおっ!? 何だあ…?」

すると突然、隣からクライインの叫び声が上がる。振り向くと、彼の周りを青白い光が包み込んでいた。彼だけではなく、シリカも、シノンも、周りに居る多くのプレイヤーもだ。と思った瞬間、俺自身も青白い光に包み込まれ、視界が真っ白になつた。

ほんの一、三秒程で光は消え、元の光景に戻つた…………かと思つたが、何か様子がおかしい。

「おい、おめえら大丈夫か?」

聞こえたクライインの方へと振り向き、「大丈夫だ」と言おうとして…………やめた。

「アンタ…誰だよ…?」

何せそこに居たのは、髪の色とバンダナこそ同じなれど、金壺目に鷲鼻、頬と顎にむ

さ苦しい無精髭という、クライインではないプレイヤーだつたのだから。
「誰つて……おいおい、ひでえなあ。オレだよ。クライインだつて」

え？ 目の前に居るこいつがクライイン？

「し、詩乃！？」

「えつ！ 和人！？」

などと考えていると、隣ではキリトとシノンと同じ装備をした別の男女が、お互いの顔を見て驚いていた。知り合いなのだろうか？

「そうだ、シリカは…！」

そう思い、シリカの居る方へと目を向けると……

「だ、大丈夫だよ、お兄ちゃん」

どうやら無事だつたらしい。だが、今のシリカは何か少し違う。そう、どちらかと言
うとアバターではなく、現実の——珪子に近い……

(ツ…?)

そこまで考えた所で、俺はある仮説に至り、急いで手元の手鏡を見る。するとそこに
映っているのは、アバターとほんの少し違う、現実の俺——綾野和也の顔だつた。

「なつ…！」

「うおつ！ オレじゃん！」

「えつ!? 現実のあたしの顔!?

「な、何で…?」

同じ仮説に思い至つたらしい俺の周りの四人が、手鏡を見てそれぞれ驚いている。と
いう事はつまり――

「お前ら……キリトにクラインにシノン…!?

「お前がクラインで、詩乃がシノンか…!?

「おめえらキリトとシノンか…!?

「あなた達がキリトさんにクラインさんにシノンさん…!?

「あなたがクラインで、和人がキリト…!?

俺達はお互いの顔を見て、五人同時に叫んだのだつた。

Chapter. 4：義務と意思と宣言

「ど、どうなつてんだこりや？　どうして現実の姿に？　てか、何でカミヤとシリカの姿は変わつてないんだ？　……それと、おめえら知り合いなのか？」

突如アバターが現実の姿に変わつた事に動搖し、まくし立てる様に問い合わせてきてるクライン。先ずは俺とシリカが、二つ目の質問に対してもう一度答えを返す。

「とりあえず落ち着けって。俺とシリカが変わつてない様に見えるのは、アバターを現実の姿に似せて造つたからだ」

「そうなんです」

次に三つ目の質問について、本人達に尋ねてみる。これに関しては俺も少し気になつた。

「で？　さつきお互いを現実の名前で呼び合つてたみたいだけど、アンタらどういう関係なんだ？」

「えっと、俺と詩乃……シノンは、その……幼馴染みなんだよ」

「そういう事」

大人しいスタイルの、前髪が少し長めの黒髪に、線の細い顔、柔弱そうな両目という、女の子と間違えそうな容姿に変身したキリトの言葉に、両側の房と猫目は変わらず、整ったショートヘアの少女に変身したシノンが頷く。

「んで、一つ目の質問に戻る訳だが……」

「一体これはどういう事だ？　どうやつてアバターを現実の姿に変えたと言うのだ？」

「…………そうか、スキヤンだ！　ナーヴギアは、高密度の信号素子で頭から顔全体をすっぽり覆っている。つまり、顔の形も精細に把握出来るんだ」

「で、でも、身体はどうするんですか……？」

「あ…………多分あれじやねえか？　キヤ…キヤリ……」

「キヤリプレーシヨンか？　ああ！　成る程な」

「そう、それだ！　初回に装着した時のセットアップステージで、自分の身体をあちこち触らされただろ？」

「そ、そういうえば」

「これでカラクリの謎は解けた。

そして、俺達を元の姿に戻した理由は、今起こつてているこれが現実であると認識させる為。言つたではないか、証拠を見せると。
さて……

「何で？ そもそも何でこんな事を起こしたのよ？ あの茅場つて人は……」

ログアウトボタンを消し、俺達プレイヤーを仮装空間に閉じ込め、挙げ句にゲーム攻略をさせる……一体全体、何の理由で、何が目的だと言うのだろうか…？

「どうせ、直ぐにそれも答えてくれるさ」

キリトがそう言つた直後、タイミングを見計らつたかの如く茅場（？）が喋り始めた。
『君達は今、何故？』と思つてゐるだろう。何故僕は——S A O 及びナーヴギアの開発者である茅場晶彦はこんな事をしたのかと？ 大規模なテロ？ それとも身代金目的の誘拐？』

茅場（？）はそこで一旦区切つてから、静かにその核心を告げた。

『いいや、そのどちらでもない。そもそも、今の僕には既に、何の目的も、何の理由も無い。何故なら……この状況こそが、僕にとっての最終目的だからね。この世界を創りだし、観賞する為だけに僕はナーヴギアを、S A O を造つた。そして今、全ては達成されたのだよ』

そして茅場（？）は、とうとうこの謎のイベントを締め括るべく、最後の言葉を宣言した。

『以上を以つて、《ソードアート・オンライン》正式サービスのチュートリアルを終了する。プレイヤーの諸君——健闘を祈るよ』

そして、茅場（？）の巨人は音も無く上空へと上がつて行き、パネルの中へと姿を消して行く。完全に消えると同時に赤いパネルは徐々に消えて行き、その光景を元の第二層の底のものへと戻した。

「嘘だろ……何だよこれ？ 嘘だろ！」

「ふざけるなよ！ 出せ！ 此処から出せよ！」

「こんなのが困る！ この後約束が有るのよ！」

「嫌ああ！ 帰して！ 帰してよおおお！」

次の瞬間、約一万人のプレイヤーの集団が、然るべき反応を見せた。悲鳴、怒号、絶叫、罵倒、懇願、そして咆哮……圧倒的大ボリュームで放たれた大量の声が、広場を震わせた。

「い、嫌ああああ！」

隣に居たシリカも悲鳴を上げ、俺に思いつ切りしがみつき、その身体を震わせる。無理も無い。まだ十二歳である少女に、こんな絶望的な状況を受け入れる事など不可能だ。……いや、シリカだけではなく、俺にだつて無理だ。けれども――

「カミヤ、クライン、シノン、シリカ、ちょっと来てくれ」

すると、キリトはクラインとシノンの腕を掴み、人垣を縫つて広場の外へと向かつて行く。その後を、未だ震えるシリカを連れて追いかけて行く。

「良いか、よく聞けよ」

広場を抜けて、広場から放射状に広がる幾つもの街路の一つへと入り、ある程度進んだ所で立ち止まると、キリトは急に口を開いた。

「俺は直ぐにこの街を出て、次の村に向かおうと思う。お前達にも一緒に来て欲しい」
その内容は、この『はじまりの街』からの移動。

「あいつの言葉が本当なら、これからこの世界で生き残る為には、ひたすら自分を強化する必要がある。MMORPGはプレイヤー間のリソースの奪い合い……システムが供給する限られた金とアイテムと経験値を、より多く獲得した奴だけが強くなれる。……この『はじまりの街』周辺のフィールドは、同じ事を考える連中に狩り尽くされて、直ぐに枯渇する。そしたら、モンスターのリポップをひたすら探し回る羽目になる。だから、今のうちに次の村を拠点にした方が良い。俺は道も危険なポイントも全部知ってるし、何より元ベータスターが二人も居る。この人数で、レベルの低い今でも安全に辿り着ける」

ゲームを攻略しなければ現実世界に戻れないと言うのなら、怖くてもやるしかあるまい。そして、そんな状況に於けるキリトのこの判断は、恐らく正しいのだろう……………“ゲーマーとして”は。

だが――

「……キリト、悪いが俺は行けない」

「えつ…？」

俺の反応に、キリトは驚いた様子で目を見開く。恐らく、間違いなく俺も付いて来るものだと思っていたのだろう。だがなキリト――

「お前の判断は、恐らく正しいと思う。ゲーマーとしてはな。けど……”人として”はどうだ?」

「ツ…!」

俺のその言葉に、キリトの目が更に見開かれる。

「確かに、自分が生き残る為には、自身を強くするしか無い……それはわかる。けど、だからって他の奴らを見捨てて良いのか?」

顔を逸らすキリトを無視して、俺は言葉を続ける。

「千人の元ベータテスターがそうしたとして、残りの約九千人はどうなる? そいつらは今日SAOを始めたばかりの、右も左も分からぬ素人ばかりなんだぞ。無事に生き残れるとは、到底思えない」

あくまで攻略に出たらの話だ。中には攻略に向かわず、街に留まり続ける奴らも居るはずだ。いや、絶対に居る。

「先にSAOをプレイした俺達元ベータテスターには、そいつらにその経験を伝え、導く

「義務が有ると思うんだ」

あくまでそれは俺の意見だが、今この状況に於いては確固たる事実だと思つてゐる。人付き合いが苦手故に、正直本当は面倒だと思っているが、状況が状況なのでそもそも言つてられまい。

「それに、俺はゲームである前に一人の人間だ。人間として、モラルは捨てたくない——人を見殺しになんてしたくない。そして、見殺しにして後悔なんてしたくない」

その言葉に、キリトは再び目を見開いてこちらに向き直つた。

「他の奴らの手助けをすれば、お前が言つた通りモンスターは枯渇して、その分レベルアップ……延いては攻略も遅れる。けど、今大事なのは『どれだけ早く攻略するか』じゃなくて、『どれだけ多く生き残れるか』だとは思わないか？」

キリトの反応を待たずに、俺は更に言葉を続ける。

「どんだけ時間を掛けてでも、より多くのプレイヤーを生き残らせてゲームをクリアする……俺はそのつもりでいる」

出来るかどうかなんて分からぬ。けど、きつとそうするべきなんだ。

「それにだ、MMORPGつてのは、大人數でやつて初めて攻略出来る様に造られてるもんだ。要するに、攻略の為の人数を増やすつて意味でも、助ける意味は充分有ると思う」そこまで言い終わつた所で、未だにしがみついていたシリカを離し、キリト達に背中

を向ける。そして……

「つー訳で、俺は広場に戻る。戻つてこの事を他のプレイヤーに伝える。……お前達は、お前達の思う様に行動しろ。シリカ：お前もだ」

顔だけをキリトへと向けてそう言つてから、向き直り、広場へ向けて歩き出そうとした。

「待てよ、カミヤ！」

すると、キリトに大きな声で呼び止められた。何か用かと思い、立ち止まつて顔だけをキリトへと向ける。

「気が変わつた。俺もそれに協力する」

「……え？」

すると、キリトの口から、俺に協力するという言葉が掛けられた。

「……良いのか、キリト？」

「ああ。俺も一人の人間として、後悔したくないからな。それに言つただろ？ 最初から協力するつて」

「そうか。ありがとな！」

身体も向き直り、確認の言葉を掛ければ、キリトは真剣な顔をして肯定の意を返してくれた。

「おう、オレも協力すんぜ、カミヤ」

「クライイン…？」

すると、今まで黙つて俺達の話を聞いていたクライインが、突然協力を申し出て来た。
「おりやあベータテスターじゃねえから、他の奴らをレクチャーすんのは多分無理だ。
けど、攻略になら協力出来ると思うぜ」

「私も。キリトに協力して、攻略に参加するわ」

「あ、あたしもお兄ちゃんに協力するつ！」

「シノン!? それにシリカまで…!？」

更に、クライインに続いて、シノンとシリカまでもが協力を申し出た。

「モラルがどうだのなんて言われちゃつたら、じつとなんてしてられないもの。それに
……」

と、シノンはそこで一旦区切ると、キリトの方を見てから言葉を続けた。

「キリトはコミュ症だから、幼馴染みの私が、ちゃんとサポートしてあげないとね♪」

「お、おい……」

茶目っ気の有る顔で言つた、まるでおちよくる様なシノンの言葉に、キリトは苦い
……けれども、何処か嬉しそうで照れ臭そうな顔をする。……お前ら、本当に幼馴染み
なだけか…?

「……んで、お前も本当にそれで良いのか？」

二人のやり取りを見て少し頭が冷えた俺は、シリカに向けて、警告の意も込めた確認を取る。

「……正直に言うと、本当は…物凄く怖い……」

顔を俯かせ、弱音を吐くシリカ。だが、直ぐに勢い良く頭を上げ、真剣な眼差しで自身の気持ちを口にした。

「でもっ！ あたしの知らないうちに……あたしだけが安全な場所でただ怯えて待つて居間にお兄ちゃんが死んじやう事の方が、もつと怖い！ だつたら……怖くてもお兄ちゃんと一緒に居たい！ 一緒に戦つて、お兄ちゃんを守りたい！」

シリカのその熱い思いに……その覚悟の籠つた眼差しに、俺は大きく心を打たれた。目頭が熱くなつた様な感覚に襲われた。

「へへっ。兄ちゃん思いの、良い妹さんだな」

「……ああ。涙が出そうになる程嬉しい事を言つてくれる、可愛くて強い、自慢の妹だ」
鼻の下を指で擦りながら言葉を掛けて来たクラインに、俺は手で顔を覆いながらそう返した。

「……四人とも……ありがとな」

ようやく落ち着いた所で、四人に一言お礼を言うと、彼らは何も言わず、こちらに笑

顔を返して來た。

「そんじやあまあ、そろそろ行くとしますか！」

「ああ！」

「おうよ！」

「ええ！」

「うん！」

そして、俺達は行動を起こす為、広場へと戻るのだつた。



急いで広場に戻ると、広場にはまだ沢山のプレイヤー達が存在し、未だに騒然としていた。

言い出しつペは俺なので、演説する役目は勿論の事俺だ。正直、大勢の人を相手に演説など俺には荷が重過ぎるが、それでもやるしかあるまい。

(……よし！)

意を決した俺は、騒然たる広場に響き渡る様、声を張り上げて切り出した。

「聞いてくれっ！」

瞬間、広場中のプレイヤーの視線が、俺へと集まる。それに臆する事無く、俺は言葉を続ける。

「俺の名前はカミヤ！　元ベータテスターだ！　この過酷な状況を生き残る為、俺は今此処に……SAO初心者の為の講習会を開く事を宣言する！」

その瞬間、それまでとは別の種類のどよめきが広場に広がった。
「ただ、俺一人でやるには限界がある！　そこで、可能であれば、他の元ベータテスター達にも手伝つてもらいたい！　より多くのプレイヤーが生き残れる様、力を貸して欲しい！」

一旦間を置き、最後の言葉を口にする。

「恐らく攻略には時間が掛かる事だろう！　だが、そんなのは二の次だ！　生き残ることを最優先に考える！」

そう言い切つた次の瞬間――

「はいっ！　俺：元ベータテスターです！」

「ベータテスターなら此処にも居るぞ！」

「教えられる限りの情報を教えておきます！」

「おらア！　死にたくねえ奴らは、とつととオレン所に来やがれッ！」

他のベータテスターと思われるプレイヤー達が、次々と拳手して名乗りを上げ、他の

プレイヤー達が徐々にそちらへと集まつて行つた。

「んじや、オレは先ずはダチを探すわ。その後は自力でどうにかするなり、他の奴に助け
て貰うなりするわ」

「ああ、またな。気をつけて」

俺達の許へとやつて來たプレイヤー達を一旦待たせ、俺達五人はそれぞれに別れる為
に、別れの挨拶を交わす。

「おう！ あつ！ そうだ、キリトよう！」

立ち去ろうとしたクラインだつたが、ふと何かを思い出した様に立ち止まり、キリト
に声を掛ける。

「ん？」

「おめえ……案外可愛い顔してやがんな！ 結構好みだぜ！」

「ツ…！ お前も、その野武士ヅラの方が十倍似合つてるよ！」

それをを聞いた後、クラインは今度こそこの場から立ち去つて行つた。

「んじやあ、俺達も行くよ」

「ああ。必ず攻略で会おうな」

「ああ」

「二人とも、元氣でね」

「キリトさんとシノンさんもお元気で」

こうして、俺達四人も別れ、それぞれに行動を開始。

「んじや、俺達も行くか」

「うん！」

「綾野君！」

この後、同じ学校の同級生達を含めた多くのプレイヤー達をレクチャーした俺は、シリカ、その同級生達とパーティを組み、長い長いアインクラッド攻略の旅へと出発したのだつた。

Interval：和人と詩乃

キリトとシノン——桐ヶ谷和人（きりがや かずと）と朝田詩乃（あさだ しの）との出会いは、あまりにも形の悪いものだった。

その日、詩乃是両親と共に外出していたのだが、途中で交通事故に巻き込まれた。カーブを曲がり切れずに、反対車線から突っ込んで来たトラックが原因で、そのトラックに衝突された前方の車に、詩乃達が乗った車が衝突したのだ。

トラックのドライバーは、フロントガラスを突き破つて路面へと投げ出され、ほぼ即死。対する詩乃達は、幸いにも両親は軽傷で済み、後部座席のチャイルドシートでしつかりシートベルトをされていた詩乃是、ほぼ無傷だった。

そして、前方からトラックに衝突、後方から詩乃達の車に追突された、詩乃達の前方の車の人物達は……前に座っていた大人二人はほぼ即死、後部座席に座っていた男の子も重症である。直ぐに救急に連絡した為、男の子は無事生還する事が出来た。
——その男の子の名前は……和人。

駆け付けた母方の妹夫婦に面会した際、詩乃是両親は彼らに深く謝罪していた。

それ以降、彼らは何度も和人——妹夫婦に引き取られる事になつた為、苗字を桐ヶ谷——の見舞に訪れる様になり、和人と詩乃是何時しか仲良くなつていた。

和人が無事退院してからも、詩乃の両親の心は完全には晴れなかつた。和人の事が気掛かりで仕方なかつた。

故に、彼らは東京から、桐ヶ谷家の在る埼玉県へと居を移し、和人と……和人ら桐ヶ谷家人達と交流を持ち続けた。和人に何か罪滅ぼしになる様な事をしてやれる訳でもなかつたが、ただ彼の事を見守つていたかつたのだつた。

大人達のそんな思いなど露知らず、和人と詩乃是楽しい日々を過ごした。同じ小学校へと通い、一緒に遊び、勉強し、剣道をし、笑い、泣き、時に喧嘩もしたりと、二人の仲はより深まつて行つた。

和人の従妹である桐ヶ谷直葉（きりがや すぐは）も、詩乃の事を本当の姉の様に慕い、仲良くしていた。……時折、和人と仲良くしている彼女に対して、嫉妬や敵対心などを燃やす事も有つたが。

だが、そんなある日、とある一つの出来事が起つた。

PCに関する知識や技術が優れていた和人は、十歳の時に住基ネットの抹消記録に気付き、自身の出生について知つてしまつたのだ。それを知つた義理の両親は、詩乃達も交えて真実を話した。詩乃も、この時初めて事故の事を知つた。

「本当に……本当にすまなかつた！」

深く頭を下した詩乃の両親……そして詩乃。自分達も被害者側であるとはいえ、結果としては、和人の実の両親を殺してしまった加害者側とも言える。そんな複雑な思いで謝る詩乃達を、和人は咎める事は出来なかつた……若しくはしなかつた。

それからだつた。和人の中で、自身と他人との距離感が狂い始め、人と関わる事を恐れる様になつたのは。安寧を求め、仮装世界に入り浸る様になつたのは。

それからだつた。敵役であるはずの自身を責めようともせず、変わらず優しく接してくれる和人に、詩乃が負い目を感じる様になつたのは。彼との距離感に思い悩みながらも、彼の対人関係に対してサポートする様になつたのは。

しかし、二人の複雑な関係は、これで終わりではなかつた。

一年後。詩乃是母親と共に買い物に出掛けた際、偶然にも和人と出くわした。親切にも同行を申し出してくれた彼と共に、途中で郵便局に立ち寄つた。詩乃の母親が窓口で書類を出している間、直ぐ近くで、和人と詩乃是何気ない会話をしていた。

すると、郵便局に一人の男が入つて來た。灰色っぽい服装で、片手にボストンバッグを下げた、痩せた中年男性だつた。その男を……男の目を見た瞬間、和人と詩乃是奇妙な……何処か嫌なものを感じた。

男は詩乃達の隣の窓口の前に立つと、カウンターにどきつとボストンバッグを置く。

そして――

「この鞄に、金を入れろ！」

男は中から黒い物――拳銃を掴み出し、窓口の男性局員に突き付けた。強盗だつた。
「両手を机の上に出せ！ 警報ボタンを押すな！ お前らも動くな！ 騒ぐな！」

拳銃を左右に動かし、奥に居た他の局員や、騒ぎ立てる周りの客達を牽制する。詩乃是恐怖のあまり、思わず和人の袖を掴んでいた。

「早く金を入れろ！ 有るだけ全部だ！ 早くしろ！」

再び叫ぶ男。それに対し、男性局員は顔を強張らせながらも、右手で札束を差し出そ
うとした――

――パン！

その瞬間、郵便局に高い破裂音が響き、その後に、どさつ、という音を立てて男性局員が倒れた。……そう、撃たれたのだ。

「ボタンを押すなど言つただろうがあ！」

その光景に、男の叫び声に更に恐怖を抱いた詩乃是、和人に強くしがみついた。

「おい、お前！ こつちに来て金を詰めろ！」

男は拳銃を別の局員に向けて、金を詰める様にと叫ぶが、拳銃を向けられた局員は首を細かく振るだけで、動こうとはしなかつた。

「早く来い！　さもねえともう一人撃つぞ！　撃つぞオオオ！」

局員の対応に焦れた男は、あろう事か、その銃口を詩乃の母親へと向けた。それを見た詩乃是、何とかして母親を助けなければと思うが、恐怖のあまり動けずにいた。

そんな詩乃の思いを感じ取つてか、和人は彼女の腕を振りほどき、なんと男に突攻を仕掛けたのだ。拳銃を握る右手首にしがみつき、噛み付いた。

「ああああ！」

驚愕と苦悶の混じつた声を上げた男は、右手を和人ごと振り回す。それにより和人の身体は投げ飛ばされ、詩乃を巻き込んで後退する。同時に拳銃も男の手から滑り落ち、身体を起こした自分の足元まで転がつて来たそれを、詩乃是無我夢中で拾い上げた。

震える手で拳銃を握り、取り返そうと迫つて来る男へと銃口を向ける詩乃。その震える手を、誰かの手が包み込んだ。

「大丈夫……」

和人だ。彼は詩乃を落ち着かせる様にそう言いながら、彼女の指を拳銃の引き金へと誘導した。

「——俺も一緒に……罪を背負うから」

その言葉に、罪悪感と同時に言い知れぬ安心感を抱いた詩乃是、和人に身を委ね、その引き金を引いた。

「ああ……あああ！」

弾丸は男の腹を貫き、男は苦悶の声を上げながら両手で腹を押さえる。その瞬間、それを見ていた局員や他の客達が駆け寄つて来て、男を取り押さえた。その後、駆け付けた警察により男は逮捕され、事件は幕を下ろしたのだつた。

この事件で、詩乃是和人に對し、更なる負い目を抱いた。拳銃で人を撃つた罪を彼にも背負わせてしまつた事、そして……敵役であるはずの自分達を、助けてくれた事への負い目を。

だから、彼女は決意した。彼を守る為に……これ以上彼を傷付けさせない為に、強くなる事を。

それから三年の月日が経ち、世間では新感覺のMMORPGであるSAOが話題となつていた。勿論の事、和人もそれに食いついていた。

ベータテストに選ばれた彼の話を毎日の様に聞いていた詩乃是、楽しそうに話す彼の顔を見て、本当にゲームが好きなんだなあと思つた。そして、彼が愛するゲームの世

界に対し、興味を持ち始めた。彼の気持ちをより深く知る為にも、自身もやつてみよう
と思い始めた。

そして二〇二二年十月三十日、詩乃是両親からの援助を受け、和人には内緒でナーヴ
ギアとSAOを購入した。彼を驚かせる為だ。そして、一週間後の十一月六日……遂に
始まつたSAO正式サービスの世界へと、彼女は飛び込んだ。

ところが、最初こそ正常だつたSAOは、『ゲームで死んだら、現実でも死ぬ』という
異常事態へと発展。しかもGMの仕業により、アバターを現実の自身の姿へと変えられ
てしまつた。

「し、詩乃!?」

「えっ!? 和人!?!」

だが偶然にも、そこで和人——キリトと合流する事が出来た。

その後、それまで一緒に行動していた『カミヤ』というプレイヤーの話を聞き、異常
事態を脱するのに協力する事を表明したキリト。

「私も。キリトに協力して、攻略に参加するわ」

そんなキリトに協力すべく、自身もカミヤに協力する事を表明した。

「キリトはコミュ症だから、幼馴染みの私が、ちゃんとサポートしてあげないとね♪」

そして決意した。キリトをサポートし、何が何でも、どんな事からも彼を守ろうと。

キリト一人に、これ以上の重荷は背負わせないと。

「それじゃあ、宜しく頼むな、シノン」

「ええ、任せなさい」

こうして和人と詩乃——キリトとシノンは、共に戦いの日々へと身を投じたのだつ

た。

Chapter. 5：第一層攻略会議

ゲーム開始一ヶ月で、約千人弱のプレイヤーが死亡した。

攻略には向かわず、早急な脱出を願う者達の中で、「城から飛び降りれば、或いは出られるので？」と考えて、AINクラツドの最外周からその身を投げた者達。

（尚、その者達は第一層の《黒鉄宮》の中の有る《生命の碑》に於いて、死亡扱い（死因は《高所落下》）とされている）

レクチャーを受けたが、恐怖の為に上手くそれを活かせず、命を落としてしまった者は達。

調子付いて、無茶な戦闘の末に命を落とした者達。

至つて普通にプレイしていても、ちょっとしたミスで命を落としてしまった者達。

そんな多種多様多数の死者を出す中、最前線で攻略する者達は、遂に次の層へと続く塔状のダンジョン—《迷宮区》……そのボスの部屋の前まで攻略を進めていたのだつた。



茅場（？）がいきなり始めた、『H.P.ゼロⅡ 現実の死』という恐怖のゲーム——プレイヤーの中には、これを『デスゲーム』と呼ぶ奴も居る——から一ヶ月の月日が経った。結局の所、外部からの問題解決が齎される事は無く、音沙汰も何も無い。一方で、ゲームの中では多数のプレイヤーが戦闘や自殺でゲームオーバーとなり、死んでしまっているらしい。

そんな中、俺達最前線で攻略を続けるプレイヤーは、遂に次の層へと続く『迷宮区』と呼ばれるダンジョンの、その番人たるバスの部屋の手前辺りまで辿り着いていた。

そして今日、迷宮区最寄の町である『トールバーナ』に於いて、その攻略の為の合同会議が行われる事になつていていた。

「うわあ！　すっげー人数だなあ！」

会議が行われる広場に集まっているプレイヤーを見て、パーティーメンバーの一人が声を漏らす。

「ざつと見た所、八十人くらいは居るかな？」

「一つのレイドが六人パーティ八つの計四十八人だから、レイド一つと六人パーティが五つか六つくらいって所か。それだけ有れば、充分行けるだろうな」

別のメンバーは周りを見渡し、おおよその人数について予想する。それを聞いた俺

は、ボス攻略の際の編成について考え、その数が適量だと判断する。

「あ！ お兄ちゃん：あそこに居るのって、キリトさんとシノンさんじやない？」
「ん？ おお、確かに」

シリカに指摘されてそちらへと目を向ければ、そこには確かにキリトとシノンの姿が有つた。

「よう、キリト、シノン。久しぶりだな」

「！ カミヤ！ シリカ！ お前らちやんと生きてたんだな」

「お前らこそな」

「久しぶりね、シリカちゃん」

「はい！ お久しぶりです、シノンさん！」

二人の許へと歩み寄り声を掛ければ、二人もこちらの存在に気が付く。お互に挨拶を交わし合っていると、今現在俺と共に行動しているパーティーメンバーの一人が話し掛けて來た。

「ねえ、カミヤ君……この人達は…？」

「ん？ ああ、紹介するよ。こいつらはキリトとシノンで、キリトは俺と同じ元ベータスターだ。二人とは、例の宣言が始まる前に一緒に行動してたんだよ」
「初めまして。私はシノンよ。で、こっちがキリト」

「宜しく」

パーティーメンバーに二人の事を紹介すると、今度はシノンが俺のパーティーメンバーの事について尋ねて来た。俺はその質問に対し、一人ずつ順番に紹介していく。

「それでカミヤ……あなたの後ろに居るその人達は？」

「ああ、こいつらは今一緒に行動してるパーティーメンバーでな、こいつは棍使いのケイタ」

「初めまして」

「メイサーのテツオ」

「やあ」

「短剣使いのダッカー」

「どもーっす！」

「槍使いのササマル」

「宜しく」

「同じく槍使いのサチだ」

「こんにちは」

「五人とも、俺と同じ高校の同級生なんだよ」

そう言うと、キリトとシノンは驚きの表情を浮かべ、シノンは確認する様に言葉を掛

けて来た。

「えつ？ カミヤつて…高校生だつたの…？」

今の反応から察するに、キリトとシノンは俺よりも年下、或いは年上（見た目からしてこちらの可能性は低い）なのだろう。その事について話そうと思ったが、その前にステージ状の広場に一人のプレイヤーが現れたので、その話については後回しにする事にした。

「ああ。けど、その話は後でな？ どうやら、そろそろ始まるみたいだからな」

そう言うと、俺達九人は広場へと移動した。

「はーい！ それじゃ、そろそろ会議を始めたいと思いまーす！」

ステージに現れたのは、長身の各所に金属防具を煌めかせた男性プレイヤーで、武器は俺やキリトと同じ片手剣。そして、何よりも目を引くのが、鮮やかな青に染まつた長髪と、かなりのイケメンと称するべきその顔立ちだつた。

プレイヤーの顔は、あの宣言の時に茅場（？）によつて現実のものに変えられている。という事は、あの清々しいまでのイケメンが彼の現実の顔なのだろう。そう思うと、何故かとてつもない敗北感を感じてしまう。

「今日は、オレの呼び掛けに応じてくれてありがとう！ オレはディアベル……知つている人も居ると思うけど、元ベータテストスターだ！ 職業は…気持ち的にナイトやってま

す！」

そんな俺の思いなど余所に、男—デイアベルは自己紹介をする。その自己紹介に、広場はどつと笑いに包まれた。だが、彼が真剣な表情で語り始めた事で、その空気は破られた。

「……今日、オレ達のパーティーが、あの塔の最上階でボスの部屋を発見した」

その言葉に、周りのプレイヤーの殆どが息を呑んだ。

「一ヶ月、此処まで一ヶ月も掛かつたけど……それでも、オレ達は示さなきやならない。ボスを倒し、第二層に到達して、このデスゲームそのものも何時かきつとクリア出来るんだって事を、はじまりの街で待つてゐる皆に伝えなきやならない。それが、今この場所に居るオレ達トッププレイヤーの義務なんだ！」 そうだろ、皆！」

続けられた言葉を聞き終えた瞬間、今度は大量の拍手の音によつて広場が包まれた。ディアベルの言葉には、非の打ち所は全く以つて見受けられないのだから。

「それじゃあ——」

「ちょお待つてんか、ナイトはん！」

と、ディアベルが会議を進めようとした時だつた。広場の上段の方から関西弁口調の男性プレイヤーの声が聞こえ、歓声がびたりと止まる。その中を、小柄ながらもがつちりした体格の、サボテンの様に尖つた形をした茶髪のプレイヤーが階段を飛び降りて来

て、ステージに降り立つた。

「わいはキバオウつてもんや」

サボテン男—キバオウはこちらに振り向いて、なんとも勇猛なキャラネームを名乗つてくれると、次いで口を開いた。

「この場を借りて、一つ言わせてもらいたい事が有るんや」

「言わせてもらいたい事…？」

ディアベルの聞き返しに、キバオウは「そうや」と言つて頷く。

はて？ キバオウが言いたい事とは何なのだろうか？ 見る限り、彼の表情からは憎しみや怒りといった感情は感じられないが。

「ナイトはん、そして、こん中におるはずの他のベータ上がりの奴らに言わせてもらいたい……」

キバオウは、俺達元ベータスターを指名すると、一旦言葉を区切る。そして——

「ホンマにありがとう！」

——そのサボテン頭を勢い良く下げる、感謝の言葉を口にした。

(ツ…?)

これには俺も、キリトも、ディアベルも、ベータスターではない他のプレイヤーも驚いていた。まさかこの様な公然の場で、堂々と頭を下げる様なプレイヤーが居るなど

と、誰が思おうか？

「あんたらが助けてくれたお陰で、多くのビギナーが生き残って、攻略に参加する事が出来どるんや」

頭を上げ、言葉を続けるキバオウ。

「特にカミヤはん」

すると、何故か今度は俺を名指しして来た。

「こん中におらんか？ おるんやつたら是非とも名乗り出て欲しい」

目立つのはあまり好きではないのだが、周りに居るメンバーが「呼ばれてるぜ」と小突いて来るので、仕方なく名乗り出る事にする。まあ、険悪なムードではないので、何の問題も無いだろう。

「俺がカミヤだ」

その瞬間、広場中の視線が俺へと集まるのを感じた。悪いものではないのだが、やはり居心地は悪い。

「あんたがカミヤはんか。これも全部、あんたがビギナーを助けてくれる事を呼び掛けてくれたお陰や思うとる。ホンマにありがとうな！」

「そうだね。君が呼び掛けてくれたお陰で、オレ達ベータスターは立ち上がる事を決意する事が出来た。君には本当に感謝しているよ」

キバオウに続き、ディアベルまでもが俺に感謝の言葉を述べる。かと思えば、周りに居る他のプレイヤー達までもが拍手喝采である。俺が取った行動が感謝されるというのは嬉しい事だが……か、かなり照れ臭い……。

「さて、それじゃあ会議を続けようか」

キバオウが席に着き、俺も照れ臭さからそそくさと腰を下ろした所で、攻略会議は再開された。

「先ずは、仲間や近くに居る人と六人のパーティーを組んでみてくれ！」

ディアベルがそう言うと、周りのプレイヤー達は一斉に仲間を探し、パーティーを組み始める。俺達も、パーティーや組もうと思うのだが……：

（人数が微妙だなあ……）

そうなのだ。俺達のパーティーは七人なので、一人余る計算になる。仮にキリト達を加えたとしても、メンバーの合計は九人。四人と五人のパーティーに分けたとしても、やはり心許ない。

「キリト、シノン：お前達はどうするんだ？」

「んー……他を探すのも面倒だから、お前：達と一緒に構わないか？」

「私も良いかしら……？」

「ああ、構わないぜ。寧ろこつちからお願ひしたい」

それ以前に、キリト達が入るとは限らないので、先ずは彼らの意見を聞いてみる事に。すると、彼らは俺達との行動を望んでいる様なので、快くOKする。

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

「宜しくね」

「ああ。こちらこそ」

よし、これで正式に九人になった。

「さて、人数のバランスを考えると、最低でも後一人は欲しい所だが……」

はてさて、どうしたものか…………ん?

「すまん。一人見付けたから、声掛けて来るわ。可能なら、後二人くらい見付けといてくれ」

メンバーにそう言うと、俺はとあるプレイヤーの許へと向かつた。

「なあ、あんた一人か?」

俺が声を掛けたのは、赤いフードケープを羽織り、そのフードを目深にかぶつた
プレイヤーだ。

「……ええ。周りが皆お仲間同士みたいだつたから、遠慮したのよ」

ケープで隠れていらない部分から見受けられる、肌の白さや栗色の長髪、細い体つき、そして今フードの下から発せられた声……それらから判断するに、どうやら俺の目の前に

居るのは女性プレイヤーの様だ。

「なら、俺らとパーティー組まないか？ バランス的に人数が足りなくてな」

「……構わないわ」

そんな彼女を俺達のパーティーに誘うと、彼女は素つ気ないながらも、パーティーに入りを了承してくれた。

「ありがとな。パーティー申請は後でやるとして、とりあえず自己紹介な。さっきので知つてるとと思うが、カミヤだ」

「……わたしは、アスナ」

「了解。そんじやあアスナ…ボス攻略の間、宜しくな」

自己紹介を済ませると、俺は彼女—アスナを連れて仲間達の許へと戻る。

戻つてみると、どうやら向こうもメンバーを二人見付けていたらしい。一人は身長が百八十くらいで、頭は完全なスキンヘッド、肌はチョコレート色で、外人を思わせる様な彫りの深い顔立ちをした、両手用戦斧を背中に吊つた巨漢《エギル》。そしてもう一人が——

「——私の名前はヒースクリフ。以後宜しく頼むよ」

ヒースクリフと名乗る、削いだ様に尖った顔立ちに、鉄灰色の髪をした、何処か不思議な雰囲気を纏つた長身瘦躯の男性プレイヤーだった。

その後、全員がパーティーを組み終えたと判断したデイアベルにより、本格的な攻略会議が始まった。

ベータテスターが提供した情報を書き記し、無料配布しているガイドブック……その最新版の情報によれば、第一層のボスの名前は『イルファング・ザ・コボルトロード』。その取り巻きとして『ルインコボルト・センチネル』が三体出て来る。コボルトロードの武器は斧とバツクラーで、最後のHPゲージがレッドゾーンに入ると、タルワールに武器を持ち替えるとの事。センチネルは、ボスコボルトのHPゲージが一本減る度にリポップし、合計十二体出現すると書かれている。

順調に進んでいた説明だが、此處で突然待つたを掛ける奴が現れた。

「ちょっと良いかしら？」

シノンだ。

「ん？ 何かな？」

「私の名前はシノン。ねえ、このガイドブックの情報……完全に信じて良いのかしら？」立ち上がり、名前を名乗ったシノンは、何とガイドブックの情報を疑う様な発言を口にした。そんな彼女に対し、周りのプレイヤーは怪訝な表情を浮かべている。

「……どういう事かな？」

だが、次の言葉で場の空気は一変した。

「この情報は、あくまでベータテストの時のものでしょ。けど、今私達がやっているのは正式版のものよ。もしかしたら、何かしら変更されてる可能性が有るんじやないかしら？」

……確かにそうだ。今俺達が居るのは正式版の世界であり、ベータ版とは仕様が変更されている可能性だつて充分に有り得る。それに気付くとは、やはりシノンは鋭い。

「……迂闊だつた。その可能性は失念していたよ。もしもベータ版と正式版とで違いが出て来たとして、何も考えずに突っ込んで行つたとしたら……」

「返り討ちに遭つて、最悪：死ぬかもしれないわ」

その言葉に、広場が静まり返つた。

そう、忘れてはいけない事だが、このゲームでの死は現実での死をも意味している。それを理解しているからこそ、その反応は当然のものだろう。

「もし違いが合つたとして、君なら何を考える？」

「私はそこまでゲームに詳しい訳じやないから、そこは詳しい人達に任せるとわ」

ディアベルの問い掛けにそう答えると、シノンは俺とキリトへと視線を向けて來た。まつたく、しゃーねえなあ。

「とりあえず、それぞれに思う事を挙げてみようぜ。武器に関しては、俺と此処に居るキリトが対策を教える。俺達二人はベータテストの時に十二層まで上がつて、色んな武器

を相手にしているんだ」

そうして、俺はキリトを道連れに武器の対策の指南役を買って出た。で、当のキリトは恨みがましい目で俺を睨んでいるが、悪いが無視させてもらう。

キリト：お前もこの際、俺と一緒にコミュ症を治してみようぜ？

その後、ベータ版との違い——主にボスコボルトの武器について——を議論し合い、それぞれへの対策を教えていった結果、会議が終わる頃には既に夜になっていたのだった。

因みにだが、指南をしている際に見えたヒースクリフの顔が、何処か微笑んでいる様に見えたのだが……あれは一体何だつたのだろうか？

Chapter. 6：それぞれの思い

長時間の攻略会議の後、アスナはボス攻略の為に組んだパーティーメンバーと別れ、一人『トールバーナ』の街の一角にいた。NPCの店で買った最も安い黒パンを、少しずつちぎりながら食べていく。

コトツ。

そんな音と共に、アスナの隣に何かが置かれた。いや、それ以前に、彼女の前に誰かが現れた。

「そのパンに使つてみ」

その声を聞いて、アスナは誰が現れたのかを理解した。見上げて確認して見れば、案の定、パーマの掛かった黒髪に、ほんの少し浅黒い肌、細い目付きに、痩せた体型をした、会議の時に自分に声を掛けて来た男性プレイヤー——『カミヤ』がそこに居た。

「ちいたあ美味くなるぜ?」

言われて、自分の横に置かれた物へと目を向けるアスナ。すると、そこには小さな素焼きのツボが一個有った。

カミヤの言葉に従い、彼女は恐る恐る右手を伸ばして、指先でツボの蓋をタップしてみる。すると、指先が仄かな光に包まれ、それを食べかけの黒パンに当ててみる。そして現れたのは――

「……クリーム?」

白いクリームだつた。

「一つ前の村で受けられる、『逆襲の雌牛』ってクエストの報酬でな、俺結構甘い物好きだから、何度も挑戦しちまつたよ」

振り向くと、何時の間にか近くに座つていたカミヤも、自分と同じ様に黒パンにクリームを塗つており、それを実に美味しそうに食べていた。

それを見て、アスナも恐る恐るかじつてみる。瞬間、彼女は衝撃を受けた。何時もはぼそぼそと粗いだけのパンが、甘く滑らかで、しかもヨーグルトの様な爽やかな酸味のするクリームによって、まるで別の食べ物にでも変わつたかの様な味になつたのだから。そのあまりの美味しさに心奪われた彼女は、二口、三口と夢中でパンを頬張り、気付いた時には欠片も残さず完食してしまつていた。

「…………ご馳走様。クリーム・美味しかつたわ」

「そりや良かつた」

ふと隣を見れば、カミヤはまだゆつくりと堪能しながら食べており、自身のあまりの

速い食べっぷりに羞恥心を抱いてしまう。それでも、立ち去りたい衝動を抑え、アスナは彼に感謝の言葉を述べる。

「まだ幾つか持つてるから、良ければおすそ分けすんぞ？」

「…………いい。わたしは、美味しい物を食べる為に、この街まで来た訳じやないから」

「そつか」

心搖らいだアスナではあるが、自身が此処まで来た理由を思い出し、カミヤの申し出を断る。

「…………」

「…………」

沈黙が流れる。いや、片やパンを堪能する事に集中している。

「…………わたしは」

先にその沈黙を破つたのは、アスナの方からだつた。

「ん？」

「わたしが…………わたしでいる為に、今まで戦い続けて來た」

何の脈絡も無く、アスナは自身の思いを吐露し始めた。沈黙に耐えられなかつたのもあるが、何と無く、自身が抱く思いを誰かに聞いて欲しかつた。その《誰か》に何故力ミヤを選んだのかは、彼女にも分からなかつたが。

「最初の街の宿屋に閉じ籠つて、ゆつくり腐つていくくらいなら、最後の瞬間まで自分のまでいたい。たとえ怪物に負けて死んでも、このゲーム……この世界……あの男には負けたくない。どうしても」

アスナの思いを黙つて聞いていたカミヤは、彼女の事を強い芯を持つた凄い奴だと思つた。それと同時に、彼は彼女が口にした『あの男』という言葉に引っ掛かりを覚えた。

「お前……あのGMの事を知つてんのか？」

「ええ」

カミヤの問い合わせに肯定の言葉を返した後、アスナはこのデスゲームを始めた人物について語り始める。

「本人を知つてる訳じやないけど、あれは絶対に茅場晶彦なんかじやない。あれは……あの声は、須郷伸之（すうごう のぶゆき）という人のものよ」

須郷伸之——それが茅場晶彦の名を名乗り、このデスゲームを始めた黒幕の正体だと、アスナは語る。

「やっぱり、茅場じやなかつたんだな。あのGM」

「!? あなたも気付いていたの？」

「いや、気付いてたって訳じやねえよ。ただ何と無く、写真の顔と声の雰囲気に違和感を感じてたってだけだ」

「そう」

カミヤの答えに、アスナは短く返してから話を続けた。

「あの男は、頭は良くて人の良さそうな見た目をしているけど、本性は利己的で、他人をこき下ろす様な性格をした最低な人間よ。今回の事だつて、ただゲームを鑑賞する為だけにこんな事を起こしたとは考えられないわ」

アスナは、昔から須郷の事が嫌いだ。父親が経営する会社の研究所で働く彼は、両親の前では猫を被っているが、目上の人間が居なくなれば、他人をこき下ろす衝動が我慢出来なくなる。そんな彼の性格には、兄共々辟易としている。

「出来る事なら、一日も早くこのゲームから脱出して、あの男の悪事を暴いてやりたい」「出来る事ならつて……おいおい、何だよ？ その無理なのを前提に考えてる様な言い方は。お前：このゲームをクリアする為に此処まで来たんじやねえのか？」

アスナの引っ掛けりを覚える様な言い方に、カミヤは怪訝な表情を浮かべながら、彼女に問い合わせる。

「確かにそう。……けど、クリアなんて無理よ」

返つて来たのは、悲観的な言葉だった。

「……何でそう思うんだ？」

「だつて、百層まで有るんでしょ？　この城は。そんなの……辿り着ける訳が無いわ」「やつてみなくちや分かんねえだろ？」

「そうかもしない。けど、まだ一層もクリアしてないのに、千人ものプレイヤーが死んでるのよ。そんなんじや、百層まで辿り着くなんて出来っこないわ……」

アスナの言葉に、カミヤは顔を俯かせる。彼自身も彼女同様、本気で百層まで辿り着けるとは思っていないのだ。だが――

「…………確かにそうかもしない」

「…………」

「けど……」

「…………？」

「それでも、やらなくちやいけねえんだよ」

「?」

カミヤは諦めてなどいなかつた。そんな彼の姿勢に、アスナは驚愕の念を抱いた。

『人生時には諦めも肝心』なんてよく言うかもしけねえが、時には諦めちやいけねえ事だつて有る。たとえそれが無理難題だったとしても、意地でもやらなくちやいけねえんだ

デスゲームという絶望的な状況に於いて、此処まで強い意志を持つたプレイヤーが居るなど、アスナは思わなかつた。そして同時に、何がカミヤをここまで強くしているのか、彼女は気になつてしまつた。

「……どうして？」

「ん？」

「どうしてそこまで強くいられるの……？ 何があなたをそこまで強くしているの……！」

何処か狂乱している様な、或いは何処か縋る様なアスナの質問に、カミヤは静かに、それでいて確かな意志を持つて答えた。

「妹を……現実世界に戻す為だ」

「……え？」

自分の為ではなく、他人の為の意志——カミヤのその答えに、アスナは一瞬啞然としてしまう。

「何が何でも戻してみせる。最悪……俺の身を呈してでもだ」

だが、アスナは直ぐに理解した。家族——大切なものの為ならば、人は何処までも強くなれるのだと。そして、そんな強い意志を持つカミヤは、間違いなく強い人間だと。

「…………強いのね」

「ん？」 何だつて？」

「何でもないわ。それより、あなたは死んだ後、どうやつて妹さんを現実世界に帰すつもりなの？ 幽霊になつてでも守るとでもいうの？」

カミヤのそんな強い意志が羨ましかつた。だから、アスナは皮肉交じりにそう尋ねた。

「こ、言葉の綾つて奴だ！ 僕は最後まで生き残つて、絶対にあいつと一緒に現実世界に戻つてみせる」

「ふふっ」

一瞬だけ慌てたカミヤが可笑しくて、アスナはつい笑つてしまふ。そしてふと思う……こうして笑つたのは何時以来だろうと。

「と、とにかくだ、やるべき目標が有るんなら、あんたも諦めずに最後まで足搔いてみろ」とすると、カミヤはポケットから何かを取り出し、それをアスナの隣に置く。

「これつて……」

見ると、それは先程のクリームのツボだつた。

「激励だ。そんじゃ、また明日な」

それだけ言うと、カミヤは立ち上がり、その場から立ち去つて行つた。

「……変わった人」

そんなカミヤに対して一言呟いてから、貰つたクリームのツボをアイテムストレージ

に仕舞い、フードの中で笑顔を浮かべながらアスナもその場を後にしたのだつた。



俺は、一体何をしているのだろうか？

攻略会議が終わつた後、パーティーは一時解散となり、残つたメンバーで一緒に食事でもしようかという事になつた。そして、食事と宿泊を兼ねて宿屋に向かう途中、俺はふと一人で居るアスナを見掛け、メンバーに単独行動をする旨を伝えてから彼女の許へと足を向けた。

何故そうしたのかは、俺にも全然分からない。現実の俺ならばただ見ていただけだろうし、あまつさえ、近付いて話し掛けるなんて事はしなかつただろう。

「ん？」

そんな事を考えながら、メンバーから送つて貰つたメッセージに書いてある宿屋を目指して歩いていると、視界の先に一人の見知つたプレイヤーを見付けた。

「サチ…？」

サチ——『はじまりの街』から此処まで攻略を共にして來たパーティーメンバーの人で、接点は少ないが、現実世界での俺のクラスメイトの少女だ。

「一人で何してんだ？ サチ」

俺はサチの許まで歩み寄り、彼女へと声を掛ける。

アスナと話していた時間を考えても、皆と別れてからそんなに時間は経っていないはず。だとすれば、サチが一人で居るというのは少しおかしな事だろう。

「あ、カミヤ君！ 君が道に迷わない様について、此処で待つてたの」

「そつか。そりやあ待たせて悪かつたな」

「ううん、良いの。私がそうしたいと思って勝手にした事だから」

待たせてしまった事を謝る俺だが、サチは気にしていないとかぶりを振つた。

「そつか。そんじやあ早いとこ皆の所に――」

そう言つて、サチと共に皆の居る宿屋へ向かおうとした所で、不意に彼女が俺の腕を掴んで来た。どうしたのかと思って振り向けば、顔を俯かせ、腰掛けたまま立とうとする様子も見受けられない。

「…………ねえ、カミヤ君」

すると、サチは顔を俯かせたまま、囁く様な声でようやく言葉を口にした。

「一緒に……どつか逃げよ」

俺は反射的に聞き返した。

「逃げようつて……何からだ？」

「この街から。パーティーの皆から。モンスターから。……SAOから」SAOから逃げる……その言葉の意味が分からなかつた俺だが、しばらく考えた後に、とある一つの答えに辿り着いてしまつた。そうであつて欲しくはないと願いつつ、俺は恐る恐るサチへと尋ねた。

「それは……心中しようつて事なのか…？」

しばらく沈黙した後、サチは小さく笑い声を漏らし、やがてかぶりを振つた。
「ふふ……そうだね。それも良いかもね。……ううん、ごめん、嘘。死ぬ勇氣が有るなら、今頃とっくに死んでるよね」

サチに自殺願望が無いと分かり、俺がほつと安心していると、彼女はぽつりと呟いた。
「……私、死ぬの怖い。怖くて、この頃あんまり眠れないの」

死ぬのが怖い……それは、人間としては当たり前の反応だろう。かく言う男の俺だつてそうなのだから、女の子であるサチは尚更の事だろう。

「ねえ、何でこんな事になつちやつたの？ 何でゲームから出られないの？ 何でゲームなのに、ほんとに死ななきやならないの？ あの茅場つて人は、こんな事して、何の得が有るの？ こんな事に、何の意味が有るの……？」

矢継ぎ早に出された質問に、俺は直ぐには答えられなかつた。俺自身、その答えは分からぬのだから。

「多分、意味なんて無いと思う……」

「意味が……無い……？」

「ああ。はじまりの日に、奴は言つてただろ？　この世界を創つて、鑑賞する事が最終目的だつて。仮にそれ以外に何らかの意味や目的が有つたとしても、それは考へてる本人にしか分からぬもんだ」

再度の長い思考の後に、俺はそう答えた。その答へが、とても残酷なものであると予想出来ていながらも。

サチをこれ以上不安にさせない為にも伏せたが、アスナの言葉を信じるならば、須郷という男は何かしらの事を企んでいるのだろう。だが、自分で言つた通り、それは考へている須郷本人にしか分からぬ事だ。

「…………」

俺とサチの間を、沈黙が流れる。間違ひなく、彼女は怯えている。このデスゲームが、

何の意味も持たないという残酷な事実に、怯えて声が出せないでいる。

「……逃げても、良いと思う」

沈黙を破るべく、そして、そんなサチの不安や恐怖を少しでも和らげるべく、俺は彼

女に言葉を掛ける。

「……え？」

「そんなにも戦うのが怖いのなら、逃げても良いと思う。戦わなくても良いと思う」

それは、サチの戦線からの離脱を許すというもの。彼女に意思を委ねての提案だ。

「死ぬのが怖い……それは人間として当たり前の反応だと思う。誰だつて死にたくはない。かく言う俺だつてそうさ。……だから、もしも死ぬのが怖くてこれ以上戦えないって言うのなら、無理に戦わなくて良い。明日のバス攻略にも行かなくて良い。俺はそれでも構わないし、それでサチを責めたりもしない。もし責める様な奴が居たなら、俺が全力で庇つてやるし、全力で説得してやる。……だから、お前のしたい様にすれば良い」「カミヤ君……」

選択肢は与えた。後は、サチ自身がどうしたいのかを決めるだけだ。

「……カミヤ君は？」

「……え？」

「カミヤ君は……どうするの……？ やっぱり、攻略に行くの……？」

まさかの聞き返し……それがサチからの返答だった。

「……ああ。そのつもりだ」

聞き返された事に一瞬啞然とするが、直ぐに我に返り、サチの問い合わせに答えを返す。

恐らく彼女は、俺にも一緒に居て欲しかった事だろう。たとえ安全な圈内に居たとしても、一人ではきっと心細いはずだ。だが、俺はそれを分かつていながらも、彼女の望まぬ答えを口にした。

「そつか……」

「……悪い。俺は逃げないって決めてるから……」

「ううん、良いの。カミヤ君が謝る事じやないから」

俺の答えに落ち込んだ表情を見せたサチは、俺の謝罪にかぶりを振る。そして直後、彼女は俺に質問を投げ掛けて来た。

「……ねえ、カミヤ君も死ぬのは怖いって言つたよね……？」

「ああ、言つた。俺だって死ぬのは怖い」

「じゃあ、何で？　何で死ぬのが怖いのに、それでもカミヤ君は行こうとするの……？　何で逃げないの……？」

その問い掛けに、俺は理由を語る。アスナにも語った理由を。そして、このデスマームが始まつたあの日に誓つた事を。

「シリカちゃんを……」

「デスマームが始まつたあの日、俺は真っ先に攻略に向かう事を決意した。なるべく早

くシリカちゃんを……」

くこのゲームを終わらせて、シリカや皆を現実世界に戻す為に。それを聞いたあいつは
何て言つたと思う?」

「一旦間を開けてから、サチの答えも聞かずに俺は言葉を続けた。
「攻略に出るのは怖い。けど、自分の知らない所で俺が死ぬ事の方がもつと怖い。だから怖くても俺と一緒に戦つて、俺を守りたい……あいつはそう言つたんだ」
「!?

「それを聞いて、俺もあいつを絶対に守るつて誓つた。あいつが逃げずに頑張るつてい
うのなら、俺も逃げないと誓つた。あいつにとつて俺が大事な様に、俺にとつてもあい
つは大事な存在だから」

俺がそう語り終えると、サチは何処か羨ましそうに呟いた。

「そうなんだ。……何か、シリカちゃんが羨ましいな」

「羨ましい…?」

「うん。……決めた。私…もう少し頑張つてみる」

「え…?」

「私も守りたい。カミヤ君を…パーティーの皆を。だつて、私にとつて皆は大事な仲
間だから」

「私が羨ましいのかは語らず、直後にサチは強い意思をその目に宿し、再び戦う事を決

心した。それを聞いた俺は、彼女が無理をしない様、仲間と共に彼女を支えると決めたのだった。

「そつか……分かつた。けど、無理はするなよ。お前には、俺達が付いてるんだからなうん。ありがとう、カミヤ君」

その後、俺とサチは皆の居る宿屋へと向かい、彼らに彼女の心境を伝えた。彼らは、彼女の気持ちを受け入れて、一緒に彼女を支えると言つてくれたのだった。で、その後小腹が空いていた俺と彼女は軽く食事を取る事にし、それを済ませた後は、明日のバス攻略に備えてゆっくり休む事にした。

のだが……

「ちょっとサチさん、お兄ちゃんにくつつき過ぎじゃありませんか？」

「そういうシリカちゃんだつて、カミヤ君にくつつき過ぎだよ」

「あたしは良いんです！ だつてあたしとお兄ちゃんは兄妹なんですから！」

現在俺は、少し不安だから一緒に寝させて欲しいというサチと、こちらの世界でも一緒に寝ようとするシリカに挟まれ、少し狭いベッドに三人で寝る羽目になつていて。しかも、何故かサチとシリカは何処かいがみ合つてる様な感じだし……。
(これ…寝れるのか…?)

そんな僅かな興奮と緊張を抱く俺を余所に、徐々に夜は更けて行くのだった。

Chapter. 7：最初の激闘！　vs　獣人の王！

翌日——十二月四日、日曜日、午前十時。

昨日攻略会議が行われた広場には、ボス攻略に挑むプレイヤー総勢八十四人が集まつていた。誰一人欠けていなかつた事に、攻略リーダーであるディアベルは大いに喜んでいた。

俺達のパーティは、元ベータスターである俺とキリトをそれぞれリーダーとした、二つのパーティに別れた。

俺のパーティは、片手剣の俺、短剣使いのシリカ、棍使いのケイタ、槍使いのサチ、レイピア使いのアスナ、片手剣と盾使いのヒースクリフの六人。一方のキリトのパーティは、片手剣のキリト、短剣使いのシノンとダツカ、メイサーのテツオ、槍使いのササマル、両手斧使いのエギルの六人。双方の構成やパワーバランスが、ほぼ均一になる様に振り分けたつもりだ。……勿論本人達の要望なんかも込みだ。

因みに、俺達二グループの担当は、ディアベルが率いるグループと共にボスへの攻撃部隊。理由としては、俺とキリトが未知数であるボスの武器に唯一対抗出来るであろう

からだ。

町を出発してから約二時間半。途中モンスターとの戦闘や、アスナがパーティーレーでのテクニックを知らないというハプニングなどが有つたりしたが、俺達は無事にバス部屋の前まで辿り着いた。今は、各々戦闘で負ったダメージを回復したり、武器のチェックをしたりしている。

「そんじや、最後の確認だ。俺達の担当は、ディアベル達と共にバスへの攻撃だ。前衛は片手剣の俺と盾持ちのヒースクリフが担当する。素早さの有るシリカとアスナはバスの隙を突いて攻撃をして、ケイタとサチは武器のリーチを活かして後方からの支援だ」

「了解した」

「うん！」

「分かつたわ」

「任せて」

「はい！」

柄にもなく俺が作戦を指揮し、皆がそれに頷いてくれる。基本的には似た様な戦闘スタイルの二人一組で行動し、スイッチをしながら攻撃をしていく作戦だ。

「それと、バスのHPゲージがレッドゾーンに入つたら、必ず一旦バスから離れる事」

「これは俺達六人だけではなく、バスと戦う攻略メンバー全員が行うべき行動だ。さも

なくば、ボスの未知なる武器による不意打ちを喰らう事になるだろう。

「そこから先の作戦は、ボスが使う武器次第だ。俺とキリトの指示をしつかり聞いてくれ」

再び頷くメンバー達に向けて、俺は最後に一番重要な事を伝える。

「最後に。お前ら…………誰一人として死んでくれるなよ」

言い終わつた直後、ボス部屋の巨大な二枚扉を背にしたディアベルが、攻略メンバー八十三人に向けて声を上げた。

「皆…………もう、オレから言う事はたつた一つだ…………勝とうぜ！」

その掛け声に、攻略メンバーが一斉に鬨の声を上げる。これにより、攻略メンバーの士気が一気に高まつた事だろう。

「…………行くぞ！」

そんな攻略メンバーに背を向けたディアベルは、大扉に手を当てて短く一言だけ叫ぶと、思い切り押し開けた。

扉が開き切つて数秒後、暗闇に沈んでいたボス部屋の左右の壁で、ぼつという音を立てて松明に灯が灯る。それを皮切りに、ぼつ、ぼつ、と松明は次々に明かりを灯して行き、やがてそれは部屋の最奥部に設けられた巨大な玉座と、それに腰掛ける巨大なシリットを照らし出す。

「全軍、突撃！」

ディアベルの指示の許、俺達攻略メンバー八十四人は一斉にボス部屋へと雪崩込む。そして、俺達と玉座との距離が二十メートルを切ったその瞬間、それまで微動だにしなかつた巨大なシエルエットがようやく動いた。

「グルルラアアアアッ!!」

飛び上がり、空中でぐるりと一回転し、地響きと共に着地した獣人の王——《イルファング・ザ・コボルトロード》が、大きく口を開いて咆哮を上げる。

二メートルを軽く超える真っ赤な巨体に、獰猛なまでに輝く赤い目をしたボスは、右手には骨を削つて造られたであろう斧を、左手には革を貼り合わせたバツクラーを携えている。そしてその周りには、取り巻きである重武装モンスター——《ルインコボルト・センチネル》が三体現れる。

此処までは、ベータテスト時の記憶や攻略本の情報と同じだ。問題は、ボスが腰の後ろに差している武器……ベータテストの時はタルワールだったが、正式版である今回は果たして……。

そんな一抹の不安の中、初となるボス攻略は幕を上げたのだつた。



「スイッチだ、カミヤ君！」

「了解！ せらア！」

ボスとの戦闘は、今の所何の障害も無く、順調に進んでいる。

壁役であるA隊、B隊、D隊が交代でボスの攻撃を防御し、大きな隙が出来た所へ、ディアベルが率いるC隊を中心とした攻撃部隊五パーティーで攻め込んでいた。今現在のボスのHPは、もう少しで四本目のゲージに入ろうかという所だ。

残りの六パーティーは、二パーティーずつで一体の取り巻きコボルトを相手にしており、リポップする度に交代している。

やはり、数にものを言わせた戦い方が功を奏しているのだろう。ベータテストの時よりも圧倒的に早いペースで、ボスのHPがどんどん削れていく。

そんな事を考えながら、ヒースクリフがバツクラーを弾いた所へ攻撃を叩き込む。どうやらそれで三体目のHPゲージを削り切れたらしく、とうとうボスのHPゲージがラスト一本になつた。

「ウグルウオオオオオオオ——！」

ボスが猛々しい雄叫びを上げ、後方ではラスト三体の取り巻きコボルトがリポップする。

「攻撃が来るぞ！　B隊、ブロツク！」

再び動き出すボスコボルト。ソードスキルで仕掛けて来るが、ディアベルの指示で前衛に出たB隊が盾で、武器でそれを防ぐ。ソードスキル発動後の硬直に陥つた隙を突き、残る部隊でボスへと一斉攻撃を仕掛ける。

俺やキリトの片手剣が、シリカやシノンの短剣が、アスナのレイピアが、槍が、斧が、両手剣が、次々とボスのHPを削っていく。

「はあっ！」

その中でも特に目覚ましのは、レイピア使いの少女——アスナの奮闘っぷりだ。

彼女が使つているソードスキルは、専ら細剣スキルの基本技である単発突き攻撃『リニア』一つのみ。他のソードスキルを使おうとする様子が、全く見られない。だが、だからこそ気付いた事がある。

（なんつー速さだよ……）

そう、アスナの攻撃は速い。技の初動からダメージが発生するまでの時間が、とにかく速いのだ。

意図的に技の威力や速度をブーストする事は誰にでも可能だが、あれはそう簡単に出来る様な技術ではない。それを、恐らくゲーム初心者であろう彼女がやつてのけているというのは、驚き以外の何物でもない。彼女の秘めたる戦闘センスは、非常に高いと思

われる。

技一つだけの状態でこれだ。もしもこの先、知識や技術を増やして磨いていったのならば、彼女は一体何処まで強くなるというのだろうか？ 想像するだけでも冷や汗が出来そうだ。

「——カミヤ！」

「ツ…!? おつと！」

キリトに呼び掛けられて我に返ると、ボスの攻撃が目の前に迫っていた。それを見て慌てて攻撃を躊躇し、ボスに反撃の一撃を叩き込む。

危ない危ない。アスナの剣技に気を取られて長考していた所為で、注意が散漫になっていた様だ。気をつけなければ……。

「悪い。助かつたぜ、キリト」

「ああ。次来るぞ！」

「了解！」

後退してキリトに礼を述べてから、再び迫り来る攻撃を今度は余裕を持つて回避。そして、再度反撃の一撃を叩き込む。

そんな攻防を続ける事数分、ボスのHPはどんどん削れていき、そしていよいよ——

「グルラアツ！ グルルラアアアアア——！」

ボスのHPが、レッドゾーンへと突入した。

「来るぞ！ 皆下がれ！」

ディアベルの指示に従い、ボスの相手をしていたメンバー全員が直ぐさまボスから離れる。

ボスは咆哮を終えると、両手の斧とバツクラーを投げ捨て、腰の後ろに携えた武器へと手を掛ける。そして、ボスが鞘から引き抜いたそれは――

「ツ…！ 野太刀か」

刃の緩い反りこそ同じなれど、タルワールよりも幅が細く、研ぎ澄まされた鋼鉄の色合いをした野太刀――つまりは『カタナ』だ。

「気をつけろ！ あれはタルワールじやなくて野太刀…カタナだ！」

その情報を、ボスと対峙するメンバーへと大声で伝える。

「ボスを後ろまで囲むと全方位攻撃が来るぞ！ 無理にソードスキルで相殺しなくても、盾や武器でしつかり守れば大ダメージは喰わない！」

続ける様に、キリトも声を張り上げて注意を促す。

「了解した！ 皆…ボスのHPはもう後少しだが、油断せずに行くぞ！」

ディアベルの声に、攻略メンバー全員が気を引き締める。

そんな中、俺の隣に立つアスナは急にその身に纏うフードケープを掴み、一気に

身体から引き剥がした。恐らくそれは、これから臨む最後の攻防に對しての、彼女なりの氣の引き締め方なのだろう。

ケープの中から現れた艶やかな栗色のロングヘアは、松明の光を浴びて綺麗な輝きを放つ。一瞬だがその輝きに見惚れてしまつた俺だが、今が戦闘中である事を思い出し、意識をボスへと集中させた。

「グルルラアツ！」

「来るぞ！ 防御だ！」

そして、ボスとの最後の攻防が幕を開ける。

開始早々から居合系統のカタナ直線遠距離攻撃である『辻風』を放つて来たボスだが、初動のモーションで技を確認したキリトの指示で動いた壁役のA、B、D隊がそれを防御。HPは削れはしたが、大きく吹き飛ばされる様な事は無かつた。

ボスがソードスキル発動後の硬直に陥つた所へ、すかさず残りのメンバーで攻撃を仕掛ける。勿論の事、ボスを全方位から囮まない様にだ。

「次、来るぞ！」

ボスがソードスキルを発動させては防御し、その隙を突いて攻撃を仕掛ける……そんな攻防を繰り返す事数分、ボスのHPがいよいよ残り僅かとなる。そこから先は、畳み掛けるかの様な連続攻撃だった。

「ふんっ！」

ヒースクリフがボスの攻撃を弾き返し——

「ぬおおおツ！」

エギルが、両手斧系ソードスキル《ワールウインド》でボスを後退させ——

「はああつ！」

そこへ、サチとササマルが槍スキルの単発突き攻撃《スタッブ》を撃ち込む。
それに続く様に、シリカが、シノンが、ケイタやディアベル達が、次々に攻撃を決めて行く。

「グルルラアツ！」

「させるかああツ！」

最後の足掻きとばかりに野太刀を振り下ろそうとするボスに対し、それを迎撃するべく俺もソードスキルを発動させる。右手の剣を左腰へと構え、身体を転倒寸前まで倒し、右足を全力で踏み切つて駆け抜ける。片手剣基本突進技《レイジスピクト》だ。

右上からの袈裟斬りと左下からの突き上げの軌道は見事に交差し、甲高い金属音を響かせる。

「行つ……たれえええええツ！」

上から振り下ろされた分威力の勝る袈裟斬りを、意地と気合い、そして隣を走るキリ

トとアスナへ向けての、ボスへの止めを煽る意を込めての絶叫と共に弾き返し、ボスをノックバックさせて隙を作る。

「はああつ！」

「行つ……けえツ！」

そこへ、アスナが渾身の『リニア』を撃ち込み、それに僅かに遅れて、キリトの剣がボスの右肩口から腹までを斬り裂く。HPゲージ……残り一ドット。

「お……おおおおおッ！」

その事にボスはニヤリと笑みを浮かべる——様に見えた——が、キリトの攻撃はそれで終わりではなかつた。振り下ろした剣を跳ね上げ、先の斬撃と合わせてV字の軌跡を描き、ボスの身体を斬り裂いた。片手剣二連撃技『バーチカル・アーフ』だ。

それにより残り一ドットだったHPはゼロとなり、インクラッド第一層のフロアボス——『イルファング・ザ・コボルトロード』は、その身体を幾千幾万ものポリゴンの破片へと変えて盛大に四散した。

——初のボス攻略は、俺達の勝利に終わつたのだつた。

「「「うおおおおおおオ!!!」」

「「よっしゃあああああア!!」」

部屋のあちこちから、勝利を喜ぶプレイヤー達の絶叫が沸き起る。互いに腕を組み、拳をぶつけ合い、中には互いを抱き合っているプレイヤーすら居る。

「お兄ちゃん！」

「カミヤ君！」

そんな中、シリカとサチが俺の許へと駆け寄つて来て、シリカに至つては俺に抱き着いて来た。それに遅れて、俺とキリトの他のパーティーメンバー達も歩み寄つて来る。何気なくサムズアップして見せれば、皆も笑顔でそれぞれに反応を返してくれた。

更に遅れてアスナと、LA（ラストアタック）ボーナスとして手に入れたのであろう黒いコートを羽織つたキリトが、こちらに歩み寄つて来了。

「二人ともご苦労さん。グッジョブだつたぜ」

「ああ」

「あなたもね」

ボスへの止めを担つてくれた二人に向けて賛辞を述べ、最初にキリトと、次いでアスナと軽くハイタッチを交わす。直後に、俺は彼女に声を掛けられた。

「あなたの言つた通りだつたわね」

「ん？」

「何事も、やつてみなくちや分からぬものね」「お、おう……。そうだな」

その際にアスナが見せてくれた美しい笑顔に、俺は一瞬見惚れてしまう。が、直ぐに気持ちを振り払い、彼女へと言葉を返した。

「一人じや難しい事でも、仲間が居れば乗り越えられるもんさ。だから、もし何時か信頼出来る仲間が出来て、パーティーやギルドに誘われたら、あんま断るなよ。協力して、頼つて、一緒に上を目指すんだぜ」

「ええ。そうするわ」

その後、俺達攻略メンバーは第一層バス部屋を後にし、第二層へと続く螺旋階段を上つて行く。次に待ち受けるボスを倒し、更に上へと進む為に。

——遙か先に存在するはずの、希望という名のエンディングを迎える為に。

Chapter. 8：月夜の黒猫団

第一層ボス攻略から、数ヶ月の月日が流れた。

あの後、第二層に於ける武器の強化詐欺事件や、第三層より始まつた、ちょっととした手違いで発生したイレギュラー含みの大型クエストなど、様々な出来事が有つた。

現在、アインクラッド攻略の最前線は第十一層。俺達七人は、頑張つて……けれども無理の無い範囲で攻略組の一角としての地位を維持しており、最前線で激しい戦闘の日々を送つている。

サチも、あの夜以来あまり弱音を吐かなくなり、一生懸命攻略に励んでいる。それでもやはり戦うのは怖い様で、ほぼ毎晩の様に俺の部屋にやつて来て、俺と一緒に寝てる。俺も別に構わないし、ケイタ達も容認してくれてるので良いのだが、ただ……ほぼ毎晩の様にシリカといがみ合うのだけはやめて欲しい。間に挟まれて寝ている俺の身にもなつてくれ……。

そんな日々を過ごしていた、ある日の事だった。

「ギルドを結成したい？」

一日の攻略を終え、第十一層の主街区《タフト》の宿屋で夕食を取っていた時の事だつた。皆を代表して、ケイタが唐突に切り出したのだ。

「うん。僕達もそろそろ、そういうのが必要かなと思つてね」

ギルドの結成は、第三層に到達した時点で可能だつた。が、俺はギルドに対しても特に興味は無かつたので、特に何も言わないのでいた。

因みに、今アインクラッドに存在する中で最も有力なギルドは二つで、一つはディアベルが率いる《アインクラッド解放軍》、もう一つはヒースクリフが率いる《血盟騎士団（K.O.B）》だ。両のギルドから一度ずつ勧誘を受けた事が有るのだが、自分達のペースで無理無くやりたい為、どちらも断つた。

「んー……まあ、良いんじやないか？ 結成しても」

「本当かい!?」

「ああ、俺は構わないぜ。……てか、わざわざ俺に許可求めなくとも良かつたんじやねえか？」

「い、いやあ……ほら、うちのパーテイーの実質的なリーダーって、カミヤだと思うからさあ」

そうは言うが、俺は単にベータテストで得た情報や経験を以てパーテイーを引っ張つてているだけで、そんな大層な器ではない。それに、ベータスターであるというアドバ

ンテージは次の第十二層で終わりで、それ以降は俺も他のプレイヤーと同じだ。

「まあ良いや。んじやまあ、明日は《ギルド結成クエスト》を受けに、第三層に下りるという事で」

「「おー！」」

まあ、リーダーの話はとにもかくにも、俺達は《ギルド結成クエスト》を受けに行く事を決定して、皆それぞれの時間に就寝した。……勿論、俺は何故かいがみ合うサチとシリカの二人に挟まれてだ。

そして、翌日の夕方。

「んじやまあ、ギルド《月夜の黒猫団》の結成を祝つて……乾杯！」

「「かんぱーい！」」

無事《ギルド結成クエスト》をクリアした俺達は、《タフト》の宿屋でギルド結成の祝杯を上げている。といつても、此処最近口にしている飲み物よりも少し値の張るものと、何時よりも少し多い食事を頼んだ程度だが。

「今更だけど、本当に俺がリーダーで良いんだな…？」

始まつて早々、皆にそう問い合わせる俺。そう……俺達のギルド《月夜の黒猫団》のリーダーは、討論の末に俺に決まったのだ。……といつても、実際には六人とも全員が俺をリーダーに推し、俺が根負けして了承したのだが。

因みに、ギルド名の『月夜の黒猫団』というのは適当に考えたものだ。……攻略ギルドとしては些か迫力に欠ける名前だと思われるが、ギルド名に関しては皆に一任した為とやかく言えないし、言うつもりも無い。

「言つただろ？ カミヤが一番適任なんだって」

俺の往生際の悪いとも取れる最後の確認に、皆は「まだ言うか」とでも言いた気な表情を浮かべ、ケイタが代表して口を開いた。

その言葉を聞いて、俺はリーダーを決める際の彼とやり取りを思い出す。



「俺にはリーダーなんて務まらねえよ。素質なんてねえだろうし、上手くやれる自信もねえ」

「それは僕達だって同じだよ。けど、君には僕達には無い経験が有るじゃないか」「経験の有無も、あんまり関係ねえと思うぞ？」

「そうかなあ？ 僕としては重要だと思うんだけど」

俺は現実じやあ人付き合いが苦手であり、他人とあまり話そと……積極的に接しようとしない。そんな俺に、人を纏める立場であるリーダーなど務まるとは思えない……

そう理解しているが故に、色々と理由を付けて推薦を断ろうとするが、ケイタは尚も俺を推して来る。

「それに……カミヤは素質や経験なんかよりも、もつと重要な物を持つてると思うんだ。この中の誰よりも」

そんな問答が続く中でケイタが口にした思わず聞き返した。

「素質や経験よりも……重要な物……？」

「意思だよ」

「意思……？」

そして、ケイタが口にした答えに再び聞き返す俺。今度は疑問オンリーだ。

「仲間を……全ブレイヤーを守ろうっていう、強い意思……そういう強い思いの力を持つた人が、リーダーに相応しいと思うんだ」

ケイタのその言葉に納得する俺。確かに、何かを成そうとする強い思いは自然と人を引き付け、そこから生まれる信頼なんかがその人物をリーダーたらしめたりするものだ。だが……

「理屈は何と無く分かる。……けど、俺にはそんな強い意思なんて……」「何を言つてるのさ！」

俺には強い意志など無い……そう言おうとした俺を、ケイタが声を上げて止めた。

「カミヤはデスゲームが始まつたあの日、僕達ビギナーの為に講習会を開いてくれた……あれは、全プレイヤーを助けたいっていう思いが有つたからだろ？」

「あ、ああ。確かにそうだが……」

「それに、カミヤは僕達が危なくなつた時には、何時も僕達を庇つて戦つてくれてる……それは、僕達を守ろうっていう思いが有る事の証拠だよ」

確かに、俺には多くのプレイヤーを……メンバーの皆を守りたいという思いが有つた。そして、その思いに従つて今まで行動して來た。

「カミヤには、皆を守ろうとする強い意思が有る。だからこそ、君が一番リーダーに適任なんだ」



ケイタの言う強い意思とやらが、本当に俺なんかに有るのかは未だに疑問だ。だが、俺がメンバーの皆を……多くのプレイヤーを守りたいと思つてゐるのは事実だ。

その点をケイタ達に突かれて言葉が返せなくなつた俺は、彼らの推しに根負けしてリーダーになる事を了承したのだ。そして……

「分かつた分かつた。単なる確認だ。今更辞めるなんて言わねえよ」

今でもまだ、俺がリーダーでは不相応ではないかと思っているが、了承した以上は覚悟を決め、不相応なりにも頑張つてやつてみるつもりだ。

やると決めた責務は最後までやり通す……それが俺のポリシーだから。

「ほらほら、せつかくの祝いの席なんだしよお、真面目な話は後にしようぜ」

「そうだよカミヤ君。楽しもう?」

「ああ。だな」

そんな祝いの席には相応しくない真面目な雰囲気の俺を見兼ねてか、ダッカーが、次いでサチが声を掛けて来た。二人その言葉に領いて、今は宴を楽しむ事にする。

飲んで、食べて、談笑して……あまり贅沢とは言えず、何時もとあまり変わらない光景だが、それでも充分に楽しい。こいつらと居ると、何だかとても心温まつて来る気がするから不思議だ。

だからこそ、俺はこいつらの事を守りたい。その為にも、俺に出来る限りの事をしよう……心の中で、俺は強くそう決意した。

「お兄ちゃん…どうかした?」

「ん? いや、何でもない」

「そう…?」

その後、ある程度宴を楽しんだ所で、リーダーとしての初の仕事——ギルドの方針について話す事にした。

「うちの方針についてだが……先ず、行動は自由だ」

「「自由…？」」

俺の自由行動発言に、メンバーはそれぞれに驚きや疑問の表情を浮かべる。

「攻略に向かうも良し。クエスト受けて、アイテムや情報を入手するも良し。宿で待機するも良し。各自好きな様に行動してくれて構わない。ただし、攻略やクエストに行く時は一人では行動せずに、必ず二人以上で行動する事。それと、犯罪紛いな事もしない様に」

命が懸かっているとは言え、一応これはゲームだ。楽しむとまでは行かないまでも、皆それぞれに自由にやりたい事だろう。行動を強制して、束縛するのは良くない……そういう考えての判断だ。

だからといって、これが命懸けのデスゲームである事を忘れて貰ってはいけないし、何をしてても良いという訳でもない。なので、そこはしつかり注意しておく。

「次にレベルについてだが、攻略に参加するつもりなら、なるべく積極的に上げて、安全マージンをしつかり確保しといて欲しい」

最前線に於いてギリギリのステータスで戦う事はつまり、死の危険性が高まる事を意

味している。それを充分に理解しているからだろう、これにはメンバー全員が強く頷く。

「最後に、これだけは絶対に守つて欲しい」

俺の『絶対』という言葉に、メンバー全員の表情がより一層真剣なものとなる。対する俺も、より一層真剣な表情で言葉を続ける。

「…………このデスマッチがクリアされるその日まで、誰一人として死んでくれるなよ」ボス攻略の度に、嫌と言う程口にして来た言葉。それだけ重要な事であるが故に、誰も茶化す様な事は言わず、ただ真剣に頷くだけだった。

「増員やギルドホームの事については追い追い考えて行くから、今は目の前の攻略に集中する事」

続く内容はさほど重要でもないので、俺は真剣な表情を崩して言葉を続ける。

メンバーの増員はともかく、ギルドホームの購入はいずれ行う予定だが、今はまだその時ではない。何も纏まっていない状態であれもこれも手を出そうとすれば必ず失敗し、最悪全てがダメになってしまふ。故に、ギルドの形が纏まるまでは、一つの事……つまりは攻略に集中するべきだろう。

「以上が、俺が考える限りのうちの方針だ。他に何か意見・要望が有つたら隨時報告してくれ。皆で検討しよう」

伝えるべき事を伝え終えた俺は、最後に皆を鼓舞するべく声を上げ、左手で持ったグラスを高々と掲げる。

「それじゃあ皆……このゲームのクリアを目指して、氣イ引き締めて行くぞ！ 絶対に生き残るぞ！」

「「おお——！」」

直後、皆も掛け声と共にグラスを高々と掲げ、掲げられた七つのグラスは、カチーンという心地好い音を響かせた。

これが、後に『攻略組の四大ギルド』の一角となるギルド……更にその一角となるギルドの、始まりの瞬間だつた。

Chapter. 9：会議と絶劍とビーストティマー

SAO開始から半年が経過し、攻略の最前線は第二十五層……つまり、ようやく全体の四分の一まで到達した。

俺達のギルド『月夜の黒猫団』はと言うと、結成から今日までの間に新たに五人のプレイヤーが入団した。その中には、キリトとシノン、エギルの三人も入っている。階を重ねる毎に迷宮区の攻略が徐々に厳しくなり始めて来た為、何度もボス攻略を共にしたよしみから、心配して引き入れる事にしたのだ。特にキリトとシノンは、三層からの大型クエスト終了後に別れて以来、ずっと二人だけで行動していた様だからな。

因みに、同じく大型クエストの後に別れ、何度もボス攻略を共にしたアスナも誘おうかと思つたが、どうやら先に別のギルドに誘われ、入団していたらしい。そのギルドの影響なのか、最近では笑つてゐる顔の彼女をよく見かける様になつた。

さて。現在俺達は、第二十五層主街区の集会所にてボス攻略の会議に参加している。俺達のギルドの他には、有力二大ギルドである『血盟騎士団』と『インクラッド解放軍』。近頃勢力を伸ばし始めて來た『聖竜連合』。ようやく追い付いて來たクライインが

率いる少数精銳ギルド『風林火山』。そして、アスナが所属している、うちとほぼ同じくらいの小規模ギルドと、その他ソロで活躍しているプレイヤー達だ。

因みに今、件の小規模ギルドのリーダーの妹さんがこちらに向けて笑顔で手を振つており、それに釣られる様にアスナも軽く手を振つている。そんな彼女らにこちらからも手を振り返してから、正面を向いて会議に集中する。

「ええ、ではこれより、第二十五層ボス攻略会議を始めたいと思います」

会議の進行役を勤めるのは、血盟騎士団の副団長である、『謹厳実直』を絵に描いた様な性格——K.O.Bの知り合いの談——だという金髪の青年プレイヤー『レンド』。

彼は手元の『記録結晶』と呼ばれる、写真や映像を記録する機能を持つた結晶アイテムを操作して集会所に映像を映し出し、説明を開始する。

「こちらが、先日我が血盟騎士団とアインクラッド解放軍の偵察部隊が調査した、第二十五層フロアボス——『ザ・ヘビイクラッジ・ゴーレム』です」

そこに映し出されたのは、身の丈十メートルは有ろうかという、全身を岩の様なごつごつとした皮膚で覆われた、巨人型のモンスターだった。

「動き 자체はそれ程速くはありませんが、その分攻撃力は半端ではないとの事。偵察部隊のタンクプレイヤーからの情報によれば、満タンだったHPが一撃でイエローゾーンを超えて、レッドゾーンの寸前まで追いやられたとの事です」

レンドさんの説明に、会議に集まつた多くのプレイヤーがどよめき、息を呑んだ。

無理も無い。バスの攻撃から他のプレイヤーを守るべく、文字通り壁となるタンクプレイヤー達は、防御力に重きを置いた装備やステータスをしている。それが、たつたの一撃でHPを半分以下にまで削られたのだ。もしもその攻撃を、ダメージディーラーであるスピードタイプのプレイヤー達が喰らいでもすれば、即死はほぼ免れないだろう。「加えて、バスの防御は見た目通り頑丈で、ソードスキルを用いた攻撃でも、ほんの数ドット程度しか削れなかつたとの事です」

ゴーレム系統のモンスターは基本的に防御力が高く、攻撃力重視ではない片手剣や短剣、槍なんかではあまりダメージを与えられない。普通のモンスターでもそうなのだから、普通のモンスターの何倍ものステータスを誇るバスが相手では、更に困難を極める事になるだろう。事実、映像の中の片手剣使いがソードスキルで攻撃をしても、バスのHPは殆ど減つていらない。

有効となり得るのは、攻撃力重視の武器である斧やメイス、次いで両手剣といった所だろう。

「それと、バス部屋の奥の方に、巨大なハンマーらしき物が見えたとの事です。恐らく、何かしら有ると考えて間違いないでしよう」

レンドさんの言う通り、そのハンマーは単なるオブジェクトではないだろう。バス部

屋にオブジェクトが置かれているというのは、どう考へても不自然な事だ。恐らく、H Pが一定量を超えた際にボスが使う武器なのだろう。それ以外に考へられない。

「以上の事を踏まえた上で、今回のフロアボスの作戦を立てて下さい」

レンドさんからの説明が一通り終わり、他のギルドがそれぞれに作戦を検討し始める中で、さて俺達も作戦を考え様かと思つた時だつた。

「黒猫の団長さうん！」

「ん？　おう、ユウキか」

件の妹さん——長く伸びた濃紺のストレートヘアで、小造りな顔、笑窪の浮かぶ頬に、つんと上向いた鼻、そしてくりくりとしたアメジスト色の大きな瞳をした少女——《ユウキ》が、声を上げてこちらへと駆け寄つて來た。

その後ろからは、アスナを含めた残り九人のギルドメンバーも近付いて來て、そのうちの一人——ユウキと同じくらいの背丈をした少女が、ユウキを窘めた。

「こらユウキ、一人で勝手に行かないの」

「は、はーい、姉ちゃん……」

少女の名前は《ラン》。ユウキの双子の姉で、件の小規模ギルド——《スリーピング・ナイツ》のリーダーだ。ただし、彼女の顔は双子だという割にはユウキとはあまり似ておらず、顔は小さな卵型、小さいながらもスッと通つた鼻筋と、どちらかと言えばアス

ナに雰囲気が似ている。濃紺の長いストレートヘアと、こちらはサファイア色の大きな瞳はユウキと似ているが。

さて、そんな二人だが、実は驚くべき事にシリカと同じ十二歳なのだ。

だが、ただの十二歳と侮る事勿れ。この二人……かなり強い。その強さは、攻略組観戦の下行われたデュエルに於いて立証済みで、元ベータテスターの中では豊富な経験を有している俺とキリトと、ほぼ互角にやり合える程……下手をすれば、俺達を上回る程の実力だ。

一度元ベータテスターの線を疑つたが、本人達曰くベータテストには参加しておらず、元ベータテスターからのレクチャーで得た技術をひたすらに磨いて来ただけとの事。……どうやら二人は、アスナ以上の逸材なのかもしれないのだ。

そんな二人の事を、誰が呼び始めたのか、俺達攻略組はこう呼んでいる。

超絶、絶倫、空前絶後の剣の姉妹——《絶剣姉妹》と。

「そんで、どうしたんだ？」

そんな強者たる二人が率いるギルドが、俺達に何の用なのかと尋ねてみると、代表してランちゃんが答えてくれた。

因みに、俺がユウキの事をちゃん付けで呼ばないのは、ユウキが実に元気かつ活発で、その上自分の事を『ボク』と呼んでいる為に、ちゃん付けで呼ぶ事に違和感を感じるからだ。

「わたし達のギルドは、恐らく何時も通り連合を組んで攻略に参加する事になると思つたので、早々に黒猫団の皆さんと合流したんです」

十二歳とは思えない、とても落ち着いた態度と口調で答えてくれたランちゃんの答えに、俺は直ぐに納得する。

確かに此処最近のボス攻略では、うちはスリーピング・ナイツや風林火山、ソロブレイヤー達と連合を組んで参加している。やはりと言うべきか、それぞれのギルドの人数が少ないので理由だ。

「ところで、カミヤ君……」

するとそこへ、今まで二人の後ろで黙っていたアスナが、俺に声を掛けて来た。その視線を若干『下』……正確には、俺の『足元』に向けて。

「えつと……カミヤ君の足元に居るその『モンスター』が例の……」

そう。今俺の足元には、アスナの言う通りモンスター……漆黒の体毛に部分的な白い毛をしたオオカミと、白銀の体毛に覆われたオオカミが一匹ずつ伏せている。本来、モンスターが『圈内』に居るというのは有り得ない事なのだが、俺の足元に居る二匹は例

外なのだ。

「そう。俺がティムしたモンスターで、種族名は『モノクロウルフ』って言うんだ
やつぱりそうなんだあ」

俺の答えにそう返すと、アスナはしゃがんで二匹の事を興味津々そうに見詰め始めた。その表情は可愛いものを見る様な、そして何處か羨ましそうなものだつた。

ティム——それは、戦闘中、通常は好戦的なモンスターがプレイヤーに友好的な興味を示すイベントが発生した際、餌を与えるなどして上手く飼い馴らす事を言う。勿論の事、全てのモンスターをティム出来るという訳ではなく、可能性が高いのは一部の小型モンスターくらい。また、『同種のモンスターを倒し過ぎていると発生しない』というのは確実だと言われている。

そうしてティムされたモンスターは、プレイヤーの『使い魔』として様々な手助けをしてくれる貴重な存在となる。また、モンスターのティムに成功したプレイヤーの事を『ビーストティマー』と呼ぶらしく、現在の所、その貴重とも言えるビーストティマーは俺を含めてたつたの二人だけだ。

俺が二匹をティムしたのは、二日前の下層の森での事……近々行われる二十五層のボス攻略に向けて武器を強化しようと思い、シリカとサチの三人で素材を集めのモンスター狩りに行つた、その帰り道の事だ。

高価な転移結晶を使うのは勿体ないと歩いて街へと向かっていた時、近くの茂みから二匹のオオカミが現れてこちらに近付いて来た。だが、その二匹が攻撃を仕掛けて来る様な様子は無く、『前例を知っていた』為にまさかと思い、試しに偶然その日に買った袋入りのジャーキーを与えた所、案の定タイム出来てしまつたのだ。

「ねえ、この子達には名前は有るの？」

「有るよ。黒いのが『リト』で、白いのが『スーナ』って言うんだ」

「へえ、リトとスーナって言うんだあ。何だかわたしとそつちの『黒ずくめ』さんの名前に似てるわねえ」

こちらに振り向いたアスナの質問に答えを返すと、彼女はくすつと笑い、キリトの事を指差しながら言葉を口にした。

『黒ずくめ』——髪の毛からコート、インナー、ズボン、果ては武器に至るまで黒一色で統一したキリトのニックネームの事で、攻略組では有名だ。最近では『黒の剣士』とも呼ばれ始めているらしい。

「似てて当然だよ。なんせ、キリトとアスナを連想して付けたんだからな」

「え？ キリト君と…わたしを連想して…？」

俺の答えに、アスナは目を見開いて驚いた様子を見せる。それもそうだ。いきなり『あなたを連想して名前を付けました』なんて言われたら、驚きもするだろう。

「いやな、黒と白を見ると、どうにもキリトとアスナを思い浮かべちまつてなあ。悪いとは思いながらも、アスナの名前から取らせて貰つたんだよ」

事実、アスナの外見は白のインナーに白のコートと、正しく白を連想させるものとなつてゐる。

「へ、へえ。そうなんだあ……」

「許可を取らなかつたのは悪いと思つてる。だから、もし嫌だつて言うんなら今すぐにでも変えるつもりで——」

「う、ううん！　良いの良いの！　何だか愛着が湧きそうだからそのまままで構わないわ

！」

「そ、そうか。ならこのままスーナつて呼ぶ事にするよ」

良かつたあ。本人の許可を得ずに名前を使つたから、もしかしたら怒られるだろうと思つていたけれど、どうやらお咎めは無いらしい。けど、今度からはちゃんと許可を取る様にしよう。

因みに、キリトからはちゃんと許可を得てから使わせて貰つた。

「う、うん。……そうかあ。わたしを連想してくれたんだあ」「ん？　何か言つたか？」

「な、何でもないわよ！　そ、それにしても、『兄妹揃つて』ビーストティマーになるな

んて、何だか凄い事よねえ」

アスナが何やら呟いた様だか、あまりに小さかつた為に上手く聞き取れなかつた。聞き返してもはぐらかされてしまつたし、しつこく聞き返すのもあれなので此処は諦める事にする。

さて……。

そうなのだ。俺以外のもう一人にして、そして俺よりも先……つまりは一番最初にテイムを成功させてビーストティマーになつたプレイヤーというのは、実は俺の隣で小さなドラゴンを肩に乗せている、我が妹のシリカなのだ。

シリカの使い魔は種族名を『フエザーリドラ』といい、全身をふわふわとしたペールブルーの綿毛で覆われ、尻尾の代わりに二本の大きな尾羽を伸ばした小さなドラゴンだ。シリカはそのドラゴンに、俺達が現実で飼っている猫と同じ『ピナ』という名前を付けた。

俺達がピナと出会つたのは、とある層の迷宮区攻略に向けてのレベルアップの為に入つた森での事。森に入つて早々に遭遇し、攻撃せずに近寄つて來たピナへ、シリカが何とは無しに買つていた袋入りのナツツを放つた所、それが偶然にもピナの好物だつたらしく、運良くテイムに成功してしまつた。その日の攻略を終えて街に戻るとたちまち大きな話題を呼び、攻略組のプレイヤー達にもかなり騒がれたものだ。……そういう

ば、その時もアスナはピナに対して興味津々な態度を取っていたなあ。

「あ、ああ。だよなあ。俺自身もかなり驚いてる」

勿論の事今回も大分騒がれた。二人目の攻略組からのビーストティマーというのもあるだろうが、やはり兄妹揃ってビーストティマーという事の方がより印象的だつたらしい。昨日の朝刊にも『驚愕！　二人目はまさかのお兄ちゃん!?』というタイトルで一面に飾られていた。

余談だが、事の真偽を確かめに来た『鼠』という通り名の情報屋『アルゴ』は、二四に対して僅かに距離を置いていた。

「ねえ、触つても良いかしら？」

「構わないけど、今は攻略会議中だから、会議が終わつてからな」

「はーい！」

「あ、ボクも——」

この後、約束通り会議が終わつてからアスナとユウキ……更には他のスリーピング・ナイツのメンバーにも二匹を触らせてあげたのだが、その時のアスナの表情は実に幸せそうなもので、うつかりドキッとしてしまつたものだ。

尚、肝心のボス攻略の作戦の方は次の通りとなつた。

ボスの攻撃は盾装備での防御ではなく、スピードタイプのプレイヤーによる回避行動

によつて凌ぐという事になり、この役目は、スピードタイプのプレイヤーを多く有する俺達連合軍が引き受ける事になつた。それでも念には念にをと壁役は用意しておくとの事で、これは攻略組の中でも特に防御に優れた聖竜連合が引き受ける事になつた。残つたK・Bと軍は一部のプレイヤーを壁役に回して、残りは攻撃に専念するとの事だ。

果たして、無事に攻略する事が出来るのだろうか…？

「ん♪ もふもふ♪」

……それと、アスナがこんなんだけど大丈夫だろうか…？

Chapter. 10 : 激震！ VS 岩壁の巨人！

二〇二三年五月十三日、第二十五層迷宮区の最上階——バス部屋の前。今そこには、第二十五層のバスを攻略せんと参加した多くの攻略組。プレイヤー達が集結している。

皆一様にその表情を真剣なものにし、HPの回復、装備の最終確認など、これから挑む戦いに向けての準備に集中している。

「諸君……この扉の向こうが、バスの待ち受けている部屋となつていて。……全員、準備は良いかね？」

バス部屋の大扉を背にして攻略メンバーの先頭に立つ、今回のバス攻略のリーダーたるヒースクリフの言葉に、攻略メンバーはそれぞれに頷き返す。それを一通り見渡したヒースクリフもまた一つ頷くと、扉の方へと向き直り、扉に手を当てる。

「では……行くぞ！」

「「おうッ！」」

そして押し開ける。扉がゆっくりと開いて行く中、プレイヤー達は各々の武器を抜いて臨戦態勢を取り、扉が開き切るのを待つ。そして——

「——戦闘、開始!」

扉が完全に開き切つたのと同時に掛けられたヒースクリフの号令を合図に、およそ百人のプレイヤーがバス部屋の中へと雪崩込んだ。

そして数秒後、部屋の周りを囲う様に並び立つ大小二種類の石柱に明かりが灯り、部屋の全貌が明らかとなる。床は大きな石柱を頂点とした巨大な正八角形となつており、周りの壁は十メートル以上上の天井まで垂直にそそり立つて――所謂正八角柱の形である。そして、その部屋の中央には、高さ五メートルは有ろうかという黒くて巨大な岩の様な塊が鎮座しており、得も言われぬ威圧感を放つている。すると……

「な、何だ……!?

突如部屋全体を激しい揺れが襲い、誰かが何事かと思わず声を上げた。

「き、来ます! ボスです!」

「ボス……!?

「目の前の巨大な岩の塊です!」

その揺れの正体は直ぐに判明した。そう、目の前に鎮座していた巨大な岩の塊――その正体は第二十五層のボス――が動き始めたのだ。どうやらうずくまつていたらしいボスは、部屋を揺らしながらその巨大を徐々に起こして行き、数十秒掛けて部屋の中央に直立した。その高さ……およそ十メートル。

「で、でかい……」

そのあまりの巨大さに、誰かが思わずそう呟いた。恐らくこの場に居る全員が、そのプレイヤーと同じ気持ちだろう。

「ゴオオオオオオオオ——！」

次の瞬間、部屋を揺るがしかねないバスの巨大な咆哮が遙か上空から降り注ぎ、バスの中程の高さの辺りにバスのHPと名前が表示された。『The Heavycrag Golem』——巨岩のゴーレムと。

「——全軍、攻撃開始！」

「「う、うおおおおオ——！」」

バスの咆哮の一瞬威圧されたプレイヤー達だが、ヒースクリフの号令によつて我を取り戻し、気持ちを切り替えて果敢にバスへと挑んで行く。

今此処に、攻略組プレイヤー達と第二十五層フロアボス『ザ・ヘビイクラッジ・ゴーレム』との激闘が始まつた。



第二十五層のフロアボス『ザ・ヘビイクラッジ・ゴーレム』との戦闘が始まつてから、

既に十分以上が経過した。だが、未だにボスのHPは五本有るゲージのうちの一本どころか、一本目の半分も削れていない。その理由は至つて簡単……

「堅過ぎんぞ、こいつ……！」

そう……堅い、堅過ぎるのだ。事前の情報で攻撃が効かない事は覚悟していたが、これは思つていた以上にきつい。しかも、攻略が難航している理由はそれだけではないのだ。

「ゴオ……」

「来るぞ！ 総員退避して衝撃に備えたまえ！」

「オオオオオオ——!!」

振り下ろされるバスの攻撃を充分な距離まで引き付けてから回避し、バスの攻撃が床に衝突する瞬間にタイミングを計つて飛び上がる。直後、ドゴオオンという轟音が部屋中に響き渡り、着地した途端に軽く足元がふらついた。

そう、攻略が難航しているもう一つの理由というのは、バスの攻撃によつて起こる搖れが原因なのだ。バスの攻撃一撃一撃があまりにも重い為に、バスの攻撃が振り下ろされる度に部屋中が揺れ、数秒程だが上手く動く事が出来なくなつてしまふのだ。しかも、バスとの距離が近い程揺れの大きさが強い為に、転倒の可能性を考えると迂闊に近く事が出来ず、どうしても距離を空けてしまいがちになるのだ。

「今だ！ 総員突撃！」

とは言え、第二層のフロアボス——《ナト・ザ・カーネルトラス》、《ラン・ザ・ジエネラルトラス》、《アステリオス・ザ・トラスキング》の攻撃の様に、衝撃を受けてスタンや麻痺状態になるという訳でもないので、揺れさえ治まれば一気に攻撃に転じる事が出来る。それにだ……

「テツオ、エギルさん、マースさん……攻撃宜しく！ 他はとにかく“弱点”らしき物を探してくれ！」

俺達だつて、ただ闇雲に攻撃をしているという訳でもない。

普通に攻撃しても駄目だというのならば、何かしら有効な攻撃方法が有るはずなのだ。そう考えた俺は、その有効なダメージを与えられる箇所……つまりは弱点を見付けろべく、メイサーのテツオ、両手斧使いのエギル、そして新メンバーである両手剣使いの巨漢《マース》の三人にボスへの攻撃を任せ、残りの黒猫団メンバーと共にボスのターゲットを取りつつ、ボスを攻撃しながら弱点を探しているのだ。

「ジユン君、テツチさん、イヴさん達も、攻撃お願ひします！」

これにはスリーピング・ナイツや風林火山……連合軍の全プレイヤーが協力している。

因みに、スリーピング・ナイツからは大剣使いの小柄な少年《ジユン》、シールドとメ

イスを持った細目の巨漢《テツチ》、両手斧使いの細身な少女《イヴ》の三人が、ランちゃんの指示で攻撃役に回っている。

「ゴオ……」

「ちつ！ 攻撃が来るぞ！ 全員退避だ！」

すると、先程の攻撃からようやく体勢を元に戻したボスが、再び攻撃を振り下ろそうと構えを取る。それを見た俺は、黒猫団やスリーピング・ナイツ、ボスを攻撃せんと前に出て来たプレイヤー全員に聞こえる様に声を上げた。

「……試しに登つてみるか」

「あ！ ならボクも！」

「……え？」

そうして、ボスの攻撃範囲から離れようと走つていると、すれ違い様にキリトとユウキの二人が何かを呟いたのが聞こえた。……気のせいでなければ、登つてみるとか聞こえた様な気がしたのだが……？ え？ 登つてみるつて…まさか……。

「オオオオオオ——！」

そんな事を考えていると、ボスの攻撃がいよいよ床に衝突しようとする。殆どのプレイヤーが後退して揺れに備えようとしている中、キリトとユウキだけはボスへと突つ走つて行き、そして――

「はあっ！」

「やあっ！」

——ボスの拳が床に激突する瞬間に飛び上がり、ボスの腕の上に着地。そのままボスの腕の上を駆け上がつて行つた。

「なあっ……！」

「「ええええエ——!?」」

その光景に、俺を含めた殆どのプレイヤーが驚愕の声を上げる。

「えっ……!? ちよ、ユウキ……!?」

普段は落ち着いているランちゃんも、これには流石に冷静さを欠いて驚いている。

「はあ……。まつたく」

そんな中で、唯一シノンだけが落ち着いて次の行動に移ろうとしている。恐らく、彼女はキリトのああいつた行動を見慣れてしまつているのだろうか。

「……つと。皆……俺達も行くぞ！」

「「お、おうツ——！」」

ともにかくにも、何時までも茫然と突つ立つてゐる訳にもいかないので、気を引き締め直して再び行動を起こす。ひたすら攻撃して、弱点となる箇所を探し続ける。

「ゴオオツ……!?」

上方ではキリトとユウキがボスの顔……恐らくは眼を攻撃した様で、ボスのHPが今までよりも大きく削れた。

今の攻撃……ボスの動きがゆっくりであるが故に何度も繰り返す事は可能だろうが、ボスの頭まで到達するのに時間がかかるであろう事から、ダメージ量を考えても効率はあまり良くない。加えて、恐らくあれを出来るプレイヤーは限られて来るであろうから、有効な手段とは言い難いだろう。

因みに、俺の場合は無理だ。それはステータス的な理由ではなく、心理的な理由……つまりところ、俺は高所恐怖症なのだ。故に、仮にステータス的に可能であつたとしても出来ない……いや、やりたくない！ たとえ此処がゲームの中であつても絶対に嫌だ！

「よつ…と」

それはさておくとしてだ。

ボスの眼を攻撃し、ボスの身体を伝つて下りて来たキリトとユウキは、床を転がつて受け身を取る事で無事着地に成功。……ユウキは、駆け寄つて行つたランちゃんからお小言を貰つている。

「どうだつた？ 何か見付かつたか？」

「いや、特にこれといった様なものは無かつたよ。せいぜい身体の至る所にひびが有つ

た程度だ」

キリトの許に駆け寄った俺は、彼にボスの弱点の有無を尋ねるが、どうやらめぼしいものは無かつた様だ。

それにしても、ひび…ねえ。俺も気付いていた事だが、確かにボスの身体には至る所にひびが見受けられる。これは俺達が喰らわせた攻撃によるものではなく、最初つから有つたものだ。距離故に下半身のものしか見えなかつたが、どうやら上半身にも有つたらしい。

「……まさかな」

そこまで頭の中で整理した俺は、此処でとある一つの可能性に思い至り、一番近い（低い）箇所——左の下腿の前内側の中点に有るひびを見詰める。……試してみる価値は有るかもしれない。

「ゴオ……」

これまでの行動が決まつたちようどその時、再びボスが攻撃の構えを取つた。それに反応して他のプレイヤーがボスから離れて行く中、今度は俺がボスの許へと駆け出す。

「何か分かつたんだな？」

「確証はねえがな。とりあえず、ボスのひびを狙つてみてくれ」

「了解！」

「オツケーー！」

俺が駆け出したのを見て、恐らく俺が何かに気付いたのだと思い追い掛けて来たのであろうキリト、加えてユウキに攻撃の狙い所を教え、俺は剣を右肩に担ぐ様に構えて攻撃の姿勢を取る。

「オオオオオオ——!!」

そして、ボスの拳が再び床と衝突する瞬間、キリトとユウキが先に飛び上がり、少し遅れて俺も飛び上がる。キリトとユウキは再びボスの腕の上へ。そして俺は、本来の敏捷力では有り得ない加速度を背中に受け、剣を鮮やかな黄色い光に包んで斜め上空——

ひびの有るボスの左の下腿の前内側へと飛ぶ。
片手剣突進技《ソニツクリープ》。同じ突進技の《レイジスバイク》よりも射程は短いが、その代わりに軌道を上空にも向けられる技だ。

「ゴオオツ：!?」

俺の攻撃が見事にひびに突き刺さると、ボスの悲鳴とも取れる様な声と共にボスのHPがより大きく削れた。

「ゴオツ：!? ゴオオオオオオ——!?」

更にぐんつ、ぐんつとHPが一気に減少し、その度にボスが悲鳴の声を上げる。恐らく二人が攻撃を喰らわせたのだろう。

複数有るが故に見落としていたが、どうやらこのひびがボスの弱点で間違い無いらしい。やはり攻撃出来るプレイヤーは限られて来るが、それでも与えられるダメージ量を考えれば有効な手段と言えるだろう。

「ボスの弱点を見付けたぞ！」

「おおっ！ マジか！」

「ああ！ ひびだ！ ボスの身体の至る所に有るひびを狙つてくれ！ 出来る奴だけで良い！」

ボスの身体から離れて上手く着地した所で、俺は攻略メンバーへ向けてボスの弱点を大声で告げる。

「なら、私の出番の様ね」

すると、近くに居たシノンが突然メニューを開いて手早く操作をし始め、それが終わると、彼女の上半身と腰に合計三本のベルトが巻かれた。そのベルトには、彼女が主武器として使っている短剣よりも確実に劣るであろう武器屋の短剣が何本も吊されている。

これは、シノンが使う戦法のうちの一つ……その為の装備だ。成る程、これならば少ない人数でもボスに有効なダメージを与えられるだろう。

「はあっ！」

シノンはベルトに吊された短剣の一本を取り、槍投げの如く逆手で構えて振りかぶると、朱色に包まれたそれをボス目掛けて思いつ切り投げた。

「ゴオオツ…！」

見事にボスの右膝の上内側に有るひびに突き刺さった短剣はボスのHPを更に大きく削り、尚も突き刺さったままじりじりとHPを削つて行く。投劍スキル中級技『ストライクシユート』。投劍スキルの中でも筋力値を要する技で、筋力値が高ければ高い程度威力が上がるのだ。

そう、シノンは短剣スキルとは別に、投劍スキルも上げていたのだ。しかもそれは保険の為のものではなく、確りと狙つて確実に命中させるという、充分にメインスキルたり得るものなのだ。それにより彼女は、近距離と中距離の二種類の攻撃が可能なのだ。

「やあっ！」

『ストライクシユート』が冷却中な為に、投劍スキル基本技の『シングルシユート』でひびを狙うシノン。左の腿の前外側に命中したそれは突き刺さる事は無かつたが、HPを大きく削る事は出来た。

「もう一発！」

そして、冷却時間が終了したのであろう『ストライクシユート』を、先程放つた箇所へと再び放つシノン。今度は突き刺さったそれは、三度ボスのHPを大きく削る。

それにより、今まで蓄積していたダメージも合わせて、ようやくボスのHPゲージが一本消えた。

——次の瞬間だった。苦難の末にようやくゲージを一本消す事が出来た事を喜ぶ俺達を、思わず攻撃が襲つたのは……。

Chapter. 11：加速する激闘！

苦難の末に、第二十五層のバス『ザ・ヘビイクラッジ・ゴーレム』の五本有るHPゲージのうちの一本を消す事に成功した瞬間、その出来事は起こつた。

「ゴ、ゴオツ、ゴオオオオオ……」

バスの身体が急に光を放ち出し、バスが徐々に光に包まれて行く。何かが起ころうと思いい、俺達は全員バスの周りから急いで離れる。だが……

「？　な、何も起きねえぞ……？」

「な、何や。ただの虚偽威しかいな」

クラインの言う通り何事も起ころる事は無く、光も徐々に消えて行く。

「ゴオオオオオオオ——!!」

キバオウさんの言う通り、ただの虚偽威しかと油断したその時だつた。バスの咆哮と共にバスの身体を覆つっていた岩が四方八方へと弾け飛び、俺達攻略メンバーを襲つたのだつた。

「うわあツ……!?」

「きやあツ…!?

「ぐあツ…!?

ボスの思わぬ攻撃に反応出来ず、殆どのプレイヤーが飛んで来た岩の直撃を受けて吹き飛ばされた。かく言う俺も同様だ。

「くつ…！ 大分削られたなあ…！」

HPを見れば、今ので一気にレッドゾーン手前まで削られている。加えて、岩の直撃を受けたという痛みから上手く身体を起こす事が出来ない。

「クウウン…！」

「お、俺は何とか大丈夫だ。それよりシリカは…!？」

上手く躊躇して大ダメージは避けられたのであろうリトとスーナが駆け寄つて来て、俺の事を心配そうに見詰めて来る。そんな彼らに多少虚勢を張つて平氣であると告げてから、急いでシリカの安否を確かめるべく周りを見渡す。

「きゆるア～」

「ううツ…。ありがとう…ピナ…！」

どうやら無事だつた様で、見付けた時にはピナが持つ回復技『ヒールブレス』でHPを回復させている所だった。

一番の不安が解消された事で周りを見る余裕が出来た俺は、次に他のプレイヤーの状

態を確認する。幸いな事に死者は出ていない様だが、殆どのプレイヤーがイエローゾーンやレッドゾーンにまでHPを削られている。ヒースクリフだけは何とか反応出来た様で、大したダメージは受けずに済んだ様だ。

「……え？」

そして、最後にこの状況を作り出した張本人たるボスを確認したのだが、途端にボスの様子に違和感を感じた……正確に言えば、先程までの姿と何処か違つてている様に見えた。

先ず、身体の大きさ——全体的に少し細くなり、先程まで天井に届かんばかりの高さだつたのが、今は天井との間に一メートルくらいの隙間を生むくらいの高さになつている。天井の高さが変わるとは思えないでの、ボスの方が縮んだのは間違いないだろう。

次に、身体の色——先程までは殆ど黒に近い色に少し茶色が混ざった様な色だつたのが、今では黒が薄れて代わりに茶色の成分が濃くなつたダークブラウンの様な色に変わつていて。

「ゴオオオオオオオオ——！」

とにもかくにも、今はボス攻略の真っ最中。何時までも倒れている訳にもいかないと思つた俺は、ポーチの中から一つの結晶アイテムを取り出す。

『回復結晶』——ポーションと並ぶHP回復用のアイテム……つまりはこのデスゲー

ムに於ける重要な生命線で、ポーションが回復するまでに時間が掛かるのに対し、こちらは瞬時にゲージを全快にしてくれるというスーパーアイテムだ。だがその分、回復結晶はポーションよりも値段が張る為に、無闇やたらに使う事は出来ないのだ。

だが、今は使う事を惜しんでいる場合ではない。殆どのプレイヤーが命の危険に晒されている今、一刻も早くバスの注意を引いて、皆が回復する時間を稼がなくてはならない。加えて、リトとスーナはピナの様な回復技は使えない為、どうしてもアイテムを使つて回復するしかない。故に、俺は躊躇う事無く回復結晶を使ってHPを全快にし、バスのターゲットを取るべくバスの許へと駆け出した。

「シリカ！　俺がバスのターゲットを取り続ける！　その間にピナを連れて皆の回復に廻ってくれ！」

その途中で、シリカに向けて皆の回復に廻る様にと一方的に指示を出し、彼女の反応を待たずにバスの許へと向かう。

「ゴオ……」

そして、どうやら狙い通りに俺をターゲットに見定めてくれた様で、バスは攻撃の構えを取る。

「…………え？」

…………だが、此処で思わぬ誤算が生じてしまった。

(さ、さつきよりも動きが速い…!?)

どういう訳なのか、バスの動きが先程までよりも速くなっていたのだ。

「オオオオオオ——!!」

やはり先程よりも速いスピードで振り下ろされるバスの拳。何とか攻撃の範囲内から離れる事は出来たが、バスの動きの速さに驚いて一瞬反応が遅れた為、充分な距離を稼ぐ事は出来なかつた。一瞬だけとは言え強い揺れに襲われる……

「……あれ？」

……そう思つていたのだが、今度は良い意味で誤算が生じた。

(距離が短いはずなのに、揺れの強さがそんなに大きくない…?)

これまでどういう訳なのか、バスとの距離の割に受ける揺れの強さが思つていたよりも小さいのだ。それこそ、距離を置いた場所で受けた揺れの強さと同じくらいだ。

(何がどうなつてんだ…?)

バスが岩を飛ばしてからというもの、バスの身体が急に小さくなつた様に見えたり、急に動きが速くなつたり、急に揺れの強さが小さくなつたり。まるでスリムになつて素早さが上がつた分、攻撃力が下がつたかの様な――

(ツ…!?)

そこまで考えた所で、俺はとある推測に行き着いた。

「だとしたら……」

それを確かめるべく直ぐ様ボスの足元へと走り、弱点ではない場所へと攻撃を叩き込む。すると、今まで大したダメージを与えられなかつたはずの攻撃は、僅かにだが今までよりも大きくHPを削つていた。

(やつぱりそうだ!)

それにより、俺の推測はより確かなものへと変わつた。

「聞いてくれ!」

そしてそれを攻略メンバーに伝えるべく、声を上げて叫ぶ。

「さつきの岩を飛ばす攻撃……どうやらあれば、ボス自身の身体を削つてのものみたいだ!」

ボスの身体が小さく、細くなつた事から考えるに、ほぼそれで間違いないだろう。

「そしてその影響で動きが速くなつた分、攻撃力と防御力は落ちたと思われる!」

身体……岩が削れた事で重量が軽減し、それにより動き易くなつた事でスピードは上昇。一方で、鉱物特有の堅さは減弱して防御力は落ちた。攻撃力に関しては、恐らくは岩の重量を攻撃に用いていたが為に、その重量が減少した所為で減少したのだろう。

まあ、それが分かつた所で、戦法が大きく変わるという訳でもないが。

「うつしやあ! 今まで大したダメージを与えられなかつた分、ガンガン削つてやつか

らなあ！ 覚悟しろよゴーレム野郎！」

周りを見渡せば、多くの攻略メンバーが戦闘に復帰出来るまでにHPの回復を終わらせた様で、続々と立ち上がって武器を構えている。クラインに至っては気合い充分といつた感じで、バスに向けて威勢良く叫んでいる。

それじゃあまあ、そろそろ反撃…行かせてもらうとしましょうか！



「ゴ、ゴオツ、ゴオオオオオ……」

完全に態勢を立て直し、攻略を再開してから数十分。途中腕で薙ぎ払う、両拳を合わせて振り下ろすなどといった新たな攻撃パターンが出現したが、それらを無事に乗り切った上で、ようやく五本有るゲージのうちの四本を消す事に成功した。

「総員退避！ 防御部隊：構え！」

そして、四度目となるバスの岩飛ばし攻撃への対応も万全。聖竜連合を中心としたタンクプレイヤーが盾を構えて周囲に展開し、その後ろにその他のプレイヤーが避難する。

「ゴオオオオオオオオ——！」

攻撃が止むのを待ち（中には飛んで来る岩をソードスキルで迎撃しているプレイヤーも居る）、止んだ所で攻撃に転じるべくタンクプレイヤーの陰から出て、タンクプレイヤーはHPを回復させるべく後ろへと移動させる。

何時でも行ける様に構えていると、今では四メートル程にまで縮み、赤褐色に染まつたボスが新たな動きを見せた。

「ゴ？ ゴオッ!? ゴオオオオオオオオ——!!」

自身の身体を見詰めて慌てふためいた（？）かと思えば、重量が大いに軽くなつた為にかなり速くなつた動き——それでも普通のゴーレム並の速さ——で、ボス部屋の奥……石造りのハンマーの許へと慌てて駆け寄つて行つた。……何のギャグ演出だ？

「ゴオオオオオオオオ——!!」

さて。そんなギャグ演出をしてくれたボスは石造りのハンマーを持ち上げると、こちらへと振り返り今一度大きな咆哮を上げる。やはりあのハンマーはボスが使う武器だつた様だ。だが、ハンマーの存在を確認していた時点でそれは予想出来ていた事。故にハンマー系統のスキルの対策もしてあり、皆慌てる事無く身構える。

「ゴオ……」

「来るぞ！ 衝撃には気をつけたまえ！」

振り下ろし系統の攻撃は後退、若しくは左右に躱すなどして回避し、ボスが次の構え

を取るまで攻撃。

「スイング系の通常攻撃、来るぞ！」

「防御部隊：構え！」

スイング系の攻撃は、ソードスキルならば後退して回避し、普通攻撃ならば複数人のタンクプレイヤーで防御。

「うおおらあああア——!!」

受け止めた所を重武器で打ち返し、その隙に他のプレイヤーが攻撃を仕掛ける。

幸いナミング——痺痺攻撃はして来ない様なので、衝撃にさえ持ち堪えれば後はこちらのもの。数にものを言わせて一気に攻め込むのみだ。

そうした戦闘を続ける事十数分、ボスの最後のHPゲージがようやく三割を下回り、長かつたボス攻略もいよいよ大詰めとなる。

「畳み掛けるぞ！ 総員全力攻撃！」

ボスの攻撃を躊躇した直後、ヒースクリフの指示の下全プレイヤーで一斉にボスへと攻撃を仕掛ける。

「ゴオ……」

だが、ボスもこのまま大人しく倒せるつもりは無いらしく、最後の足掻きとばかりにソードスキルを振り下ろさんと構える。

「ワオオオオオオ——ン!!」
「ゴオッ…!?

だが、突如リトとスーナが吠えた事に驚いた様で、発動させようとしたソードスキルを途中で解除する。

「ナイスだ！ リト、スーナ！」

「ワオッ！」

リトとスーナが作ってくれたその決定的な隙を逃すはずもなく、残り僅かとなつたHPを一気に削りに掛かる。入れ代わり立ち代わりに、色とりどり、多種多様なソードスキルがボスの身体に叩き込まれる。そして――

「カミヤ…スイッチ！」

「了解！」

ケイタと入れ代わり、ソードスキルを発動させてボスへと斬り掛かる。

「ゴオッ…!…」

上から右下への袈裟斬り、上から左下への袈裟斬り、そして左から右への水平斬りと
いう、三角形を描く様な軌跡で放たれる片手剣三連撃ソードスキル『トリニティ・スラッシュ』。他のプレイヤーが放つたスキルとほぼ同時にそれが決まった直後、ボスの残り僅かだったHPは全て無くなり、HPゲージは消滅。

「ゴ…ゴ…ゴゴゴゴゴゴゴ…」

ボスの身体は五度光に包まれ、そして――

「ゴオオオオオオオオ――!!」

今まで以上に大きな咆哮を上げて、第二十五層フロアボス『ザ・ヘビイクラッジ・ゴーレム』はド派手にポリゴン片を爆散させて消滅。青白い光が降り注ぐボス部屋の上空には、【Congratulations】という文字が表示された。

――俺達は、無事第二十五層フロアボスに勝利したのだ。

「……ん？」

空中に浮かぶ文字を眺め、ボス攻略が終わつた事に安堵していると、突如俺の視界にシステムメッセージが表示された。まさかと思ってメッセージを確認すると、そこには案の定『You got the Last Attack!!』という文字……つまり、俺がLAボーナスを手に入れたという内容が書かれていた。今までのボス攻略では殆ど他の奴――主にキリト――に譲っていた為、まさか自分が取る事になるとは思つてもいなかつた。その為、俺は内心かなり驚いている。その半面、LAボーナスをゲット出来た事への嬉しさも勿論有る訳で、今にも口角が上がつてしまいそうだ。

因みに、手に入れたアイテムは『ブラックスチル・インゴット』。LAボーナスであるが故に、恐らくは高い確率で強力な武器が出来上がる事だろう。強化したばかりだが、今日明日にでもあいつに頼んで新調してもらう事にしよう。

「お疲れ、カミヤ」

「ん？　ああ。お疲れさん」

そんな事を考えていると、ケイタを始めとした黒猫団のメンバーが続々と集まって来て、それぞれに労いの言葉を掛け合う。

「ワオッ！」

「おお！　お前達もお疲れさんだつたな。リト、スナー」

「くううん♪」

そして、皆と一緒にやつて来たりトとスナーへも労いの言葉を掛けながら、両手でそれぞれの頭を撫でてやる。こいつらも、ボスへの攻撃や最後の威嚇など、皆に負けず劣らずと頑張つてくれたのだから。

「…………（ジー）」

ところで、シリカとサチが何だか羨ましそうな目でこちらを見詰めているのだが、一体これはどういう事なのでしょうか？

「えーっと、一人ともどうかしたのか…？」

「撫でて」「

「……え？」

「あたし（私）達も頑張ったから撫でて！／＼＼＼＼」

何なのかと思つて二人に尋ねてみれば、ほんのり頬を染めながら揃つて自分達も撫で欲しいと言い出して來た。てかお前ら……頭撫でるのと同じか、以上に恥ずかしい事ほぼ毎晩の様にしてるんだから、今更そんな顔すんなよ。こつちまで恥ずかしくなるだろうが。てか周り：ニヤニヤすんな！ 特にマースさん：あんた普段は無表情なくせに、こういう時だけそういう顔しないで！ それとキリトお前もだ！ 僕と同類のお前にだけはそんな顔されたくねえよ！

「わ、分かつた分かつた！」

やがて、シリカとサチからの無言の圧力、周りからの視線の両方に耐えられなくなつた俺は、恥ずかしいのを抑えながら二人の頭を撫でてやる事に。……その際、別の場所からも一人と同じ様な視線を感じた様な気がしたが、気のせいだと判断して無視する事にした。

こうして第二十五層フロアボス攻略は、最後にちょっとした騒動（？）が有つたものの、無事に終了したのだつた。

Chapter. 12 : 十六の月夜に眠る黒猫と騎士

第二十五層のボス攻略から三日経つた、二〇二三年五月十六日。

一日の攻略を終えた俺達——俺とマースさんの二人——は、突然送られて来たメールの指示に従い、現在の攻略最前線である第二十六層の主街区《エイダム》のとある宿屋へと向かっている。メールの送り主は……スリーピング・ナイツのリーダーのランちゃん。各ギルドとの連携も必要だという理由から、フレンド登録しておいたのだ。他にも風林火山リーダーのクラインや、KoB団長のヒースクリフ、軍のリーダーのディアベルに、聖竜のリーダーの《ドレア》さんなど、主にリーダー格のプレイヤーとフレンド登録をしている。……あくまでギルド間の連携が目的で、ぶつちやけそこまで親しいという訳でもない。

それ以外にも多少縁のある奴とフレンド登録をしているが、数は少ない方だ。理由は、まあ……察してくれ。

「おう、来たか」

「すいません、エギルさん。今からが一番の稼ぎ時なのに、急に呼び出しちやつたりして

……

「なーに、気にすんな。ギルドメンバー全員集合って話なんだろ?」

さて。メールの内容によると、何でも両ギルドのメンバー全員で話し合いたい事が有るとの事だつたので、早い段階からプレイヤー同士の商売を営んでいるエギルにも、多くのプレイヤーが攻略から帰つて来て戦利品を売却するという一番の稼ぎ時である今この時間に店を空けてもらい、集まつてもらつたのだ。

「にしても、何なんスかね。俺ら全員を集めて話し合いたい事つて…?」

「さあな? まあ、全員揃つて話し合うつて事は、余程重要な話なんだろ?」

「でしようね。まあ、どんな内容にせよ、今は全員が揃うのを待ちましょ。話はそれからですし」

「「だな(そうツスね)」」

その後、足元に二匹のオオカミ、両隣に二人の巨漢というメンバーでベンチに腰掛けながら、指定された宿屋の前で残りのメンバーが揃うのを待つのだつた。……シユール?

ほつとけ!



「あつ！ オオカミのお兄さん達、やつほー！」

しばらくして黒猫団のメンバー全員が揃つた所で宿屋一階のレストランへと向かうと、そこにはスリーピング・ナイツのメンバー十人全員が揃つており、俺達を見付けたらしいユウキが手を振つて声を掛けて來た。……何気に俺の呼び方が変わつているんだが、まあ特に気にするまい。

その場所へと向かい、アスナの指示の下それぞれ席に着く俺達。団長である俺と、副団長的ポジションのケイタ、年長者代表のエギルは、向こうの代表格らしきメンバー三人と向かい合う様に六人掛けのテーブルに。残りのメンバーは、俺達の周りのテーブルに自由に腰掛けている。

因みに、向こうの代表格らしきメンバーは、団長のランちゃんに、アスナ、そして向こうの年長者代表の、黒いストレートの髪を両肩に長く垂らし、長い睫毛の下に穏やかそうな棗型の綺麗な眼をした女性プレイヤー『シウネー』さんの三人である。

「ええ、ではこれより、ギルド『スリーピング・ナイツ』と『月夜の黒猫団』による会談を始めたいと思います」

代表してアスナが切り出した事により、俺達黒猫団メンバーの周りに緊張の空気が漂い始める。対し、スリーピング・ナイツの面々は会談の内容を知つてゐる様で、こちらよりも雰囲気が落ち着いている。

果たして、一体どんな内容なのだろうか…?

「今回黒猫団の皆さんに集まつて頂いたのは、皆さんにとある提案を持ち掛ける為です」

「……提案?」

アスナの勿体振る様な言い方に多少眉を寄せながら聞き返すと、彼女はようやく会談の内容を明かした。

「わたし達のギルドと、合併する気は有りませんか?」

合併——つまりは、俺達黒猫団とランちゃん達スリーピング・ナイツで一緒に攻略をしないか? という事か。

「にしても、何でうちと合併をしようと?」

「ほら、うちとあなた達つて、此処最近ボス攻略でよく連合を組んでるでしょ? なら、いつその事合併して一つのギルドになつても良いんじやないかと考えたのよ」「ふうん」

理由になつているのかどうか微妙な所だが、理由なんてのは大抵そういうもののなのだろうと納得する事に。だが、俺はそこだとある事に気付いた。

「ん? なら、何でクライン達は誘わなかつたんだ? あいつらとだつて連合組んでるだろ」

「えつ!? ええと、その……そう! クラインさん達とはまだフレンド登録していないの

よ！ だから連絡しようにも出来なくて……」

「あれ？ まだしてなかつたつけか？」

「え、ええ。 そうなの……」

「ふうん……まあ、ならしゃーないか」

俺の疑問に対するアスナの答えは何処か急に思い付いた様な感じもしたが、何だかこれ以上詮索してはいけない様な気がしたので、彼女の答えに納得する事にした。

……それはそうと、アスナ以外のスリーピング・ナイツのメンバーがニヤニヤしている様に見えるのは、気のせいだろうか？

「んー……ギルドメンバーの人数が増えるのは嬉しいが、それまでのお互いのギルドの方針ややり方が崩れるのはなあ……」

さて。 人数が増えれば攻略の効率は上がるだろうし、連携が取り易くなる為にボス攻略に於いても有利に動けるだろう。

が、合併するという事はそんな良い事ばかりという訳でもない。 合併する以上は方針ややり方を一つに纏める必要が有る訳で、 そうなるとそれまでのやり方が崩れてしまつたり、 考え方の違いから下手をすれば内部分裂が起こつたりもするだろう。

「確かにそうですよねえ……」

「なら、それについてはお互いが納得出来るものを考へるとして、参考までにそちらの方

針ややり方について教えてもらえないかしら?」

俺の言い分に同意するランちゃんに対して、前向きな提案をしてくるアスナ。更に続けてこちらのギルド事情についても尋ねて来る。……えらく積極的だなあ。

「うちは基本攻略重視の方針だけど、活動内容に関しては各自の好きな様にやらせてる……つまりは自由だ」

「自由ですか…?」

俺の説明に、シウネーさんは驚いた様な表情をしながら問い合わせ返して来る。見ればシウネーさんだけではなく、ランちゃんやアスナを含めた他のギルドメンバーも同様の表情をしている。

「攻略に励むも良し。クエストに挑戦してアイテムや情報を入手するも良し。アイテム調達に行くも良し。休むも良し……せつかくゲームの世界に来ている訳なんですから、楽しむとまではいかないにしても、自由にやりたい様にさせてあげないと。勿論犯罪行為は禁止しますし、攻略に参加する意思の有るメンバーにはちゃんとレベルを上げる様に言つてありますよ」

「へえー、中々良いギルドじやん。アタシだつたら迷わず入りたくなるよ」「僕も僕も!」

俺の説明が終わると、他のテーブルに着いていた、太陽の様に広がった黒髪に浅黒い

肌、きりりとした両目に、骨太な体格をした女性プレイヤー『ノリ』がいの一番に口を開き、次いで、頭の後ろで小さな尻尾を結んだ髪をアイテムでオレンジ色に染めたのであろう、見た目シリカやランちゃん、ユウキと同い年くらいの小柄な少年『ジ Yun』が声を上げる。そして、他のメンバーも二人に賛同する様に頷いている。

「攻略の効率としても悪くないやり方だわ」

「それに、何より気持ち的に実にやり易そうですね」

「アスナさん……いつその事、もうこのやり方で決定で良いんじゃないですか？ 少なくとも、わたしはそう考えているんですけど……」

「うん、そうね。わたしもそれで良いと思うの」

どうやら、うちのやり方は向こうの代表格にも好評の様で、向こうで勝手に話が纏まりつつある様だ。

「という訳で、わたし達はそちらのやり方に賛同します。ですので、うちと合併しませんか？」

「えつと……本当にうちのやり方で良いのか？」

「はい。寧ろそちらのやり方でやらせて下さい」

再度のアスナ達からの勧誘に対し俺が確認の質問を投げ掛けると、ランちゃんが代表して肯定の意思を返して来た。

「分かった。そこまで言われたら、合併せざるを得ないっしょ」

それを聞いた俺も、一度黒猫団の皆の反応を窺つた後、彼女達からの合併の提案を受け入れる事にした。

「本当…!?

「ああ。これから宜しくな」

「ええ！一緒に頑張りましよう！」

あれ？ 何故だろう……アスナがやけに嬉しそうに見えるのは…？

何故だろう……またしてもスリーピング・ナイトのメンバーがニヤニヤしている様に見えるのは…？

そして何故だろう……後ろから殺氣の様なものを二つも感じるのは…？

「んで、新しいギルドのリーダーは誰がやるんだ？」

そんな疑問を抱いていると、隣に座っているエギルが口を開き、次いでランちゃんが言葉を口にした。

「あ、そういえばそうですよね。後、ギルドの名前とかも考えないといけませんよね。合併する以上は」

「まあ、とりあえずまずは新しいギルドのリーダーから決め……」

それに続いて俺も口を開くが、思わず途中で言葉を止めて止めてしまう。それは何故

かと言うと……

「…………ええと、何故皆さん俺の事を見詰めてらっしゃるのでしようか…？」

何故か、両ギルドのメンバー全員の視線が俺に集中しているからだ。自意識過剰とかではなくマジで。……それとケイタ……俺の肩に乗せているこの手は何でしようか：？

「…………まさかとは思いますが、俺にリーダーをやれという事でしようか…？」

「「「うん（はい）（ああ）（ええ）（おう）！」」

「まさかの即答かつ満場一致！」

嫌な予感を覚えてつい丁寧口調で尋ねてみれば、全員が声を揃えて肯定の言葉を返して来た。ランちゃんやアスナも例外ではない。

「何でだ!? 何で全員で俺を推してるんだ!？」 適任な奴は俺以外にも居るよなあ!?

そう思い、ランちゃん、アスナ、ユウキ、キリト、エギルと、俺の中では適任だと思われる人物達に視線を向ける。え？ 最後までやり通すポリシーはどうしたつて？ いや、ギルド新しくなるんだから良いじやん！ あれはあくまで黒猫団の団長としてであつて、新しいギルドには反映されません！

「い、いやあ……ほら、俺ってコミュ症じやん？ つー訳で無理」

ポリポリと頬を搔くキリト。コミュ症を理由に逃げんな！ それを言つたら俺だつ

てコミュニケーション能力低いから辞退したいよ！」

「悪いな。俺には店があるからな」

「うう……エギルはまあ仕方あるまい……」

「姉ちゃんを差し置いてボクがリーダーになるなんて出来ないよ」「くっ……。ユウキもまあ仕方あるまいか……」

「わたしは……ほら、やつぱり経験の有る人がやるべきかなあ……って」と、経験の有無を理由に逃れようとするアスナ。いやだから、経験の有無なんてそんなに関係無いと思うんですが。

「確かにわたしもスリーピング・ナイツのリーダーを務めていましたので経験は有りますが、けどやはり、年下の者があまりでしやばるのは良くないと思いまして」

ではと、同じくリーダーの経験の有るランちゃんへと視線を向けるが、自身の年齢を理由に俺にリーダーの役目を押し付け様としている。……何かするいぞ。

「か何ですかもおー！ そこまでして俺をリーダーにしたいんですか!? お前ら密かに結託してるんじゃないですか!?」

「まあ、皆さん色々と理由をおっしゃつてはいますが、あなたを推薦する一番の理由としては、やはりカミヤさんの皆さんを守ろうとする姿勢故……でしようかね」と、五人の言い分を聞いたの直後に、シウネーさんからようやくまともな理由を聞く

事が出来た。……しかし、やはり理由はそれなのか。

「初日の演説もあるが、先日のボス攻略の時だつてそうだ」

「そうですね。崩壊した僕ら攻略メンバーを守る為に、一人でボスの注意を引いてくれていましたしね」

「うんうん！　凄くかつこよかつたよ、カミyan！」

シウネーさんの言葉に続き、エギル、ケイタ、そしてスリーピング・ナイトのメンバーの一人で、ショートの金髪に深緑色の大きな瞳、鼻の所に横一筋のペイントを入れた、褐色肌の細身な少女《イヴ》が口を揃えて先日のボス攻略の際の事を話す。

「普段の攻略の時でもそうだ。俺達は勿論の事、たとえ相手が知らないプレイヤーや他のギルドのプレイヤーだろうと、ピンチに至つていれば助けに入る」

「そんなカミヤ君だからこそ、リーダーに相応しいと私達は思つてゐるし、此処まで付いて来ただんだよね」

「「ああ（おう）（ええ）（うん）！」」

更に、うちのメンバーである、常に白いフードを目深に被つた男性プレイヤー《トシユキ》、そしてサチが言葉を引き継ぎ、サチの言葉に黒猫団メンバーが声に出して頷く。「そういう訳だから、カミヤ君：新しいギルドでも君にリーダーになつて欲しいの」

そう言つて真つ直ぐに俺の事を見詰めるサチ。そして周りを見回せば、スリーピン

グ・ナイツのメンバーも含めて全員が頷いている。……はあ、まつたく……

「……ようやく楽出来ると思つたんだけどなあ」

「え…？ それじゃあ…!?」

「ああ、やるよ。やつてやるよ。そこまで信頼されるとあつちや、応えない訳にはいかないだろうが」

愚痴を零しつつも、結局俺はまた彼らの押しに負けて、リーダーの役目を引き受けてしまつた。……ほんと俺、こういうのに弱いなあ。

「その代わり、今回は俺がギルド名を決めさせて貰うからな？ そのくらいの我が儘は認めろよな」

「まあ、そのくらいの権利は有つても良いわよね」

「はい。宜しくお願ひしますね」

「出来るだけカッコイイのを頼むぜ！」

「心配要りませんよ。お兄ちゃんつて、意外とネーミングセンス有りますから」

シノン、ランちゃん、ダッカー、シリカの反応を聞いてから、俺は新しいギルド名を考える。そして、しばらくの思考……途中でメニューを開いてある事を確認した後――

「うし、決まつた。新しいギルドの名前は《十六夜（いざよい）騎士団》だ」

俺の頭の中で纏まつた案を、メンバーに発表する。

「十六夜…騎士団…」

「うおー！ カツケー！」

「中々良いんじやない」

「ええ。ところで、何で十六夜騎士団なの…？」

「スリーピング・ナイトの『スリーピング』……つまりは『眠る』って言葉から、月夜の黒猫団とも共通する『夜』って言葉を連想してな。そこから夜に関係する言葉を探していく内に『十六夜』って言葉が浮かんで、そういうえば今日は十六日だって事を思い出して、ちょうどピツタリだと思つて『十六夜騎士団』にしたんだ」

「へえー。成る程ね」

俺が考えたギルド名を皆が称賛する中、名前の由来を尋ねて来たアスナ。それに対して俺が由来を説明すると、アスナが……メンバー全員が納得した様に頷いた。

「さてと……」

と、此処で一言呟いた俺は、座っていた椅子から立ち上がり、表情を真剣なものに変えてからメンバー全員に向けて口を開いた。

「良いかお前ら……このデスゲームが終わるその日まで、誰一人として死んでくれるなよ？ それが俺達十六夜騎士団の、絶対に守るべき最重要規則だからな！」

「「おう（ああ）（はい）（うん）（ええ）！」」

第一層の頃から煩く言い続けて来た言葉に、元・黒猫団のメンバーは勿論、元・スリー・ピング・ナイツのメンバーも真剣な表情をして頷いたのだった。

その後、ギルドのマークやシンボルカラーなんかを決めた後、ギルド合併を祝つてのパーティーが行われ、皆大いに楽しんだのだつた。

Interval：シリカの悩み

皆さんこんにちは。あたしシリカつて言います。……つて、あたし誰に対しても自己紹介してるんだろう？

あたしには、とある大きな悩みが有ります。それは……あたしの実のお兄ちゃんであるカミヤお兄ちゃんが、他の女の人に盗られてしまうかも知れない……という事についてです。

お兄ちゃんは少し無愛想で、とても謙虚で、暗い性格をしているけど、それでも根は優しくて、責任感が強くて、かつこよくて、いざという時には頼りになる、あたしの自慢のお兄ちゃんです。

そんなお兄ちゃんに好意を抱いている人が、あたしが把握している限りで二人居ます。

一人は、お兄ちゃんやあたしと最初の頃から一緒に居るサチさん。

初めて会った頃からお兄ちゃんの事を意識している様で、あたしも薄々ですが気付いていました。ですが、ただお兄ちゃんの事を意識しているだけで、特に何かをする様な

気配は有りませんでした。

けど、第一層のボス攻略の前の夜に何かが有つたみたいで、その日急に行動を起こして、お兄ちゃんと一緒にベッドで寝ようとしていました。サチさん曰く「怖くて眠れないから」との事で、それ以降も事あるごとにお兄ちゃんと寝ようとする様になりました。そしてそれは大分戦闘に慣れて来た今でもそうで、抜け駆けされるのではと思うと毎晩気が気じやありません。

更に、攻略やクエストなんかに出掛ける時は大抵お兄ちゃんと一緒に行動する事が多くて、その為にと必死でレベルを上げている様なのです（勿論あたしもです）。その甲斐有つてか、あたしとサチさんのレベルはギルドの中でも上位に入るくらいまでになり、幾つかの戦闘用スキルの熟練度も大分高くなりました。

閑話休題。

それだけじゃなくて、ある日からサチさんは急に『料理スキル』を上げる様になつて、お昼ご飯は殆どサチさんが作つたお弁当を食べる様になりました。しかも、お弁当を皆に配る時は決まってお兄ちゃんが一番最初です。お兄ちゃんの心を掴む為には先ず胃袋から……という事なのでしょう。なのであたしも負けじと、キリトさんに手料理を振る舞おうとしているシノンさんと一緒に、日々頑張つて料理スキルを上げています。

そしてもう一人は、元・『スリーピング・ナイツ』のメンバーで、今では同じ『十六夜

騎士団》のメンバーのアスナさんです。

アスナさんは《アインクラツド》中でも五本の指に入ると言われている程の美人さんで、その上剣の腕も強いという、まさに才色兼備な人です。

そんなアスナさんですが、何もサチさんみたいに最初っからお兄ちゃんに好意を抱いていたという訳じやありません。初めて会つた第一層ボス攻略の会議の時は、お兄ちゃんに対して興味を持つている様子なんて全く見られませんでした。それがどういう訳か、ボス攻略が終わつた直後に、何やらお兄ちゃんに親しげに話し掛けているじやありませんか！ しかも、それからは事あるごとにあたし達の前に現れては一緒に行動をする様になり、しかも、会う度にお兄ちゃんに親しげに話し掛ける回数が増えていく様になりました。それを危険だと判断したあたしはサチさんと同盟を組んで、一緒にアスナさんの事を警戒する様になりました。それでも、あたしとサチさんが敵同士だという事は変わりません。

そんなある日、アスナさんがスリーピング・ナイツに入つたという事を知り、これでアスナさんがあたし達の前に現れる事は少なくなるだろうと、あたしとサチさんはとりあえず一安心しました。……ですが、第二十五層のボス攻略が終わつてから三日経つたある日、アスナさんは急にあたし誰黒猫団と合併しようという話を持ち掛けて来ました。攻略の事も考えていましたが、恐らく一番の理由はお兄ちゃんと一緒に居

る為だと、あたしとサチさんは思いました。その証拠に、お兄ちゃんが合併の話を受け入れた時、アスナさんは目に見えて嬉しそうな反応をしていました。強敵（アスナさん）が復活した事に、あたしは強く戦慄したのでした。恐らくはサチさんもでしょう。

勿論、アスナさんもあたし達同様にお兄ちゃんとよく一緒に行動して、加えて元々上げていたという料理スキルも、本格的に上げて来る様になりました。

そんなアスナさんに対し、実は一つだけ優位に立っている事が有ります。それは、夜：お兄ちゃんと一緒に寝る事です。ずっとあたしとサチさんだけの秘密にしていたのが見付かった時は、アスナさんも攻め込んで来るのはと二人で警戒していたのですが、未だにその様な気配は見られません。ですが、見付かった時に凄く羨ましそうな顔をしていたので、恐らく何時かは攻め込んで来る事でしょう。なので油断は禁物です。と、そんな二人の強敵が相手ですが、あたしだつてお兄ちゃんの事が大好きなんです！ 絶対に負けません！ 血縁関係？ そんなの愛さえ有れば関係有りません！

……そりやあお兄ちゃんが出て、その人とお付き合いする事になるかも知れないけど……それまではお兄ちゃんはあたしのものです！ 誰にも渡しません！

それに、新しくギルドに入した、あたしと同じお兄ちゃん大好きつ娘の『コガネ』ちゃんが言つてました——

『妹は最強！　妹こそが最強！　お兄ちゃんと妹の間には、誰も入る事は出来ない！』

——と。

ふ、ふふふ……。そうです、そうですよね。妹こそが最強なのですよね。誰が相手……たとえそれが才色兼備のアスナさんだろうとも、妹には勝てないのでですよ！　古今東西・妹こそが最強の種族なのですよ！

ふふふ……ふふふふ……。

妹の強さ・凄さ・恐ろしさ……特と味あわせてあげますよ——!!



「ツ…!？」

な、何だ!?　今一瞬・背中に物凄い寒気を感じたんだが…!?

「ん？　どうかしたのか?」

「あ、いや、大した事じやない。……ただ一瞬・得体の知れない恐怖を感じただけだ

……」

「！…………奇遇だな。俺もだ……」

「…………」

と、新しくうちのギルドに加入した、俺と何かと気の合う男性プレイヤー『カナツグ』と二人、さして寒くもないはずの迷宮区を背中を震わせながら進んで行くのだつた。

Chapter. 13 : 聖夜にサチ有らん事を

二〇二三年十二月二十四日。

デスゲーム開始から一年と一ヶ月が経過し、攻略最前線は間も無く第五十層——つまりは城の半分に到達しようとしていた。

俺達『十六夜騎士団』のメンバーの人数は俺の予想に反してどんどん増えて行き、気が付けば『K○B』や『軍』に勝らずとも劣らない程の勢力にまでになっていた。

ただ、全ての物事が上手く行っているという訳でもなく、現時点での死者の数は二千人を超えており、その内の約二割はなんと俺達と同じプレイヤーによつて殺されていたりするのだ。

曰く「ゲームなのだから何をやつても許される」「ゲームで人を殺したからと言つて、実際に現実でそいつが死ぬという証拠は無い」「どうせ茅場晶彦が罪を被るのだから、これは合法的殺人なんだ」と、積極的に犯罪——殺人を行つている節が見られる。
……性質たちの悪い奴らだと、殺人を楽しんでいる節すら見られる。

そんな様々な事情を孕みながら浮かび続ける鉄の城は、今日：二度目のクリスマスイヴを迎えていた。

一度目……つまりは去年のクリスマスは、デスゲームが開始されてからまだ日が浅かつた為に楽しむ暇や余裕など全く無かつたが、今年は皆幾分か余裕が出て来た様で、今日という日を楽しもうとしている人達が多く存在している。それは勿論の事俺達十六夜騎士団も例外ではなく、夜には皆で集まつてパーティーをする予定となつている。

「ふいー。こんくらり上げときや大丈夫か?」

「大丈夫なんじやね? こつちは人数も居る訳だしさ」

「それでも、油断はしない方が良いと思うよ」

「分かつてるつて」

………… だとしても、攻略を怠る様な事はしない。……まあ、俺以外の奴らは別の目的があるが故に攻略……正確にはレベルアップに励んでいるんだがな。

「で、肝心の巨大な櫻の木の場所は?」

「キリトさん達が目星を付けてくれてるそうよ。アルゴさんからも情報を買つていてるみたいだし」

「おお! だとすりやあ『ニコラス』は俺達で頂きだな! キリトさんは勘銳いし、『鼠』の情報は確実だしな!」

「ああ(ええ)!」

彼らが今話しているのは、今日……十二月二十四日の夜二十四時ちょうどに現れるという、一年に一度だけのクエストM o b『背教者ニコラス』……その出現場所についてである。NPC曰く「何処かの森に有る樅の巨木の下」との事だ。

そのニコラスが担いでいる大袋の中にはたっぷりの財宝が入っているとの事で、攻略を重視している攻略組のプレイヤーまでもが必死になつて探している。また噂によれば、ニコラスの大袋の中には『命尽きた者の魂を呼び戻す神器』——つまりはプレイヤー用の『蘇生アイテム』なる夢の様なアイテムまで入つてているとの事なので、それもまた多くのプレイヤーを必死にさせているのだろう。

「にしてもよお、団長はマジで来ないつもりなんスか？」

「ああ。俺は夜は基本：部屋でゆっくりして いたいもんでな」

さて。パーテイメンバーの一人にも言つた通り、俺はそのクエストには参加するつもりは無い。ゆつくりしたいという理由も確かに有るが、本当の所はあまり長い事人と接していたくないのだ。一人になりたいのだ。人との接し方が分からなくなり始めてからは、一人で居る方が気が楽になる様になつたのだ。

そしてもう一つ……クエストに対して、あまり興味を持てないのだ。歳の所為だろうか、イベントや祭りなどに対して段々と興が冷めつつある。何だがつまらないのだ。

「ノリ悪いですよ、団長！」

「そんな事言つたら駄目ですよ。人には人それぞれに思う所が有るんですから。それに、うちは各自の行動は自由のはずですよ？」

「そりやあ分かつてることさあ……」

「あはは……ノリの悪い団長で悪かつたな。それとサツキ：気を使わせちまつて悪いな」

「いえ、こちらこそ団長のご気分を害してしまつてすみません」

兎にも角にも、未だに俺のクエストへの不参加に納得のいかない様子の二人と、律儀に礼儀正しく謝るサツキと共に、俺達はレベルアップを兼ねての迷宮区攻略を続けるのだった。



「それじゃあ、これよりクリスマスパーティーを始めたいと思います。乾杯！」

「「カンパーア!!」」

今日の攻略を終えてから数時間後の現在、第二十二層の大きな湖の近くに有る洋館風の十六夜騎士団のホームでは、俺の音頭を合図にクリスマスパーティーが始まつ

た。

「うはあ！ やっぱりアスナの料理は美味しいやあ！」

「ふふつ。まだまだいっぱい有るから、どんどん食べてね」

「はいキリト、これ：私が作った料理よ」

「おお！ 美味そうだなあ！」

「おっ、彼女からの手料理だなんて、羨ましいねえ」

「オメーも隅に置けねえなあ。コノコノー」

「うわっ!? やめろよダツカ一、クライイン！ それに、俺とシノンはまだそんな関係じやあ……」

「まだ、ねえ（ニヤニヤ）」

「ちよつ、キ、キリト!?／＼／＼」

「はいお兄ちゃん、あくん！」

「おい兄貴、こつちのメシも中々に美味えぜ！」

「ご主人様：リーシャの作つた料理もお召し上がりになつて下さい！」

「ちよ、お前ら、そんないつぺんに差し出すな！」

「成る程。あれくらい積極的に行くべきなんだね」

「……シリカ：お前さんは何をそんなに真剣に観察してるんだ？」

で言うか、お前さん

だつてもう既に充分に積極的だと思うんだが……」

「あははは。キリト達もカナツグ達も、やっぱり仲が良いのな」

「……アレは仲が良いっていうレベルなのかなあ？」

皆『料理スキル』持ちが作ってくれた料理を食べ、談笑し、騒ぎながら、このパーティーを大いに楽しんでいる。一応俺も、それなりには楽しんでいる。……皆とは多少距離を置いてではあるが。

「カミヤ君」

そんな俺の許に、料理が乗った食器を持つたサチがゆっくりと近付いて来た。その表情は、まるで何かを心配しているかの様に見える。

「サチか。どうかしたのか？」

「うん。……カミヤ君がちゃんとパーティーを楽しんでるのかなって、ちょっと心配になっちゃって」

——否、事実心配してくれていた様だ。

「楽しんでるよ、ちゃんと」

嘘は言っていない。皆とは距離は置いてはいるが、パーティー 자체は楽しんでいる。……百パーセントかと聞かれればそうでもないが。

「てか、何でそう思つたんだ？」

「カミヤ君…さつきからずっと皆から離れて、一人で居るのが多いから」

余計な詮索をされる前に、何故俺が……楽しんでいない様に見えたのかをサチに尋ねてみるが、やはりと言うべきか、俺が一人で居たのが理由だつた様だ。まあ、一人で寂しくやつている（俺自身はそんなつもりは無い）のを見れば、誰だって『楽しんでいないのでは？』と思つてしまふだろう。

「どちらかつつーと、一人で居る方が好きなんだよ。それでも、話し掛けられればちゃんと応えるし、何よりパーテイーはちゃんと楽しんでるから、そんなに心配すんなって」

これ以上はサチに心配は掛けまい、安心させようと声を掛ける。

「それなら良かつた。……けど、やつぱりちょっと心配だから、私しばらくの間カミヤ君と一緒に居るね？」

が、完全には信用してもらえなかつた様で、サチが監視役として付く事になつてしまつた。

「……好きにしろ」

けどまあ、異性おんなのこ（しかも可愛い）と二人で居るというのも、存外悪くもあるまい。

「やつた（カミヤ君と一緒に要られる口実が出来た！）
「ん？ 何か言つたか？」

「う、ううん！ 何でもないよ！」

その後、しばらくサチと二人（十足元にオオカミが二匹）で何気無い会話をしながらパーティーを楽しんでいると、俺達を見つけたシリカとアスナが近付いて来てサチとちょっとした口論をし始め、それを見ていた周りの奴らが集まって来て茶化して来るという、最終的には沢山の人に囲まれてパーティーをする羽目になってしまったのだつた。



力ミヤ君——和也君に対する私の第一印象は、一言で言うと『暗い』だった。

始めて和也君と出会ったのは高校一年生の時。偶然同じクラスになつたというだけで、特に接点が有つたという訳でもない。

誰とも話そうとせず、ずっと一人で居て、話し掛けられても短く・素つ気なく返して、あまり友好的な感じじやなかつた。

正直近寄り難くて、あまり関わりたいとは思わなかつた。けど：何故か気になつて仕方が無かつた。気が付けば、次の日からも彼の事を目で追う様になつていた。気にする様になつていた。多分：私自身が内氣で、臆病で、引っ込み思案な性格だから、同類を見つけていた様な気がして気になつたんだと思う。親近感を抱いたんだと思う。

ある日の事だつた。私に和也君と接する機会が訪れた。

その日は夕方から雨が降つて来て、傘を持つて来るのを忘れた私は昇降口で立ち往生していた。家が近所のケイタ君は同じパソコン研究会の皆と一緒に寄り道して帰るとの事で居なくて、周りの人に頼もうにもあまり親しい訳でもないし、何よりも自分の性格柄頼みづらくて、どうしようかと思つて悩んでいた。

そんな時だつた……

「……に入るか？」

突然声を掛けられて、振り向いて見るとそこには傘を持った和也君が居た。

「ええと……お願ひしても良いかな？」

「構わない……てか、そのつもりで声掛けたんだけどな」

「ありがとう」

「別にお礼なんていい。单なる気まぐれだから」

相手が和也君だったのは驚いたけど、折角の好意なのでありがたく入れさせて貰う事にした。

「…………」

「…………」

最初のやりとり以降、会話は殆ど無かつた。和也君も私をあまり話す方でもない

から、ただ黙々と歩くだけ。話し掛けたとしてもそれは全部私からで、彼からの応えも普段通り短くて素つ気ないもの。正直な所：彼と二人だけというのはかなり辛かつた。

「送つてくれてありがとう」

「別にいい。言つただろ？ 単なる気まぐれだつて」

そんな気まずい雰囲気だつたとはいえ、家まで送つてくれた事には感謝していました。なので私は和也君にお礼を言つたんだけど、彼は素直には受け取つてはくれず、「じゃあな」と一言だけ言つてそそくさと帰つてしましました……元来た道の方向へと。「……え？」

それを見て、私は一瞬驚きました。家が同じ方向だと思つていた為に、それに反して逆方向へと歩き出したのだから。けど家は近くで、少し戻る程度なのかな……とも考えたけど、まさかと思つて翌日クラスの子に和也君の帰る方向を聞いてみた所、なんと：彼の帰る方向は私の家とは全くの逆方向でした。……つまり、彼は懶々私を家まで送つてくれたみたいなのです。

この時、私は彼に対する印象を改めました。彼は暗い性格をしているけれど、本当はとても優しいんだと。それが証拠にもう一つ……彼は私を送つてくれる間ずっと、私の方に傘を寄せていてくれました。自分が半分濡れてしまう事も構わずに。

その日から、私は別の意味で和也君の事が気になる様になりました。もつと彼の

事が知りたくて、度々話し掛ける様になりました。

そして一年前の第一層ボス攻略の前の日の夜、私の中に和也君に対する明確な恋心が芽生えました。怖がる私を気遣ってくれる彼の事が、異性として好きになりました。



クリスマスパーティーも終わり、殆どのメンバーが『二次会』と称した『ニコラス狩り』に出掛けた中、現在俺は一人自室でゆつくりと休んでいる。

コンコン

「カミヤ君…入つても良いかな？」

すると、ドアをノックする音と、直後に俺同様にニコラス狩りに行かなかつたらしいサチの声が聞こえて來た。因みに、シリカは俺の分まで頑張つて来ると言つて張り切つて出掛け、ユウキに誘われたアスナもノリノリで出掛けて行つた。

さて。ドアの向こうに居るサチに向かつて「どうぞ」と声を掛けると、ドアを開けてパジャマ姿のサチーー何時ものと違つて、少しばかり色っぽいものを着ている——が入つて來た。どうやら何時もの様に、一緒に寝る為の様だ。

ピロリーン。ピツ、ピツ……

…………おかしい。何故システムサウンドが聞こえて来る？ 何故サチはウイ
ンドウを操作している？

「…………サチ、お前……何してるんだ？ 何でドアに鍵掛けてるんだ？」

サチの行動の意図が分からぬ俺が彼女に尋ねると、彼女はこちらに振り向い
て——

「他の人気が入つて来れない様にだよ。今晚は私だけでカミヤ君を独り占めなんだから」

——と、満面の笑みを浮かべて仰つて下さいました。

「…………えーっと」

「ほおら、もう寝よう♪」

「ちょ!? お、おい、サチ!?」

直後、俺は有無を言う間も無くサチにベッドの中に引き釣り込まれて思いつ切り
抱き着かれてしまい、他にやる事も無かつたのもあって、そのまま彼女と寝る事にした
のだった。

「…………まあ良いか」

…………これはこれで悪くないと思いつつ。

Chapter. 14：攻略組最恐のプレイヤー

「ひつ……や、やめ……がつ!?」

とある中層の主街区のゲート広場……そこでは現在、一人の女性プレイヤーが別のプレイヤーによつて攻撃を受けている。

犯罪防止コード圏内であるが故に、他のプレイヤーに攻撃を与えても不可視の障壁に阻まれて相手にダメージが届く事は無いが、衝撃までは流石に止める事は出来ず、ソードスキルの威力によつては僅かながらノックバックが生じる事もある。

そして、相手にダメージが届かないという事はつまり、本来デュエル以外で他のプレイヤーを攻撃してしまつた場合に攻撃者が陥る、^{オレンジ}犯罪者プレイヤーにはならないのだ。

これを活用したのが『圈内戦闘』と呼ばれるものであり、通常は訓練や模擬戦として使われるものなのだが……

「ひつ……がつ……あはつ!？」

今現在行わわれているのは訓練や模擬戦などではなく、相手プレイヤーが女性プレイヤーを一方的に攻撃しているという、所謂暴行だ。しかも、周りのプレイヤーは誰もそれを止めようとはしない。何故なら……

「………」

ほぼ無言で女性プレイヤーに暴行を加えているのは、攻撃組の一角を担う大型ギルド『十六夜騎士団』の団長であるカミヤであり、そもそもこの暴行自体——

——『暴行』という名の『制裁』なのだから。



——遡る事数時間前。

場所は攻略最前線より離れた中層のフィールド。そこではシリカとテツオが十六夜騎士団に新たに加わった四人の少年少女達に協力して、モンスターと戦闘を行つてゐる。

攻略最前線での活動を主とする、最近では『攻略組の四大・ギルド』の一角として有名となりつつある十六夜騎士団だが、その知名度とは裏腹に、ギルドへの入団は呆気ない程に簡単だつたりする。というのも、レベルや実力、装備などといった入団条件の類は一切設けておらず、『来る者拒まず』のスタイルであつさり受け入れてしまつてゐるからである。

それ故に、レベルや実力、スキルや装備などに関係無く、多くのプレイヤーが入団を希望してやつて來る。

余談だが、メンバーの増加に伴いギルドホームが手狭になりつつある為、『大工スキル』なるスキルを習得した後方支援組のプレイヤー達が、周囲の環境に配慮しながら日々ホームの増築に勤しんでいたりする。

さて。誰でも入団を許可していれば、時には極端にレベルの低い者や、あまり実力の無い者も入団して來る事もある。カミヤはそれ自体は一向に構わないのだが、レベルや実力の低さ故にギルドの最重要規則——『デスゲームがクリアされるまで、絶対に死なない事』——が破られてしまう……つまりは死者が出てしまう事を強く懸念してい

る。

それ故に、そういったプレイヤーには当分の間ギルドの上位、若しくは中堅メンバーが交代で付き添い、充分なレベルや実力になるまで育成するというシステムが導入された。ギルドの上位メンバーであるシリカとテツオが中層に居るのも、新入り四人の育成が理由だからである。

「しゃあー！ らくしょーらくしょー！」

さて。今し方一戦闘し終えたシリカ達六人。

「この調子でモンスターを倒しまくつて、どんどんレベルアップしまくつて、ソッコーで攻略組の仲間入りしてやるぜ！」

「バカ。そんな簡単に攻略組に参加出来る訳がないでしようが」

その中の一人……栗色の髪を二つ結びにした、とても活発そうな印象の新入りの少女『ミホ』が、モンスターに勝利した事を喜んで少し調子に乗り、それをもう一人の新入りメンバー……腰に届かんばかりの水色の髪を三つ編みにし、少しきつめの目をした少女『ディア』が窘める。

「わ、分かつてるよー、そんな事くらい。けど、じょーしょーしーは大事だぜ？ デイ ア」

「ふふつ、確かにその通りね。ミホの割にはいい事言うじゃない」

「あたしの割にははよけーだ！」

それに対してミホも負けじと言い返し、デイアは彼女の言い分を肯定した上で彼女をからかう。何はともあれ仲のいい二人であり、そんな二人を残り二人の新入りメンバーは苦笑しながら、シリカとテツオは微笑ましそうに見つめている。

「ねえ、ちょっと良いかしら？」

すると、そんな六人に話し掛ける第三者が現れた。

炎の様に真っ赤な髪に、同じく赤い唇、エナメル状に輝く黒いレザーアーマーを装備し、片手には細身の十字槍を携えた女性プレイヤーだ。

その女性プレイヤーを見た六人はというと……

「「「…………」」」

警戒する様な目で女性を見つめていた。というのも、目の前の女性がとある事情で探しているプレイヤーの特徴とあまりにも酷似しているからだ。

「ねえ、ちょっと聞いてる？」

「あ！　えっと…すいません。ちょっと考え事をしていたので……」

……警戒するあまり応答するのを忘れてしまい、女性を少々不快にさせてしまつた。

「えっと、俺はこのパーティの纏め役のテツオって言います。あなたは？」

何はともあれ、六人の中で年長者であるテツオが代表して女性に話し掛け、名前を尋ねる。

「アタシはロザリアよ。宜しくね」

対して、女性《ロザリア》は先程までの不快そうな表情を消し、愛想良く自己紹介をする。

「それで、ロザリアさんは俺達に何か用ですか？」

「実はね、アタシをあなた達のパーティに入れて欲しいのよ。一人でフィールドに出てみたものの、やっぱりちょっと不安でね」

簡単に自己紹介を済ませた所で、テツオはロザリアに自分達に話し掛けて来た用件を尋ねる。それに対するロザリアの答えは、自身をシリカ達のパーティに入れて欲しいとのものだつた。

「それに……こう言つちやあなんだけど、あなた以外の子達つてまだ幼いでしょ？　だから、お姉さんちよつと心配でね」

更に言葉を続けるロザリア。

彼女の言う通り、シリカ達のパーティーメンバーの内の新入り四人はシリカと一緒に年、若しくは年下と、シリカを含めて見た目的にも実年齢的にも確かに幼い。そんなシリカ達を見たが故に、彼女はシリカ達の事を『頼りない』『強そうには見えない』と判断したのだろう。

尤も、幼く見えるが故に強くないと判断されたシリカは実際には十六夜騎士団の上位メンバーであり、テツオと同等……若しくはそれ以上に強かつたりするのだが。

「心配ムヨー！ だつてあたし達チヨー強いもん！」

さて。テツオとロザリアの二人が話し合っていると、二人の後ろで話を聞いていたミホが話に割つて入つて来て、自分達の事は心配要らないとばかりに強気な発言をする。

「そうなのー？ なら、逆にお姉さんを守つて欲しいんだけど、良いかしら？」

「おうよ！ あたし達に任しとけー！ ねつ？ テツおん、りつかん」

「うん」

「ロザリアさん：一緒に頑張りましようね」

「え？ あ、ええ……」

ミホの言葉を冗談だと受け取ったロザリアは、それに対しても自身も冗談半分で言

葉を返す。が、まさかテツオ達が本気で返答して来るとは思っていなかつた為、彼女は一瞬呆然となつた。

因みに、ミホの言つた『テツおん』『りつかん』なる言葉は、それぞれテツオシリカに対しミホが勝手に付けた渾名だつたりする。……アルゴにしてもそうだが、プレイヤーネームを更に渾名で呼ぶというのはどうなのだろうか？

「それじゃあ、張り切つて行こうか」

「「おおー!!」」

「え、ええ」

何はともあれ、ロザリアをパーティに加えたシリカ達一行は、モンスター狩りを続けるべく更にフィールドを進んで行くのであつた。



所変わつて、シリカ達が居る層とはまた別の中層のフィールド。

そこでは、カミヤとメイサーの少女の二人がモンスター狩りを行つていた。

「攻略で忙しいのに、あたしのプレイヤーホーム購入の手伝いをして貰つちゃつて、何時
もありがとうございます。先輩」

「気にすんな。俺とお前の仲だし、何時も武器のメンテや強化なんかで世話になつてる
からな」

「……その強化の素材やインゴットなんかは、先輩から提供して貰つちゃつたりしてる
んですけどね」

モンスターを倒して区切りが付いた所で、急にカミヤにお礼の言葉を告げるメイ
サーの少女。

そう。攻略組である筈のカミヤが何故中層のフィールドなんかに居るのかとい
うと、現実世界では先輩後輩の関係である少女の、プレイヤーホーム購入の手伝いをす
る為である。

「ん？」

さて。少女と会話をしていたカミヤだが、ふと何かに気付いた様子で、おもむろ
にウインドウを開いた。

「どうしたんですか？ 先輩」

「ん？ メールだよ」

どうやらメールが届いた様だ。

カミヤはしばし無言で届いたメールの内容を読んだ後、直ぐ様返信画面を呼び出してメッセージを作成し始めた。

「えつと、何ですつて？」

「犯人^{ターゲット}が接触して来たつてさ」

「ターゲット？」

「数日前にとあるギルドを壊滅させたオレンジギルド……そのリーダーだ」

「ああ！ 先輩達が請け負つたつていう依頼の」

「そ」

興味本位で尋ねた少女の問いに答えながらもメッセージを打ち込んでいくカミヤ。そして、説明が終わるとほぼ同時にメッセージを書き終え、メールの差出人へと返信する。

「これから一緒に狩りに行くそうだから、終わつたら俺に連絡する様にメールした。つー訳で、こつちもそれに合わせる事になる。それでも良いか？」

そして、これからの予定について少女に確認を取るが、少女はそれよりも、オレンジギルドのリーダーと接触したパーティの事が心配な様だ。

「あたしは構ないですけど、向こうは大丈夫なんですか？ 相手はオレンジギルドのリーダーなんでしょう？」

「つっても、相手は中層プレイヤーだ。向こうには最前線で活躍するうちの上位メンバーが一人も居るから、油断さえしなけりや大丈夫だろ」

「そりやあ、攻略組と中層プレイヤーとじや力の差は歴然かもしけないけど……」

「それに、依頼人の話を聞く限りじや、相手は潜入したパーティー やギルドが大量に稼ぐのを待つてから行動するらしい。だから、会つていきなり襲つて来るなんて事は多分無いだろう」

「……まあ、先輩がそこまで言うなら、あたしもそう信じますよ」

しかし、それはカミヤの説得によつて幾分か解消された様で、彼女もパーティーメンバーが無事であると信じる事にした。

「つー訳で、連絡が来るまでモンスター狩りを続けるぞ」

「はい！」

そして、彼らはホーム購入の為のモンスター狩りを再開するのであつた。



場所は戻り、シリカ達が居る中層……その主街区。

ロザリアをパーテイーに加えて狩りを再開してから数時間、本日の狩りを終えたシリカ達はそれぞれのねぐらへと帰るべく、ゲート広場へ向けて足を進めていた。

「にしても驚いたわー。まさか、あなた達があんなにも強かつたなんてね」「にししし。だから言つたじやん。あたし達はチヨー強いって」

そんな中、先程までの戦闘でシリカ達が思いの外強かつた事を知ったロザリアは驚嘆の言葉を口にし、それを聞いたミホが得意げな表情をして反応する。

「私達一人一人の力はまだまだ弱いかもせんが、皆で協力すれば、どんな強い相手にもきつと勝てる強い力になる……私達はそう考えてます」

「うん！」
「おうよ！」

そこへディアが付け足すかの様に口を挟み、それに同意する様に残りの新入りメンバー力強く、そしてシリカとテツオの二人も静かに頷いた。

そうこうしているうちに、ゲート広場に到着したシリカ達一行。

「それじゃあね。また明日も宜しくね」

明日も共に行動する事を言い残し、別れを告げて立ち去ろうとするロザリア。だが……

「「「…………」」

シリカ達からの反応は無く、ただ無言でロザリアを見つめているだけだった。

「ちょっとー、聞いてるのー？」

出会った時同様に無視された事に不快な表情をして抗議するロザリア。

「……残念ですけど、明日……いいえ、もう二度とあなたと会う事は無いでしょう

「……へ？」

ようやくシリカが口を開いたかと思えば、その内容は全くもつて訳の分からないもの。どういう意味なのかと困惑するロザリアに、シリカが続けて言葉を掛ける。

「だつてあなたは——」

丁度その時、背後の転移門内部に青いテレポート光が発生していた。こちらで転移門を利用した者は居ない……ならば別の層からこの層に転移して来たのだろう。今日の狩りを終えてねぐらへと戻つて来たプレイヤーか？　はたまたこれから狩りへと出掛けるべくこの層にやつて来た夜型のプレイヤーか？

「——これから黒鉄宮の牢獄に入つて貰うんだからな。オレンジギルド『タイタンズハンド』のリーダー……ロザリアさん」

——否、咎人ロザリアを監獄カミヤへといざなう閻魔カミヤだつた。

「い、いきなり何なのよ!? てか、あんた誰よ!?

「俺はカミヤ。そいつらのギルドのリーダーで、シリカの兄貴だ」

いきなり現れて、シリカの言葉を引き継ぐ様な発言をしたカミヤに驚いたロザリアは、カミヤの方へと振り返り、疑問の言葉をぶつける。対するカミヤは、彼女達の許へゆつくりと近付きながら己の正体を明かした。

「もう一度言うぜ？ あんたには黒鉄宮の牢屋に入つて貰う」

「な、何でアタシが牢屋に入らなくちやいけないのかしら？ シリカちゃんのお兄サン」「しらばつくれるなや。身に覚えが有る筈だろ？ オレンジギルド『タイタンズハンド』のリーダーのロザリアさん」

「さ、さつきからアタシの事をオレンジのリーダーって……アタシのカーソルは見ての通りグリーンだよ！ オレンジのリーダーな訳が無いじゃないか！」

「生憎と、あんたらの筈は『鼠』からの情報で確認済みなんだよ。それに、オレンジギル

ドのメンバー全員が全員オレンジカーソルつて訳じやない筈くらい、あんたが一番よく分かってる筈だよなあ？」

「くつ……」

そして、再度の投獄宣告。ロザリアはそれを認めようとはしないが、カミヤの言葉が逃げ道を塞いで行く。

「さて、そろそろ本題に入ろうか」

そして、ロザリアがとぼけるのを諦めたと判断した所で、カミヤは話の本題を切り出した。

「あんた、五日前に三十八層で『シルバーフラグス』ってギルドを襲つただろ？ メンバー四人が殺されて、リーダーだけが脱出した」

「……ああ、あの貧乏な連中ね」

全く悪びれる様子も無く、ロザリアは頷く。

「生き残った男性はな、毎日朝から晩まで、最前線のゲート広場で泣きながら仇討ちしてくれる奴を探してたよ。……けどその男性は、依頼を受けた俺達にあんたを殺してくれとは言わずに、黒鉄宮の牢獄に入れてくれつて言つたよ」

「で、あんた、その死に損ないの言う事を真に受けて、アタシを探してた訳？」

「そうだ。勿論あんたの仲間も全員牢獄にぶち込む」

カミヤがそう言い切ると、ロザリアは心底面倒そうな表情をして口を開いた。

「何よ、マジんなつちやつて、馬鹿みたい。此処で人を殺したって、ホントにその人が死ぬ証拠無いし。そんなんで、現実に戻った時罪になる訳ないわよ。だいたい戻れるかも解らないのにさ、正義とか法律とか、笑つちやうわよね。アタシそういう奴が一番嫌い。この世界に妙な理屈持ち込む奴がね」

此処は主街区のゲート広場。そして、今は多くのプレイヤーがフィールドから帰つて来る時間帯。即ち、今のロザリアの発言は多くのプレイヤーの耳に入つてしまつた事になる。そうなれば当然、今の発言に怒りや不快感を覚えた者が現れるだろう。

「成る程。あんたもその口か」

口調は静かだが、勿論カミヤも今の発言に対して怒つている。

「安心しろ。俺もあんたみたいな奴は嫌いだし、あんたのそういう考え方は許せねえ」

すると、カミヤは腰に下げた鞘から剣を抜いて、ロザリアの許へと更に歩み寄る。「けど、それ以上に俺が許せないのは……」

そして、抜いた剣を肩に担ぎ、刀身を仄かな水色に発光させて――

「――テメエがよりもよつて、俺の妹を標的にした事だア！」

怒りと共にロザリアへと叩きつけた。しかも、その怒りはロザリアの考え方に対するではなく、妹であるシリカを殺そうとした事に対するだつた。



——そして、冒頭へと戻る。

「ゞ、ゞめんなさい……も、もう……許して……!?」

力ミヤの逆鱗に触れてしまつたが故に、ひたすらソードスキルによる攻撃を受け続けるという制裁『暴行』を受け続けたロザリアは、力ミヤに対して必死に謝り続ける。「も、もう犯罪なんてしないッ！」

大人しく牢屋に入るからッ！　だからお願ひッ！　もう許してッ!!

「…………分かった。なら次ので最後にしてやる」「ひいつ…!?」

ようやくロザリアの謝罪の意思を聞き入れたカミヤは、最後の制裁を加えるべく、手に持つ剣を斜めに振り上げる。

「ひやつ……あつ……がはつ…!？」

そして放たれた、上から右下への袈裟斬り、上から左下への袈裟斬り、左から右への水平斬りという三角形を描く様な三連撃の斬撃——かつて第二十五層のフロアボス《ザ・ヘヴィクラッジ・ゴーレム》にトドメを刺したソードスキル《トリニティ・スラッシュ》が、ロザリアの身体を吹き飛ばしたのだつた。

「今すぐ仲間を全員集める。んで、こいつで牢獄に入れ」

「は、はいい!!」

吹き飛んだロザリアの許へと歩み寄り、ポーチから回廊結晶を取り出して彼女に指示を出すカミヤ。精神的にボロボロとなつたロザリアは、恐怖に怯えながら頷くと、直ぐ様ウインドウを開いてメールを作成し始める。

「いいか？ 脱獄しようだなんて考えるなよ？ もししようなものなら、今度は完全決着デュエルでボコボコにしてやつからな？ 覚悟しとけよ」

「は、はいいいい～!!」

数十分後、主街区付近のフィールドに集まつたタイタンズハンドのメンバー達全員は、尋常ではない程に震えるロザリアと共に、回廊結晶のゲートを通つて黒鉄宮の牢獄へと入つた。

そして、この事件は翌日の朝刊の一面にて大きく報道された。

おそらく、この朝刊を読んだ多くのプレイヤーが思つたことだろう……

——シリカ絡みで、絶対にカミヤを怒らせてはいけないと。

Interval：剣士達の癒し

「うーん、疲れたあ……」

とある日の夕方、その日一日の攻略を終えてギルドホームへと帰つて来たキリトは、一人大広間のソファーに腰掛けて呟く。

「お疲れ様です、キリト様」

そんなキリトに、大広間を通り掛かつた一人の女性プレイヤーが声を掛ける。

プレイヤーネームを《リーシャ》といい、白に近い金色をした長髪に、翠玉色の瞳、抜ける様な白い肌をした、ヨーロッパ系の外人を思わせるかの様な美少女。料理や裁縫、薬の調合や、必需品や食糧の買い出し、果てはギルドの経費の管理など、後方支援に特化したプレイヤーである。

因みに、同じ《十六夜騎士団》のメンバーであるカナツグとは主従関係にあり（尤も、彼女が勝手にその様に慕つてているだけなのだが）、アスナをはじめとした女性陣曰く『出来てる』との事。

「随分とお疲れのご様子ですね？」

「まあな。アインクラッドの攻略も半分を切つた事で、モンスターのパラメータやアルゴリズムも大分高くなつて来たからな。肉体的な疲労は無くとも、精神的な疲労は溜まるもんなんだよ」

さて。リーシャの問い合わせに対し、キリトは首を右に左にと曲げて、肩が凝つ正在とでも言いたげな仕草をしながらそう答える。……尤も、このSAOに於いて本当に肩が……延いては身体が凝るという事はあり得ないが。

「でしたら、お食事の後に団長様のお部屋に伺つてみては如何ですか？」

「ん？ カミヤの部屋に？」

「はい！ 恐らくキリト様の疲労も解消されるかと」

そんなキリトにリーシャはカミヤの部屋に行く様にと告ると、「それでは、リーシャはお仕事が有りますのでこれで」と言つて大広間を去つて行く。後に残されたキリトは、今度はリーシャの言葉に対する疑問から首を傾げるが、とりあえずは言われた通りにしてみようと、一旦自分の部屋へと戻るのであつた。



そして夕食後しばらくしてから、キリトはリーシャに言われた通りにカミヤの部屋へと向かっていた。

「おう、キリトじやねえか」

そんな彼に、背後から声を掛ける者が現れた。

「よお、クライン」

その人物とは、趣味の悪いバンダナを巻いた無精髭の男……今までこそ同じ十六夜騎士団のメンバーだが、かつてはギルド『風林火山』の頭を張っていた男……そして、キリトやカミヤ、シノンやシリカとは第一層の頃からの付き合いである、頼れる兄貴分・クラインである。

キリトの許まで歩み寄つて来た私服姿のクラインは、歩みを止めるとキリトへと話し掛ける。

「もしかしてよお、おめえもこれからカミヤの部屋に向かうところか？」

「ああ。『も』って事は、お前もなのか？」

「おうよ！『アレ』を受ける為にな」

クラインの問いかけに答えた後、彼の言葉振りが気になつたキリトが彼へと問い合わせる。

返せば、彼は肯定と共に気になる言葉を口にした。

「なあクライン……『アレ』つて何だ？」

「あれ？　おめえ：『アレ』を知らねえのか？」

「あ、ああ、知らない……」

「そうか。おめえはまだ『アレ』を知らねえのか」

その『アレ』というものが何なのかをクラインへと尋ねるが、当のクラインはキリトが『アレ』を知らない事に意外そうな向けるだけで、『アレ』が何なのかを答えようとはしない。

「んじやあよお、おめえは何でカミヤの所に行こうとしてんだ？」

「ああ、カミヤの部屋に行つたら、疲れが取れるつてリーシャから聞いたから……」

「なーんだ、やっぱりおめえも『アレ』を受けに行くんじゃねえか」

もしかして違う用事なのかとクラインが問い合わせを聞いて目的が同じであると理解し、そして「成る程。リーシャちゃんからねえ」と一人納得した様な表情をする。

「だから『アレ』って何なんだよ？」

一向に『アレ』が何なのかを話さないクラインに少し苛ついたキリトが再び問い合わせるが、クラインは尚もはつきりと答えてはくれない。

「まあ、行つてみりや分かるつてもんよ」

そう言われ、不服ながらもそのままクライインと共にカミヤの部屋を目指す事にしたキリト。

その後しばらくしてカミヤの部屋の前に到着し、ドアをノックする。すると中から「どうぞ」というカミヤの声が聞こえ――

『うああ～……』

――直後に、今彼の部屋に居るらしき、別の人物の呻き声の様なものが聞こえて来た。そしてそれは、尚も続いている。

「……えつ？」

その声を聞いて、キリトはドアノブに掛けようとしていた手を止めた。

今の声は何なのか？ 今この部屋では何が起こっているのか？――ドア一枚の先にて起こっている未知なる事への恐怖から、キリトは目の前のドアを開ける事を躊躇してしまったのだ。

「おっ、どうやら先客が居るみてえだなあ」

そんなキリトの不安を他所に、『アレ』の内容を知っているクラインは、未だ中から聞こえて来る声に臆する事無く、キリトの代わりにドアノブに手を掛けてドアを開けてしまう。

果たして、その先に広がっていた光景とは――

「よお、クライン。それにキリトも一緒か」

「ああ……団長さん、そこ気持ち良いく……」

——私服姿のユウキがうつ伏せでベッドに寝転がり、そんな彼女の腰をカミヤが親指で押しているという、所謂マッサージをしているというものだつた。

「……え？ これつてもしかして……マッサージ…か？」

「おう。当たりだぜ」

恐怖した事の内容がまさかのマッサージだつたという事実に、キリトは安堵したのと同時に脱力してしまう。

その他にも、クラインの言つていた『アレ』がマッサージだと分かつた事への爽快感、リーシャが『披露が回復する』と言つていた事への納得感なんかも感じていた。

「にしてもカミヤ、お前：マツサージなんて出来たのかよ」

「まあ、ちよいとかじる程度にな」

「いやいや。ありやあちよつとかじつたつてレベルじやねえだろ」

「そおだよお～……団長さんのマツサージ、すづごく気持ち良いよお～」

さて。お約束な展開（？）も済んだところで、入り口横に置かれたソファーにクラインと共に腰掛けて、カミヤに素朴な質問を投げ掛けるキリト。その問い合わせに、ユウキへのマツサージを続けながらも答えたカミヤだが、クラインとユウキの二人はカミヤのその答えに異を唱えた。

「そりやあまあ、システムのアシストも受けてるからなあ」

それに対するカミヤの答えは、システムの恩恵によるものという、遠回しに本来の自身の技術を低く評価する様なものである。

「な、何イ!? マツサージのスキルなんて有つたのかよ!」

「うひや……どおりですつごく気持ち良い訳だよ。……あ、それ気持ち良い～……」

それを聞いたクラインとユウキの二人は、真意には気付かず、それぞれマツサージのスキルが有る事に対する驚嘆を漏らす。声こそ出してないが、キリトも僅かに目を見開いている。

「ああ。上の層のフィールドでたまたまそのスキルを会得する為の場所を見つけてな」

「へえー」

「……言つとくけど、会得するにはガタイの良いN P Cのおっさんを揉み続けにやならんし、熟練度上げるのだつてひたすら床押しや相手を揉み続けにやならないから、そんなに簡単じゃあないぞ？」

「う、うへえ……そ、そうですか……」

力ミヤはそんな彼らにスキルの会得情報を伝えるが、クライインが興味津々な表情をしているのに気付き、セクハラ紛いな事をしない様にという意味合いも兼ねて、会得するのが簡単ではない事を伝える。それにより、クライインの表情は急に暗くなり、会得を断念する様な雰囲気を漂わせた。

尚、このマッサージスキルの情報……とある事情から既にAININKラツド中に公開されではいるが、詳細が詳細な故に、殆どのプレイヤー——主に男性陣——はクライイン同様に会得を断念したのだつた。

「俺はまあ……普段世話になつてゐる奴の疲れを取つてやりたかつたから、ちよつと頑張つてみたんだけどな」

「へえー。団長さんは優しいんだねえ。…………うおお～……足の裏効くう～……」

ユウキの足の裏を押しながら、力ミヤは更にその後の経緯を語つて行く。

「そうかな？…………んで、そいつがある日そいつの友達にマッサージの事を話したらし

くて、そこからどんどん他のプレイヤーに情報が拡散。次々とマッサージや情報を求める奴が増えて、今じゃこうしたギルドメンバーへのサービスや、その他のプレイヤー相手の商売をするに至つてゐるよ」

「ええっ!? お前…商売までしてゐるのか!？」

カミヤが淡々と語つて行く中、最後の最後にとんでもない事実が判明した為、キリトは驚いて思わずカミヤへと聞き返した。

「ああ。俺も攻略が有るから、夕方限定でな。大分利用者が増えて來た辺りで、アスナが『店を出してお金を見るべきだ』って強く提案するから、流される形でな」

「アスナの意見は正しいよ。こんなに気持ち良いんだから、お金を取りなきゃ損だよ。……うああ～……その足引つ張るの良い～……」

「……アスナさん」

と、足を牽引されながらアスナの意見に賛同するユウキに対し、キリトは意外と強引なアスナに対してもうれてしまう。

「けど、店なんて何處てやつてるんだ?」

「ああ、それはな、うちのホームの一室を使つてやつてるんだぜ。後方支援の奴らがそれ用について部屋を増築した上に、客用の出入り口まで有るんだぜ」

「……ああ。どおりで最近この層に来る奴らが多い訳か」

クライインの説明を聞いて思い当たる節が有るらしく、キリトはへえー、と納得した顔になる。

　　余談だが、十六夜騎士団のホームが有る二十二層の湖でよく釣りをしている《ニシダ》という五十代の男性は、釣りの帰りにとよくマツサージを受けに来ては、帰り際にその日釣った魚をお裾分けしてくれたりしている。

「因みに、お前にこの事を教えてくれたりーシャちゃんは、カミヤの店のアシスタントをしてくれてるんだぜ」

「成る程。それでか」

「彼女には主に受付を担当して貰つてる。何より彼女は経理面が得意なみたいだからな。……つと、ほい、お疲れさん」

「ありがとう、団長さん。……ふう、気持ちよかつたあ」

　　そして、最後にアシスタンントとして働いてくれているリーシャの話が出たところで、ユウキへのマッサージは終了した。

「さて、次はどっちが受けるんだ?」

「キリト……おめえが先に受けて良いぞ」

「良いのか? クライイン」

「おう。俺はもう何度か受けてるからな。おめえも早えところ受けてみろ。……ハマる

ぞお？』

「それじゃあ、お言葉に甘えさせて貰つて……』

そして、次に受ける事になつたのは、クラインの勧めで未だ経験の無いキリト。先程までユウキが寝ていたベッドにうつ伏せになると、カミヤがその背中に手拭いを掛け……。

「んじや、始めるぞ？」

——今此処に、キリトにとつてS A Oに入つて初めてのマツサージが始まつた。

『うおおおお～～～確かにこれ効つくううう～～～！』

——結果は、翌日キリトが最前線で敵モンスターを無数のポリゴン片へと変えるものとなつたのだつた。

Chapter. 15：晴天下の攻防

世界初のVRMMORPG『ソードアート・オンライン』が正式サービスを稼働し、日を同じくして『茅場晶彦』を名乗るゲームマスター——巻き込まれたプレイヤーの一人である少女『アスナ』曰く、本当の名を『須郷伸之』というらしい——によつて引き起こされたデスマゲームの開始から一年と五ヶ月の月日が経つた今日——二〇二四年四月二十二日。

つい数日前にフィールドボスを倒した事によつて挑める様になつた、現在の最前线である第五十九層の迷宮区を攻略するべく、アスナを含む五人のギルドメンバーと共に迷宮区を目指そうとする俺。

因みに、シリカとサチは今日は新人や下つ端メンバの育成担当で、何故かアスナに向けて羨望の眼差しを向けていた。

さておき、一日でも早い解放の日へ向けて、さあ今日も頑張ろうかと意気込んで

いた訳だが……

……その意気込みは、出鼻から思いつきり挫かれる結果となつた。

「…………」

「…………」

「スウ…………」

「ムニヤ…………」

転移門を潜り五十九層の主街区《ダナク》へとやつて来た瞬間、突然俺の使い魔のオオカミであるリトとスーナが何かを感じ取ったのか、俺の指示も無しに何処かへと駆け出してしまつた。とは言つても、二匹が向かつた先は五十九層の主街区転移門を取り囲む低い丘の一画という、大して距離も開いてない近場だつた。

直ぐに追い付く事が出来た俺達がそこで見たのは、木の下で仰向けになつて寝転がつているキリトと、その両隣で横になつているシノンとユウキの三人の姿だつた。しかも、シノンとユウキに至つては寝息まで立てて熟睡しているという感じである。

「くうう……」

更にそこへリトとスーナまでもが加わり、キリトの腹を枕代わりにして眠り始める始末である。

どういう経緯でこうなったのかは本人達に聞いてみなければ分からぬが、恐らくはキリトが主犯で間違ひ無いだろう。シノンは割と真面目な方だし、ユウキもキリトと似た様な思考や行動をする事が有るが、大抵はキリトに触発されてのものだ。

とはいって、こうしてキリトと一緒に寝て居るのは、ほぼ間違ひ無く彼女達の意思によるものだろう。シノンは眞面目ではあるのだが、キリトの誘いには意外と弱かつたりするし、何よりシノン自身にキリトと行動を共にしたがる節が見られる。ユウキは先程も言つた通り思考や行動がキリトと似ている所が有る為、今回の事もキリトの考えに共感してのものだろう。

と、人間二人に関してはまだ分かるのだが、シンプルなアルゴリズムで動いている筈のモント^{モント}とスナ^{スナ}二匹までもが、主人である俺の指示を無視してこの状況に加わるというのは、果てし無く謎である。

とはいって、全く訳が分からぬという訳でもない。どうにもリトとスーナ、それにシリカの使い魔であるピナには、そのアルゴリズムにイレギュラー性が存在する様で、時折アルゴリズムから外れた行動を取る事があるのだ。今回の事も、それが関係し

ているのかもしれない。

と、そんな事はこの際どうでもいい。今はこの様な状況に至っている経緯を確かめるのが先だ。

「キリト、起きてるか？」

それには先ずキリトに起きて貰わなければならぬ為、起きているかどうか本人に問い合わせる。

「ああ、カミヤか。起きてるよ」

眠りは浅かつたのか、反応は意外と速く返つて来た。

直後、閉じていた瞼を開いたキリトは、自身の腹に頭を乗せているリトとスーナを確認すると、二匹を起こさない様にそのままの姿勢で話し掛けて来た。
「……どうなつてんだ、こりや？」

キリトの言葉が指しているのは、間違い無く二匹の事だろう。だが、主人である俺にも理由がさっぱりである為、「俺にも分からん」と答えるしかなかつた。
「そんな事より、何こんな所で昼寝なんかしてるんだ？」

そして、再び浮かんだ疑問を脇に置いて、今この状況に至っている経緯についてキリトに問い合わせる。ギルドの方針に於いて自由行動を認めている為、別にキリト達に対して怒つてはいる訳ではない。……怒つてはいないが、一応理由は聞いておきたいと

思つたのだ。

「いやあ、今日はAINクラッドで最高の季節の、更に最高の気象設定なんだもんだからさあ、こんな日に迷宮に潜つちや勿体無いって思つてなあ」

で、返つて来た答えがコレだ。

AINクラッドの四季は現実と同期しているのだが、その再現度はかなり忠実。夏は暑くて冬は寒いという気温設定は勿論の事、雨や風、湿度や埃っぽさ、果ては小虫の群れなどといった気象パラメータが山の様に存在し、どれかが好条件でも他のどれかが悪かつたりするのが常——キリトの談——らしい。

だがしかし、今日に限つてはそれは違うらしく、どうやら全ての気象パラメータが好条件な様だ。周囲に意識を向けてみると、降り注ぐ日差しは暑過ぎもせず柔らかで、吹き抜けるそよ風には湿気も埃っぽさも無く、更には小虫の羽音も聞こえないと、確かに最高で完璧な気象設定だと言えよう。

「だそうだ。今のを聞いて自分もつて思つた奴…………構わん。攻略を休んでも良いぞ？」

「だ、団長!?

故に、俺同様に周囲に意識を向けてこの最高の気象を感じている他のメンバー達に対し、俺は選択の自由を与えてやる。

「よ、宜しいのですか？ 多くのプレイヤー達が一日も早いゲームクリアを願つてゐる
というのに、攻略組である自分達が攻略を休んでしまつても……」

「他の奴らが何と言おうと、団長である俺が良いって言つてんだから別に良いんだよ。
それに、いくら攻略組つつても、俺らだつて人間だ。休まにや身体が保たん」

「そういう事だよ。頑張る事も大事だけど、それで倒れちやつたら元も子も無いからね。
時には休む事も必要だよ？」

当然の如く、他のメンバー達は俺の言葉に懸念の表情を見せるが、俺と、更には

アスナの説得により、全員が納得の表情へと変える。

「で、では、団長方のお言葉に甘えさせて頂いて……」

「俺も……」

「わたしも……」

「おう、休め休め。何なら他の連中にも声を掛けても良いぞ？ 勿論今日休んだ分、明日
からはしつかり頑張つて貰うからな？」

「「はい!!」」

そして、恐る恐るといった感じで休暇を申し出るメンバー達に許可と忠告をする
と、俺とアスナ以外の四人は軽く頭を下げた後、揃つて転移門の方へと戻つて行つた。

しばらくその後姿を見送つた後、さて俺も自由に行動しようかと反対方向へと振

り向き歩き出そうとするが、片方の腕を何かに掴まれて動きを止められてしまう。振り解こうと試みるが、俺の腕を掴む力が意外にも強く中々振り解けない。

「何処へ行くつもりなのかなあ？」カミヤくん

振り返つて見ると、其処には満面の笑みを浮かべて俺の腕を掴んでいるアスナが居たのだが…………何故かその笑顔は笑つている様には見えなかつた。寧ろ怖いものを感じた。満面である分余計にだ。

「何処つて、迷宮区の攻略にだが？」

本能的に危険を感じてか、彼女の問い掛けに素直に答えるが、彼女から感じる恐怖は薄れる事は無く、寧ろ更に強くなつてしまつた様な気がする。

「他の皆にはお休みさせておいて、自分は攻略？」

「正確には、休んでも良いつていう選択肢を与えただけであつて、それを選ぶかどうかはそいつの自由だ」

理屈的な意見で以つてアスナを説き伏せようとするが、彼女の顔に納得の色は殆ど見られない。

「…………休みなさい」

「ん？」

「攻略を休みなさい！　今日はわたしもお休みするから、君も一緒に休みなさい！」

「はあっ？」

そんなアスナは、俺の意思など無視するかの如く、俺に今日の攻略を休む様にと命令して来た。

「わたしが攻略に行かない以上、今の君は一人で攻略に向かう事になる。けど、一人で最前線の攻略なんて危険過ぎるわよ？　スーナちゃん達も行くかどうか分からぬ様子だし」

「安全マージンはちゃんと取つてあるし、スーナ達が居ない分トラップにも充分気を付ける。もし危なくなつても何とかして脱出するから、多分大丈夫だろ。それに、どつちかつて言うと、俺は一人で行動する方が気楽で好きなんだけどな」

「多分じゃ駄目！　行かせられません！　……それに、君も少しは休まないと身が保たないわよ？　知つてるんだから……君が全然休暇を取らずに、殆ど毎日の様に攻略やレベル上げ、レベルの低いメンバーの人達の育成に出掛けてる事」

「気遣つてくれてどうも。けど大丈夫。自分の身体の事はちゃんと分かつてゐつもりだし、たまにだけは息抜きはしてるからさ」

「全然分かつてないわよ！　もう……」

何かかんかと理由を付けて俺に休む様にと命令して来るアスナだが、俺はそれを頑なに拒む。

休む事が大事なのはちゃんと分かっている。だが同時に、今日攻略を休むメンバーの分まで、俺だけでも少しでも頑張らなくてはという自己満足な思いも有る。デスゲーム初日に『日数は二の次で、生き残る事を最優先に考えろ』なんて言つたものの、やはり少しでも……一日でも早くこのゲームを終わらせなくてはならないと思つてゐるからだ。

「あつ、そうだ！」

拒み続けていればその内俺を休ませる為の理由も無くなり、アスナも諦めてくれるだろう……一瞬だがそうなつたかと思つたが、彼女はまだ諦めていなかつた。

「カミヤ君……わたしの護衛をしなさい！」

「…………はい？」

果たして今度はどんな理由を以つて攻めて来るのか、どうやつてそれを拒もうかと考えていたが故に、俺はアスナが口にした『自分の護衛をしろ』という命令に、一瞬彼女の意図を読めずに呆気にとられてしまう。

「わたしは今から此処で寝る事にするから、カミヤ君はわたしやシノのん達が『睡眠PK』に遭わない様に、しつかり護衛してね♪』

だがその直後、アスナから告げられた内容を聞いて漸く彼女の意図を理解した俺は、虚を衝かれた思いとなる。

今俺達が居る此処——第59層主街区の中央広場は『アンチクリミナルコード有効圏内』に設定されており、アイテムの窃盗は勿論の事、他のプレイヤーを攻撃してもHPバーは一ミリも減らないなど、^{犯罪禁止}『アンチクリミナル』の名の通り一切の直接的犯罪行為が不可能である。

この事は『SAO』というデスゲームに於いて、『HPがゼロになれば死ぬ』のと同じ位絶対のルールである。

だがしかし、残念な事にこれには幾つかの抜け道が存在する。

その内の一つが、アスナが口にした『睡眠PK』という方法。その詳細は、熟睡して動かない状態のプレイヤーに対し、HPがゼロになるまで戦うという『完全決着モード』のデュエルを申し込み、寝ている相手の指を勝手に動かしてOKボタンをクリックさせる。後は文字通り寝首を搔き、相手を死に至らしめるという寸法だ。

実際その方法で何人ものプレイヤーが被害に遭っている事から、アスナは警戒の為に俺を護衛に指名して来たという訳で、これなら確かに俺は攻略に行くのは難しいだろう。

だが、まだ甘い。生憎とこちらにはまだ抗議の為の材料が残っているのだ。

「此処にはキリトが居るんだから、別に俺が護衛をしなくても良いだろ？ なあ、キリト？」

「お、俺が!?」

「キリト君もきっとお昼寝するだろうから、その間に『睡眠PK』に遭わない様に、やっぱりカミヤ君に護衛をして貰う必要が有ると思うんだ。……キリト君もそう思うよね？」

「ソ、ソウデスネー……」

と、内心で勝ち誇っていた俺だが、その内の一つ——未だに起きて俺達の会話を聞いていたキリトに任せるという手は、アスナにキリトを抑えられた事によつて封じられてしまう。

「な、なら、『索敵スキル』の接近警報をセットすれば良いじゃないか？」

「わたしはゆつくりとお昼寝がしたいから、警報はセットしません」

ならばともう一つのカードを切るが、こちらは何とも我儘としか思えない理由によつて却下。

その逆転劇によつて貴重なカードを失つた俺は、他に何か無いかと必死に考えを巡らすも、決定的な材料は中々思い浮かばない。……どうやら、俺は詰んだようだ。

「…………」

「どうやらわたしの勝ちの様ね？」

「…………はあ、分かったよ。護衛という名目で、今日の攻略は休ませて頂きますよ」

「よろしい。あ、因みに副業のマッサージも今日はお休みね？」
「な、何イ!?」

「それじゃあお休み。護衛宜しくね♪」
「お、おい！ ちょっと待て！」

故にこれ以上の抗議は諦めて、渋々ながらも今日の攻略を休む事をアスナに伝え
ると、彼女は満足そうな表情を浮かべて更なる衝撃発言を残し、ユウキの隣に横になつ
てその瞼を閉じてしまつた。

「……はあ。ド畜生が……」
「……お前も苦労してるな」
「……全くだ」

こうして、急遽攻略を休んでアスナ達の護衛をする事になつてしまつた俺は、彼
女に聞こえない様に小声でキリトと会話をした後、色々と諦めて与えられた仕事を全う
する事にしたのだつた。

Chapter. 16：惨劇は突然に

「……マジで熟睡してたな、オイ……」
「いやー……あははは……」

ギルド『十六夜騎士団』が急遽攻略やレベル上げなどといった活動を休む事になつたその日、浮遊城の開口部からオレンジ色に染まつた夕陽の光が差し込む頃になつて、最前線の主街区広場にて昼寝をしていた同ギルドの副団長である少女・アスナは、漸く眠りから覚醒した。

彼女が眠りに就いたのはおよそ朝の八時頃であり、現在の時刻は十七時過ぎ……つまり、彼女は約半日も眠つていた事になる。

それに伴い、アスナによつて護衛の任に就かされた同ギルドの団長・カミヤは、半日ずっと暇を持て余す結果となつた。

彼女の近くの芝生に腰を下ろし、自身のステータスや所持しているスキルの確認をしたり、武器の簡単な手入れをしたり、攻略の為にその場を通り掛かつた他のギルド

のメンバーと軽い会話をしたり、その場に居合わせていた同ギルドのメンバーであるキリトに昼食を買って来て貰つて食べるなどして時間を過ごしたもの、非常に退屈な半日だつたと彼は思つてゐる。

余談だが、長時間じつとしているのが苦手な彼は、穏やかな天候の所為もあつて途中眠気に襲われてしまい、キリトに護衛の代理を任せて、座位のまま軽く三十分程昼寝をしたのだつた。

「あ、コートありがとう。ハイ

「ありがとねー」

「ん」

さて、目を覚ましたアスナは、自身と隣で一緒に寝ていた同じギルドのメンバーである少女・ユウキに掛けられていた濃い灰色のコートを、持ち主であるカミヤへと返却する。季節は春の中頃とはいえ、何も羽織らずに寝ていては風邪をひいてしまう（実際にはSAOに於いて風邪などひきはしないが）だろうと心配したカミヤが、親切に彼女達に掛けてあげたのだ。

因みに件のユウキも、アスナが起きるより少し前まで熟睡していたりする。

「ところで、マジでマツサージも休まなきゃ駄目なのか？」

そんなアスナに対し、カミヤは彼女が寝る前に告げた『副業の休業』という言葉

マツサージ

の真偽について問い合わせる。

「勿論です！ 攻略同様毎日の様に頑張つてゐるんだから、たまには休みなさい！」

返つて来た答えは、カミヤの予想した通りのものだつた。

カミヤの知るアスナという少女は、一度口にした事・決めた事は滅多な事では曲げない、意外と強情な性格をしている。その強情さは半日前に経験している故に、彼は端から期待など殆どしていなかつた。

「……分かつたよ。なら、お前らへのマッサージも今日は休みな」

「えええ——！」

「休めつて言つたのはそつちだろ？ それに、働くもの揉まれるべからず——今日半日、攻略もせずにずっと寝てたお前らには、どつちにしろマッサージはしねえよ」

「……まあ、理屈としては確かにその通りよね」

「そんなあ……」

「ボクあれ好きなのになあ……」

故に、カミヤは潔くアスナの命令を聞き入れる。……だが、何の抵抗も無しに諦めたのでは駄然としないと思つた彼は、彼女達へのマッサージをも休むという策を以つて一矢を報いた。

これにはアスナとユウキは不服の声を漏らし、二人同様に夕方近くまで寝ていた

シノン（キリトにコートを掛けて貰つた）も、納得はしているが少し残念そうな顔をする。隣ではキリトが苦笑いを浮かべている。

そんな彼女達の反応など氣にも留めず、カミヤはアシスタントのリーシャや、十六夜騎士団が經營している施術所にアルバイトに来ている『血盟騎士団』所属の『マツサージスキル』持ちのプレイヤー『ハジメ』に宛てて、臨時休業の旨を伝えるメールを作成する。実は既に一度、早い内に臨時休業の旨のメールを送つてはいるのだが、念の為だ。

「さて、この後の空いた時間をどう過ごすよ？」

それが終わつたところで、カミヤはこの場に居る四人に對してこの後の予定について尋ねる。

本来であれば、カミヤは今この時間帯はギルドホームに設けられた施術所で副業マッサージを行つてゐる筈であるのだが、今日はアスナからそれを禁じられている為、何時もの夕食の時間（副業が終わつた後で、大体十九時頃）までフリーだ。しかし、普段から攻略以外で出掛ける事が少ない上に、これと言つた趣味を持たないカミヤからしてみれば、この予定外の自由時間をどう過ごしたら良いのかよく分からぬのだ。

加えて、彼は会合やボス攻略以外の集団行動に於いて、自身の意見を主張する事をあまりしない。故に、自身以外の四人に意見を求め、自身はそれに身を委ねるつもり

だ。

「そうねえ……なら、何時もよりも大分早いけど、タコ飯にしましょ？　たまにはN P Cのお店で」

「あ、なら、五十七層の主街区に、N P Cレストランにしてはイケるつて噂の店が有るから、そこに行つてみないか？」

「そうなの？　じゃあそのお店に行つてみよう！」

「私もそれで構わないわよ」

そんなカミヤの問い合わせに対してもアスナが外食する事を提案すると、他の三人もそれに賛同する様に声を上げる。

「という事だけど、カミヤ君はどう？」

「ん。俺もそれで構わない」

余程のものでない限りは否定するつもりなど端から無かつたカミヤは、勿論の事賛成の返事をする。そしてその後に、十六夜騎士団の料理担当メンバーの一人に宛てて、外で食べて帰る旨のメールを作成し、送信する。

その後は、五十九層主街区の転移門をくぐり、五十七層主街区へと移動するのだつた。



突然出来た暇な時間を、アスナの提案で大分早い夕食を摂つて過ごす事にした俺達は、現在第五十九層主街区『マーテン』に有る、N P C レストランにしてはイケるという噂の店に来ている。

それなりに人で賑わっている店の一角に腰掛け、何故か注がれている周りからの視線を無視しながら、やつて来たN P C のウェイトレスに各々の料理を注文。

速攻で運ばれて来たフルートグラスに口を付けてから、俺は思つた事を口にした。

「しつかし、まさかアスナが『攻略を休め』だなんて言う様になるとはねえ。最初の頃のアスナからは全然想像出来ねえわ」

「確かに。あの頃のアスナは、デスゲームをクリアするのに必死つて感じだつたからなあ」

当時のアスナとはよく行動を共にして相応に面識が有つた為、俺とキリトの言葉に頷くシノン。少しずつ変わり始めた頃の彼女と当時メンバーだったユウキも知つて

いる様子で、「そう言えば、ボク達のギルドに入つたばかりの頃はそんな感じだつたかなあ」と言つてこちらも頷く。

「あの頃は心にあんまり余裕が無かつたからねー」

対して、笑い話の様にそう語るアスナは、隣に座るユウキの方へと顔を向けてから話の続きを語り始める。

余談だが、席の位置はアスナの逆隣に俺、向かいにキリトとシノン、俺とアスナの足元辺りにリトとスーナという風になつていて。

「そんなわたしの心に余裕を与えてくれたのが、当時の『スリーピング・ナイツ』の皆なの」

アスナの言葉にユウキは「ほえ？ ボク達が？」と小首を傾げ、スリーピング・ナイツでの彼女を知らない俺やキリト達も気になつて必死に耳を傾ける。

「それこそ入つたばかりの頃は、攻略の事や、一日も早く現実世界に帰る事しか考えられなかつたから、好き勝手にやつてるユウキ達を見て、現実での時間を無駄にしてる、やる気が有るのかつてイライラしてたわ。

……けどある日、ユウキ達に『今ボク達が生きてるのはこのアインクラッドなんだ』って言われて、考え方が変わつたの。気付いたの……こうして一生懸命に生きようとしているこの瞬間も、この世界も、掛け替えのない現実いまなんだって。

それが分かつてからは、それまで現実の事で一杯だつたわたしの心に余裕が生まれた。生きている今この瞬間を少しでも楽しもう、ゲームであるこの世界を少しでも楽しもうつて思える様になつたの」

アスナの口から語られた、彼女が変わる切つ掛けとなつた出来事の話を聞いて……彼女の思いを聞いて、少なくとも俺は感心した。そんな風に思いながらこの世界を生きている彼女が凄いと思えた。……同時に、メンバーには『この世界を楽しめ』と言つた割に、あまり楽しもうとはせず、ただ作業の様に毎日を過ごしつつある自分は、そんな彼女が羨ましいと思えた。……俺もこの世界を楽しもうと思える様に、何か切つ掛けを見付けてみるべきなのかもしれないな。

「お待たせ致しました」

などと、心の中で一つの小さな決心をした所へ、N P C のウエイトレスが注文したサラダの皿を持って來た。

「さ、真面目な話はもうおしまい。ここからは楽しく行きましょ♪」

アスナの言葉に俺を含めた全員が頷き、今はこの夕食時を楽しむべく思考を切り替え、早速運ばれて來た色とりどりの謎野菜に卓上の調味料を掛けて、五人と二匹でぱりぱりと頬張り始める。

「考えてみれば、栄養とか関係無いのに、何で生野菜なんか食べてるんだろうな？」

「言われてみるとそうだよねー」

「えー、美味しいじゃない」

ふと、キリトが口にした疑問にユウキも頷き、そんな二人にレタスっぽい葉物を上品に咀嚼してからアスナが反論する。

「味の方はともかくとして、多分現実での生活習慣的なもんじやないのか?『ちゃんと摂らなきやいけない』って教え込まれて、それが染み付いちまつてるから、頭が野菜を摂らなきやつて思つちまうんだろうな」

「そういうものかしら?」

「そういうもんじやねえの? 若しくは『野菜が食べたい』っていう気分的な何かとか』同じ様にレタスっぽい葉物を咀嚼しながら、『何故生野菜を摂るのか』という疑問に対する俺なりの考えを口にする。暫くの間五人揃つてその考えに首を傾げていたが、キリトがその空気を変える様に新たに話題を切り出した。

「ま、まあ、あんまり深く考えない様にしようぜ? ……それよりもさ、やっぱN.P.Cの店だから、不味いとは言わないにしても、味付けが物足りないって思わないか?」

「あー、思う。それは思う」

「同感ね」

「俺はさっぱり塩ダレかな」

「「何ソレ美味しそう!!?」」

NPCの店の食事は基本的に空腹感を解消するのが主である為、味の方はイマイチ物足りなかつたりする。故に、一年近く現実の調味料の味から離れてしまつてはいる俺達はそれが無性に恋しい訳で……

「という訳でアスナさん……調味料作り、頑張つて下さい！」

「頑張つて下さい！」

AINクラッドに存在する調味料を使って現実の味を再現しようと日々研鑽しているというアスナに対し、キリト、俺、ユウキの三人は懇願する様に頭を下げる。

「うん！ 任せて！」

「アスナ……私も料理スキル持ちとして協力するから、助けが必要な時は何時でも言ってね？」

「ありがとう、シノのん。その時は宜しくね♪」

当の本人も実に張り切つており、彼女同様に『料理スキル』を取得しているシンも、彼女を手助けしようと張り切つている。

そんな騒がしくも楽しい、夕暮れの時の街に於ける平和なひと時――

「——きやあああああ！」

……だかそれは、突如として何処か遠くの方から聞こえて来た、紛れもない恐怖の籠つた悲鳴によつて破られる事となつた。

「!? 今のつて……」

「お店の外からだわ！」

「放つておく訳にもいかねえ！ 行つてみるぞ！」

「「ああ（ええ）（うん）！」」

対する俺達の行動は早く、椅子から腰を浮かせて各々の武器に手を伸ばしていく状態から、直様椅子を蹴立てて店の出口へと駆け出す。

表通りに出た所で、再び絹を裂く様な悲鳴が聞こえて来る。その方向へと向けて、俺達は持ち前の敏捷力ステータスを活かして全力疾走する。

「なつ……!」

あつという間に悲鳴の出処と思しき円形広場へと辿り着いた俺達は、そこで信じられない光景を目の当たりにした。

広場の北側には教会らしき石造りの建物が聳え立っているのだが、その二階中央の飾り窓からは先端が環になつた一本のロープが垂れ下がり、そしてそのロープを首に巻かれて吊るされている一人の男性の姿が有つた。

だが、S A O に於いて窒息死する事は有り得ない為、驚くべきはそこではない。騒ぎを聞きつけて集まつて来たプレイヤー達を真に注目させ、驚かせ、そして恐怖させているのは、明らかに N P C ではなかろう、分厚いフルプレート・アーマーに身を包み、大型のヘルメットを被つた男性プレイヤーの胸に深々と突き刺さつた、一本の黒いショートスピア短槍だ。

更に驚くべき事に、その槍が突き刺さつている胸の傷口からは、赤いエフェクトライトが噴き出る血の如く明滅を繰り返している。それが意味する事はつまり、他人にダメージを負わせる事の出来ない安全エリアに設定されている筈の圈内に於いて、今この瞬間も男性にダメージを与え続けているという事だ。

「早く槍を抜け！」

数刻先に訪れるやもしれない最悪の未来を回避するべく、大声で早く槍を抜く様にと男性に叫びかける。それで一瞬こちらに視線を向けて来た男性は、直後に槍を抜こうと試みるも、槍が深く食い込んでいるのであろう事と、男性が死の恐怖によつて手に力が入らない様子である事から、中々抜ける様子が見受けられない。

「仕方ない。俺とアスナ、ユウキの三人で教会の中に入つて、ロープを切る！ 二人は下で受け止めてくれ。後、念の為に投擲は控えておいてくれ！」

「分かつた（わ）！」

「行くぞ、二人共！」

「ええ（うん）！」

このままでは駄目だと判断した俺は、キリトとシノンを外に残し、五人の中でも更に敏捷力ステータスの高い、俺を含めたメンバー三人で教会の中へと突入する事にする。

投擲を控える様に言つたのは、もし万が一にも狙いが外れて、それが男性に当たつてしまつたら、助けようとしたつもりが逆に止めを刺してしまふ事になり得ると考えたからだ。本来ならばそんな事は有り得ないのだろうが、今起きている出来事が出来事な為に、『絶対に有り得ない』とは断言出来ないのだ。

兎にも角にも、今は一刻も早く男性を助ける事だけを考え、二階中央の部屋へと急ぐ。

敏捷力ステータスを思いつきり発揮し、二階へと上がる為の階段を駆け上がり、他の部屋などは一切気にせずに廊下を駆け抜け、そして目的の二階中央の部屋の前へと辿り着く。

そして、中に居るやもしれないこの騒動の犯人の事も一切考えず、部屋の中へと飛び込むべくドアノブに手を掛けた――次の瞬間だつた……

——ガシャアアアアアアン！

——ドアの向こうから、今この状況に於いて最も聞こえではならない音が聞こえてしまつた。

だからと言つて、それが指し示す事実を受け容れる事など到底出来る筈も無く、聞き間違いだ、そんな事が有つてたまるかと祈りつつ、勢い良くドアを開けて部屋の中へと飛び込む。

……だがしかし、その祈りは儂くも散り、無常にもロープが垂れ下がる窓の向こうに青いポリゴンの欠片が見えてしまつた。

それでもまだ信じられない……信じたくない俺は窓から外へと顔を覗かせるが、男性の姿は何処にも無く、男性が吊るされていた場所の真下に件の槍が落ちてているだけだつた。

——こうして今此処に、『圈内に於いてＨＰがゼロになる』という、このゲームの常識を覆しかねない大事件が発生してしまつたのだつた。

Chapter. 17：圈内殺人

『圈内』に於いて一人の男性プレイヤーのHPがゼロになつた……それも、誰か他のプレイヤーの手によつて殺されるという形で——その事実に、俺も、少し遅れて俺の隣に駆け寄つて来たアスナとユウキも、俺達の眼下に集まつてゐる観衆達も、皆が啞然となり、一瞬の後に広場は観衆達が放つ悲鳴によつて埋め尽くされた。

無理も無い事だ。圈内に於いてプレイヤーのHPがゼロになる事など……人が死ぬ事など、本来ならば有り得ない筈の事なのだから。

「皆！ デュエルのウイナー表示を探してくれ!!」

そんな俺達にの耳に、そのざわめきを上回る程のキリトの叫び声が届き、俺達は我に返つて僅かに冷静さを取り戻す。

「二人は外を頼む！ 俺は中を調べてみる！」

「分かった（わ）！」

そして、キリトの意図を読み取り、二手に分かれてデュエルのウイナー表示を探

し始める。

キリトはこう考えているのだろう——アンチクリミナルコード有効圏内である主街区に於いて、プレイヤーのHPをゼロに出来る方法はたつた一つ……それ即ち『完全決着モード』によるデュエル。死んだ男性はそれに挑み、敗北し…………そして死んだのだと。

だとすれば、何処かに必ず『WINNER／名前／試合時間／何秒』と
いう表示形式の巨大なシステムウインドウが出現する筈であり、そうすれば男性を殺した犯人を簡単に特定出来る筈なのだ。

ただし、ウイナー表示が出現するのはたつたの三十秒間だけなので、急いで見付
けなくてはならない。

外をアスナとユウキに任せて、俺は室内へと目を向けるが、ウイナー表示は何処
にも見当たらない。ならば部屋の外かと思い、部屋の出入り口へと向かい、『索敵スキ
ル』も使いながら廊下を覗くが、やはり何処にも見当たらない。

「アスナ！　ユウキ！　ウイナー表示有つたか？！」

「ダメー！！　全然見付からないよー！！」

「こつちもダメだわ！！　カミヤ君！　そつちはどう？！」

「こつちもダメだ！！　表示も見付からねえし、プレイヤーの反応もねえ！！」

「嘘ツ!？」

背後からキリト、ユウキ、アスナの順に声が聞こえ、こちらも答えを返してから尚も搜索を試みるが、全く何も見付からない。そして……

「…………ダメだ。三十秒経つた…………」

「…………外から、誰かがそう咳くのが聞こえてしまったのだつた。」



「カミヤの言つた通り、教会の中には他には誰も居ない」

　　ウイナー表示搜索終了の直後に、シノンと共に教会の中に入つて来たキリトが、俺達が居る問題の部屋に入つて来るなりそう報告する。

「ねえ、隠^{ハイディング}蔽アビリティ付きのマントで隠れてる可能性は無いの?」

「いや、俺達程の索敵スキルを無効化する程のアイテムは、最前線でもドロップしてない

し……」

「もし仮に隠蔽するんだとしても、リトとスーナの嗅覚から逃れられるとは思えない」

「それに念の為、教会の入り口に、プレイヤーに隙間無く立つて貰つてる。透明化しても出る時に接触で自動看破リピールされる筈だ。この建物には裏口も無いし、窓が有る部屋は此処だけだ」

キリトの報告に、隠蔽ハイディングの可能性を示唆して来たアスナだったが、キリトと俺の二人でそれを否定する。

俺達『十六夜騎士団』は、最前線での攻略を主な方針としている為、安全マージン確保の為のレベル上げは必要不可欠。故に、モンスターを見付け易くする為にと、メンバー全員に『索敵スキル』の取得と熟練度上げを義務付けている。その結果、大半の中堅コンブリートメンバーの索敵スキルの熟練度は半分を超えており、上位メンバーに至つては『完全習得』している者すら存在する。

この場には、その完全習得者である俺、キリト、ユウキの三人が存在する上に、アスナやシノンだって八割台まで上げている。そんな俺達を相手に隠れ切れるであろうアイテムなど、今の所は存在しないし、そうそう存在するとも思えない。

加えて、先に教会に突入した俺、アスナ、ユウキと共に付いて来た、俺の使い魔

のオオカミのリトとスーナだ。

隠蔽は確かに便利なスキルではあるが、決して万能という訳ではない。視覚以外の感覚を持つモンスターが相手では、効果は薄いのだ。そして、オオカミであるリトとスーナは、その視覚以外の感覚——嗅覚の発達したモンスターであり、いくら隠蔽スキルで隠れていたとしても、僅かな体臭で見付ける事が出来るのだ。

俺達の索敵スキルに引っ掛からない、リトとスーナも反応しないとなれば、隠蔽の可能性は極めて薄くなる。

「そつか……分かつたわ。これを見て」

それを理解したアスナは頷くと、部屋のとある一画を指差す。

そこには『座標固定オブジェクト』——つまりは動かす事の出来ない置物である、簡素な木製のテーブルが設置されてあり、その脚の一本には、例の全身金属^{フルブレ}鎧の男性を吊るしていたであろう、やや細いが丈夫そうなロープが結えられていた。

「これは一体、どういう事なのかしら？」

「えつと、普通に考えれば……」

シノンが小首を傾げながら口火を切る。対して、アスナも同じ様に小首を傾げながら、彼女の質問に答えを返す。

「……あのプレイヤーのデュエルの相手がこのロープを結んで、胸に槍を突き刺したう

えで、首に輪を引っ掛けた窓から突き落とした……って事になるのかしら……」「けど、何の為に？」

「何かの見せしめのつもり……なんだろうか？　けど、それ以前に……」
ユウキの素朴な疑問に答えた直後に、俺はこの騒動に於いて最も重要な問題点について指摘する。

「犯人は、どうやつてあの男性を殺したっていうんだ？」

「ウイナー表示は見付けられなかつた。広場に詰め掛けてた数十人が誰も見付けられなかつたんだぜ。デュエルなら、必ず近くに出現する筈だろう」

「でも……有り得ないわ！」

俺の言葉の後に、明瞭な声で暗意に『これはデュエルによるものではない』と告げるキリトだか、それに対してもアスナが強く反論する。

「圈内でHPにダメージを与えるには、デュエルを申し込んで、承諾させるしかない。それが常識の筈でしよう！」

「……ああ、その通りだ。……その通りの筈だ」

だが、実際にはその有り得ない筈の方法で人一人が殺されており、しかも現状、その手口は勿論の事、誰が、どういった理由や目的でやつたのかも、一切分かつていない。

教会前の広場からは、尚も集まつた観衆達がざわついているのが聞こえて来る事

から、皆がこの事件の異常性に恐怖や不安の念を抱いている事が分かる。勿論、それは此処に居る俺達五人も同じだ。

だがやがて、アスナが何かを決意したかの様な表情で、俺達に告げた。

「何にしても、このまま放置しておいたらまずいわ。もし『圈内PK技』みたいなものを誰かが発見したんだとしたら、外だけじゃなくて、街の中に居ても危険だつて事になっちゃうわ」

「だな。早い所この事件のカラクリを解かなきや、安心して攻略に集中出来ねえだらうからなあ」

アスナの言葉に頷いて俺も、そして残りの三人も、アスナ同様に決意を固めた表情へと変える。

「「「おー！」」」
「しゃあない。前線を離れる事になつちまうが、俺達でこの事件を解決するぞ！」

こうして俺達五人は、主街区に於いて起こつたプレイヤーの死亡事件——『圈内殺人』の解決に、急遽乗り出す事になつたのだつた。



証拠物件であるロープを回収した俺達は、教会をして廣場へと戻った。因みに、同じく証拠物件である黒い短_{ショートスピア}槍は、教会に入つて来る前にキリトが回収済みである。

「すまないが、さつきの一件を最初から見ていた人、居たら出て来て話を聞かせて欲しい！」

先ずは事件が起こつた時の様子、更には殺された男性の詳細なんかを調べる為に、廣場に居る観衆に情報提供を呼び掛ける。

すると数秒の後、おずおずといった感じで、一人の女性プレイヤーが俺達の前に進み出て来た。緩くウエーブの掛かった濃紺色の髪と、髪と同じダークブルー色の大きな瞳をした、見た感じ俺達とそう歳は離れてなさそうな少女だ。身に付けている片手剣や防具からするに、恐らくは観光に来た中層プレイヤーなのだろう。

俺の足下に居るリトとスー那が原因か、少しばかり怯えている様子の少女に対し、代わつて前に出たアスナが優しく声を掛ける。

「ごめんね、怖い思いをしたばかりなのに。あなた、お名前は？」

「あ、あの……私、『ヨルコ』って言います」

そのか細い震え声に、俺は聞き覚えが有つた。

「もしかして、さつきの……最初の悲鳴も、君が？」

「は、はい……」

俺達がN P C レストランで聞いた、此処に駆け付ける切っ掛けとなつた、あの絹を裂く様な悲鳴と同じ声質だ。

同じ様に気付いたらしいキリトがその事を尋ねると、少女・ヨルコさんは領き、その直後に事件が起きた時の事を語り始めた。

「私、さつき殺された人と、一緒にご飯を食べに来ていました。あの人、名前はカインズつていつて、昔同じギルドに居た事が有つて……」

そこまで来て、無惨にも殺された昔の仲間の事を思い出したのだろう。悲しさからか涙を流すが、それでも尚その時の事を話してくれる。

「でもこの広場ではぐれちやつて……周りを見回したら、いきなりこの教会の窓から彼が……」

だが、そこまでが限界だつた様だ。それ以上は言葉にならないという様に両手で口許を覆い、我慢出来ずに泣き出してしまう。

そんなヨルコさんに寄り添い、落ち着かせる様に彼女の背中をさすりながら、アスナは彼女に優しく問い合わせる。

「その時、誰かを見なかつた?」

「……一瞬なんですが、カインズの後ろに、誰か立つていた様な気がしました……」

「その人影に、見覚えは有つた?」

「…………」

ヨルコさんは暫く考えていたが、やがて申し訳無さそうに分からないとかぶりを振つた。

「その……嫌な事を聞く様だけど、心当たりは有るかな? カインズさんが、誰かに狙われる理由に……」

次いで、今度はキリトがヨルコさんに質問を投げ掛ける。昔の仲間を失つた直後に、その人を疑う様な質問をするというのは、多分に配慮に欠けている事なのだろう。だが、この事件を早急に解決する為にも、少しでも多くの情報が必要である為、どうしても聞いておかなければならぬのもまた事実である。

だが残念な事に、今度の質問にもヨルコさんはかぶりを振るのみだつた。



その後、日を改めてまた事情を聞く事にて、一人で下層まで帰るのが怖いと言うヨルコさんを、アスナとシノンに任せて最寄の宿屋に送つて貰う。その間に残つた三人で、転移門広場にて待機していたプレイヤー達（主に攻略組）に、今回の事件に関する情報を報告する。

「さて……」

それも終わり、二人も戻つて来たところで、今後の捜査の方針について話し合う。「とりあえずは、証拠であるスピアについて調べてみよう。そこから何か手掛かりが見付かるかも知れないからな」

「成る程な。となると、鑑定スキルが居るなあ」

先ずは、凶器であるスピアと、現場に残つていたロープについて調べる事になつた。

が、それには『鑑定スキル』と呼ばれるものが必要であり、基本的には商人プレイヤーや鍛冶屋といった職人プレイヤーが持つてゐるもの。戦闘色の強い俺達は生憎と持ち合わせてはいないのだ。

「わたしの友達で、武器屋やつてる子が持つてるけど、今は一番忙しい時間だし、直ぐには頼めないかなあ……」

「俺にも武器屋をやつて後輩が居るけど、多分同じだろうな……。同じ理由でエギルさんも駄目だろうし……」

ならば、その手の知り合いに頼めば良いのだろうが、生憎とこの時間帯は、昼型のプレイヤーが手に入れたアイテムの売却や、武器のメンテナンスやらでそれぞれの店に押し掛ける頃だろう。下手に営業を邪魔してしまうのは気が引けるというものだ。

「けど、この時間帯なら『ヴィント』さんが帰つて来てる頃じゃないかしら？」

「あつ、そう言えばそうだな」

俺達が頼む相手に困る中、シノンが新たに日星となる人物の名を挙げる。

『ヴィント』——十六夜騎士団所属の、顎鬚を蓄えた長身の男性で、エギルさんと共に商人を兼任している大剣使いのプレイヤーだ。夜はエギルさんが経営している雑貨屋の手伝いをし、昼間は迷宮区（基本的に最前線）に赴いて、攻略に訪れるプレイヤーを相手に商売を行つている。予想外の消費を強いられる事の有る最前線に於いては非常に重宝であり、俺達もよく利用させて貰つていて。

「どつちか一人に頼めば、鑑定して貰えるんじやないかしら？」

「可能性は高いだろうな。よし、早速聞いてみるか」

そのヴィントさんかエギルさんのどちらかに鑑定を依頼出来ないかと、とりあえずはヴィントさんに宛てて、『ヴィントさんかエギルさんのどちらかに頼みたい事が有

るから、今から会いに行つても良いか』という旨のメツセージを作成・送信する。

そして暫くした後に、ヴィントさんから『良いぜ。俺が聞いてやるよ』という承諾の返事が返つて来たので、俺達はエギルさん達の店へと向かうべく、転移門で五十層へと下りるのだつた。



猥雑な雰囲気が漂う、某電気街の様な第五十層の主街区《アルケード》。迷い込んだ二度と出て来れないのではと思わせる様な、その街の裏通りを奥へ奥へと進んで行けば、目当ての人物達が営む雑貨屋へと到着。

中へと入り、絶賛商談中の店主の横を通り抜け、依頼を引き受けてくれたもう一人の店員・ヴィントの後に付いて、カミヤ達五人は店の二階へと上がる。

「圏内でＨＰがゼロに？ デュエルじやなかつたのか？」

「いや、ウイナー表示は見付けられなかつたから、恐らくは違うと思う」「マジかよ……」

小さな丸テーブルを六人で囲みながら、事件のあらましを説明すれば、ヴィントは目を丸くして驚く。

「直前までヨルコさんと歩いてたなら、睡眠PKの線も無いしね」

「第一、突破的デュエルにしては遣り口が複雑過ぎる。事前に計画されたPKなのは確実と思つていい。そこで……これだ」

アスナ、キリトの順に自論を述べた後に、キリトがアイテムストレージから問題のスピアを取り出し、テーブルの上に置く。全体が同一素材の黒い金属で出来ており、長さは一メートル半、柄にはびつしりと逆棘が生えているそれを、ヴィントは手に取つて指でタップし、開かれたポップアップウインドウから『鑑定』メニューを選択する。

「コイツは……プレイヤーメイドだな」

そして、少しの間を置いて表示された結果に、キリトは思わず「本当か！」と声を上げる。声こそ上げていながら、他の四人も同じ気持ちだ。

「製作者は誰なの？」

ユウキから投げ掛けられた質問に、ヴィントはシステムウインドウを見下ろしながら答える。

「グリムロツク……聞いた事のねえ名前だな。少なくとも、一線級の刀匠つて訳でもねえだろう。それに、武器自体にも特に変わった事は無さそうだぞ」

「けど、手掛かりにはなるわね」「だな。一応固有名も教えてくれ」

それを聞いて冷静に言葉を口にするシノンに頷き、キリトが更に質問を投げ掛け
る。対して、ヴィントは三たびウインドウを見下ろし、答えを返す。

「えつと……『ギルティソーン』だつてよ。訳すと『罪のイバラ』つてところだな」

S A O に於いて、装備フイギュアに設定されていない武器を地面上に落ドロップすると、或い
は誰かに渡したり、モンスターに刺したままで遠ざかると、三百秒で所有者属性がクリ
アされ、システム上次に拾つたプレイヤーがそのアイテムの所有者となる。

現在の所有者はキリトである為、鑑定を終えたスピアがヴィントからキリトへと
手渡される。そして、手渡されるそれを端から見つめながら、カミヤはポツリと呟くの
だつた。

「罪のイバラ、ねえ……」と。

Chapter. 18 : 罪と罰

ヴィントに短^{ショート}槍^{スピア}の鑑定をして貰つた後、諸事情により彼らが営む雑貨屋に残る事になつたカミヤを除いたキリト、シノン、アスナ、ユウキの四人は、第一層の主街区『はじまりの街』に有る黒鉄宮に安置されている、『生命の碑』を確認しに行つた。

『生命の碑』——それは、デスゲームに参加している一万人のプレイヤー全員の名前が刻印された金属製の巨大な碑であり、ご丁寧な事に、死亡したプレイヤーの名前之上には分かり易く横線が刻まれ、その横に詳細な死亡時刻と死亡原因が記されるというシステムになっている。

それによれば、捜し人たる『グリムロツク』なるプレイヤーは健在。逆に、スピアによつて胸を貫かれてポリゴン片となつてしまつた『カインズ』なる男性プレイヤーは、事件が有つた日時丁度に、貫通ダメージによつて死亡している事が明記されていた。

そして翌日、カミヤを含めた五人は、他のギルドメンバーに攻略を（指揮は元『月夜の黒猫団』と『スリーピング・ナイツ』——所謂『十六夜騎士団』の初期メンバーに）

任せて、事件の関係者であるヨルコからより詳しい事情を聴取するべく、ヨルコが泊まる宿屋へと直行し合流。現在は、昨日夕食を食べようとしたレストランへと来ており、より奥まつた場所に有る六人掛けのテーブルに腰掛けている。

昨日の事件が余程ショックであまり眠れていないので、ヨルコは何度も瞬きを繰り返している。

「悪いな。昨日友人が亡くなつたばかりだつてのに、捜査に協力して貰つちまつて……」

「いえ、良いんです。私も、早く犯人を見付けて欲しいですし……」

その様子を察して声を掛けるカミヤだが、対するヨルコは気にしていないという風に氣丈に振る舞い、かぶりを振る。

が、そんな彼女の態度に反し、その後暫くの間は沈黙が続き、重苦しい雰囲気が漂つていたが、それを断ち切らんとアスナは思い切つて話を切り出した。

「ねえ、ヨルコさん、あなた、『グリムロック』って名前に聞き覚えは有る?」

瞬間、少しばかり俯いていたヨルコの頭が、ピクリと震えた。

「……はい。昔、私とカインズが所属していたギルドのメンバーです」

返つて来たのは、か細い声による肯定の言葉と、かつて三人の間に交流が有つたという意外な情報だった。

それを聞いた五人はちらりと視線を見交わし、それぞれに思つた——かつてそのギルドに於いて、今回の事件の原因となる《何か》が起こつたのだと。今回の事件はそれがの《復讐》や《制裁》なのではないかと。それ以外、同じギルドのメンバー同士による間接的な殺人の理由など、考えられないからだ。

「実は、カインズさんの胸に刺さつていた黒い槍……鑑定したら、作成したのがそのグリムロツクさんだつたんだ」

「ツ……!?

それを確かめる為にもと、キリトがスピアの作成者がグリムロツクである事を告げれば、ヨルコは目を大きく見開き、口元を両手で押さえるなど、目に見えて驚愕する。「ねえ、何か思い当たる事は無いかしら?」

「……はい、あります」

そんなヨルコに対し、シノンが核心へと迫る質問を投げ掛ければ、ヨルコはそれに肯定の言葉を返し、意を決した様に更に言葉を続けた。

「昨日、お話出来なくてすみませんでした……。忘れない……あまり思い出したくない話だつたし、無関係だつて思つたかった事もあつて、直ぐには言葉に出来なくて……。でも、お話します。《出来事》……その所為で、私達のギルドはしたんです。



——そのギルドの名前は『黄金林檎』^{おうごんりんご}。攻略目的でも何でもない、総勢たつた八人の弱小ギルドで、宿屋代と食事代を稼ぐ為だけの安全な狩りだけをしていた。

しかし、半年前のある日の事だった。

その日、中間層の、何てことの無いサブダンジョンへと潜つた彼女達は、そこでそれまで一度も見たことの無いモンスターとエンカウントし、そして偶然にも、それを倒す事に成功した。

そのモンスターがドロップしたアイテム——指輪は、なんと敏捷力を二十も上げるというかなりのレアアイテムであり、『ギルドで使おう』という意見と、『売つて儲けを分配しよう』という意見で割れた。

話し合いの末、最終的には多数決で決める事となり、結果は五対三で売却。前線の大きな街の競売屋に委託するべく、ギルドリーダーの『グリセルダ』が一泊する予定で前線へと出掛けた。

残つた七人は、グリセルダが吉報と共に帰つて来る事を期待して待つていたのだ

が、しかしどういう訳なのか、グリセルダは一向に帰つて来なかつた。

「グリセルダがアイテムを持ち逃げする筈が無い——そう信じて疑わなかつた彼女達は、とてつもなく嫌な予感がして、黒鉄宮の『生命の碑』を確認しに行つた。すると——

——なんとグリセルダの名前の上には、無常にも死を意味する横線が刻まれていたのだつた。



「……どうして死んでしまつたのか、未だに分かりません」

「……そんなレアアイテムを抱えて圈外に出る筈が無いよな。て事は……『睡眠PK』

か

「半年前なら、まだ手口が広まる直前だわ」

ヨルコが辛いながらも大凡の過去を話し終えたところで、キリトは『睡眠PK』の線を疑い、補足する形でアスナもそれを肯定する。

「だとしても、偶然襲われたつてのは少し考えにくい。グリセルダさんが指輪を持つているのを知った上で襲つたと考えるのが妥当なところだろうな」「指輪の事を知つていたプレイヤー……それってつまり……」

更にそこへカミヤの推測が加わる。それを聞いて全員がカミヤの言いたい事を察したようで、シノンの言葉を合図に一斉にヨルコへと視線を向ける。対するヨルコもそれを肯定するかの如く、瞑目してこくりと頭を動かした。

「黄金林檎の残り七人……の誰か。私達も、当然そう考えました」

そうなれば、お互いを疑い合う七人の間に亀裂が生まれるのは当然の理^{ことわり}。そしてそこからギルドの崩壊へと至るのに、そんなに長い時間は掛からなかつた事だろう。

たつた一つのリアアイテムが切つ掛けで不和が生じ、互いに揉め合い、喧嘩別れとなる——酷く嫌な話ではあるが、同時に充分にあり得る話でもある。「中でも怪しいのは、売却に反対した人間だろうな」

「売却される前に指輪を奪おうとして、グリセルダさんを襲つた……つて事?」「恐らく」

そんな結末へと至らしめた犯人——その可能性の高い人物を、キリトは指輪の売

却反対派の三人だと予測する。

「ところで、グリムロックさんってどんな人だったの？」

一方で、ユウキは今回の『圈内殺人』の重要な参考人であろうグリムロックの事について尋ねる。特にグリセルダとの関係性次第では、今回の事件と大きく繋がる事だろう。

「グリムロックさんは、グリセルダさんの旦那さんでした。勿論このゲーム内の、ですけど」

そしてそれに対するヨルコの答えは、ゲーム内に於ける夫婦というものの。……その返答から読み取れる、ギルドリーダーが女性であつた事に対して、五人は特に驚きはしなかつた。何故なら、彼らの身近にも嘗てギルドリーダーを務めた女性……というよりも、弱冠十三歳の少女が居るからだ。

「グリセルダさんはとつても強い剣士で、美人で、頭も良くて……私は凄く憧れています。グリムロックさんは何時もニコニコしている優しい人で、とてもお似合いで……仲の良い夫婦でした」

一方でヨルコの話は続き、グリセルダの事も含めてグリムロックの人柄を口にする。二人の関係を知り、更には今の話を聞いた五人は思つた——グリムロックが復讐に走つた、或いはその片棒を担いだのには充分過ぎる動機だと。

「もし昨日の事件の犯人がグリムロックさんなら、あの人は指輪売却に反対した三人を狙つてるんでしようね」

「ねえ、その売却に反対した三人つて誰なの？」

狙われる可能性が有るというのならば、売却反対派の三人に注意を呼び掛けておく必要が有る。

「……三人の内、二人はカインズと私なんです」

「「!?」」

それを確認するべく掛けられたユウキの問いに、返つて来たのはいさきか予想外な答えであり、五人は驚愕の色を浮かべている。まさか三人の内の一人が目の前に座っているヨルコであり、更にもう一人は既に死んでいるカインズであつたとは思わなかつただろう。……いや、カインズの事に關して言えば、カミヤは話の何処かで薄々気付いていた様で、「やっぱりカインズは反対派だつたか……」と一人呟いている。問い合わせたユウキも似たような表情だ。

「じゃ、じゃあ、もう一人は？」

『シユミット』というタンクです。今は攻略組の『聖竜連合』に所属していると聞きました』

それにより、護るべき対象はヨルコを含めて残り二人となつた。ならば、これ以

上の被害を出さない為にも、もう一人共々是が非でも護らなくてはならない。キリトが名を尋ねれば、返つて来た答えに五人は覚えが有つた。

「シユミット？ 聞いた事有るな」

「聖竜連合のディフェンダーチームのリーダーだよ。ほら、あのデカいランス使いの」

「ああ、彼ね」

「シユミットを知つてゐるのですか!?」

「まあ、ボス攻略とかで顔を合わせる程度だけどな」

五人がシユミットの事を知つてゐると知ると、ヨルコは彼に会わせて欲しいと願い出る。もし万が一今回の事件の事を知らない様であれば、彼もカインズと同じ運命を辿る事になりかねない、というのが彼女の弁だ。

「分かつた。聖竜連合に知り合いが居るから、何とか掛け合つてみよう」「宜しくお願ひします」

どちらにしてもシユミットからは事情を聞かなくてはならない。そのついでに昔の仲間同士で話し合う事には、何の問題も無いだろう。寧ろヨルコが居た方が、指輪事件に關係の無い第三者だけで話を聞くよりも、より多くの情報を喋つてくれる事だろう……そう考えた上で、カミヤは彼女の申し出を承諾した。

「それじゃあ先ずは、ヨルコさんを宿屋に送らないと。ヨルコさん、俺達が戻るまで、絶

対に宿屋から外に出ないでくれ

「……はい」

シユミットに会いに行く途中で襲われては元も子もない為、安全の為にヨルコを再び昨晩泊まつた宿屋へと送り届けた。本当ならば自分達十六夜騎士団のギルドホームで保護するのが良いのだろうが、彼女がそれを拒んだとあつては仕方あるまい。恐らくは、これ以上自分達の事情が公になる事を忌避しての事なのだろう。

ともあれ、彼女を宿屋へと送り届けた五人は、その後聖竜連合のギルドホームの有る第五十六層へと足を運ぶ事にした。

「皆は、今回の『圈内殺人』の手口をどう考へてる？」

その最中、不意にアスナが他の四人に對して問いを投げ掛けた。因みに、カミヤは四人の後方で聖竜連合の知り合いに宛ててのメッセージを作成している最中だ。が、その表情からは思案の色が窺える事から、作成しながらも考へている様だ。

「大まかに三通りだな。先ず一つ目は、正当なデュエルによるもの。二つ目は、既知の手段の組み合わせによるシステム上の抜け道」

暫くの間を置いて最初に答えたのは、五人の中で最もSAOの事を熟知しているキリトだった。

「まあ、そんな所だよね。三つ目は？」

「圈内の保護を無効化する未知のスキル、或いはアイテムの存在。……いや、でもこの三つ目は先ず無いだろうな」

アスナの相槌を挟み、催促を受けて三つ目の可能性を口にしたキリトだつたが、言つたそばから自らそれを否定する。

「どうして？」

「フェアじゃないから。認めるのもちよいと業腹だけど、SAOのルールは基本的にフェアネスを貫いてる。『圈内殺人』なんて、このゲームが認めている筈が無い」

シノンが尋ねてみれば、キリトは『SAO』ソードアート・オンラインというゲームの公平さを理由に挙げる。……尤も、『アレ』が存在している時点で、その公平さとやらは若干疑わしいものだが。

「だとしたら、今の所は実質二つ目一択だな」

するとそこへ、メッセージの作成を終えたカミヤが話に加わる。

「どうして？」

「大まかな可能性は、生憎とキリトが考える三つ以外には思い浮かばん」

アスナの問い合わせにカミヤは少しばかり申し訳無さそうな表情で答えた後、自身の推測を口にする。尚この時、キリトの隣と、その少し前を歩く二人の少女もまた、カミヤ同様に申し訳無さそうな表情をしていた。

「となると、残る可能性はキリトの言う一つになる訳なんだが……ウイナー表示が現れなかつたっていう事実が、あれがデュエルじやないって事を物語つちまつてゐるから、恐らくは一つ目の可能性もなくなる」

「つまり……残つた二つ目の可能性一択になるつて訳か」「俺の勝手な推測だが、そういうこつた」

「……成る程ね」

カミヤの推測を聞き終えた直後、キリトがカミヤの出した結論を復唱すれば、アスナも未だに少し受け容れられないという様子ながらも相槌をうつ。
「だとして、一体どんな手口を使つたか、なんだよな……」

その後聖竜連合のギルドホームに着くまでの間、五人はあれこれと考えを巡らせたのであつた。



えたのは、つい数日前の事。小高い丘の上に聳え立つてゐるそれは、《ホーム》というよりも《城》^{キヤッスル}、或いは《要塞》^{フォート}とでも言うべき堅牢そうな外装をしている。五十五層に有る、同じく四大ギルドの一角である《血盟騎士団》のホームの一つ上に構えたのは、恐らくは自分達の攻略組としての上位性を誇示したいという思いの表れだろうか。

「そういえばさあ、団長さんの聖竜連合の知り合いつて誰なの？」

そんな聖竜連合のギルドホームの近くまで来た所で、不意にユウキがカミヤへと問い合わせる。他の三人も同様に気になるようで、四人の視線がカミヤへと集まる。「リーダーの《ドレア》さんだよ」

対してカミヤが口にした人物の名前に、四人は多少なりと驚いた様な表情を浮かべる。

「え!? カミヤ君……ドレアさんとフレンド登録してたの?」

「ああ。同じギルドリーダー同士つて事で、黒猫団の時にな」

「ああ、成る程ね。リーダー同士だから――」

「まあ、始めはそれこそ攻略会議で話す程度だつたんだが、たまに何度か攻略で会つて協力し合ううちに意気投合してな、最近は結構親しくやつてるよ」

「「…………え?」」

瞬間、四人はカミヤの言葉に一斉に固まつた。というのも、件の聖竜連合のリー

ダーである『ドレア』なる人物は、逆立てた金髪に、鋭い目付き、右目の辺りに稻妻模様の傷が有るなどという、見た目が少しばかりキツめな大柄な青年なのだ。その様な、見た目がアレン人物と親しくやつてているなど、驚きやら不安やらで何とも言い難い気持ちになるだろう。

「えっと……大丈夫、なの？」

「？ 何が大丈夫なのは知らねえけど、あの人見た目とは裏腹に結構優しいんだぞ？」

「そ、そうなんだ……」

尤もカミヤの言う通り、彼は見た目に反して仲間想いな優しい人物であり、人付き合いも意外と良かつたりするので、特に何の問題も無かつたりするのだ。

「ああ。さてと……よお、タダクニ、モトハル」

さて、ドレアの会話もそこそこに、カミヤは聖竜連合ホームの城門へと向かい、警備や来客の取り次ぎの為にと交代で配置されている、見知った門番役の少年二人へと声を掛ける。

「あ、カミヤさん！ どうも」

「キリトやアスナさん達まで居るじやねえか。一体どうしたんだ？」

片手剣持ちの二人の門番の内の一人——『タダクニ』が挨拶を返し、名の知れた人物達が揃つてやつて來た事を訝しんだ『モトハル』が疑問を投げ掛ける。それに対し

て、カミヤは早々に用件を切り出す。

「お宅のディフェンダー隊のリーダー・シュミットさんにちよいと用事が有つてな」「シユミツトさん？」

「ああ。ドレアさんには事前にアポを取つてゐるから、取り次いで貰えないか？」

「あ、ああ……。ちょっと待つてろよ」

「これは何か有るとのではと揃つて訝しむ二人だが、所詮自分達は取り次ぎの身でしかないと自覺し、カミヤの要請に素直に応じてドレアへと取り次ぎのメッセージを飛ばす。返信は割と直ぐに返つて来て、それから僅か数分後には、プレートアーマーの上に厚手のコートを羽織つた件の青年『ドレア』が、同じくプレートアーマー姿の長身の男『シユミツト』を伴つてやつて來た。

「よお、カミヤ。この間の新居購入のパーティの時以来だなあ」

「ですね。その際はメンバー共々ご馳走になりました」

「気にすんなつて。それより、今度また一緒に飲みに行こうぜ？」ディアベルやシンガー、後ヒースクリフの野郎も誘つてな

「了解です。日程とか決まつたら連絡下さい」

そしてやつて来て早々に、カミヤと親しげに話し始める。その様な光景に、キリスト達四人は勿論の事、門番の少年二人も、更には用事が有ると連れて来られたシユミツ

トも呆然としてしまい、同時にキリト達四人は、本当に親しくやっているのだと確認させられたのだつた。

「さて、シユミットに用事つて話だが…………そいつはお前らが捜査してゐるつていう昨日の事件絡みでか？」

「ええ、まあ……。そんな訳で、シユミットさんを少しお借りしても構いませんか？」
「迷宮区の攻略はまだ半分つて所だから、ボス攻略に必要なタンクの出番はまだ当分先だ。連れて行つても大して問題は無えよ」

一方でドレアとカミヤは世間話もそこそこに、真剣な表情で以つて本来の用件について話し合う。途中事件の部分で声量を抑えたのは、恐らくは意図しての事だろう。
何はともあれ、ドレアからの許可を得るに至つたカミヤは、その視線を問題のシユミットへと向ける。が、当の本人は何故自分が名指しで呼び出されたのか、未だに理解していない様子だ。

「オレに用事が有るつて事らしいが、一体何の用なんだ？」

「詳しく述べは移動しながら話しますけど、敢えて言うなら『黄金林檎』『指輪』に関係する事についてです」

「? ……分かつた」

しかし、カミヤの口から自身と最も関係の有る言葉が紡がれた瞬間にその表情を

一変させて強張らせ、大人しくカミヤ達に同行する事を了承した。

「では、俺達はもう行きますね」

「ああ。くれぐれも気イ付けろよ」

「ご心配ありがとうございます」

自分達の身を案じてくれるドレアの声を最後に聖竜連合ホームを後にし、カミヤ達はシユミツトを伴い、途中今回起きた事件のあらましや、半年前の事件と関係している可能性が高い事をシユミツトに説明しながら、ヨルコを送り届けた宿屋へと向かうのだった。



街が夕焼け色に包まれる頃、ヨルコさんが滞在する五十七層の宿屋の一室に集まつた俺達。向かい合う形で椅子に腰掛けたヨルコさんとシユミツトさんの二人の様子を、俺達はそれぞれの両の傍らに寄り添いながら窺う。

「……グリムロックの武器で、カインズが殺されたというのは本当なのか？」

長い沈黙を破り、先に口を開いたのはシユミットさんの方。事件のあらましは此処へ来る途中に話してはあるが、圈内に於ける殺人なんて到底受け容れられる様な事じやない。《確認》というよりも、嘘であつて欲しいという《願望》の意味合いの方が強いだろう。

「……本当よ」

「ツ!! なんで今更カインズが殺されるんだ!? あいつが……あいつが指輪を奪ったのか? グリセルダを殺したのはあいつだったのか!?

だがしかし、無情にもヨルコさんの口からそれが真実であると肯定する言葉が告げられ、それを聞いたシユミットさんは激しく動搖し、捲くし立てるかの如く質問を投げ掛ける。が、ヨルコさんだつて真相を知らないのだから彼の質問には答えないし、答えられる筈も無いだろう。

「グリムロックは、売却に反対した三人を全員殺す気なのか? オレやお前も狙われてるのか!?

一旦冷静を取り戻し、椅子に座り直して手で額を覆つたシユミットは、再び質問を投げ掛ける。しかし、その質問に対する答えに關してはは未だ不明である。武器を作つたのはグリムロックさんで間違ひ無いのだろうが、だからと言つてその人が実行犯であるという確証は無い。その事を説明しようとしたが、それよりも先にヨルコさんが

口を開いた。

「グリムロックさんに槍を作つて貰つた他のメンバーの仕業かもしだいし、もしかしたら……グリセルダさん自身の復讐なのかもしだい。

「……へ？」

しかしその言葉に、シユミットさんは勿論の事、ヨルコさんを除くこの部屋に居る全員が絶句した事だろう。死^死_{りん}人^だ間^{あい}隔^かた^まグリセルダさんが人を殺した——いくら此処が幾分か非常識なS A Oとはいえ、そんな非現実的な事が起ころる筈が無い。

「だつて、圈内で人を殺すなんぞ事、幽靈でもない限りは不可能だわ」

そんな事を考える俺達を他所に続けられたヨルコさんの言葉に、シユミットさんは先程とは比べ物にならない程の尋常ではない動搖つぶりを見せる。口をパクパク動かして喘ぐその表情は、『そんな事有り得ない』『信じられない』『理解したくない』とでも言いたいかの様だ。

それは俺達とて同じだ。だが、未だに圈内PKのロジックが分からぬ為に、その可能性を否定し切れないでいる自分が存在するのも事実だ。

「私……タベ、寝ないで考えた」

そんな中、ヨルコさんはゆっくりと椅子から立ち上がり、そして錯乱するかの如

く捲くし立てる様に己の内心を叫び吐露した。

「結局のところ、グリセルダさんを殺したのはメンバー全員でもあるのよ！　あの指輪がドロップした時投票なんかしないで、グリセルダさんの指示に従えば良かつたんだわっ！！」

叫び終えたヨルコさんは一步右へと移動し、一步後ろに退いたアスナの前をシユミツトさんやキリト達の居る方向に顔を向けたまま後ろ歩きし、南の窓へと移動して行く。

(……ん？)

その一瞬だつた。俺の目には、ヨルコさんの濃紺色の長髪の間から小さな黒い棒の様な物が僅かに飛び出しているのが見えた様な気がした。俺の気の所為だろうかと思つていると、ヨルコさんが再び口を開いて言葉を続けた。

「ただ一人、グリムロックさんだけはグリセルダさんに任せると言つたわ。だから、あの人は私達全員に復讐して、グリセルダさんの敵を討つ権利が有るんだわ」

「……ッ！」

すると、ヨルコさんでも、シユミツトさんでもない、この部屋に居る誰かが息を飲む様な声が聞こえた様な気がした。だが、それを詮索するよりも前に、シユミツトさんが震える声でうわごとの様に呴き始めた。

「冗談じやない。冗談じやないぞ。今更……半年も経つてから、何を今更……」

そしてがばつ、と上体を持ち上げ、取り乱して叫び出した。

「お前はそれで良いのかよ、ヨルコ！ こんな訳の分からぬ方法で殺されて良いのか！」

ヒートアップしてヨルコさんに詰め寄らんとするシユミットさんをキリトが腕を掴む事で止め、目で冷静になる様に促す。それによつてシユミットさんが落ち着きを取り戻したのを見計らい、更なる話し合いを続けようとした――

——トンツ

——その時だった。不意に何かが突き刺さつたかの様な、乾いた音が部屋の中に響いた。それと同時にヨルコさんの目が見開かれ、次いで彼女の身体が揺れた。躊躇めく様にして振り返ると、濃紺色の長髪がなびくその背には、何とも信じ難い事に何やら黒い棒の様な物が突き刺さつていた。

一瞬それが何なのか分からなかつたが、その根本に被ダメージ時に明滅する特有

の赤いライトエフェクトを視認した瞬間、それが投げ短剣の柄である事を理解し、そしてその事実に俺達全員が戦慄した。安全な筈の圈内に於ける殺人事件が、今再び、俺達の目の前で再現されていいるのだから。

「あつ……！」

アスナの小さな悲鳴が漏れるよりも前にヨルコさんの身体は窓の外へと傾いており、我に返った俺とキリトが駆け寄るも時既に遅し。彼女は宿屋の外へと落下してしまった。

「ヨルコさん！」

窓から顔を出して見下ろせば、そこには石畳に落下して横たわるヨルコさんの姿が。だがしかし、次の瞬間にはその身体は青白い光に包まれ、ばしやつ、という音と共にボリゴン片を撒き散らして消滅してしまった。

——後に残つたのは、乾いた音を立てて路上に転がつた漆黒のダガーだけだつた
……。

Chapter. 19 : 幽幻の復讐者

……結果から言えば、残念ながらヨルコさんを殺したであろう犯人には逃げられてしまつた。

ヨルコさんが殺された直後、顔を上げた俺とキリトは、宿屋から離れた建物の屋根に立つ黒衣の人影——恐らくはヨルコさんを殺したであろう犯人——を発見。次の瞬間にはキリトと、少し遅れてユウキが宿屋の窓から飛び出し、漆黒のフレデッドローブを身に纏つた暗殺者を捕まえんと建物の屋根伝いに追い掛けて行つた。が、二人の報告によれば、犯人には追い付く前に転移結晶によつて逃げられ、行き先を特定する為のボイスコマンドも、『マーテン』の街全体に響き渡つた大ボリュームの鐘の音によつて遮られ聞き取れなかつたとの事だ。

因みにだが、二人は宿屋に帰つて来るなり、相手を即死させる事の出来るであらう犯人を無謀にも追い掛けたという事で、アスナとシノンの二人から軽くお叱りを受けたのだつた。

さて、これは一体どういう事なのだろうか……。

宿屋の客室はシステム的に保護されている為、たとえ窓が開いていたとしても、誰かがその内部に浸入する事は勿論、何かを投げ込む事も絶対に不可能な筈だ。

更に言えば、俺の感覚ではヨルコさんの背中にダガーが刺さつてから彼女が死ぬまで、ものの十秒程も掛かっていない——つまりはほぼ即死に近かつた。ヨルコさんが中層プレイヤーだつたとしても、キリト達が回収して来た小型のダガーで満タンのHPを全壊させるなど殆ど不可能に近い上に、貫通継続ダメージが発生していた事も疑問だ。

……先程のあれは——更に言えば昨日の事件は、本当に殺人だつたのだろうか？
「……違う」

今回の事件全体に対して疑惑の念を抱いていると、不意にソファーアの上で頭を抱えて縮こまつっていたシユミツトさんが否定の言葉を漏らす。

「違うつて……何が違うの？」

「違うんだ。あれは……屋根の上に居た黒ローブは、グリムロックじやない。グリムロックはもつと背が高かつた」

何を否定しているのかをユウキが聞えば、シユミツトさんは先程の黒衣の人物が犯人の可能性の有るグリムロックさんではないと呻き答える。

「それに……それに……」

更に深く俯いて震えながら続けられた言葉に、俺達は僅かに息を呑んだ。

「あのローブはグリセルダの物だ。あれはグリセルダの幽霊だ。俺達の全員に復讐に来たんだ」

犯人が纏っていたローブが死んだグリセルダさんの物であると口にし、更にはその事もあつてか、ヨルコさん同様に犯人がグリセルダさんの幽霊であると言い出す。

「幽霊なら、圈内でPKするくらい楽勝だよな」

あはははは、と瓶が外れて狂ったかの様に笑い続けるシユミツトさんは完全にグリセルダさんの幽霊の仕業であると思い込んでしまっている。

「幽霊じやない。二件の圈内殺人には、絶対にシステム的なロジックが存在する筈だ」

逆にキリストは幽霊の存在を否定し、システム的なロジックの存在を主張する。

ショートスピア
俺もキリストと同じ考えだ。今回の犯行に使われたダガーも、前回の犯行に使われた短槍も、質量を持つて実在するオブジェクトだ。幽霊などという実体を持たない存在が質量を持つたオブジェクトを手にするなど、論理的に有り得ない話だ。加えて、もし仮に犯人がグリセルダさんの幽霊であつたとしたならば、態々転移結晶を使って移動する必要など無かつた筈だ。更に言えば、グリセルダさんの幽霊が存在するというのであれば、彼女以外の幽霊も存在する事になる。この世界で死んだ二千人以上のプレイ

ヤーの多くが、彼女同様に無念に思つてゐる筈だ。……だが勿論の事、死んだ彼らの幽靈が目撃されたという話など今まで一切聞いた事は無い。

以上の事から、幽靈が犯人という線は殆ど有り得ないと言える。先程までの迷いはもう殆ど無い。

結局のところ、シユミットさんはそれ以上話せる様な状態ではなくくなつてしまつた為、今回の話し合いはそれでお開きとなつた。相当参つている様子で、本人は申し訳無さそうに攻略には出れないと弱気な発言をしており、『聖竜連合』本部の城門にて出迎えてくれたドレアさんは、事前にメッセージで事情を説明しておいた為に彼に対する概ね同情的な姿勢を見せていた。

因みにそのドレアさんだが、聖竜からも信頼出来る奴を捜査に出そうか、と言つて援助を申し出てくれたが、無闇に人数を増やして嗅ぎ回つては相手に気付かれる恐れがある為、気持ちは嬉しかつたが丁寧にお断りさせて貰つた。その代わりに、何か有つた時には協力して貰える様に頼んでおいた。

さて、シユミットさんを聖竜の本部へと送り届けた俺達は今、彼を送り届ける前に彼から教えて貰つた情報を頼りに、グリムロツクさんが行きつけにしているという店の有る二十層主街区へとやつて來ている。その店は主街区の下町に有る小さな酒場であり、曲がりくねつた小路にひつそりと看板を掲げてゐる。

俺達は件の酒場を見通せる一軒の宿屋へと入り、通りに面した二階の客室を借りる。窓から外を見れば狙い通りに酒場の入り口がはつきりと確認でき、灯りを落としたまま窓の近くに椅子を五つ並べ、腰を下ろして外を監視する態勢に入る。

「ねえ、張り込みは良いけど、わたし達グリムロツクさんの顔知らないよね」

するとそこで、アスナがとても重要な事を指摘する。そう、俺達はグリムロツクさんの名前は知つていれども、その顔までは知らない。加えて、初対面のプレイヤーに視線をフォーカスしてもそのカラー・カーソルにはHPバーとギルドタグしか表示されない為、たとえ名前を知つていても目的の人物を探す手掛かりにはならないのだ。

シユミットさんが居れば容易に判別出来たかもしぬれないのだが、当の本人がある様子では恐らくは無理だろう。

「俺とユウキは一応、さつきローブ越しとはいえグリムロツクらしきプレイヤーをかなり至近距離から見てる。身長体格で見当を付けて、ピンと来る奴が現れたら、ちよつと無茶だけどデュエル申請で確認する」

「えーっ」

苦肉の策としてキリトが提示したのは、それらしきプレイヤーに手当たり次第にデュエルを申し込んで、メツセージに表示される相手の名前を確認しようという、かなり強引かつ危険なものだつた。もしもその方法で行くといふのであれば、相手の方にも

誰かからデュエルを申し込まれたという旨のメッセージが表示される為に、身を隠したまま名前だけを調べる事は出来ないし、それ以前にマナー違反な行為である為こちらも姿を見せなくてはならない。加えて、相手がデュエルを受けて立ち武器を抜くという展開だつてあり得るのだ。

「ゞ、強引過ぎない……？」

「けど、それ以外に方法は無いと思うよ」

しかしユウキの言う通り、それ以外に有効な手段が無いというのも事実。……ともなれば、止むを得ずその手段を取るしかあるまい。

「……分かったわ。あんまり気は進まないけど、その手で行きましょ。それと、行く時は必ず二人以上で行く事。カミヤ君もそれで良い？」

「ああ、それで構わないよ」

不肖不承といった具合ながらもその手段に従う事にしたらしいアスナは、グリムロックさんだと思われる相手に近付く際の事について付け加え、俺に確認を求めて来る。俺がそれに頷けば、いざ改めて見張りの開始だ。

とはいって、じつと座つて窓の外を見ている以外は殆ど手持ち無沙汰というのは、俺としては中々に辛いものがある。

「はい、カミヤ君」

ならば監視を暫く他の四人に任せて、今回起きた二つの事件についてもう一度振り返つてみようかと思った時だった。俺の隣に座るアスナが、白い紙に包まれた謎のオブジェクトをこちらに差し出して来た。不思議に思いながらもそれを受け取つてみれば、何やらやけに良い匂いが漂つて来る。

「……えっと、何だこれ？」

「夜ご飯だよ。そろそろ皆お腹空いて来た頃でしょ？」

「……言われてみれば確かに。んじゃまあ、ありがとうございます」

包み紙を剥がしてみれば、中に入っていたのは大ぶりなバケツツトサンド。カリッと焼けたパンの間には野菜やロースト肉がたっぷりと挟まれており、その見た目と包み紙を剥がした事で先程よりも強く漂つて来る匂いが、より一層に食欲をそそる。

「うおッ！　旨そうだなあ」

「本当お！　けどアスナ、何時の間にこんな物用意してたの？」

「こういう事も有ろうかと、朝から用意しといたの。そろそろ耐久値が切れて消滅しちゃうから、急いで食べた方が良いよ」

流石はアスナ、と感心しながらもバゲットサンドにかじりつく。するとどうだろうか？　その重層的な歯応えは中々のものであり、味付けもシンプルながらも適度に刺激的で、並の店の物ではないのは瞭然だ。……というか、これはほぼ間違い無くNPC

ショップで売っている物ではない。そして俺は……この味を知っている。

「……なあ、アスナ」

「ん？ 何、カミヤ君？」

「……つかぬ事を聞くが、これ……お前の手作りなんじやないか？」

俺とアスナの足下に伏せている俺の使い魔オオカミのリトとスーナにも件のバゲットサンドを与えていたアスナへと問い合わせれば、彼女は少し目を見開いた後にそれが当たりである事を告げる。

「凄い！ よく分ったね、カミヤ君！ そうだよ、これはわたしが作ったんだよ」「やつぱりな。NPCじゃ、こんな独特な味付けは絶対に無理だろうからな」

「味を覚えててくれたの？」

「どんだけお前と一緒に過ごして、お前の料理を食つてると思つてんだよ？ 良い意味で嫌でも覚えるつづーの」

要是慣れだ。アスナの料理を何度も口にしている内に、俺の舌——正確には脳が彼女の味を覚えてしまった様だ。

隣ではアスナが、何がそんなにも嬉しいのか物凄い笑顔で自分の分のバゲットサンドを頬張り、逆隣ではキリトやユウキが「どうりで美味しい訳だ」とか「言われてみればアスナの味だあ」と呟きながら、二口、三口とかぶりついている。

アスナの話では耐久値が危ないとの事なので、俺も味わいつつも少し急いで頬張つて行く。そんな俺の視界の端に映るのは……

「…………」

キリストの隣で、先程から一言も喋らずにゆっくりとバゲットサンドを頬張つているシノンの姿だ。一体どうしたというのか、五十七層の宿での事件の後からずつと何だか様子がおかしいのだ。

「おーい、シノン？」

「……え？　えっと、何ですか？」

「あー、いや…………さつきからずつと黙つたまんまだから、大丈夫なのかと思つてな」

「あー、えつと……私なら大丈夫ですよ」

返事には一応ちゃんと応えるし、本人は大丈夫だと言つているが、どうにも大丈夫そうには見えない。現に再び黙り込んでしまった上に、バゲットサンドを食べるスピードもこれまで同様にかなりゆっくりだ。てか、そんなにゆっくり食べると――

――パシヤン

「あつ…………!？」

言わんこっちゃない。シノンがバゲットサンドを口にしようとした瞬間にとうとう耐久値がゼロになってしまった様で、三分の一程残っていたバゲットサンドが全て

ポリゴン片となつて消滅してしまつた。

「ごめんアスナ……。折角アスナが作つてくれたのに……」

「気にならないで。それよりも、本当に大丈夫？ 具合でも悪いの？」

「心配してくれてありがとう。でも、本当に大丈夫だから……」

絶対に大丈夫じゃないだろ。ホント、一体どうしたつて——

「——!..」

……今、俺の頭の中を何かが過ぎつた気がする。今の光景を見た事で、全くもつて分からなかつた数式を解く為の方程式が見付かつた様な気がする。落ち着け、落ち着いてよく考えてみろ。今までの事をよく思い返してみろ。ありとあらゆる可能性を式に当て嵌めてみろ。そうすればきつと……

「「……あっ!!」」

「ど、どうしたの、三人とも!..」

……分かつた……分かつて來たぞ。漸く答えが見えて來たぞ。そしてどうやら、キリトとユウキも答えに行き着いた様だ。

後もう一步だ。そしてその考えを確信に変える為の最後のキーを俺達は持つている。それを確かめるべく、俺は急ぎストレージからある物を取り出す。それは一枚の羊皮紙であり、そこにはグリセルダ、グリムロック、シュミット、ヨルコ、カインズ……

元『黄金林檎』のメンバー八人の名前が金釘流のアルファベットで書き付けられている。シユミツトさんを聖竜本部へと送り届ける前に、念の為にと彼に書いて貰つた物だ。

俺は羊皮紙に書かれている八人の名前を一通り確認した後、とある一人のものに注目する。そして……

「……ビンゴだ」

——遂に方程式を完成させて、真の答えに辿り着く事に成功した。

「な、何か分かったの？」

「ああ。……そもそも俺達は、何も見えちやいなかつた。見ているつもりでも、全くもつて違うものを見ていた」

分からなくて当然だ。何せ俺達は答えを導き出す為に使う公式云々の以前に、最初に示した解答自体を間違えていたのだから。

「……どういう、こと？」

『《圈内殺人》……そんなものを実現する武器も、スキルも、ロジックも、端つから存在なんかしなかつたんだよ』



第十九層の主街区『ラーベルグ』。そこから二十分钟左右に有る『十字の丘』と呼ばれる小さな丘の上に今、シユミットはやつて来ている。

目的はグリセルダへの謝罪。間違い無く自身にも向けられているであろう復讐の凶刃に対する恐怖に耐えられなくなつた彼は、己が犯した罪を告白して心から懺悔する事で、彼女に許して貰おうと考えたのだ。

「……グリセルダ……オレが助かるにはもう、アンタに許して貰うしかない……」

ギルドが解散したその日に、残つた七人のプレイヤーで相談してグリセルダの墓にする事にした、地形オブエクトである枯れた低木と墓碑が存在するその場所にてシユミットは地に跪き、ありつたけの意志を振り絞つて謝罪の言葉を口にした。

「すまない……悪かつた許してくれ、グリセルダ！ オレは……まさかあんな事になるなんておもつてなかつたんだ！」

『ほんとうに……？』

が。

突如聞こえて来たその声によつて意識が遠ざかりかけるのを必死に堪え、シユミットは恐る恐る視線を上に向けた。

そして見てしまつた……捻れた樹幹の陰から音も無く現れた、黒衣の影を。

「…………!!?」

悲鳴を迸らせそうになる口を両手で押さえるシユミットに、黒衣の影は再び問いかける。

『なにをしたの……？　あなたは私に、なにをしたの、シユミット……？』

黒衣——漆黒のフードドローブの右袖から伸びる黒い細線を見開いた両眼で捉えた瞬間、シユミットは更なる恐怖に駆られる。

その黒い細線の正体は剣。しかし恐ろしく細い、《エストック》と呼ばれる分類の片手用の近距離貫通武器。大型の針を思わせる円断面の刀身には、螺旋を描く様に微細な棘がびつしりと生えている——三本目の《逆棘の武器》だ。

己に迫り来る《死》から逃れるべく、シユミットは頭を垂れて己がした事を素直に白状する。

「お、オレは！ オレはただ……指輪の売却が決まつた日、何時の間にかベルトポーチにメモと結晶が入つてて……そこに、指示が……」

『誰のだ、シユミット？』

今度は男の声。

俯かせていた頭を持ち上げて視線を向ければ、樹の陰から二人目の黒衣の死神が現れた。

「……グリムロック……あんたも死んでたのか……？」

シユミットのその問い掛けに死神は答えようとはせず、逆に再びシユミットに問い合わせを投げ掛ける。

『誰だ……お前を動かしたのは誰なんだ……？』

「わ、分からない！ 本当だ！」

自身にメモや結晶を押し付けた相手が誰なのか知らないと言い張るシユミットは、必死になつて弁解を言葉をまくし立てる。

「メモには、グリセルダが泊まつた部屋に忍び込めるよう、回廊結晶の位置セーブをして、そ、それをギルド共通ストーンに入れるとだけ書いてあって……」

『それで……？』

「お、オレがしたのはそれだけなんだ！ オレは本当に、殺しの手伝いをするつもりは無かった。信じてくれ、頼む……！」

そして再び頭を垂れて、許して乞う。夜の風が唸り、ぎしぎしと梢が軋み、暫しの間無言の時が続く。

「全部録音したわよ、シユミット」

それを破つた、これまでの陰々としたエコーが嘘の様に失せた女性の声に、シユミットは聞き覚えが有つた。いや、聞き覚えが有るなんてものではない——つい数時間前に聞いた、もつと言えば半年前まで行動を共にしていたが故によく聞き慣れた声。

それ故に驚いた彼は恐る恐る顔を持ち上げ、そして愕然と両眼を見開いた。何故ならば、漆黒のフードを取り払つた事で露になつたその素顔は……

「…………ヨルコ？…………カインズ…………？」

まさに二人が纏うローブ姿の死神によつて数時間前に殺された筈のヨルコと、そのヨルコから殺されたと聞かされた筈のカインズのものだつたのだから。

Chapter. 20：解ける謎、迫る影

「い、生きてるですって……？」

「ああ、恐らく生きてる筈だ。ヨルコさんも、カインズさんもな」

俺達が辿り着いた答えを聞いて驚愕の叫びを上げるアスナと、声こそ上げていないものの、驚愕によつて啞然としているシノンの二人に対して、俺達はゆっくりと頷いてみせる。

「け、けど……私達は昨日の夕方確かに見たじゃない。黒い槍に貫かれて宙吊りにされたカインズさんが……死ぬところを」

「いや、違うんだ」

シノンの抗議の言葉に大きくかぶりを振つてから、キリトは謎解きの説明を始め

た。

「俺達が見たのは、カインズ氏の仮想体(アバター)がポリゴンの欠片を大量に振り撒きながら、青い光を放つて消滅する現象だけだよ」

「だから、それがこの世界での『死』でしょ？」

「……覚えてるか？ 昨日教会の窓から宙吊りになつたカインズ氏は、空中の一点をぴつたり凝視してた」

タベの事を思い返したのだろう、アスナとシノンは暫くの間その表情に思案の色を浮かべせた後、小さく頷く。

「あれって、自分のHPバーを見ていたんじゃないの？」

「俺も最初はそう思つた。でも、そうじやない。彼が本当に見ていたのは、HPバーじやなく、自分の着込んだプレイヤーの耐久値だつたんだ」

「た、耐久値！？」

アスナとシノンが揃つて驚愕の叫び声を上げる。キリトばかりに説明をさせるのも悪いし、丁度キリも良さようなので、此処からは俺がキリトに代わつて説明を行う。「圈内じや、基本的にプレイヤーのHPは減りはしない。けど、オブジエクトの耐久値は減る。さつきのバゲットサンドみたいになつてしまひだ、あの時カインズさんの胸に突き刺さつていた槍が削つっていたのは……」

「……カインズさんのHPじやなくて、カインズさんが着ていた鎧の耐久値？」

「じゃ、じゃあ……あの時碎けて飛び散つたのは……」

「そう。鎧だけだ」

「そして、まさに鎧が壊れる瞬間を狙つて、その中身のカインズ氏は結晶でテレポートした」

「結果、発生したのは死亡エフェクトに限りなく近い、けれども全く別の現象だったとう訳さ」

最初にヨルコさんの話を聞いた時からずつとおかしいと思つていた。食事をしに来たというのに、何故態々分厚い鎧を着込んで来ていたのかと。

今ならば分かる……恐らくあれは、死亡エフェクトを偽装出来る程のポリゴンの量を稼ぐ為のものだつたのだろうと。若しくは、ポリゴンの爆散エフェクトを可能な限り派手にして、多くのプレイヤーの注目を集めん為だつたのだろう。

「なら、ヨルコさんの消滅も同じトリックだつたのね」

ヨルコさんも本当に無事であると分かり、「よかつた」と呟いて胸を撫で下ろすアスナ。シノンも同様に安心した様だが、直ぐに疑問の表情を浮かべる。

「けど、確かにヨルコさんはやたらと厚着をしてたけど、ダガーは何時刺したの?」「刺さっていたんだよ。最初から」

「さ、最初から!」

俺の返答にシノンが、声こそ上げていらないもののアスナも驚いた表情を浮かべている。

「よく思い出してみろ。あの部屋で、彼女は俺達に一度も背中を見せようとしなかった。それはつまり、俺らに背中を向けられない何かしらの理由が有つたって事だ。そこから考えるに……」

「……その時点で、既に背中にダガーが刺さっていた?」

「そう言うこつた。そしてそれを決定付ける根拠もちゃんと有る」

「根拠?」

「見たんだよ、俺……彼女の背中にダガーが突き刺さっているのを」

「〔ええツ!〕」

再び俺の言葉にシノンとアスナが、更にはキリトとユウキまでもが加わって驚いた表情を浮かべる。直後、隣に座るアスナが急に椅子から立ち上がり、鬼気迫る勢いで俺に問い合わせて来た。

どうでも良い事だが、アスナの足元に居たスーナがアスナが急に立ち上がった事に驚き、椅子の下に潜り込んでしまった。

「み、みみみ見たつて……そ、それ本当なの、カミヤ君?　あの時、わたしもカミヤ君と同じ様にヨルコさんの傍に立つてたけど、全然気付けなかつたよ」

「仕方ねえよ。ダガーは彼女の髪型の所為で殆ど隠れちまつてたし、色も黒だつたから彼女の濃紺色の髪と見分けが付かなかつたからな。だから俺も最初は見間違いかと

思つたよ」

「そうなんだ。それで、カミヤ君がダガーを見たっていうのは何時なの?」

「彼女が窓際に移動した時だよ。アスナの場合は、すぐ傍を通られたから逆に背中に目が行かなくて気付けなかつたんだろうけど、俺の場合は彼女との距離が有つたから、全体的に視線が行つて気付けたのさ」

アスナが俺の説明に納得の表情を浮かべたのを確認したところで、俺は更に解説を続ける。

「でだ、服の耐久値を確認しながら会話を続けて、タイミングを見計らつて窓際に移動した彼女は、多分足で壁を蹴るなりなんかしてそれっぽい効果音を立てる事で、あたかも外から飛んで来たダガーが彼女の背中に刺さつたっていう演出をしたんだ」

「窓の外に落ちたのは、転移コマンドをわたし達に聞かれない為ね。……て事は、あの黒いローブの男の人は……」

「十中八九、グリムロックじゃない。カインズだ」

アスナの問い掛けにキリトが断定の言葉を返し、俺もそれに頷く。

「ちよつと待つて」

だがしかし、シノンにはまだ腑に落ちない点が有る様で、眉根を寄せて問い合わせを投げ掛けて来た。

「私達はタベわざわざ黒鉄宮に『生命の碑』を見に行つて、カインズさんの名前に横線が刻まれているのを確認したわ。死亡時刻もぴつたりだつたし、死因だつてちゃんと『貫通属性攻撃』だつたわ」

シノンの言葉を聞いて、アスナも「言われてみれば」と眉根を寄せる。俺はその時諸事情で一緒に行かなかつた為に直接は確認していないが、それでもカインズさんは生きていると言える。何故ならば……

「なら、そのカインズさんの名前の綴りを覚えてるか？」

「えつと……確か、K、a、i、n、s、だつたかな」

「そうだ、俺達はヨルコさんからそう教えて貰つた。……けど、これを見てみろよ」

そう言つて、俺は元『黄金林檎』のメンバーの名前が書かれた羊皮紙を四人に見せるべく翳す。椅子から立ち上がり羊皮紙を覗き込む四人——その内のアスナとシンは紙片の中ほどを一瞥するや、驚愕にその目を見開き、逆に俺同様に答えに辿り着いていた様子のキリトとユウキは、示された内容に「やっぱり」と言いたげな納得の表情を浮かべる。

『C a y n z』……!? これがカインズさんの本当の綴りなの!?

「一文字程度ならともかく、三文字も違つてくるとなればシユミットさんの記憶違つて線は考え難い。となれば、ヨルコさんは俺達にわざと違う綴りを教えたつて事にな

る。Kのカインズさんの死亡表記を、Cのカインズさんのものと誤認させる為に

「そ、それじゃあ……私達がタベ教会前の広場でCのカインズさんの偽装死亡を目撃した瞬間に、AINクラツドの何処かでKのカインズさんも貫通ダメージで死んでたって事よね？ 偶然……にしては出来すぎてるから……まさか……」

「あ、多分その可能性は無いと思うよ」

一つの疑問が解けた事でそこから新たに浮上した疑問に、しかしユウキがすかさず口を開いてシノンが考へているであろう可能性を否定する。

「多分シノンさんは、ヨルコさん達の共犯者がタイミングを合わせてKの方のカインズさんを殺した、つて考へてると思うけど、それは違うよ。よく考えてみて……生命の碑に表記されてた『四月二十二日』は、昨日で二回目なんだよ」

「あつ……」

ユウキの説明に暫し絶句した二人は、やがて力の無い、けれど何処か安心する様な笑みを浮かべた。

「去年……なのね。去年の同じ日、同じ時間に、Kの方のカインズさんは今回の件とは無関係に、既に死んでたのね……」

「そう、恐らくはそこが『計画』の出発点だつたんだ。ヨルコさんとカインズ氏は、この偶然を使えばカインズ氏死亡を偽装出来るのではないかと思い付いた。しかも『圈内殺

人》という恐るべき演出を付け加えて」

「そしてその目的は、《指輪事件》の犯人を追い詰め、炙り出す事。二人は自らの殺人事件を演出し、幻の復讐者を作り出した」

「狙いはシユミットだ。多分最初からある程度疑つてたんだろうな。中堅ギルドだった《黄金林檎》から一足飛びに攻略組四大ギルドの《聖竜連合》に加入したとなれば、よっぽど急激なレベルアップか、或いは急激な装備の更新が無いと無理だろうからな」

ならばシユミットさんがグリセルダさんを殺して指輪を奪つた犯人なのかと聞かれれば、正直何とも言い難い。可能性としては疑うべきだろうが、あれ程死に対しても怯えていたシユミットさんに《殺人者》の気配が有るかどうかと言えば、とてもではないがそんな風には見えない。だがしかし、だからと言つて事件に無関係ではない筈も無かろう。

「まあ何にせよ、後の事は彼らの間での問題だから、俺達の今回の事件に於ける役回りは此処までだ。下手に首を突つ込もうとはせずに、彼らに任せよう」

「うん」

その後、未だに登録したままの状態であるヨルコさんとのフレンド機能で彼女達の現在の居場所を確認した俺達は、宿屋から撤収してギルドホームへと帰る事にしたのだつた。



所変わつて、十九層のフィールド『十字の丘』。

その天辺に立つ低木の前にて地面に膝を付くシュミットは、目の前に映る光景に驚いていた。グリセルダとグリムロックだとばかり思っていた黒衣の死神の正体が、まさかのカインズとヨルコだったのだから。

だがしかし、目の前の二人とて死んだ事には変わりはない。カインズの死亡は伝え聞いただけでしかないが、ヨルコに至つては、つい数時間前にダガーで刺された瞬間を目の当たりにしたのだから。

やはり幽霊なのか、そう思い一瞬気絶しそうになつたシュミットだつたが、直前にヨルコが口にした台詞が辛うじて彼の意識を繋ぎ止めた。

「ろ……ろく、おん……？」

喉から^{しゃが}嗄れた声を漏らしながら、ヨルコが手に握る物へと視線を向ける。ライトグリーンに輝く八面柱型のそれは、音声の記録・再生を可能とする結晶アイテム——錄

音クリスタルだ。

幽靈がアイテムを使って会話を録音する筈はないし、その必要性も無い。そこから導き出される答えは一つ——今日の前に居るこの二人は死んでなどいない。つまりは二人の死は偽装だったという事だ。

「…………そう…………だつたのか……」

手口こそ分からぬものの、自らの死を偽装する事で存在する筈の無い復讐者を作り上げ、真に復讐すべき相手——つまりは自分を追い詰め、罪の告白を録音する事が、全て二人の計画であつた事を理解したシユミットは、声にならぬ声で呟き、その場にがくりと脱力した。

まんまと騙され、証拠まで押さえられた事への怒りは無い。ただただ、二人の事件解決に対する執念、そしてグリセルダを慕う気持ちの深さへの驚嘆だけを感じていた。

「お前ら…………そこまでグリセルダの事を……」

「あんただつて、彼女の事を憎んでた訳じやないんだろ？」

「も、勿論だ。信じてくれ。…………そりやあ…………受け取った金で買ったレア武器のお陰で、聖竜連合の入団基準をクリア出来たのは確かだけど……」

カインズからの問い合わせに、シユミットは顔を歪めながらグリセルダへの殺意が

無かつた事を必死に訴える。

——ザシユツ……。

直後だつた。背後から伸びて来た小さなナイフが胸^{ブレスト}当てと喉^{ブレード}当ての隙間に突き刺さり、シユミツトは身体の感覚を失つてがしゃりと音を立てて地面に転がつた。恐らくは小型刺突武器専用スキル《鎧^{アーマーピース}通し》と、非金属防具専用スキル《忍^{スニーキング}び足》の複合技による不意打ちだと当たりを付ける。

嫌な予感がした彼は直ぐさま自身のHPゲージを確認すると、その周りを緑色に点滅する枠が囲つていた。——麻痺状態だ。シユミツトは聖竜連合の壁戦士^{タング}のリーダー格として最前線で戦うべく、高い防御力を誇ると共に耐毒スキルもそれなりに上げている。その耐性をも上回るハイレベルな毒を使うのは一体誰なのか……。

「ワーン、ダウーン」

そう思つた次の瞬間、背後から少年の様な無邪気な声が降つて來た。

必死に視線を上へと向けるシユミット。その視線の先に居たのは、全身を黒い装備で覆い尽くし、右手には刀身が緑色に濡れている細身のナイフ、そして頭部は、目の部分だけがくり抜かれた頭陀袋の様な黒いマスクに覆われていた。

更に注目すべきは、彼のプレイヤーカーソル。その色は見慣れたグリーンなどではなく、犯罪者である事を意味する鮮やかなオレンジ色であつた。

「あつ……！」

更に別方向から聞こえて來た声……いや、小さな悲鳴。そちらへと視線を向ければ、そこにはヨルコとカインズを同時に血の色に発光する極細の剣——針剣^{エストック}で牽制する、全身に檻^{ぼうろ}樓切^{はきり}れの様なものを垂れ下げたやや小柄なプレイヤーの姿が。頭には觸體^{どくたい}を模したマスクを被つており、その暗い眼窓の奥には不気味に赤く光る小さな眼が有つた。そして、そのプレイヤーカーソルの色は先のプレイヤー同様にオレンジ。「デザインは、まあまあ、だな。オレの、コレクションに、加えて、やろう」

その髑體マスクの男は棒立ち状態のヨルコからエストックを奪い取ると、しゅう

しゅうと擦過音の混ざる途切れ途切れの声でそう呟いた。

「WOW……確かにこいつはでつかい獲物だ。聖竜連合の幹部様じやないか」

そして更に現れた三人目の影。膝上までを包む艶^{つや}消しの黒いポンチョに、目深に被つたフード。だらりと垂れ下がる右手に握られるのは、まるで中華包丁の如く四角く、血の様に赤黒い刃を持つ肉厚の大型ダガー。

(まさか…………いづら…………!)

シユミットはこの男達の事を知っている。ある意味ではボスモンスター以上に厄介であり、攻略組、中層問わず、ほぼ全てのプレイヤー達が忌み嫌う存在——殺人者^{レッド}プレイヤー。

「殺人ギルド……『笑う棺桶』…………ツ!?」

その中でも特に注意すべき、最大最凶の殺人ギルド『笑う棺桶』——その幹部の座に着く最凶最悪の男達……

——毒ダガー使い『ジョニー・ブラック』。

——エストック使い『赤目のザザ』。

そして、その二人を……数多くのレッドプレイヤー達を纏め上げ、その頂点に君臨する男……

——リーダー『P.O.H.』

白骨の腕が隙間よりはみ出した、にやにやと笑う漆黒の棺桶かんおけが描かれたエンブレムをその手に刻みし死神達が、命を狩らんとする凶刃を携えて現れたのであつた。

Chapter. 21：紅の殺人者

殺人ギルド 《笑う棺桶》^{ラフイン・コフィン}。

結成されたのは、S A O というデスゲームが開始されてから一年後の事だ。それまでは、ソロ或いは少人数のプレイヤーを大人数で取り囮みコルやアイテムを強奪するという小悪党レベルだった犯罪者^{オレンジ}プレイヤーの一部が、より過激な思想の下に先鋭化された集団である。

——その思想とはつまり……《デスゲームならば殺して当然》。

現代日本においては許される筈の無い《合法的殺人》が、この極限状況^{アイシングラッド}でならば可能となる。何故ならば、最終的にH Pバーがゼロになつたプレイヤーを《殺す》のは

殺人装置と化したナーヴギアであり、その設計者かつこのデスゲームの計画者である茅場晶彦なる人物だ。H.P.バーを減少させたプレイヤーではない。

——ならば殺そう。ゲームを愉しもう。それは全プレイヤーに与えられた権利なのだから。

そんな薬薬じみた思想に誘惑され、洗脳された多くのオレンジプレイヤー達が狂的な紅へと染まり、凶刃を携えてそれまで踏み越えなかつた一線を何の躊躇いも無く超えて行き、多くのプレイヤー達の命を刈り始めた。

そして、彼らをそんな狂気の道へと誘つたのが、そのユーモラスなプレイヤーネームに反して冷酷非道な思想を有し、凄まじいカリスマ性と巧みな人心掌握術をも併せ持つ、肉切包丁を携えた黒ポンチョの男——『P.O.H』なのだ。

そんな恐怖の象徴たる最凶最悪のお訊ね者の男が、何故にこの様な下層のフイールドなんかに現れたのだろうか。それも、彼同様に要注意人物として見なされている腹心の部下二人をも伴つて。

麻痺毒の所為もあつて身動きが取ずに地面に転がつた状態のまま、加えてそれ以上の疑問に対しても必死に思考を彷徨わせるシユミット。そんな彼を見下ろしながら、P.O.Hは如何にして目の前の獲物を料理するかについて思案する。

「さて……どうやつて遊んだもんかね」

「あ、あれ、あれやろうよヘッド。《殺し合つて、生き残つた奴だけ助けてやるぜ》ゲー
ム…………ぶつ」

「ンなこと言つて、お前この間結局生き残つた奴も殺したろうがよ」
「あーっ！ 今それ言つちやゲームにならないつすよヘッドお！ ……ぶくつ

凶悪殺人者二人の間で繰り広げられる緊張感の無い、されどおぞましやり取りに、ザザはエストックの切つ先をヨルコとカインズへと掲げながらニヤけた笑みを浮かべ、向けられている二人は恐怖からか手で口を押さえる。二人の会話によつて現実に引き戻されたシユミットに至つては、その口元をひくつかせている。

…………否、実を言えば、今この場を支配しているのは何も《恐怖》だけではなかつたりする。

「さて、取り掛かるとするか」

そんな事など氣にも留めないと言わんばかりに、冷静にシユミットへの処刑宣告を下し、手に持つ大型ダガー《友切包丁》メイトチヨツバを高々と掲げるP.O.H.モンスター・ドロップでありながら、現時点に於いて最高レベルの鍛冶職人が作成出来る最高級の武器を上回る性能を持つ、所謂《魔剣》と称されるそれがシユミットの命を刈り取らんと振り下ろされる――

——しかし、その凶刃がシユミットへと届く事はなかつた。

どどどつ、どどどつ、というリズミカルなビートと振動を立てて、何かがこちらへと近付いて来る。迫り来る気配にP.O.Hは処刑の手を止め、部下二人と共に音の聞こえて来る方向へと警戒の目を向ける。シユミットも同様にそちらへと視線を向ければ、霧の掛つた薄暗い『十字の丘』を、こちらに向かつて一直線に近付いて来る白い熐光^{りんこう}が見えた。

小刻みに上下するその光が、闇夜を駆ける一頭の馬の蹄^{ひづめ}を包む冷たい炎であると見て取れたのは数秒後のこと。その力強い脚力にてたちまち自分達の下まで辿り着いた騎馬は、立ち止まるとその場で後脚だけで立ち上がる。

「ふがっ！」

「あいたたた……だ、大丈夫、キリ——ひやうッ！」

それにより、その背に乗せていた二人の騎手が重力に逆らえずに真後ろへと転がり、二人の身体が重なる形で地面へと落下してしまう。

「？　急に変な声出してどうしたんだ、ユウキ？　……てか、何だこれ？」

「や、だめえ！ 何処触つてのキリトお～～!!」

「ど、何処つて……？」

「胸ッ！ ボクの胸だよお!!」

「な……っ!?」

そして、落下して下敷きとなつたプレイヤー——キリトが、自身の上に乗つかつているもう一人のプレイヤー——ユウキをどかそと背後から彼女の身体を両手で掴み…………そして彼女の胸を触つてしまふという、何ともラツキースケベなイベントに突入してしまつた。

悲鳴の如きユウキの抗議の声を聞いてキリトが直ぐさまその手を彼女の身体から放せば、彼女は素早くキリトの上から立ち退き、地面にペタリと座り込んで自身の胸部を両腕で庇う様に抱きしめる。顔を朱に染めて恥じらうその姿は、普段の元気で活発的なそれとは全く違う、まさに乙女の姿だつた。

涙で潤んだ目をしたユウキに睨まれてたじろぐキリトに、ユウキと同じ女性であるヨルコは勿論の事、カインズやシユミット、そして流石のP·O·H達までもが侮蔑の意思の籠つた白い目を向ける。

「わ、悪かった！ わざとじゃないんだ！ こ、今度何でも一つ言う事を聞くから、許してくれ！」

「…………ホントに？」

「ほ、本當だ！ 約束する！ だからこのとおりだ！」

「…………分かつたよ、赦^{ゆる}してあげる。その代わり、ちゃんと約束は守つてよね？」
「あ、ああ、勿論だ。それとその…………本当にすまなかつた……」

必死の謝罪の末にユウキからの赦しを得たキリトは、騒動の元凶たる騎馬への仕返しの意も込めてその尻を少し力強く叩き、騎馬のレンタルを解除する。去り行く騎馬を見送つてからP o H達の方へと振り返り、この場に漂う微妙な空気を払拭しようとし
て……

「よう。久しぶりだな、ブ———」

———固まつた。

〔〕

それは隣のユウキも同様であり、その表情は如何にも『え？ これどういう事？』
とでも言いたげに酷く狼狽えている。

「ん？ 急にどうしたよ、黒の剣士様？ 僕の顔に何か付いてるのか？」

「…………お、お前…………ほ、本当にP.O.Hなのか…………？」

急に黙り込んだキリトに対して一体どうしたのかと問い合わせるP.O.H。それに応えるキリトの声は、まるで信じられないものを目の当たりにしているかの如く僅かに震えている。

「H.A.? 何を言つてるんだキリト。この声、この格好、この武器、このエンブレム……忘れた訳じやないだろう？」

「え、いや、でも…………マジで…………？」

「お前さんまで俺の事を疑うのか、絶剣の嬢ちゃん？」

——イツツ・ショウ・タイム！

……これで分かつただろう？ 僕は正真正銘、間違いなくお前達の言うところの殺人ギルド『ラフイン・コフイン』のリーダーのP.O.Hだぜ？」

「嘘だッ！」

その装いを見せようとも、武器を見せようとも、ラフコフの証たるエンブレムを見せようとも、決め台詞を口にしようとも……如何に本人が本人であると主張しようと、キリト達はそれを否定し、頑として認めようとしない。何故ならば……

「だつて……」

「だつて……」

「——くまの〇〇さんみたいな仮面をしてる様な奴（人）が、ラフコフのリーダーのP.O.Hな訳がない!!」

……そう、黒ポンチョのフードの隙間から見える今のP.O.Hの顔は、世界的に有名な某ネズミの会社の黄色いく間にそつくりな仮面に覆われているからだ。その様な仮面を着けたP.O.Hの姿からは、正直言つて最凶最悪の殺人ギルドのリーダーたる雰囲気など微塵も感じられはしない。

「…………」

「…………」

キリト達の指摘を切っ掛けに一気に静まり返る十字の丘。張本人たるP.O.Hも、キリトも、ユウキも、そして三人のやり取りを傍観していたジョニー・ブラックやザザ、シユミット達も、誰一人として口を開こうとはしない。完全なる静寂に包まれる。

「——ぶつ!!」

だがしかし、やがてその静寂は途端に破られる事となつた……示し合わせた

かの如く、その場に居るP.O.H以外のプレイヤー全員が一齊に噴き出す事によつて。

「ふ、ふはははははははツ！ プ、P.O.H……お前、何でそんなモン着けてんだよ!?」

「A.h、これか？ 偶には気分転換でもしようかと思つてな」

「き、気分転換でそんなの着けたつてのかよ！ や、やめろツ！ そのユルい笑顔をこつちに向けるなツ！」

「よ、よくそんな仮面を見付けたね！ あ、あはは……あははははツ！ お、お腹イタイ！」

「も、もうダメ！ もう無理！ もう限界！ ずっと我慢してたけど、これ以上はもう堪えられないつすよヘツドお～！ あつはははははア～～！」

「～～～クツ！」

「プ、P.O.Hがくまの○○さんの仮面つて……ふつ！ あははははははツ！」

「ま、まさかの名前繋がり！ 僕達の腹筋を大量殺人するつもりかよツ！」

「お、恐るべし……殺人ギルド『ラフィン・コフイン』……ツ！」

敵味方問わずの大爆笑……まさに混沌である。

カオス

——彼らの腹筋が回復するまで、しばらくお待ち下さい——

「ゼエ、ゼエ、ゼエ……P.O.H、その仮面はお前の戦力すら奪いかねない。今後はあまり着けない事をお勧めするぜ」

「みたいだな。OK、今回ばかりは貴様の意見に従つておくぜ」

キリトの忠告をP.O.Hが素直に聞き入れ、問題の仮面を外したところで気を取り直し、改めて対峙するキリト達とP.O.H達。緩んだ空気が一瞬にして強張つたものへと変わる。

「さてキリト……いくらお前達二人でも、俺達三人を相手に出来ると思つてているのか？」

「んー……不可能じやないとは思うけど、多分相当難しいだろうな」

P.O.Hの問い合わせに、暫しの間思案した後にそう答えを返すキリト。だがしかし、言葉とは裏腹にその表情には余裕の色が見える。それはまるで、自分達の方が優勢

であると信じて疑っていないのかの如く。

「でも耐毒P.O.T.ボーション飲んでるし、回復結晶ありつたけ持つて来たから、十分間……いやもつと耐えられるだろうぜ。そんだけ有れば、援軍が駆け付けるには充分だ。いくらあんたらでも、攻略組三十人を三人で相手出来ると思つてるのか？」

「…………S u c k」

「ああ、それともう一つ……」

直前と全く同じ台詞を返され、尚且つ援軍が迫つてゐる事にフードの奥にて軽く舌打ちをし、短く罵り声を上げるP.O.H。ののしジョニーとザザも、不安に駆られて視線を周囲の暗闇へと泳がせる。

そんな三人へと向けて、キリトは左手を軽く挙げながら更なる言葉を投げ掛けた。

「うちの狙撃手さまからの伝言だ……」

——どんな時も後ろに注意、チエック・シックスつてな。

——ズトツ。

「…………へつ？」

言い終えた直後、何かが突き刺さる様な音と共に、ジョニーの身体が先のシユミットの様に糸が切れた人形の如くその場に崩れ落ちた。そして倒れた彼の背には、一本のダガーが突き刺さっていた。

地に倒れ伏すジョニーにはそれが分からぬ。だがしかし、自身の身体が動かない事と、その原因が何であるのかは理解出来ている。緑色の枠に囲まれた自身のHPゲージと、その隣に表示されている稻妻模様のデバフアイコン——それが意味するのは、麻痺状態。そう、彼は自身の十八番おはこである苦の麻痺毒によつて地面に這はつくばされているのだ。

(一体誰が……何処から……!?)

背中に違和感を感じる事から、背後から麻痺毒を用いての攻撃を受けたであろう事はジョニーにも分かる。だがしかし、攻略組並みに鍛え上げられた《索敵》スキルを用いても、一向にそれらしき影を見付ける事が出来ない。それはP.O.Hやザザも同様であり、程度は違えども彼らに焦りが生まれ、集中力が乱れ始める。

——そしてその集中力の乱れは、時として命取りともなり得る。

十字の丘に、一陣の疾風が近付いて来る——咎人達に襲い掛からんとする鎌鼬かまいたちとがびとと

なりて。

「ツ！……ザザ、後ろだ！」

「ツ？……ぬおツ？」

最初に気付いたP.O.Hの声でザザも漸くそれの接近に気付くも、時既に遅し。振り向いた時には既に目の前に死神の影が迫つており、今まさにその手に持つ凶刃を突き出していた。反応が遅れてしまつたザザは抵抗する間も無くその凶刃をその身に受けてしまい、ジョニー同様に地に倒れてしまう。

「くそッ、よくも、やつてくれたな、『ウルフハンドラー狼使い』ツ！」

「へー、俺つて周りからはそんな風に呼ばれてるのか。まあ、妥当つちやあ妥当な呼び名だわなあ」

麻痺毒により仰向けに地に横たわり、自身を襲つた目の前の人形へと鋭い視線を向け、悪態を吐くザザ。対して『狼使い』と呼ばれたプレイヤー——現時点に於いて、唯一『モノクロウルフ』と呼ばれるオオカミモンスターを使い魔としているビーストティマー・カミヤは、彼の怒りなどお構い無しと言わんばかりに、その関心を自身に付けられた二つ名へと向ける。

い。

因みにだが、今カミヤの傍らには二つ名の所以たる黒と白のオオカミ達は居ない。

「さて……どうする、P.O.H.? あんたのお仲間は二人とも戦闘不能だぜ?」

エストックを握るザザの手を踏み押さえながら、片手剣の切つ先をP.O.H.へと向けて抜き放ち構えるカミヤ。因みに、ジョニーの傍らには何時の間に移動したのかユウキが立つており、濃紺色の片手剣の切つ先をジョニーへと向けている。これで二人はもはや詰んだと言えよう。

「あんたに与えられた選択肢は三つ。一つ目は、仲間を助ける為に俺達三人を相手にするか。……けど、こいつは時間との勝負だぜ? あんまりちんたらやつてると、うちと聖竜の精銳が援軍として駆け付けまうぜ」

一対多の状況に追い込まれたP.O.H.に対し、指を一本立てて複数有る選択肢の内の一つを口にするカミヤ。更に立てる指を一本ずつ増やしながら、続けて二つ目、三つ目の選択肢を提示する。

「二つ目は、仲間を見捨てて一人で逃げるか。三つ目は、大人しく投降して三人仲良く投獄されるか。……俺達としては三つ目を選んでくれる一番助かるんだが……さて、どうする?」

「オイオイ、誰が好き好んで自分から投獄される道を選ぶかよ。投獄させたかつたら、力

「近くでやつてみる事だな」

「だと思つたよ。……けど、そいつはやめにしておくぜ」

欲を言うならば、今直ぐにでもP.O.Hの言う通りに力尽くで彼を捕らえて投獄したいところなのだが、状況が状況である為にそうもいかない。今此の場には麻痺で動けぬシユミットや、戦力的には心許ないヨルコとカインズが居るのだ。いくら三人掛かりとはいえども、シユミット達を守り、尚且つ戦闘不能状態にあるザザ達に注意を払いながらP.O.Hと戦うというのは、そう簡単な話でもないのだ。

「て事で、選択肢は一と二の二択だ。さあ、どうする？」

今一度P.O.Hへと選択を迫るカミヤ。それに対しP.O.Hは少し考える様な素振りを見せた後に、右手に持つ友切包丁を収めた。それが意味する事はつまり……

「……二人を失うのは手痛いが、仕方ねえ。二人には悪いが、此処は一人で退かせて貰うとしよう」

「そうかい。なら、精々俺達に見つからない様に気をつける事だな」

撤退する事を選んだ様だ。P.O.Hのその選択に対して、ジヨニーとザザは些か複雑な心境である。見捨てられる事は悔しいが、だからといって自分達のリーダーをむざむざ捕まらせる訳にもいかないとも思つてゐるからだ。

「フン……。覚えておけよ。貴様らは、何時か必ず地面に這わせてやる。大事なお仲間

の血の海でごろごろ無様に転げさせてやるから、期待しておく事だな」

最後にそう言い残すと、P o Hは一人十字の丘を立ち去つて行く。カミヤ達は、先の理由から深追いをしようとはしない。

こうして、殺人ギルド『ラフイン・コフイン』による脅威は、一先ずのところ過ぎ去つたのであつた。

Chapter. 22：眞実と想い

AINKURAD 第十九層のファイールド 『十字の丘』。

そこで行われようとしていた、最凶最悪の殺人ギルド『笑う棺桶』の主要幹部による凶行。だがしかしそれは、駆け付けた攻略組四大ギルドの一角である『十六夜騎士団』の幹部格プレイヤー達の活躍により阻止され、一人の犠牲者も出す事無く無事追い払う事に成功した。

尚その際、主要幹部三人の内の二人——毒ナイフ使いの『ジョニー・ブラック』とエストック使いの『赤目のザザ』の捕縛に成功。撃退後に駆け付けた増援により、黒鉄宮の監獄エリアに送り込まれるべく連行されていった。

余談だが、二人は連れて行かれる直前に、増援として駆け付けた『聖竜連合』のメンバーの内の二人——大剣使いの『サラマンダー』と『ハクリュウ』により、それぞれ一発殴られた。殴つた二人曰く……

『お前ら、よくもオレ達の家族なかもに手エ出してくれたなア！』
 『こいつはその報いだ！』

……との事で、この事から、この二人がいかに仲間の事を大事に想つて いるのか
 が窺うかがえる。

否、仲間想いなのは彼らだけにあらず。中には自分達のギルドの上位性を誇示こじしたいという想いの強いメンバーも存在するが、ギルドリーダーの『ドレア』が掲げる思想の下、聖竜連合は基本的に仲間をとても大事にするギルドなのだ。故に、駆け付けた聖竜メンバーの中に二人の行動を咎める者は誰も居なかつた。誰もが二人の想いに同じだつたからだ。

その様な組織柄故か、攻略組四大ギルドに於ける聖竜への入団希望者数の割合は、入団基準の厳しさに反して十六夜騎士団に次ぐ二位だつたりする。

ラフコフとの騒動が片付いた今現在、十字の丘に残っているのはラフコフに襲われかけたシユミット、ヨルコ、カインズの三人と、騒動の解決に尽力したキリト、ユウキ、カミヤの三人の計六人。

駆け付けた聖竜メンバーは全員捕えたラフコフメンバーの連行に携わり、十六夜のメンバーはその護衛という名目で先にこの場を後にした。

「また会えて嬉しいよ、ヨルコさん」

「それと……こうしてちゃんと顔合わせをするつて意味じゃ、初めましてになるのかな、カインズさん」

援軍メンバーが十字の丘を去つてから暫くして、始めてキリトが口を開き、次いでカミヤが少しばかり皮肉っぽく聞こえる台詞で以つてカインズへと語り掛ける。

「全部終わつたら、ちゃんとお詫びに伺うつもりだつたんです。……と言つても、信じて貰えないのでしようけど」

「いや、信じますよ。ヨルコさん達は嘘を吐くのが得意な様には見えませんから」

そんなカミヤ達を上目遣いで眺めながら苦笑を浮かべるヨルコに、カミヤは何時もの氣だる気な表情に少しの優し気な笑みを浮かべて応える。僅かに緩んだ空気の中、

今度はシユミットが口を開き、再度場の空気を引き締めた。

「……お前達。助けてくれた礼は言うが、何で分かつたんだ？　あの三人が此処を襲つて来る事が」

「分かつた、つて訳じやない。あり得ると推測したんだ」

シユミットの問い合わせに応えを返したキリトは、その視線をヨルコとカインズの二人へと向ける。

「なあ、カインズさん、ヨルコさん。あんた達は、あの二つの武器をグリムロツクさんに作つて貰つたんだよな？」

「はい。彼は、最初は気が進まない様でした。もうグリセルダさんを安らかに眠らせてあげたいって」

「でも、僕らが一生懸命頼んだら、やつと武器を作つてくれたんです」

確認の問い合わせに応えた二人に、しかしキリトはその表情を暗くして、恐らくは二人にとつて衝撃的であろう事実を語つて聞かせた。

「…………残念だけど、あんた達の計画に反対したのは、グリセルダさんの為じやない。『圈内PK』なんていう派手な事件を演出し、大勢の注目を集めればいずれ誰かが気付いてしまうと思つたんだ」

「え……？」

思いも掛けないキリトの言葉に、ヨルコ達は意味が分からないとばかりに首を傾げる。そんな彼女達に、キリトは出し得る限りの静かな声で以つて、自分達が行き着いた真実を語り始めた。

「…………俺達も気付いたのは、ほんの三十分前だ……」



時は遡ること三十分程前。
さかのぼ

圈内殺人のトリックの解明に行き着いたカミヤ達は、自分達のギルドホームへと戻り、大広間にてアスナが淹れたお茶を飲みながらゆっくりと寛いでいた。

そんな中、不意にキリトが口を開いて話を切り出した。

「まんまとヨルコさんの目論見通りに動いちゃったけど、でも、俺は嫌な気分じゃないよ」

「そうだね」

「ボクも、探偵の気分が味わえたみたいで少し面白かったよ」

などと、自分達がヨルコに騙されていた事に怒る様子の見られないキリト達。シノンも、何やら少しばかり浮かない表情をしてはいるが、同様に怒りを感じてはいない様子で、彼らの言葉に頷いてみせる。そんな彼らに少々呆れて「お前ら懐広いなあ」などと零し、茶を啜^{すす}るカミヤだが、かく言う彼とて騙された事にさして怒りを感じてはいない。「ねえ……」

そんな中、今度はアスナが口を開き、そして四人へと問い合わせ掛けた。

「もしみんながギルド『黄金林檎』のメンバーだつたら、超級レアアイテムがドロップした時、何て言つてた?」

「「…………」」

突然の問い掛けに数秒程絶句した後、更にそこから数秒黙考してから、先ず初めにカミヤが徐^{おもむろ}に口を開いて答えた。

「……場合にもよりけりだから、一概には何とも言えないかな」

「まあ、そうだよね……」

「まあ極端な話、隠匿しても明かしても揉めて、雰囲気がぎすぎすして崩壊寸前にまで至る様なら、俺はそのアイテムに関する一切の権利を棄てて、速攻でギルドを抜けてただろうな」

それはあまりにも大胆かつ極端過ぎるものであり、逃避的で臆病で卑怯な考え方

である。故に四人は暫し啞然とし、問題の提示者たるアスナは抗議に近い声を上げる。

「ちよつ!? 縛ら何でもそれは流石に極端過ぎるんじゃ……」

「なら聞くが、レアアイテム一つで乱れる様なチームワークの粗雑なギルドなんかで、死と隣り合わせの戦場を生き残つていけると思うか?」

「そ、それは……」

しかし、反論のしようの無いあまりにも正論過ぎる言葉を返された事により、アスナは……他の三人もまた、何も言えなくなり口を噤んでしまう。

そんな気まずくなつた空氣を変えるべく、カミヤは直ぐ様フオローを入れる。「安心しろ。そうならない為にもうちは、ドロップしたアイテムの権利はドロップした奴のもの、つてルールを設けてるんだから」

「そ、そうだよね! うちはちゃんとしたルールを設けてるんだから、そんな事にはならないよね! うん!」

途端に少しばかり過剰な反応をしてみせるアスナの様子に、カミヤは少しばかりたじろぎ、思わず身を引いてしまう。

さて、カミヤの言う通り、十六夜騎士団ではアイテムによる一切のトラブルを避けるべく、『ドロップアイテムの一切の権利はドロップしたプレイヤーのもの。何人もそれに口出しをしてはならない』という決まりが設けられている。これを含めた幾つも

のギルドのルールが加入の際に希望者へと説明され、それらを受け容れられるプレイヤーのみギルドへの加入を許される事になつていていたのだ。

—— 閑話休題 ——

暫くしてカミヤ以外の四人が落ち着きを取り戻したところで、アスナが静かに口を開いた。

「……わたし、思うんだ。戦闘経過記録コンバットログが無くて、誰にどんなアイテムがドロップしたかは自己申告するしかない……そういうシステムだからこそ、S A Oこの世界での『結婚』に重みが出るのよ」

不意に出て来た『結婚』という話題に、理解出来ずに首を傾げるアスナ以外の四人。そんな彼らの疑問に答えると、アスナはゆっくりと続きを語る。

「結婚すれば、二人のアイテム・ストレージは共通化されるでしょ？ それまで隠そっと思えば隠せたものが、結婚した途端に何も隠せなくなる。『ストレージ共通化』って、凄くプラグマチックなシステムだけど、同時にとてもロマンチックだとわたしは思うわ」

そう語るアスナの視線は自然とカミヤへと向いており、ほんのりと熱を帯びている様に窺える。

当のカミヤは、なるべくそんな彼女の表情を見ない様にしながら「お前って確かに結婚した事無い筈なのに、よくそんな事知つてるなあ」などと呟いていたが、不意に浮かんだ疑問に再び首を傾げ、アスナへと問い合わせた。

「ん？ プラグマチック……確か『実際的』って意味だつたつけか。……SAOでの結婚が実際的？」

「うん。だつてある意味身も蓋も無いでしょ、ストレージ共通化だなんて。お互いのアイテムを共有する事になつちやうんだよ」

「ストレージ共通化……アイテムの共有ねえ…………」

そこまで口にしたところで、カミヤはその二つの言葉に何やら違和感を覚えた。それは横で聞いていてキリトもあり、そして先に違和感の正体に気付いて問い合わせを投げ掛けた。

「……なあ、結婚相手が死んだ時、アイテムはどうなるんだ？」
「え……？」

「アイテム・ストレージは共通化されている。片方が死んだ時、アイテムはどうなるんだ？」

「グリセルダさんとグリムロックさんの事？……そうね……一人が亡くなつたら…………」

「……ストレージの容量が許す限り、全てもう一人の物になる？」

「あつ…………！」

カミヤも漸く違和感の正体に気付いた様で、アスナが答えるよりも先にその答えを口にする。そして、そこから導き出される衝撃の事実に、五人は五様の表情を浮かべる。

「……という事は、グリセルダさんのストレージに入つていたレア指輪は……？」

「犯人じやなくて、結婚相手のグリムロックさんのストレージに残る、つて事になるよね」

「指輪は……奪われて、いなかつた……？」

最後に紡がれたアスナの言葉に、しかしキリトは首を縦には振らず、断言する様に力強く言い放つたのだつた。

「いや、そうじやない。奪われた、と言うべきだ。グリムロックは、自分のストレージに存在する指輪を奪つたんだ」



「グリムロックが……？　あいつが、あのメモの差出人……そして、グリセルダを殺したのか……？」

「いや、直接手を汚しはしなかつただろう。多分、殺人の実行役は、汚れ仕事専門のレッドに依頼したんだ」

俺達が行き着いた真実に、ヨルコさん達は信じられない……いや、信じたくない、嘘だと言つて欲しいとでも言いたげな表情を俺達へと向けて来る。気持ちは分からなくもない。仲の良かつた筈の夫婦が相手を殺してしまふなど、とてもではないが信じられないだろう。……だがしかし残念な事に、ほぼ間違いなくそれが真実なのだ。

「そんな……あの人があの人が真犯人だつて言うんなら、何で私達の計画に協力してくれたんですか？」

「あんた達は、グリムロックに計画を全部説明したんだろう？」

ヨルコさんからの問い合わせに、答えではなく問い合わせを投げ返したキリト。唐突な質問に一瞬戸惑つた様子を見せてから、ヨルコさんは小さく頷く。それを確認すると、キリトは説明の続きを語った。

「ならそれを利用して、今度こそ『指輪事件』を永久に闇に葬る事も可能だ。シユミットにヨルコさんにカインズさん……その三人が集まる機会を狙つて……纏めて消してしまえばいい」

「…………そうか。だから……だから此処に、殺人ギルドの連中が……」

「恐らく、グリセルダさん殺害を依頼した時から、パイプが有つたんだろう」

「…………そんな…………」

余程のショックからか、ヨルコさんは地面に崩れ落ちそうになるが、カインズさんがそれを支えた。しかし、そのカインズさんの表情も、戸惑いの色が浮かんでいるのが見受けられる。

「居たわよ」

そんな重苦しい雰囲気の中、この十字の丘に新たな来訪者が現れた。

全員が振り向いた先に居たのは、別行動を取つて貰つていたアスナとシノンの二人。その足下には、とある理由からアスナに預けておいた、俺の使い魔オオカミであるリトとスーナが。

そして、それぞれの得物を手にした彼女らに追い立てられる様にして歩いて来た、一人の男性プレイヤー。かなりの長身であり、裾の長い、ゆつたりとした前合わせの革製の服を着込んでいる。頭にはつばの広い帽子を被つており、その陰に沈んでいる

目元は黒いレンズの丸眼鏡によつて覆われている。実は、アスナ達にはこの男を探して貰つていたのだ。そしてその助けになる様にと、鼻が利クリトとスーナをアスナに預けておいたという訳だ。

「詳しい事は、本人に直接聞こう」

男は俺達から三メートルほど離れた位置で立ち止まると、先ずシユミットさんを、次にヨルコさんとカインズさん、最後にちらりと苔生こけむした小さな墓標を見てから、徐に言葉を発した。

「やあ……、久しぶりだね、みんな」

低く落ち着いたその声に、数秒経つてからヨルコさんが応えた。

「グリムロック……さん。あなたは……あなたは、本当に……」

本当にグリセルダさんを殺して指輪を奪つたのか。そして事件を隠蔽する為に、自分達をも殺そうとしたのか。

音にはならない、されど誰の耳にもしつかりと届いたであろう、嘘であつて欲しいと切に願うヨルコさんの問いに、男——元『黄金林檎』のサブリーダー、鍛冶師グリムロックは直ぐには答えなかつた。……沈黙は肯定と見なすべきだろう。

「何でなの、グリムロック！　何でグリセルダさんを……奥さんを殺してまで、指輪を奪つてお金にする必要が有つたの!?」

「…………金？　金だつて？」

ヨルコさんの心からの悲痛な叫び声に、しかしグリムロックさんは掠れた声でくくく、と笑つた。

「金の為ではない。私は……私は、どうしても彼女を彼女を殺さなければ。彼女がまだ私の妻でいる間に」

まるでグリセルダさんが自分の元から離れて行つてしまふかの様な物言いをしたグリムロックさんは、一瞬だけ苔生した墓標へと視線を向けてから、独白を続けた。

「彼女は、現実世界でも私の妻だつた」

グリムロックさんの口から告げられた衝撃の事実に、俺達は皆凄まじい驚愕の念に襲われた。そして尚のこと疑問に思つた。現実世界でも奥さんである筈のグリセルダさんを、何故に殺したのかと。

グリセルダさんの独白は続く。

「一切の不安の無い、理想的な妻だつた。可愛らしく、従順で、ただ一度の夫婦喧嘩すら無かつた。……だが、共にこの世界に囚われた後……彼女は変わつてしまつた……」

グリムロックさんは帽子の下に隠れた表情を暗くし、低く息を吐いて言葉を続け

「強要されたデスゲームに怯え、怖れ、竦んだのは私だけだつた。彼女は現実世界に居た

時よりも、遙かに生き生きとし……充実した様子で……。私は認めざるを得なかつた。
私の愛した『ユウコ』は消えてしまつたのだと

…………。

「ならば…………ならばいっそ、合法的殺人が可能なこの世界に居る間にユウコを、永遠の思い出の中に封じてしまいたいと願つた私を……誰が責められるだろう……？」

…………理解……不能だ。グリムロツクさん…………いや、グリムロツクの戯言たわごとは、

あまりにも理解に苦しむものだ。

「…………そんな理由で、あんたは奥さんを殺したのか？」

「充分過ぎる理由だ。君達にもいずれ分かるよ、探偵君たち。愛情を手に入れ、それが失われようとした時にね」

だから…………だからこそ…………

「…………分かんねえ……分かんねえよ。分かりたくもねえよ、ンな気持ちッ！」

——だからこそ俺は、俺が抱く想いを、グリムロツクに抱く怒りを込めた、心の

底からの叫びをぶちまけた。

「グリムロック……あんた、何でグリセルダさんが……ユウコさんが変わったなんて思つたんだ？ 何であんたの知るユウコさんが消えちまつたなんて思いやがつたんだ？」

「……何？」

「何で、彼女が変わつてしまつたんじやなくて、新しい一面を見せたんだと思わなかつた！？ 何で、その一面も彼女の一部なんだつて思つて認めようとしなかつた！？」

「ツ……！？ き、君に、私の気持ちなんて——！」

「分つかんねえよ！ 俺はあんたじやねえんだから、あんたの気持ちなんて分かる訳がねえよ！ ただ一つ分かるのは、あんたがユウコさんを殺した事が間違いだつて事だ！」

グリムロックの抗議の言葉を怒鳴つて遮断しゃだんしてから、一旦落ち着いて此処で一つの質問を投げ掛ける。

「なあ、あんたはユウコさんにきちんと伝えたのか？」

「え……？」

「ユウコさんに、きちんと自分の気持ちを伝えたのか？ 自分がこのデスゲームに恐怖している事を。彼女が自分の元から離れてしまう事に怯えてる事を……あんたは言葉

にして伝えたのか?」

「ツ……！」

グリムロックの肩が小さく震えた。顔もだんだんと蒼白くなつて行く。……その様子から、質問にに対する答えは明白だ。

「伝えろよ! 殺そなんて考える前にちゃんと伝えろよ! 言葉にしろよ! 言葉にして伝えなくちゃ、お互いの気持ちなんて何も分かる訳がねえだろがツ!!」

「…………あ…………あ…………」

俺の想いの丈を込めた叫び声の直後、グリムロックは声にならない声を漏らし、がくり、と膝から崩れ落ちた。

「それに、グリムロックさん……あなたがグリセルダさんに抱いていたのは愛情じやない。あなたが抱いていたのは、ただの所有欲だわ」

「…………」

更に追い討ちを掛けるかの如く掛けられたアスナの言葉に、グリムロックは深く頭を垂れ、やがてポツリ、ポツリと言葉を呟いた。

「…………何処で……間違つてしまつたんだろうね…………。昔は……あんなにも愛していた筈なのに…………」

漸く己の間違いに気付いた様子のグリムロックの、眼鏡の奥に隠れた両目から

は、ポタリ、ポタリと涙が流れ落ちて行く。そんな彼の元へと、今まで黙つて話を聞いていたシユミットさん、カインズさんが歩み寄り、グリムロックの両隣に立ち並んだ。「カミヤさん、この男の遭遇は、私達に任せて貰えませんか?」

「……分かつた」

頷くと、二人は項垂れるグリムロックの腕を掴んで立ち上がらせる。立ち上がった次の瞬間、グリムロックは俯かせていた顔を上げて俺へと向けてると、言葉を口にして来た。

「…………もつと、もつと早くに君と会いたかったよ、カミヤ君……」

その言葉を最後にグリムロックは二人に連れて行かれ、ヨルコさんも、俺達へと深々と頭を下げるから、三人の後を追う様に十字の丘を去つて行つた。

四つのカーソルが完全に見えなくなるまで見送ると、背後から徐々に白い光が射し込んで来た。どうやら夜が明けた様だ。

「…………ねえ、みんな」

不意にアスナが問い合わせて來た。

「みんななら……仮に誰かと結婚した後になつて、相手の人の隠れた一面に気付いた時、みんなならどう思う

「……二日間、この手の質問が多い様な気がするなあ……などと、俺とは縁遠そう

な質問に少し現実逃避をしてから、真剣に考えを巡らせてみる。人生たかが十五、六年近くしか生きていらない四人で必死に考える中、先に答えたのはキリトだった。

「ラツキーだつた、つて思うかな」

「え？」

が、その答えはあまりにも予想外なものだつた。それ故に呆然とする俺達四人に、キリトは説明を加えた。

「だ……だつてさ、結婚するつて事は、それまで見えてた面はもう好きになつてる訳だろ？だから、その後に新しい面に気付いてそこも好きになれたら……に、二倍じやないか」

「ふ……アハハハ。何それ、変なの？」

「へ……変……」

知的さの感じられないキリトの説明に、ユウキはオブラートに包んではいないと思われる感想を述べる。

「うん。……でも、ボクはキリトのそういう考え方、良いと思うよ」

が、直ぐに優しく微笑んで感想を付け加えた。確かに、悪くない考え方だと俺も思う。

「そういう考え方も、アリなのかもな」

「そうだね」「そうね」

「まあ、俺としてはあんまりとやかく言うつもりは無いが…………あんまりまともじやないのは流石に御免こうむ蒙るかな」

「「確かに」」

直後に皆で一斉に声を上げて笑った。

数秒ほど笑った後、さてホームに帰ろうかと歩き出そうとしたところで、俺は不意にアスナに後ろから腕を掴まれた。何事かと思い振り向くと、そこには驚くべき光景が有った。

ねじくれた古樹の根元にぼつんと立つ、グリセルダさんの墓標の傍らに、薄い金色に輝き、半ば透き通る、一人の女性プレイヤーの姿が有った。

ほつそりとした身体を、最低限の金属鎧に包んでいる。腰にはやや細身の長剣。背中には盾。髪は短く、穏やかで美しい顔立ち。そして何よりも、その身に纏うのは、二件目の偽装殺人の際にカインズが纏っていた物と同じ、グリセルダさんのものだつたというローブ。詰まる所、俺達の目に映っている女性は……

「グリセルダ……さん」

……の幻、なのだろう。恐らくは。

〔〕

そのグリセルダさんだと思われる幻は、透き通るその顔に微笑みを浮かべて、俺達に何かを伝えんと口を開く。が、当然幻である為に音など出る筈もない。

「あつ……」

そして次の瞬間には、そこにはもう誰の姿も無かつた。

一時の不思議な現象に、暫くその場に立ち尽くしていた俺達だったが、やがてアスナがゆっくり口を開いた。

「グリセルダさん、何て言つてたんだろうね？」

「さあな」

アスナの問い掛けに俺は素っ気なく答え、今度こそホームへと帰るべく歩き出す。

「そら、二日も攻略を休んだんだ。早えところギルドに帰つて休息取つて、午後からだけでも攻略に参加すんぞ。目標は今週中にこの層を突破だ」

「あ、ちよつ、待つてよカミヤくん！」

「よ、夜通しで疲れてるんだぞ。せめてもう一日だけでも休ませてくれよ……」
「……午前中は休ませてくれるみたいだし、我慢しましょ、キリト」

「それよりも、ボクお腹空いたよ……」

後ろから追い掛けて来る四者の四様の声を聞き流しながら、俺は小さな丘を降

り、主街区を目指すのだった。

…………アスナにはああ言つたが、本当はグリセルダさんが俺達に何と言つていたのか、俺には何となくだが聞こえた様な気がした。勿論実際には声は出ていなかつたが、そんな様な気がしたのだ。

——ありがとう、と。

Interval：黒と絶剣 〈前編〉

AINKURAD中を騒がせた『圈内殺人』、及びそれに深く関連する『指輪事件』の解決より数日が過ぎた。

事件解決後、解決に尽力した『十六夜騎士団』の一部メンバーの証言を元に発行された新聞には、事件に使われたトリックと、実際には一人の犠牲者も出ていなかつた事が記されており、騒動を起こした人物及び理由に関しては、関係者の事情を考慮して詳細には記載されなかつた。

その関係者である『ヨルコ』らはというと、事件が解決したその日に、事件解決への協力に対する御礼と迷惑を掛けた事に対する謝罪をしに、十六夜騎士団のホームを訪れたのだという。

——閑話休題。

さて、その十六夜騎士団なのだが……実は今日この日、ある意味でのちよつとした騒動が起きようとしていた。

午前九時。

十六夜騎士団がギルドホームを置く、広大なフロアの大部分を常緑樹の森林と点在する湖に占められた、aignクラッド第二十二層。殆ど小さな村と言つてもいい《コラル》という名の主街区の転移門広場に、広場に生えた大きな木に凭れ掛かる一人のプレイヤーが居た。

そのプレイヤーの名は《キリト》。十六夜騎士団に所属する幹部格のプレイヤーの人であり、その出で立ちから他のプレイヤーからは《黒の剣士》などと呼ばれている。

しかし、今の彼の出で立ちは『黒の剣士』の所以である黒ずくめではあるが、普段のそれとは違っていた。何時もは羽織つてゐる黒のコートや背中の黒の片手剣の姿形は無く、シンプルな黒の長袖のシャツと黒の長ズボンだけという、どちらかと言えばオフの格好だ。

そう、今日の彼はオフなのだ。それも、他のプレイヤーから共に過ごそうと誘われてのだ。

詰まる所、今の彼は絶賛『待ち合わせ』の最中なのである。

「ごめんキリト、ちょっと準備に戸惑つて遅れちゃつた！」

暫く上層の天井に覆われた空を眺めながら待つていると、遅れて来た事を謝罪しながら彼の許へと駆け寄つて来る足音が聞こえて來た。どうやら待ち人来たりの様だ。

「いや、大して待つてないよ。其れよりユウ…キ…」

やつて來たその待ち人というのは、キリトと同じく十六夜騎士団に所属する幹部格のプレイヤーであり、若干幼いながらも『絶剣』という異名を持つ凄腕の片手剣使いの少女『ユウキ』だつた。

キリトは声が聞こえて來た方向へと振り向き、やつて來たユウキへと自身が抱いていた疑問を投げ掛けようとしたが、彼女の姿を視界に捕らえた途端に呆然としてしまい、それ以上言葉が続かなくなつてしまつた。

彼女の今の出で立ちは、上は白いシャツの上に桜色のカーディガンを羽織り、下はチエツク柄の赤いミニスカートで、脚には黒のニーサックスを履いている。加えて髪型も、何時もは腰の辺りまで伸ばしている濃い紫色の長い髪を後頭部で纏めてポニーテールにしており、前髪も何時ものリボンは外し、ヘアピンで額の両側にて留めている。その容姿から見受けられる雰囲気は、普段の可愛くも凜々しいそれとは違う、純粹に女の子らしくて可愛いものであり、詰まる所キリトは、普段とは違う彼女の姿に思わず見惚れてしまったのである。

「ど、どうしたの、キリト？ 急に黙り込んだやつたりして」

「あ……えーっと、ゴメン……何時もと格好が違うから、一瞬誰だか解らなくて。それにその……結構似合つて可愛かつたから、つい……」

「ツ！ え、えーっと、その……あ、ありがと……//／＼

其の事を言われた——其れも異性から——ユウキは、嬉しさと気恥ずかしさから頬を朱に染め、少々吃りながらもキリトへと礼を述べる。

一方のキリトは、ユウキの其の照れた表情に普段はあまり見る事の少ない女の子らしさを感じ、自身が口にした言葉に気恥ずかしさを感じた事も相俟つて、此方もまた頬を朱に染めている。

「…………」

「…………」

氣恥ずかしさ故に双方共に急に黙り込んでしまい、二人の間を沈黙が流れる。

しかし、その沈黙はそう長く続く事はなく、先に沈黙に耐え切れなくなつたユウキがキリトに問い合わせを投げ掛ける事によつて破られた。

「と、ところでさ……キリトはボクに何か聞きたかったんじゃないの？」

「あ、ああ……そう言えばそうだつた」

空気を変えてくれたユウキに心の中で感謝しつつ、キリトは先程尋ね損ねた疑問を口に出す。

「いやな、待ち合わせの場所の事だけさ……俺たち同じギルドなんだからさ、わざわざ此処にしなくとも、ギルドの玄関前とかで良かつたんじやないか、つて思つてさ。其れにそもそも、待ち合わせをする必要なんて有つたのか？」

「もう、キリトは分かつてないなあ……。ムードだよ、ムード。折角のデートなんだもん、少しばかりつぽい事したいんだよ♪」

キリトの意見も一理有るだろう。同じ場所に住んでいるのであれば、態々時間をずらして出発して待ち合わせなどせずとも、双方の準備が整つてから一緒に出発すれば良い様にも思えるだろう。……尤も、其れは『普通に』出掛ける場合の話だ。

そう、二人がこれから行くのはただのお出掛けではない。ユウキが言つた通り、二人

はこれからデートなのだ。

事の発端は数日前、指輪事件の口封じの為にと殺されそうになつたヨルコらの危機を救うべく、彼らの許へと駆け付けた際の事。キリトとユウキは移動の為にと利用した騎馬から落馬してしまい、起き上がるうとしたキリトが誤つてユウキの胸を触つてしまつたのだ。キリトはその謝罪の際に「何でも一つ言う事を聞く」という口約束をしており、ではと、後日ユウキはその権利を用いて「デートして欲しい」と要求して来たのである。

まさかデートを要求されるなどとは思つてもみなかつたキリトは大いに面喰らつたものの、言い出した手前拒否する事など出来る訳も無く、彼女の要求を承諾し、今に至つているという訳である。

「そ、そういうもんなんのか？」

「そういうもんだよ。今後の為にも、ちゃんと覚えといてね♪」

返しの言葉に「え？ 次が有るのか？」と戸惑うキリトの手を引き、ユウキは転移門の方へと歩き出す。

「じゃ、そろそろ行こつか。今日はどことん付き合つて貰うから、覚悟しといてよね♪」「お、おう。任せとけって」

そして、二人は転移門が放つ青いテレポート光に包まれて、上層へと飛んで行つたの

だつた。

「……行つたな」

「ああ、行つたねえ」

……その様子を、村に生えている木や茂みの裏、更には建物の陰など、至る所に隠れて窺う者たちが居た。

「しつかしよお、まっさかキリトの野郎とユウキの嬢ちゃんがデートとはなあ」

「ほんとビックリですよねえ。キリトさんってシノンさんと一緒に居る事がが多いから、てつきりシノンさんとそういう関係なのかと思つていたんですけどねえ」

「あー……其れ俺も思つた」

「いや、多分うちのメンバーの殆どがそう思つてる筈だよ…………ユウキちゃんも其の筈だと思うんだけど」

「マジで!? つー事は、ユウキちゃんつて結構怖いもの知らずなのか?」

「かもしぬないね。普段の行動からも、時折それっぽい節が見受けられるし」

「あー……言われてみると確かに……」

「あははは……なんか、妹がすみません……」

彼らは二人の事や、二人の周囲との関係性に關してよく知っているらしく、二人がデートをするという事に対しても、思い思いの言葉を口にする。

其れも其の筈……何故ならば彼らは、二人と同じく十六夜騎士団に所属している人々なのだから。

因みに、今この場に居る面子は、アスナやクライン、ケイタ、シリカ、シウネーらなどといったキリトやユウキと特に親交の深い者たちに加え、ユウキの双子の姉であるラン、更に数名の恋愛好きのメンバーとなっている。

尚、今この場に居るメンバーの中に、シノンの姿は無い。

彼氏彼女の関係が疑われる彼女に二人がデートをしている光景を見せては、キリトが危険な目に遭いかねないという懸念から、彼女には今回の事を伝えていないというのも理由なのだが、其れよりも、ここ数日のシノンには何処か少しキリトを避けている、キリトから少し距離を置いている様な気振りが見られるのだ。

其の切っ掛けは、『圈内殺人』の捜査中にあつた何かしらの出来事に有るのだろう、とカミヤは当たりを付けているが、心配して尋ねてみても「大丈夫。大した事じやないから」と濁されるのと、戦闘には特に支障を来たしていい事から、下手に干渉するべきではないのだろうと考え、今の所は執拗には触れない様にしている。

—— 閑話休題。

「其れにしても、キリトさんとユウキは何時の間にあの様な関係になつたんでしょうか？」

「さあ？ でもさあ、あの二人つて見た感じ仲は良いし、波長も結構合つてそうだから、そんなに意外つて訳でもないんじやないかなあ」

「うーん……言われてみるとどうかもしれないね」

「まあ、その辺の事は後で本人たちに直接聞いてみるとして、今は一人の後を追いかけましょ。メリダちゃん、二人の現在地は？」

「えーとですねー……四十二層の主街区をゆっくりと移動してますねー」

『サビア』の街があ。て事は、先ずはショッピングをして回るつて事なのかな

何はどうあれ、二人の後を追い掛ける気満々といった様子で、続々と物陰から出て来るメンバーたち。

「よーし、それじゃあみんな……そろそろ一人の後を追い掛けるわよ！ 念の為に、二人

の『索敵』の範囲に引っ掛からない様に、二人との距離にしつかり注意してね！」

「「了解！」」

転移門へと歩き出して行く、張り切る方向性を何処か間違えているであろう、アインクラツドの精銳剣士たち。

そんな彼らを見て、呆れの籠つた声を零す者が居た。

「…………お前ら、マジで何やつてんの」

何時も通りに攻略へと向かうべく、転移門を利用せんと近付いて行つたが、丁度二人が話し込んでいる最中であつたために、連れのメンバー共々隠れていた追い掛け隊の面々によつて強引に引き留められてしまつた、十六夜騎士団團長のカミヤである。

「何つて……キリトくんとユウキがデートするんだよ！ 何だか物凄く気になるから、二人の後をこつそり追いかけるんだよ！」

その呴きには、他のメンバーを先に行かせて、アスナが凄まじい気迫を纏つて返してきた。

「それは話聞いてたから分かつてるよ。俺が言いたいのはな、攻略を休んでまでする程の事なかつて事だよ。そりや、行動は自由だつて言つたけどさあ」

「そうだよ！ あの二人に限らず、他人の恋の行方は意外と気になるものなんだよ！ しかもそれが親しい間柄の人なのものとなれば、尚更だよ！ 追い掛けてでも見守りたい

「なんだよ！」

「そ、そ、うか……」

「カミヤくんは気にならないの？　あのコミュ症だったキリトくんと、普段はちょっとびり女の子らしさに欠けてるユウキが、二人でデートなんだよ！」

「…………生憎と、俺は他人の恋愛にはあんまり興味は無えよ。有つたとしても、後を追つ掛けてまで見守ろうとは思わねえよ」

何処か鬼気迫る雰囲気のアスナに圧倒され、若干引き気味となつてしまふカミヤだが、其れでも、アスナからの問い合わせにはしつかり自身の考え方を返答した。……尤も、その内容は大分冷淡なものではあるが。

「えー……カミヤくん、ちよつとつれなーい」

「考え方なんて人それぞれだろ」

「むうー……確かにそうかもしれないけどさあ……」

案の定、アスナはカミヤの冷淡な考え方には多少の不満を抱き、異議を唱えるが、カミヤはあまり取り合おうとはせず、むくれるアスナに向けて忠告の言葉を掛ける。

「まあ、俺の考え方なんてこの際どうでも良いだろ。……取り敢えず、お前らに一つ忠告

「…………なに？」

「…………なに？」

「あんまり過ぎて、馬に蹴られねえようにな」

「あ、うん、そうだね。気を付けまーす」

「其れともう一つ……今日の夕方六時に、三十三層主街区の転移門広場だからな。絶対に遅れるなよ?」

「うん、分かってるよー。それじゃあまた後でねー!」

そして、カミヤが何やらとても重要そうな用件を伝え終えると、話はお終いとばかりに、アスナは転移門を使って目的の層へと消えて行つたのだつた。

「何か用事ツスか?」

「んー? ちょっとな」

「若しかして、カミヤさんもアスナさんとデートですか?」

「ダアホオ、ちげーよ。つーか、何をどう考えたらそういう結果に行き着くんだよ?俺なんかがアイツと釣り合う訳がねえだろうが」

「本当にそうでしようか?」

「そうなの」

其の後ろ姿を何処か疲れた様子で見送ったカミヤ。そんな彼に、彼の本日のパートナーである両手剣使いの赤髪の巨漢『マース』と、長い赤髪を左側で結つたメイサーの少女『ラビ』が、先程アスナに伝えていた用件に対する詮索の言葉を掛ける。

余談だが、此の三人……『投擲』スキルと並んでサブウェポンとして扱われがちである『体術』スキルを、メインウェポンに劣らぬ頻度で多用しており、今では第二のメインウェポンと言つても差し支えない程に熟練度を鍛え、数々の敵を打ち倒していたりする。

「ホレ、んな事どうでも良いから、俺らもとつと攻略に行くぞ」

「ウツス

「……分かりました」

何はともあれ、カミヤは二人からの問い合わせに適当に応えを返してから、二人を伴つて漸く攻略へと出発した。

——こうして、攻略組四大ギルドの一角たる『十六夜騎士団』に於ける、
キリトとユウキによるデート
ちょっとした騒動の幕が上がつたのであった。

Interval：黒と絶剣 《中編》

街の西側から南東の方角へと緩く湾曲する様に流れ行く水路と、街の北東より流れて来て先のものに合流する水路——二本の水路によつて三つに区分された、アインクラッド第四十二層の主街区《サビア》。

規模は其れ程大きくはないものの、建ち並ぶ煉瓦造りの建物が醸し出す洋風な雰囲気が意外にも人気を集め、此処をホームタウンとする者や、観光目的で訪れる者たちで連日賑わっている。

そんなサビアの街の、各種の商店が犇めく商業エリアと、公園や広場などの有る観光エリアとが合わさつた北側を、《十六夜騎士団》の幹部格プレイヤーである《黒の剣士》キリトと、同じく《絶剣》ユウキが、建ち並ぶ商店へと視線を彷徨わせながら歩いて行く。

私服姿で、腕を組んで歩いて行く姿はまさにカツプルの其れであり、其の光景を見た道行く男性プレイヤーたちの多くは、キリトへと羨望の眼差しを向ける。

無理も無い。S A O に於ける男女の比率は、圧倒的に女性の方が少ない。其れに加えて、まだ少し幼いとはいえ、ユウキは充分に『美少女』に分類されるであろう可憐な少女だ。モテたい、彼女が欲しいと願う男性プレイヤーたちにしてみれば、数少ない——しかも美少女であるユウキと連れ歩いている男性プレイヤー^{キリト}が羨ましくない訳がないのだ。

「うわー……見て見て、キリト！　あそこのお店に飾つてある服、すっごく可愛いよ！
行つてみよ！」

「お、おい……そんなに引っ張るなって」

尤も、ユウキは自分たちが注目を集めている——キリトに至つてはあまり好意的ではない意味で——事など気付かず、気にする事もなく、只々自分たちが楽しむ事だけを考えて、目に映つた一軒の洋服店へとキリトの腕を引いて入つて行くのだった。

「んじや、あたしらも行つてくるね」

「うん。気を付けてね、ノリ、テツオさん」

「あいよ」

「了解」

……勿論の事、その後を追つて十六夜騎士団の《二人のデー^ス_トー^トを見守り隊》のメンバ——ノリとテツオの二人も入店するのであつた。

因みにだが、此の人選は《あまり目立たない》という基準の下に決まつたもの。容姿端麗で明るい髪色のアスナや、赤い髪にバンダナをしたクラインなどでは目立つのはほぼ確実であり、そうなれば、こつそりと二人に近付いて様子を窺う事などが不可能だからだ。

勿論の事、彼らは皆あまり目立たない様な、それでいて決して怪しまれない様な装いに変装してはいるが、念には念の為という事だろう。

兎にも角にも、キリトとユウキのデート……及び十六夜騎士団メンバーによる尾行が、本格的に幕を開けたのであつた。



……どうしてこうなつたんだ？

いや、ちゃんと解つてはいる。

これは、不可抗力とは言えユウキの、その……む、むむむ胸を触つてしまつた事への償い^{つなぐ}であると。

しかし……しかしだ。確かに「何でも一つ言う事を聞く」と言つたとはいえ、何がどうして其の内容が『デート』になるというのだろうか？ 言つた手前拒否する事など出来る訳もないから、こうして承諾はしたが、未だに納得は出来てはいない。

俺としては、『スイーツを奢つて^お欲しい』とか『クエストに付き合つて欲しい』とか、そういう感じのを予想していたんだが……。

「じゃーん！ 見て見てキリトー！」

なんて事を考えていたら、俺とユウキの間を隔てていたカーテンを勢い良く開けて、出発した時とは全く異なる格好をしたユウキが姿を現した。

と言うのも、俺たち——と言うかユウキは今、とある洋服店にて絶賛店の商品の試着の真っ最中なのだ。

因みに今のユウキの格好は、白地に淡い水色の水玉模様が入った、ノースリーブのワンピースに、足下は素足に水色のビーチサンダル。纏めていた髪も何時もの様に下ろし、其処へ麦わら帽子を被つている。彼女の肌の白さも相俟つて清楚な雰囲気が有り、それでいて、ユウキの活発なイメージを決して損なつてはいない。そして、何よりも可愛い。

「どうかな？ 似合つてる？」

「ああ。似合つてとても可愛いよ」

「本当!？」

「ああ」

ユウキの問い合わせに、少し恥ずかしいながらも正直な感想を述べれば、彼女は「えへー！ 良かつたー！」と言つて、実に嬉しそうな笑顔を浮かべる。

そして直後に、「それじゃあ次のに着替えるねー」と言つてカーテンを閉め、再度試着

室の中へと消えて行つた。

待ち合わせの時といい、今といい、在り来たりな感想ではあつたが、其れでもユウキが喜んでくれたのならば何よりだ。

……いや、極端な話……感想を言えただけまだマシなのかもしれない。最悪、何を言つて良いのか分からず、躊躇^{ためら}つているうちに結局言う機会を逃してしまい、機嫌を取るどころか、逆に更に悪化させてしまつた場合だつて有り得ただろう。

そうならずには済んだのは、間違い無くシノン——詩乃のお陰だろう。アイツが長年ずっと俺の隣に居てくれたお陰で、女の子との接し方をある程度学ぶ事が出来たのだから。

……そのシノンはというと、ここ最近、何だか様子がおかしい。

具体的な事を言うと、何だか俺の事を避けている様な気がする。前は一緒に出掛ける事の多かつた攻略やクエストも、最近は何時の間にか他の奴らと出掛けているみたいだし、彼女と会話をする機会も少し減つた気がする。話しかければちゃんと應えてはくれるけど、其れでもあまり長くは続かなかつたり、何処か落ち着かない様子だつたり、変に誤魔化そうとするなど、まともに会話出来ていない様な気がする。

カミヤも心配して何度か直接尋ねてみてくれたらしが、「大丈夫」の一点張りで何も分からなかつたという。

カミヤ曰く、「多分、今は何を言つても答えてはくれないだろから、暫くは下手に干渉せずに様子を見よう」との事だが、やはり気になるし、心配にもなる。俺が関わっているとなれば尚更にだ。

「…………ト、…………え…………リト…………」

何か彼女を怒らせる様な事をしてしまったのだろうか？ 嫌われる様な事をしてしまったのだろうか？

「ねえ、キリトつてばあ！」

「へ？ おわっ!?」

突然掛けられた大きな声に思考を遮られ、俺の意識は現実に呼び戻された。かと思えば、至近距離に此方を見上げているユウキの顔が有り、驚いた俺は思わず間抜けな声を上げてしまつた。

そんな俺を心配するかの様に、ユウキは優しい声音で話し掛けて來た。

「驚かせてごめんね……。けど、何回呼んでもキリト返事してくれないんだもん」「わ、悪い……。ちょっと考え事をしてたもんだから」

「シノンの事を考えていた」とは言わない。俺とユウキは今一応デートをしているのであって、心配する意味合いとはいえ、デート中に他の女の事を考えているというのは、あまり褒められた事ではないからだ。

「ふーん……。まあいいや。其れよりさ、此の服どうかな？ 似合つてるかな？」
 ユウキの方も深く追求して来る様な事は無く、話題を変えて、新しく着替えた格好に
 対する感想を求めて来た。

今度の格好は先程のものとは打つて変わり、上は白のTシャツに、丈たけの短い半袖の黒
 のジャケット、下は膝下辺りまでの長さの青のジーンズを履き、足下はスニーカーと、ユ
 ウキの活発さを前面に出した様なコーディネートとなつてゐる。其れに合わせて髪型
 も項の辺りで一本結びにし、其処にグレーの野球帽を被つてゐる。

女の子らしさはマイナスかもしれないが、ユウキの性格的には寧ろこういったボ
 イッショウな格好の方が似合うかもしれない。

「おー！ なかなかカッコいいじゃないか！」
 「それって似合つてるつて事？」

「おう！ こう言つちやなんだけど、ユウキは無理に女の子らしい格好をするよりも、
 そつちの方がよっぽど似合つてるかもしれないな」

「あははは。そうかもしれないねー。うん、ボクもそう思う」

普通、女の子らしい格好よりもボイッシュな格好の方が似合つていると言われて喜
 ぶような女の子は殆ど居ないのだろうが、思つた事を素直に口に出した俺に対し、ユウ
 キは怒るでも呆れるでもなく、自然な笑顔で笑つてくれた。どうやら彼女の機嫌を損ね

はしなかつた様だ。

「それじゃあ次ねー」

「おう」

この後も、ユウキは何度も試着ショリーを繰り返し、その中から気に入つた物を何着か選んで購入——勿論、此れはユウキへの償いである為、代金は全額俺が支払つた——してから、俺たちは次へと向かうべく店を後にした。

余談だが、試着した洋服の中に、胸の上部が大きく開いたタートルネックが存在し、ユウキが其れを着て出て来た時には激しく動搖した。

確かに、何年か前にそういうのが流行つてたのは知つているが、何で其れがS A Oに存在してんのだよ!? 何で茅場はそんなモンを取り入れてんだよ!? お前は一体何がしたいんだよ!? 頭おかしいだろオ!? そしてユウキも何故に其れを選んだ!? 時期的に考えて少しづれてるだろ!?

それとハツキリ言わせて貰おう…………ユウキの控え目な胸では大分哀^{かな}しい事になつていて、正直あまり似合つていなかつたです……。



「…………。……イケるかしら？」

後日、こつそり撮影した二人のデート風景の写真を整理していた際に、ユウキが胸開きタートルネックを着ている写真を見たアスナが、自身の胸元を見ながらそう呟いていたそうな…………。

それからというもの、俺とユウキは色々な店を見て回り、所々で幾つかの商品を購入したりしてデートを楽しんだ。

追加の衣服に、アクセサリーや小物など、其処まで多くはないもののそれなりの量を購入したが、購入したアイテムはその場でアイテムストレージに収納する事が出来る為、現実世界の様に大量の荷物を持ちながら歩いて回るという様な心配はない。そういった点では仮想世界はとても便利であり、意外と助かる。

それはさておいといてだ。

「そろそろ昼時だけど、ユウキは腹の具合はどうだ？」

現在の時刻は正午を少し回ったところ。普段とは違つて戦闘や訓練激しい運動をしてはいないが、やはり生理現象だからだろう、そろそろ腹が減つて來た。

「そーだねー……うん、そろそろ空いて來たかも」

くうくうくうくうくうく。

俺の問い掛けにユウキが答えた直後、何とも可愛らしい音が俺の耳に聞こえて來た。

其れがユウキの腹の虫の音である事は、「あ、あははは……」と照れ笑いを浮かべながら、紅くなつた頬をかいているユウキを見て一目瞭然だつた。

本人は普段通りに振る舞おうとしている様だが、其の様子は普段と比べれば明らかにぎこちなく、其の所為もあつてか何と無く氣不味い。

「そ、そつか……。そんじや、どつか良さそうな感じの店に入つて昼飯にしようぜ？」

「え？ あ、うん、えーと、ね……実はさ、お昼ご飯の事ならボクに考えが有るんだ」

「お、そうなのか。何処か良い店でも知つてるのか？」

「えへへ、ナ、イシヨ！ それは着いてからのお楽しみだよ♪」

「お、おい……！」

だからと言つて、下手に茶化して機嫌を損ねられても不味いので、此処は何も聞かなかつたフリをし、話を先に進めて意識を逸らす方向で行く。

其れが功を奏したのか、ユウキは次第に落ち着きを取り戻していく。後はお互いで忘れてしまえば問題は解決だ。

其れはさて置き。

此方から振つた話題に、自分に案が有ると応えたユウキ。だが、彼女は其の内容を勿体ぶつて詳細には教えてくれない。

俺を驚かせたいとか、そういう何かが有るのは何と無く解る。だがしかし、解つてもやはり気になるものだ。

そんな訳で、詳細も聞かされずにモヤモヤとした気分のまま、ユウキに手を引かれて街を歩く事数分。

「着いたよ！」

連れて来られた先は、こじやれ小洒落た雰囲気のオープンカフェ……

…………とかではなく、街の東に位置する転移門広場。二本の水路の合流地点に面して造られたウッドデッキだ。

其処から見える、日の光が反射してきらきらと輝いている水路と、其の水路に沿つて煉瓦造りの建物が建ち並ぶ光景は、同じく水路が流れる第四層の主街区《ロービア》とはまた違つた趣が有る。

さて、そんな景色の良い場所で昼食にしようと言うユウキだが、生憎と周りに飲食店や宿屋の類いの建物は存在しない。となれば、残る可能性は一つ……、

「弁当か」

「そうだよー」

近くに有つた手頃なベンチに二人で腰掛けてからそう言うと、ユウキはストレージから小ぶりなバケットを取り出し、其の中から大きな紙包みを二つ取り出した。

其のうちの一つを受け取り、期待に胸を膨らませながら包み紙を剥がして見れば、先日アスナが作ってくれたモノとそつくりのバゲットサンドが、食欲をそそる香ばしい匂いと共に出て来た。

途端、其れまで感じていた空腹感を余計に刺激された俺は、一言「頂きます」と挨拶をしてからバゲットサンドへとかぶりついた。

「んー……美味しい！」

飲み込んだ瞬間、以前食べたモノとは少し違つた味わいが口の中一杯に広がり、其の美味さに素直な感想が口をついて出て來た。そして気付けば俺は、二口、三口と夢中になつてバゲットサンドを頬張つていた。

「えへっ、喜んで貰えて良かつたー。頑張つて作った甲斐かいが有つたよ」

「……へ？」

だが、ユウキが俺の感想に対し返した言葉を聞いた瞬間、俺は一瞬我が耳を疑い、思わず食事の手を止めてユウキの方へと振り向いた。

と言うのも、俺が覚えている限りでは、ユウキは『料理』スキルを持つていなかつた筈なのだ。対応するスキルを持つていなければ……持つていてもスキルの熟練度が低ければ、其れだけ成功率は低くなるものなのだ。

「……此れ、本当にユウキが作つたのか？　お前確かに『料理』スキルなんて持つてなかつた筈だろ」

「あ、そう言えばまだ言つてなかつたね。実はね、ボク最近『料理』スキルを取つたんだ」「マジで？」

「うん。……でも、ホントつい最近取つたばかりだからさ、まだまだ熟練度は低いんだ。現に此のバゲットサンドだつて、リーシャさんに手伝つて貰つてやつとなんだ」色々と合点がいった。

『料理』スキルを取つたというのならば簡単な調理くらいなら可能だろうし、『料理』スキルの熟練度がかなり高いという後方支援部隊長のリーシャ（カミヤが任命）が手伝つたというのならば、料理の成功率もぐんと上がるだろう。

「あ！　俺よりも遅れて来たのつて、若しかして……」

「うん。此れを作るのにちょっと手間取つちゃつたからなんだ。でも、其れでキリトに喜んで貰えたんだから、時間を掛けて作つた甲斐があつたよ」

「ああ。すつごく美味いぜ」

「えへへ。ありがとう、キリト」

其の後は、先程の様に夢中になつてガツガツと頬張り続けるのではなく、ユウキが頑張つて作つてくれたという事を噛み締めながら、ゆっくりと味わつて頂いた。

水路の水分を含んだ涼しい風が心地よく吹き抜ける、穏やかな昼時の一齣である。

Interval：黒と絶剣 《後編》 ↗太陽と月↖

お昼ご飯を食べ終えた後、ユウキとキリトくんは再び『サビア』の街の散策へと繰り出した。

色々なお店を見て回ったり、それぞれ違う味のアイスを買って食べさせ合いっこしたり、途中戦闘用のアイテムショップで議論を繰り広げたり、広場のベンチで休憩したりして時間を過ごしたりと、デートに誘ったユウキは勿論の事、キリトくんも実際に楽しそうな笑顔を浮かべながら、デートしていた。

其の様子を見ていたら、わたしもカミヤくんとあんな風に楽しくデートしたいなと思いい、其の光景を想像してみて思わずにやけてしまつた。

……その時、誰かに敵意の籠つた鋭い視線で睨まれた様な気がしたけど、多分気のせいよね……。

その話は置いといて
—— 閑話休題。

今現在、二人はサビアの街を後にして、AINクラッド四十七層の主街区である《フローリア》に来ている。

通称《フラワーガーデン》と呼ばれているこの層は、街だけじゃなくてフロア全体が無数の花々で溢れ返っていて、見た目とっても綺麗な場所だ。そういう訳なので、此処はデートスポットとしてとても人気があり、現に今も、花の間の小道を歩く人影の殆どが男女の二人連れだ。皆しつかりと手を繋いで、或いは腕を組んで楽しげに談笑しながら歩いている。

……その光景を見て、羨ましいと思つてしまつたわたしは悪くない筈だ。わたしも力ミヤくんと二人であんな風になりたいと思つてしまつたわたしは悪くない筈だ。

だつてだつて、大抵の女の子つていうのはそういつたシチュエーションにとつても憧れるもので、目の前で其れをやられたとあつては、自分だつてそういう事をしたいのにと羨ましく思つてしまうものだ。意中の人が居るとなれば尚更にだ。

ユウキとキリトくんのデートを見守るという目的が無ければ、直ぐにでもこの場から逃げ出したいところだ。

地獄

で、その肝心の二人はというと、他のカツプルで賑わう転移門広場から離れて、安全エリア内に有る人気の少ない丘の上へと来ている。

黄色からオレンジ色へと移り行く夕焼け空の下、沢山の花々が咲き誇る丘の上に並んで腰掛けている二人の様子は、何だか口マンチックな雰囲気だ。

……其れは良いんだけれど。

実は此処で一つ問題が有つて……丘の周りには花以外には何も無い所為で隠れられそうな場所が無くて、二人の其の様子を真近で見る事が出来ないのだ。仕方なく、二人から大分離れた所からこつそり様子を窺っているんだけど、距離が有る所為で二人の会話が全然聞き取れない。

これって……つまりアレなのかしら？　これ以上二人の邪魔になる様な真似はするな、という神様からの警告とかそういうった感じの。

ぐぬぬ……。折角良い感じの雰囲気だつていうのに、其れを近くで見聞き出来ないだなんて……。

神様のイジワル……。



アスナ達が神の計らい（？）に対して其々に思いを抱いている一方、ユウキ達はとい
うと――

「綺麗な景色だねー、キリト」

「ああ。夕日の光の影響もあって、より一層にな」

「だねー」

夕焼け空の下、ボクとキリトはフラワーガーデンの安全エリア内に有る丘の上で、並んで腰掛けて景色を眺めている。

フラワーガーデンは元からとつても綺麗な場所なんだけど、キリトの言う通り、夕日のお陰で其の景色は普段よりもっと綺麗に感じられる。何と言うか、その……魅力的

だ。

「……ねえ、キリト」

ん?
」

「何でボクがキリトをデートに誘つたのか……分かる?」

だからかな、そんな魅力的な光景に感化されちゃつたらしいボクは、何となくキリトに対してそんな質問をしてしまった。

「……え？ えつ？」

当然、急にそんな質問をされたら誰だつて困惑する訳で、キリトの表情は目を見開いたり顔を引き攣つたりで凄い事になつてゐる。

「え、えーと……そりやあ、その……アレだろ？」この間の償いとして、だろ？」

激しく動搖しながらも答えてくれたキリトだつたけど、其の表情は今度はどんどん赤くなつてゐる。

れちやつたんだよね……。

…………その、触り心地とかはどうだつたんだろ？ そりやあ、ボクの胸はアスナやシウネー、リーシャさんとの比べればまだ全然小さいから、揉み応えは無いに等しいのかも知れないけどさ。それでも女の子の胸なんだぞ。柔らかいんだぞ。それに、ボクはまだまだ成長途中だから、これからどんどん大きくなるかも知れないんだぞ。

それと、出来ればあんな形でじやなくて、もつとこうお
てから、霧囲気のある形でして欲しかったかなあ.....

「じ、実を言うと其れは只の切っ掛けで、根本的な理由じやあないんだよね……」

多分間違ひ無く真つ赤になつてゐるだろう顔をキリトに見られない様に逸らしながら、キリトへと答えを返す。

そう、キリトの言う償いは、あくまでキリトをデートに誘う為の切っ掛けだ。本当の事を言えば、ボクはもつと前からキリトと二人でデートしたいと思つていた。けど、いざ言おうと思つたら恥ずかしくなつたり、断られるのが怖かつたり、誘う事を躊躇つたりで中々言い出せないでいた。そんな時に巡つて来たのが今回のチャンスだ。

「き、切つ掛け……!? え、じゃあ、その根本的な理由ってのは何なんだ?」

「そ、それはね……」

そんな事なんて知らないキリトは再び困惑顔で、ボクがデートに誘った本当の理由を聞いて来た。

そ、それはつまり、キリトはボクの想いこたえを知りたいって事なんだよね! ボクが君をデートに誘つたのは、そういう想いが有つての事なんだからね!

だつたら言つてあげるよ! 教えてあげるよ! たとえそういう深い意味で聞いたんじやないんだとしても、聞いて来たんだからちゃんと聞いて貰うんだからね! ボクが君に抱いているこの想いこたえを!

「…………好きだから」

「え?」

「——キリトの事が、好きだからだよ。友達や仲間とかじやなくて、一人の男の子として

……。
……。
……。

う、うわああああああああああああああ！？

い、言つちやつた！ 遂に言つちやつたよ、ボク！ キリトの事が好きだつて言つ
ちやつたよ！ 友達や仲間としてじやなくて、一人の男の子としてキリトの事が好き
だつて言つちやつたよ！ キリトに面と向かつて言つちやつたよ！ 気持ちは物凄く
昂たかぶつてる筈なのに、物凄く落ち着いた声で好きだつて言つちやつたよ！

「…………え？」

うわああああああああ！ 恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい！ 物すつゞく恥ずか
しい！ 言つちやつたら何だか急に恥ずかしさが込み上げて來たよお～！ キリトに
胸を触られた事を思い出した時よりもっと恥ずかしいよおおおおおおおお！

「え、ええ？ ええええええええええええええ！」

そ、そりやあ急に告白なんかされたら驚くよね。ましてや仲間で、そんなに目立つた
素振りなんて見せなかつた相手からされたら余計にだよね。

「ちよ、ま、ユウキ……それ……マジで……？」

「…………うん。マジで……」

「…………」

「…………」

其処から暫く沈黙が続いた後、キリトの方から沈黙を破つてボクへと尋ねて來た。

因みに、お互に黙つている間に頭が冷えて、幾らか落ち着きを取り戻す事が出来た。

「……何時から、なんだ？」

「キリトの事を好きになつたのは、つて事だよね」

「ああ……」

ボクがキリトの事を好きになつた時、か……。

初めの頃は、デスゲーム開始直後にあの大々的な宣言をしたつて理由で注目していた
団長と一緒に居たつて事と、キリト自身が強かつたつて事で興味を持つていた。

直接話してみたら、思考が似てるつて事で気が合つて、其処から仲良くなつて、一緒に居ると面白くて楽しいと思う様になつた。

ボクらと団長達のギルドが合併してからは、キリトの色々な一面を知る様になつてそれまで以上に楽しいと思う様になつたし、まるで兄妹として一緒に過ごしているかの様に思う様になつた。

そして、ボクのキリトに対する気持ちが大きく変わつたのは、うん――

「キリトの事が気になる様になつたのは、五十層のボス攻略の時からだよ」

今から三ヶ月も前の年の始めの頃、五十層のボスという強敵との激闘の中でキリトへの想いを覚え始めた事を思い返しながら、ボクは其の時の事を語り始めた。



五十層のボスとの戦闘は、実に壯絶だった。

『ヴァージュラ・ザ・フィルスゴッド』という名前の中金属製の仏像の様なモンスターは、三つの顔に六本の腕という、まるで阿修羅みたいな姿をしていて、六本の腕にそれぞれ種類の異なる武器を持つて襲い掛かって来た。

しかも厄介な事に、ボスは一つの身体に三つもAIを積んでいて、三つの面がそれぞれ別々に動いていた。其れに加えて、三つの面は時々他の面を助ける様な動きまで見せた。

だから、事前の偵察で其の情報を知っていたボク達攻略組は三つのグループに分かれ、一つのグループにつき一つの面を相手する事になった。

それでも、左右で武器が違う所為でボスの動きに注意しなきやならなくて、更には其

処へ他の面からの横槍が時々来るもんだから、五十層のボス攻略はそれまで以上に集中力を必要とする事になった。

で、そんな風に激しく集中した状態で何十分と激しい戦闘を続けていれば、肉体的にも精神的にも疲労が溜まって行き、それによつて集中力も落ちてしまう。

そうなればどうなるか？

注意力が散漫になつて、それまではちゃんと見えていた攻撃にも気付けなくなつてしまふ。気付くのが遅れれば、それに対する反応だつて遅れてしまう。

戦場に於いて、その一瞬は命取りになつてしまふ。
詰まる所、ボクは他の面が入れて来た横槍に気付くのに遅れてしまい、反応出来ずに攻撃を喰らいそうになつたんだ。

それを助けてくれたのがキリトだつた。

同じグループだつたキリトがボクのピンチに気付いて駆け寄つて来てくれて、ボクを抱き寄せてボスの攻撃から守つてくれたんだ。

その後は、気を取り直して再びボスへと挑み、激しい戦闘の末に一人の犠牲者も出ず事無くボスを倒したんだ。



「……あの時のアレが切っ掛けなのか」

戦闘が終わつた直後は、助けてくれたキリトの事が妙に気になるだけで、それがどういった気持ちなのかは分からなかつた。

それからというもの、名前も知らないその気持ちは日に日に強くなつていつて、気が付けばキリトの事を必死で目で追つて、キリトの事ばかりを見て、キリトの事ばかりを考える様になつていた。

リーシャさんに相談して、その気持ちが『恋』だつて気付いたのは、それから随分経つてからだ。

恋を自覚してからは、キリトと一緒にいたい、キリトの傍にいたいという気持ちがあふれて来て、積極的にキリトと行動を共にする様になつた。前よりもキリトと一緒に居る事が多くなつた。

そしてキリトと一緒に居ると、前とは別の意味で楽しいと感じる様になつた。嬉し

いつて感じたりする様になつた。

「ピンチを救われたヒロインが助けてくれたヒーローに恋をしちやうなんて、単純で在り来たりな話だよね。……でも、ボクはそんな単純で在り来たりな恋をしちやつたんだ」

……だけど、ここ最近になつてそれだけじや物足りなくなつてしまつた。ボクだけがキリトの事を見るんじやなくて、キリトにもボクの事を見て欲しいと思う様になつた。

ダメだと思つて今までずつと我慢してたんだけど、もう気持ちを抑えられなくなつちやつた。

「ボクは……ヒロインを助けてくれたヒーローに恋をしちやつたんだよ」

だからこそ、ボクは我慢するのをやめて、ボクの想いをキリトへと打ち明けた。少しでもキリトにボクの事を意識して欲しいから。一秒でも多く、キリトにボクの事を見ていて欲しいから。

「ねえ……キリトはさ、ボクの事どう思つてる?」

「え? ええつと……」

そもそも、何でボクはキリトに想いを伝える事を躊躇つていたんだろうか? 何で我慢する必要が有つたんだろうか?

「えっと、その……ユウキは見た目は可愛いし、性格も明るくて、元氣で、それに優しくて……」

シノンとキリトはとつても仲が良いし、シノンがキリトの事を好きだつて事は、シンの態度で前から気付いてた。

其れだけで、ボクがキリトに告白するのを躊躇うには充分な理由だつた。
「何だか……『太陽』みたいだつて思つてる。一緒に居ると楽しいつて思うし、気持ちがあつたかくなる様に感じる」

「え、えへへへ。そ、そんな風に言われたら、何だか照れちゃうじやないかあ……」
だけど、何時まで経つても二人が付き合い始めたという話は聞こえて来なかつた。

ボクは充分なくらいに待つていた。その上で相手が何も行動を起こさないというのなら、ボクがキリトに想いを打ち明けたつて良い筈だ。

「なら、さ……」

ともかく、ボクはキリトにボクの想いを打ち明けた。此れでボクとシノンの関係は、キリトを巡る恋のライバルだ。

「——シノンの事はどう思つてるの？」

キリトが何で応えるのかは判らないけど、ボクは負けるつもりは無い。シノンに負けないくらい精一杯アピールして、きっとキリトの心をボクの方へと振り向かせてみせる

んだ。



「…………え？」

ユウキの突拍子な問い掛けに、俺は彼女の意図を理解出来ずに呆気にとられてしまった。反応が遅れてしまつた。

それも仕方の無い事だと思う。なんせ俺の事を異性として好きだと言い出したかと思えば、いきなり別の女の事をどう思つているのかと聞いて来るのだから。

「な、何で其処でシノンの名前が出て来るんだ？ 今は関係無いんじやないのか」

「良いから、応えて」

返された応えに納得はいかないし、やはり意図も理解出来ない。

だがしかし、此方を見つめるユウキの目は真剣そのもの。とても冗談とかそんなんで聴いてるつて感じじやない。それだけ、彼女にとつて先程の質問は重要だという事なんだろう。

ならばどうするか？

そんなの決まっている。眞面目な質問にはそれ相応の応えを返す。それが筋つてもんだ。

俺は早速、俺がシノンに對して抱いてる感情を真剣に思い浮かべ、其れを言葉にしてユウキへと伝える。

「そうだなあ……シノンはクールで、何處か素直じゃなくて、時々厳しい事も言うけど、だけど本当はとつても優しくて、面倒見が良くて、頼もしくて、そんで可愛くて……」

今此の場に本人が居ないからこそ、すらすらと口にする事が出来たであろう自分の言葉の数々を思い返しながら、俺は思う。

俺はさつきユウキの事を『太陽』だと例えた。同じ様に例えるとするならば、シノンはきっと其の反対の『月』だろう。

どちらも明るく照らしてくれる存在ではあるが、太陽と比べると其の強さは弱いかもしない。けど、太陽とは違つて其の光は優しく穏やかであり、夜の暗闇を照らしてくれる其の存在感は言い知れない安心感を感じてくれる。

何時だつてそうだつた。交通事故で大怪我を負つて入院していた時も、俺自身の出生の真実を知つた事で人との距離感が判らなくなつた時も、そして……此の『SAO』といふ死の牢獄に閉じ込められた時も、彼女は俺の傍に居て『不安』という名の暗闇を照

らし、支え助けてくれた。

「俺にとつてシノンは少し特別で、とても大切な……ッ!」

最後に俺にとつてシノンがどういった存在であるのかを伝えようとするが、其の途中で不意にある事に気付き、最後まで言い終える前に思わず口を噤んだ。

特別、大切……シノンに対してそんな感情を抱いているのは何故か?

彼女にはこれまで何度も助けられたから、というのも勿論あるだろうけど、きっと其れだけじゃ其処までの感情を抱く事は無いだろう。其れ以外の……或いは其れ以上の『何か』が有るからこそそういういつた感情が生まれて来る筈だ。

ならば其の『何か』とは何か? と聞かれれば、一つだけ心当たりが有る。

其れは——『好意』。

どうにも俺は、知らない内にシノンに対して好意を抱いていたらしい。

好きだからこそ特別だと感じるんだろうし、好きだからこそ大切な存在だと思うのだろう。

それに、好きだからこそ様子のおかしい彼女の事を必要以上に心配してしまってのだろう。ああ、自覚したら余計心配になつて來た。

「キリト……?」

するとそんな俺の顔を、心配そうな顔をしたユウキが覗き込んで來た。

まあ無理も無いだろう。喋っている途中で急に黙り込んだりしたら、誰だつて心配するに決まっているよな。

……さて、こりやあ一体どうしたものか……。

察しの良いユウキの事だから、恐らくはさつきの沈黙の間に俺に何かしらの変化が有った事には、もう気付いているかもしれない。

だとするならば、このまま黙っているというのは、心優しい彼女を騙す様で何だか心苦しい。それにユウキだって、自分の気持ちを押し殺してまで付き合つて貰つたつて嬉しい筈だ。俺がユウキの立場だとしたら、間違い無くそんなの嫌だと思うだろうから。

ならば、此処は素直に言つてしまふのが得策だろう。

「……ごめん、ユウキ」

「ううん、ちょっと心配したけど、そんなに気にしてないよ」

「いや、其れもあるけどさ、そうじやないんだ……」

そう決心した俺は居住まいを正し、視線を顔ごとユウキの方へと向けて、真っ直ぐ彼女を見詰める。

俺の其の様子から真剣な雰囲気を感じ取つたのだろう、彼女もまた居住まいを正し、其の表情を先程同様の真剣なものへと変えた。

其れを合図に、俺は重い口を開いた。

「ユウキ……俺さ、気付いちやつたんだ……」

「気付いた、つて……何を……？」

「えつと、其れは、その……」

だが、いざ言おうと思うと罪悪感に囚われて、言うのを躊躇わかれてしまう。

しかし、既に話の口火は切つてしまつてるので、最早後戻りなど出来ないだろう。ならばと、俺は今一度決心を固めて、再び重い口を開く。

「…………めんな、ユウキ。俺——シノンの事が好きみたいなんだ」

…………言つて、しまつた。自分の事を好きだと言つてくれた女の子の前で、他の女の子が好きだと、最低な事を言つてしまつた……。

そんなのを聞かされたユウキは、「そつか……」と言つて其の表情を見る見る曇らせて行く。そうさせてしまつた俺としては罪悪感が半端ねえよ……。

「け、けどッ！　俺は……ユウキの想いも大事にしたいって思つてる」

確かにシノンの事は気になる。けど、だからと言つてユウキの好意を無下にはしたくない。けど其れは決して、慰めなぐさとかそういうつた理由でじやない。ユウキが俺の事を好きだと言つてくれた事が、とても嬉しかつたからだ。

要するに俺は、優柔不斷で何方付かずの駄目な奴だ。

「今はまだ気持ちの整理が出来てないから、どつちか一人を選ぶ事は出来そうにない……。だから、俺に時間をくれないか？」

挙句、考える時間が欲しいなんていう、ある意味逃げる様な事を言つてしまつ始末だ。其れでも俺は、どちらの気持ちにも真剣に向き合いたい。遊び半分な事には絶対にしない。

「真剣に考えた上で、ちゃんとした答えを出したい。だから頼む！」
俺に……俺に考える時間をくれないか？」

「うん、良いよ」

「俺は優柔不断で、何方付かずな駄目な奴かもしけないけど、そんな俺でも良ければ少しだけ待つて…………つて、…………え？」

其の思いを込めて必死の説得を試みたが、其の結果は思いもよらないものとなつた。さて、俺の耳が確かならば、ユウキは今驚く程あつさりと此方の願いを聞き入れてしまわなかつただろうか……？

「ええつと……ユウキ……今、何て……？」

「マジだよ。もう、キリトは疑り深いなあ……」

どうやら俺の聞き間違いではなかつたらしい。

普通こういった大事な話はもう少し悩んだり焦らしたりしてから応えるものじやないのか、と突っ込みたくなつたが、其れでユウキの気分を害して折角の好意を撤回されても困るので、其れは心の内だけに留め、寛大で心優しい彼女に礼を言う。

「あ、ありがとな、ユウキ。……それと、ごめんな……」

「謝らなくとも良いよ。キリトの真剣な気持ちはちゃんと伝わつたから」
やはりユウキは、どんな事でも優しく受け容れ、包み込んでくれる『太陽』だ。

「けど、此れからは覚悟しといてよね？ シノンに負けない位うんとアピールして、絶対にキリトの心をボクの方に振り向かせてみせるんだから！」

「あはは……。お手柔らかに頼むよ」

——此の日を以つて、俺は恋愛感情というものを知り、同時に俺、シノン、ユウキによる三角関係が始まつたのであつた。

余談だが、此の後俺とユウキは暫し景色を堪能してから、雰囲気の良いN P C レストランで夕食にしたのだった。

407 Interval : 黒と絶剣《後編》～太陽と月～

Chapter. 23：『笑う棺桶』討伐作戦会議

ユウキとデートをして、恋愛感情というものを知つてから二週間近くが過ぎた。

あれからというもの、ユウキは宣言通りに俺に対して猛アピールして来る様になつた。具体的には、攻略やクエストと一緒に行こうと誘つて来たり、飯の時に隣に座つて来たり、夜に俺の部屋に押し掛けて来て一緒に寝たりだ。

いやあ、ユウキが初めて押し掛けて来て「一緒に寝よう」なんて言い出した時はマジで焦つたし、止む無く一緒に寝たら寝たで興奮してなかなか寝付けなくて大変だつた。

同じ境遇のカミヤの事を少しばかり羨ましいと思つた事も有るが、いざ自分もなつてみると意外と辛いもんだ。一年半近くもあれに耐えて来たのだと思うと、カミヤには脱帽するよ。

ああ、そう言えばかなり今更な話だけど、随分前からカミヤと一緒に寝るメンバーにアスナも加わったんだつけ。

初めはアスナフアンのギルメンから嫉妬の目を向けられてたみたいだけど、カミヤの

疲れ様を見たら、みんな掌てのひらを返して同情する様な目で見る様になつたつけなあ。
……色々と大変だなあ、力ミヤも。

—— 閑話休題。

俺の方も、シノンに對して根気良くアプローチをし続けてはいる。だがしかし、結果はあまり思わしくなく、相変わらず避けられたり会話が長く続かなかつたりのままだ。ただ、そんなシノンだが、最近俺とユウキが二人で仲良くしている所を見ると、何とも形容し難い顔をする様になつた。怒つている様な、羨ましそうな、悔しそうな、苦しそうな、哀しそうな、……けれど、何處かホツとしているかの様な、そんな複数の感情がごちゃ混ぜになつたかの様な複雑な表情を。

相談に乗つてくれた力ミヤからのアドバイスで、彼女が抱える事情に關しては追求したりせず、なるべく頻繁に、なるべく何時も通りに接する様に心掛けている。

因みに、シノンと接する時にはなるべく一人で行く様にとも言われた。特に、ユウキと一緒に行くのだけは極力避ける様にと念押しされた。……何でユウキと一緒にるのは

駄目なのか、全くもつて分からんままだ……。

—— 閑話休題。

そんなこんなで時間が経つた、本日夕方。

現在進行形で夕食の準備をしてくれている後方支援組を除く、俺達『十六夜騎士団』の全メンバーは、団長であるカミヤの召集の下ギルドホームの大食堂へと集まっている。

今朝の報告によれば、何でもとても重要な話が有るとの事で、その証拠に当のカミヤはとても厳かな雰囲気を纏つて佇んでいた。

「それじゃあ、今夕食を作つてくれているメンバー以外全員集まつたみたいなので、今から重要な報告をしたいと思う」

メンバー全員の確認が終わつた様で、それまでずっと静かだったカミヤが漸く口を開いた。

重要な報告との事なので、それまでギルドメンバーの話し声で溢れていた大食堂は一斉に静まり返り、たちまち忽ち話を聞く姿勢となる。

「これは、他の四大ギルドと協議した結果なんだが……」

『攻略組四大ギルド』の名前が出た事で、今からカミヤが話す内容は余程重要なものだ
という事を理解し、気持ちをより一層真剣なものとする。だが――

「――今夜、四大ギルド合同で『笑う棺桶』(ラフイン・コフィン)の討伐を行う事になった」
……心構えは出来ていたにも関わらず、報告された内容には大きな衝撃を受けざるを得なかつた。



話は遡る事十日前——キリトとユウキがデートをした日の夕刻の事。

全体的に和の雰囲気が漂うアインクラッド第三十三層、其の主街区『ミヅチ』の一
角

に有るとある木造平屋建ての食事処に、彼らは居た。

攻略組四大ギルドの一 角である《アインクラツド解放軍》のリーダーであるデイアベルと、副リーダーであるキバオウ。

同じく《聖竜連合》のリーダーであるドレアに、副リーダーである《フリードリヒ》。《血盟騎士団》の団長・ヒースクリフに、副団長のレンド。

そして、《十六夜騎士団》の団長にして、今回の食事会の主催者であるカミヤと、副団長として付き添つたアスナ、加えてカミヤの使い魔オオカミであるリトとスーナ。

各ギルドの団長、副団長 $+ \alpha$ という豪華な面子が、畳たたみと襖ふすまに囲まれた和室にて、何とか和風な料理が並ぶテーブルを囲み座つていた。

「皆さん、本日は自分の呼び掛けに集まつて頂き、ありがとうございます。とりあえず重苦しい話は後にして、先ずは目の前の食事を楽しみましょう。それでは僭越せんえつながら、乾杯」

「乾杯」

集まつた中ではアスナの次に年少ではあるが、今回の主催者であるという事からカミヤが乾杯の音頭を取り、其れを皮切りに楽しい食事会が始まる。

食事をしながら個人的なものからギルドに於ける近況を話し合つたり、各々のギルドがどの様な規則を設けているのか、どの様にすればより良くなるかなどと意見交換をし

たり、時には他愛の無い話をしたりと、各々が交流を深め合つた。

その中でも特に話題となつたのが、アスナが作ったオリジナル調味料に関してだ。例に漏れず、此のN.P.C.の店の料理の味付けも今一つ物足りなさを感じさせるものだつた。そこでアスナは持つて来た試作品の調味料を使ってみようと出したところ、『十六夜騎士団』以外の全員が其れに興味を持ち、皆試しに其れを使ってみると。結果は大絶賛。現実世界のものに似ている其の味に全員が衝撃を受け、歓喜の涙を流した。普段はあまり感情を表に出さず、常に冷静な表情を浮かべているヒースクリフまでもがだ。

そんな美味しい味を知つてしまつては、また食べたくなつてしまふのが人間の性といふもの。彼らはアスナに對して調味料のレシピを求め、アスナも快くこれまで作った調味料のレシピを教えた。中でも、偶に料理をする事が有るというレンドとフリードは、アスナの話を熱心に聞いていた。

更にアスナは、新しい調味料が出来る度に、情報屋を通じて其のレシピを公開する事を彼らに約束するのだつた。

——そしてその約束が、後にアインクラッド中に革命を起す事になるのだつた。

「さてカミヤ君……今回君が我々を呼んだのは、我々に話したい事が有るからとの事だが、そろそろ聞かせて貰えるかな?」

「ええ。では、お話をさせて頂きます」
さておき。

食事会も大分盛り上がりがつて来た所で、ヒースクリフがカミヤに今回の議題を話す様にと催促をする。それに対してもカミヤも頃合いだらうと判断して頷くと、姿勢を正してから

「今回お話ししたいのは、殺人ギルド 『笑う棺桶』 の事についてです」

『笑う棺桶』——その名前がカミヤの口から出て来た瞬間、部屋の空気が忽ち一変した。それまでの和気藹々とした雰囲気から、緊張感の張り詰めた重苦しいものへと。

そうなるのも当然の事。何せ相手は、ゲームの中での死が現実世界での死をも意味する異常極まりないこの状況下に於いて、何の躊躇いも無く他のプレイヤーの命を奪い続ける危険で凶悪な、厳重な警戒が必要な殺人鬼集団なのだ。

そんな彼らに関する話題ともなれば、これから行われる話し合いがいかに重要であるのかを理解する事が出来るだろう。少なくとも、ふざけた態度で取り組んで良いもので

はない」と解るくらいには。

「皆さん既にご存知かとは思いますが、先日の『圈内殺人』の際、事件の捜査に当たつていた俺とアスナを含む数名のメンバーは偶然にも『笑う棺桶』の犯行現場に遭遇しました。幸いにも上手く不意を衝いて犯行の妨害、及び彼らを退ける事に成功しました。また、その際に幹部である『ジョニー・ブラック』と『赤目のザザ』の二名の捕獲に成功し、『聖竜連合』の協力の下彼らを投獄する事が出来ました」

実の所、カミヤが行つた報告の内容は既に圈内殺人の解決の知らせと共にアインクラッド中に報道されており、その知らせは犯罪者や殺人者オレンジレッドプレイヤーを除く多くのプレイヤー達に大きな喜びと安心を与えた。

何せ、『笑う棺桶』の強さは攻略組には届かないまでも、中層の上位並と中々に脅威であり、幹部に至つては攻略組に匹敵する程のものだと推測されているのだ。その幹部二人を捕まえたという事は、つまりは彼らの戦力を大きく削れたという事であり、その分だけ彼らによる脅威が減った——その分だけアインクラッドが安全で平和になつたという事なのだから。

当然、今回の会に参列しているカミヤ達もまたこの吉報を喜んでおり、その証拠に張り詰めていた場の空気が僅かにだが緩んだ。

「さて、此処からが本題となります」

しかし、カミヤが口にした『本題』という言葉に緩んだ空気が再び引き締まり、全員が真剣な眼差しでカミヤの次の言葉を待つ。

これから話す内容が内容である為に、カミヤは自身に集中する視線に気後れする事無く言葉を続ける。

「自分が思うに、二人を失つた今の彼らの戦力は大幅に低下しているものだと考えられます。ですので――」

必要な前置きを言い終えたカミヤは、いよいよ今回の議題について打ち明けた。

「――彼らが新たに戦力を整えてしまう前に、直ぐにでも此方から打つて出るべきだと考えています」

圈内殺人が解決してから数日の間、カミヤは降つて湧いた折角のチャンスをどうすべきか、一人で真剣に考えていた。

勿論、今回の案件は一人で何とか出来るものではなく、他のプレイヤーの協力が必要な事くらい重々承知していた。だが、協力を求めるにしても、自分の意見をはつきりさ

せておかなければ話し合いなど出来る筈もないと考えた彼は、先ずは自分はどうしたいのかを考える事にしたのだ。

「今この機を逃して彼らの戦力回復を許してしまえば、彼らを討ち取る事は難しくなり、最悪攻略組からも犠牲者を出してしまう事になりかねません」

「そうなる前に、弱っている今の内に奴らを討つておこうという事か。成る程、とても理に適っている話だな」

「そして考え抜いた末にカミヤが出した答えに対し、最初に賛同的な意見を返したのは、染色アイテムで緑色に染めたのであろう長髪の男性プレイヤー、『聖竜連合』の副リーダーである『フリードリヒ』だつた。

「だな。攻略組から犠牲者が出れば、その分攻略に遅れが生じる事になる」

「攻略組の被害も勿論ですが、中層及び低層プレイヤーへの被害も見逃せませんよ。いくら幹部一人を捕まえて戦力を大きく削つたとはいえ、彼らの強さは未だに中層のプレイヤーの手に負えるものではありませんから」

「何にしても、彼らの討伐は必須、という訳だね」

そのフリードリヒが自身のギルドの団長であるドレアへと伺いの視線を向ければ、ドレアは頷いて賛同的な意を示し、レンドとディアベルもそれに続く。口にこそ出さないがアスナとキバオウも賛成の様で、それぞれに頷いて見せる。

そして残りは、頷く素振りも見せずに黙つたままのヒースクリフのみ。

「団長はどの様にお考えですか？」

「ふむ……私からは特に意見は無い。討伐を行うというのであれば団員を派遣しよう。レンド君、後の事は君に任せよ」

「分かりました」

「ちよ、何やジブン、その非イ協力的な態度は!? 部下にだけ戦わせて、ジブンは何もせえへんちゅーんか!」

「まあまあキバオウさん、落ち着いて」

「せやけどディアベルはん……」

レンドがヒースクリフへと伺いを立てるが、しかし返つて来た応えはキバオウの言う通りあまり協力的とは言えないものであつた。

カミヤもヒースクリフの態度には釈然としない気分だが、それでも兵を出してくれるだけまだマシかと考える事にし、不服そうなキバオウの言葉を遮つて話を進める。
「キバオウさん……お気持ちは分かりますが、先に話を進めましょう」

「お、おう。スマンな……」

「いえ。……では、そろそろ採決を行いたいと思います。『笑う棺桶』^(ラフイン・コフィン)の討伐に賛成だという方は挙手をお願い致します」

結果は、ヒースクリフ以外の七人が手を挙げた事により、賛成多数で可決となつた。

念の為に反対意見も伺うが、ヒースクリフは今度も手を挙げる事無く傍観の姿勢を貫き、その態度が再度キバオウを苛立たせる事となつた。他の者も怒りこそしないがそれに呆れており、カミヤの場合は、其処まで興味が無いのかよ、とヒースクリフにジト目を向けるのであつた。

「……では、賛成多数により討伐作戦を決行致します。万が一奴らのスパイが紛れ込んでいた時の事も考えて、メンバーの選抜や情報のやり取りには充分な注意をお願いします」

さておき。

カミヤは気持ちを切り替え、討伐作戦の決行とそれに当たつての注意事項を伝える。

それに対してもう一つ質問がある。「一つ良いだろうか?」という言葉と共にフリードリヒが挙手して発言の許可を求める。何かと尋ねれば、作戦に大きく関わる重大な疑問が返つて来た。

「奴らのアジトの場所や構成人数などの把握は出来ているのだろうか? 特にアジトに関しては、君も知っていると思うが、以前からずっと探し続いているにも関わらず一向に見付けられていないのだぞ」

フリードリヒの疑問は尤もであり、幾ら意気込んだところで、相手の居場所が判らな

ければ攻め込む事など出来る筈もなく、ただ空回りに終わるだけだ。

しかも、幾ら探し続けても一向に見付けられていないとなれば、その懸念は大きくなるばかりだ。

「それに関しては未だに調査中です。一応ある程度の見当を付けてみましたので、上手く行けば早くに見付けられるかもしれません」

だかしかし、カミヤは難題だと思われていた敵アジトの問題をあっさりと解決するかの様な発言をしてみせた。

当然これには一同驚き、アスナはそんなカミヤに称賛の目を向ける。……ただ一人、ヒースクリフだけは興味は無いと言わんばかりに無表情のままであるが。

「凄いよカミヤ君！ よく六十も有る階層の中から奴らのアジトの場所を絞り込めたね」

「あくまで予想だ。それに、それでもまだ候補は多い……」

「いや、だとしても凄いと思うよ。俺なんて未だに全然予想も付かないんだから。それと、候補が多くて絞り込めないというならば、俺達の方でもそれとなく調査してみるよ」

「ウチも協力するぜ。お前らには、シユミット家族を助けて貰つた借りが有るからな」

「勿論僕達も協力させて貰うよ。構いませんよね？」 団長」

「構わないよ。好きにしたまえ」

アスナからの称賛の言葉を受けたカミヤだが、当の本人は大した事はしていないと、自分の推理は充分ではないと謙遜を重ねる。

しかし、その謙遜を否定するかの如くディアベルがすかさずフオローを入れ、次いで捜査の協力を申し出る。更にはそこへ報恩を望むドレアとヒースクリフから代理を任せられたレンドが加わり、同意の意思を示す。

「そういう訳だから、奴らのアジトが大凡どの辺りに有ると考えているのか、カミヤ君の予想を聞かせて貰つても構わないかな？」

「……アルゴさんにも言いましたけど、あくまで予想ですからね」

「大丈夫だよ。予想っていうのは、合つて居るかどうか分からぬのが普通なんだから。もし違つていたとしても、別の場所を探せば良いだけの話さ」

「……分かりました」

それに対してもカミヤは自身の推理が予想の域である事を強く念押しした上で、順を追つて敵アジトの大まかな場所について話し始める。

「普通に考えた場合、誰にも見付からない様に隠れようとするならば、人があまり立ち寄らない様な場所や、探す相手の意識が行き辛い場所を選ぶのがセオリーでしよう。

もし彼らがセオリー通りに隠れていたとした場合、彼らが最も警戒しているであろう俺達攻略組の意識が行き辛い場所となると、恐らくは攻略の為に忘れがちになる下層で

しよう。下層ならばモンスターのレベルもそこまで高くはないので、圏外のみでの活動を強いられる彼らでも苦にはならない筈です。

そして、これまでの調査結果を踏まえて考えるに、彼らは大型家屋などではなくダンジョン——それも迷宮区ではなく、厄介であつたり目立たないなどの理由からあまり人が寄り付かない様なフィールドダンジョンに隠れているのではと考えています」

予想だと言う割には大分理に適つているカミヤの説明に納得する一同。

そんな中、真っ先に説明の一部に疑問を抱いたドレアは、それに対する説明を求めてカミヤへと声を掛けた。

「成る程、ダンジョンってのは盲点だつたぜ。……だがよ、何でタワーじゃねえと思うんだ？」

「下層とはいえ、迷宮区はレベルアップや移動などの為に人の通りが少なからず有ります。それと、下層で活動しているメンバーからの報告を聞く限り、それらしい気配は無いとの事なので」

「そつか、下層に行つてるメンバーにも報告をする様に言つてるのは、この為だつたんだね」

「今回の事に限つての事でも無いけどな。兎に角そういう事です」

「成る程な。理解したぜ」

迷宮区タワーの可能性を否定する理由を問うドレアに対し、カミヤは理屈と事実の二つを根拠に答えを返す。

その返答に対して更なる質疑の声は上がらず、ドレアを含む一同が納得の表情を浮かべているのを見て、カミヤは説明の締めに掛かる。

「そこから更に絞り込むには判断材料が無いので、残念ながら推測出来るのはそこまでです」

「いや、ここまで絞り込めただけでも充分だよ。とても助かっているよ、カミヤ君」「そう言って頂けると助かります」

下層のフィールドダンジョンという大雑把な推測に終わりはしたが、誰一人としてその事に文句を言うものは居ない。

逆に労いの言葉を掛けられてホツとしたところで、カミヤは敵アジトに関する話題を切り上げて、その他に質疑は無いかと問い合わせる。

すると、今度はレンドが手を挙げた。

曰く「ソロプレイヤーや他の攻略組ギルドへの協力要請はどうするのか」との事だが、此れに対してカミヤは情報漏洩ろうえいの可能性を危惧して、表立つて有志は募らないと返答。個別に勧誘するのだとしても、余程信頼の置ける者のみにして欲しいとも付け加えた。「では、討伐作戦の話し合いは以上とします。この後はまたご自由にお楽しみ下さい」

それ以外に質疑の声は上がらなかつた為、それにて作戦会議は終了。

その後は一転して軽く宴会ムードとなり、飲み比べをしたり、談笑したり、（気分的に）酔つて他の者に絡むなどして、皆それぞれに盛り上がり楽しむのであつた。



それから約二週間、情報屋や各ギルドで調査を行つた結果、数日前に漸く敵アジトの場所を突き止める事に成功。

手に入れた情報を基に各ギルドの代表者の間で遣り取りが行われ、ついに今日、その作戦会議にて決定した内容がギルドメンバーへと報告される事となつたのである。

察しの通り、カミヤはギルドメンバー全員に討伐作戦、及び方が一の際の後始末への参加を認めているのだ。

メンバーの選抜は充分に注意して行うのではなかつたのか、と思いたくなるだらうが、カミヤは自身のギルドにスパイが紛れ込んで居る可能性を殆ど疑つてはいない。

勿論それは堅実な根拠が有つての事であり、その根拠というものは、情報屋に頼んで随

時更新して貰つてはいるオレンジプレイヤーのリストを以つて行われる入団時の厳重なチェックである。入団希望者のプレイヤー名は勿論の事、そのプレイヤーの交流関係を表すフレンドリストまでをも確認し、該当する名前が無いかどうかを調べるので。

幾ら『来る者拒まず』の精神とはいえど、流石に犯罪者まで受け容れようという寛大な心までは持ち合わせてはいらないのだ。

「作戦内容は以上だ。何か質問が有る人は居るか？」

兎にも角にもそんな訳で、信用しているギルドメンバーへと作戦内容を伝えると、次いで質疑の有無を問い合わせる。

しかし、ギルドメンバーの多くはいきなりの衝撃的な報告に未だに驚愕や困惑の念が冷めず、何を問うべきなのかを考えられる程の充分な余裕までは持ち合わせていない。

「なら、私から一つ良いかしら」

多くのギルドメンバーが未だにまごつきざわつく中、凜とした声で以つてその空気を破り立ち上がったのはシノンだった。

「襲撃するのは良いけど、何で夜に仕掛けるの？ 普通だつたら敵の警戒のそんなに厚くない昼間にやるものなんじやないの」

相変わらずの鋭い指摘ではあるが、しかしカミヤにとつてその質問は来ると予想していたもの。故にカミヤは焦る事無く、予め用意しておいた答えを口にする。

「恐らくは奴らもそう考へてゐる事だろうな。夜の活動を控えてる眞面目ちやんな俺達攻略組が、それもわざわざ警戒の厚い夜中に攻めて来る訳が無いって。……だからこそ、奴らの裏をかいて夜に仕掛けてやるのさ。攻めて来る訳が無いという僅かな気の緩みを突いてな」

敵の気の緩みを狙うというカミヤの説明に、質問したシノンを含むギルドメンバーの多くが納得の表情を浮かべる。

因みにだが、ギルドで唯一討伐作戦の存在を知らされていたアスナは、他のギルドとの作戦の遣り取りの際に何度も意見を求められていた為、襲撃を夜に行う理由は事前に知つていたりする。

「それじゃあ、作戦に参加する意思の有る人は、この後十一時半までに『コラル』の転移門前に集合。激しい戦闘になる事が予想されるから、軽く仮眠を取つておく事を薦めます」

それ以外に質疑の声は上がらず、報告は以上となる。

その後はメンバー全員で夕食を摂り、解散後、作戦に参加する意思のある者達はカミヤに言われた通りにそれぞれの部屋で軽い仮眠を取り、この後起こるであろう激戦に備えて体力の回復に努めるのであつた。

「覺悟……しねえとな……」

余談だが、この日昇った月は、何かしらの不吉な予感を暗示するの如く、血の様な紅色に染まっていたのだつた。

更新再開のお知らせ & 次作品サンプル

——自分の部屋で、作業を行っていた時だつた——

「おに〜いちゃんツ！」

唐突に、ノックも無しに部屋のドアが勢い良く開かれ、妹が俺の部屋の中へと入つて

来た。

「ん？ どうした？」

「わたしはこれからお風呂に入つて来ます！」

「お、おう……」

「お兄ちゃん……ゼツタイに、ゼ~~~~ツタイに、覗^{のぞ}かないでね！」

「わ、分かつた、分かつた……。覗いたりせえへんから、ゆっくり風呂入つて来い……」

「はい！」

一体何の用なのかと俺が尋ねてみると、何故なのかはよく分からないが妹は俺に対し
て、自分がこれから風呂に入るという報告をし、付け加えて入浴を覗くなど強く念押し
をして來た。

当然の事だが、実の妹とはいえ女性の入浴を覗くなどという破廉恥な真似をする訳にもいかず。そもそもその話、俺にはその様な事を実行する程の度胸も無いので、俺は妹に入浴を覗かない旨むねを伝え、彼女を風呂へと送り出そうとする。

其れに対しても妹は、何が嬉しいのかは知らないが笑顔で元気良く返事をすると、足早に俺の部屋から出て行つた。その途中で、俺の部屋のドアを閉めるのも忘れずにだ。

其れを見送った俺は、中断していた作業へと再び取り掛かるのであつた。

其から一時間くらいは経つんだろうか。

試行錯誤しながら作業を続け、漸くある程度の纏まりが見えてきたので、ひと段落つこうとした時だつた。

部屋の外から、ドタドタドタドタ、と慌ただしく階段を、そして廊下を駆ける足音が聞こえて來た。

やがて、その足音は俺の部屋の辺りで止まる。そして――

ガチャツ!!

「お兄ちゃんツ!!」

勢い良くドアを開ける音と、何やら此方を非難するかの様な厳しい口調の叫び声と共に

に、バスタオルを一枚身体に巻いただけというあられもない格好をした妹が、部屋の中へと駆け込んで来た。

いきなり入つて来られた事にもそうだが、妹のあられもない姿にも驚いた俺は、方言が滅茶苦茶に混ざつた口調になつてしまふ程に狼狽えつつも、冷静に彼女の突拍子もない行動の理由について尋ねてみる。

「うおおおおいッ!? ちょ、おまツ……なんちゅう格好ばしとんねん!? 一体どげんしだとよ?」

「そ、そんな事つて……」

が、妹から返つて来たのは俺の問い合わせに対する答えなどではなかつた。
兄であるとはいえ異性に裸に近い格好を晒してゐるにも関わらず、「そんな事どうだつて良い」と気にせず片付けてしまう妹の反応に、其れは女の子としてはどうなのだろうかと呆れてしまう。だが、そのお陰で俺の頭は大分冷静さを取り戻した。

で。冷静さを取り戻した事で気付いた事だが、妹の顔からは『怒り』の色が見て取れた。

「一体何故？　俺は彼女を怒らせてしまう様な何かをしてしまったのだろうか？」
などと考えていると、妹自ら憤いきどおつていている理由を語り出した。

「…………何で……」

「うん…………？」

「何でわたしがお風呂に入つてゐるのに、一向に覗きに来ないのッ!!?」

「…………うん…………？」

……ちょっと待つて欲しい。

……え？ 妹は今何と言った？ 我の耳がおかしくなつていなければ、『何で入浴を覗きに来なかつたのだ？』と聞かれた様な気がするのだが？

「……あー、ゴメン。もう一回言つてくれないか？ 聞き間違いをしたかもしけんから」

「だーかーらーー！ 何で覗きに来なかつたのつて聞いてるのツ！」

…………うん、見事なまでに聞き間違いなんかじやありませんでした……。
というか、『何で』と問いたいのは寧ろ俺の方なんだけれども。

「いやいやいや。何でつて言われても……そりやあ、お前が覗くなつて念押ししていつたからだろうが」

俺は妹から『覗くな』と言われた。ならば、言われた通りに覗きに行かなかつた俺の対応は正しい筈なのだ。

…………だというのにだ……

「何言つてお兄ちゃん!? 其処は普通、覗きに来るもんでしょう!」

妹から返つて反応がコレである。

うん、どう考へてもおかしいのは妹の方である筈だ。

であるにも関わらず、俺の方がおかしいみたいに思われているのは何故なのだろうか?
一体全体、妹の思考回路はどの様になつているというのだろうか?

「いやいやいや。お前こそ何言つてんだよ?『覗くな』って言われたら、言われた通りに覗きに行かないのが普通の筈だろ? なのに、何をどうしたら覗きに行くのが普通つて事になるんでしようか?」

「『押すなよ! 絶対に押すなよ!』って言われたら押したくなるし、実際にテレビとかじやそう言われたら絶対に押してくるじゃない! 其れと同じ理屈だよ!」

「いやいやいや。上〇竜兵のネタを基準に考へるなよ……」

で、何を根拠に考えているのかと思えば、とある芸人の有名な持ちネタだつたというオチ。

いやまあ、確かに現在に於いては『○○するな』＝『○○しろ』という意味で、お笑いの業界に限らず広く認識されてはいるけれども。

其れでも、額面通りに解釈するのが普通である筈だろう。

「どうかさあ……」

まあ、其れに関してはとりあえずそのくらいで置いておくとしてだ。

俺は妹の発言を聞いて、先程からずつと思つていた事が有る。其れは……

「其れだとお前……まるで、自分の裸を俺に見て貰いたいみたいじやないか」

そういう事だ。

まあ世の中には、逞しく鍛え上げた己の肉体や、美しく整つた己の身体を他人に見せ付け、愉悦に浸り、あわよくば誉められたいと思う人達も居るには居る。

だがしかし、そんな彼らでも最低限下着は着けている筈。余程の露出狂でもない限

り、自分の全裸姿を相手に見せる事には流石に抵抗感を抱くであろう。其れを女性が、あまつさえ異性おとこに対してもなれば尚更にだ。

「そうだよ！」

「まさかの肯定!? しかも即答かよッ!?」

我が妹も、なんだかんだ言いつつも本当は恥ずかしい筈だ。

……と、思つたんだが……：妹は俺の問い合わせに對して、恥ずかしがる様な素振りなど微塵みじんも見せる事無く、間を置かずして肯定の言葉を返してくれやがりました。

世の男どもからしたら泣いて喜ぶべき展開なのかかもしれないが、生憎とチキンな俺は、妹でその様な展開は求めちやいません！

「寧ろ、お兄ちゃんはわたしの裸を見たいとは思わないの？ 見てよ！ このシミ一つ無い艶々な肌を！ 級麗きれいでしょ？」

で、俺に対する羞恥心などまるで感じていないう様子の妹は、此方の思考が理解出来

ないとでも言いたげな表情を浮かべ、自らの二の腕を見せ付ける様にしながら俺に問う掛けて来る。

「…………ああ、うん…………まあ、綺麗だとは思うけど…………」

「そうでしょ!? 自慢のお肌なんだよ！ 此れはもう覗きに来て当然！ 寧ろ襲つて然しか

るべきなんだよ！」

「いやいやいや、無い無い。後者に至つてはもつと無いから…………」

妹の肌が綺麗である事は素直に認めよう。

だがしかし、だからと言つて覗きに行こうなどとは思わないし、ましてや襲おうなどとも思わない。

「何でなのッ!?」

「何でつて……そりゃあお前、俺とお前は実の兄妹だからに決まつてるだろ？」

「兄妹である以前に、男と女なんだよ!?」

「いやいやいや、普通逆だから。男と女である以前に実の兄妹だから、俺ら……」

其^はは偏^{ひどえ}に、俺達が血の繋^{つな}がつた実の兄妹であるから。実の兄妹での交わり愛はタブーというモラルこそが、最後にして最固の壁として俺の理性を護つてくれているのだ。

では、血の繋^{つな}がりの無い従兄妹^{いとこ}の関係であれば、もつと言えば、兄妹の関係でなければ据え膳^{すぜん}を頂くのかといふと…………多^{すこ}なりとも心は揺れ動くのかもしれないが、恐らくは『否』と答えるであろう。

『チキン』だの『ヘタレ』だと罵^{ののし}られるかもしれないが、俺としてはその様な犯罪紛^{まが}いな真似をするつもりは無い。其^がが『俺』という人間なのだ。

「もおーーツ！ お兄ちゃんの分からず屋ーーツ！」

「いや、んな事言われてもなあ……」

「ぐぬぬう……。そつちがその気なら……」

が、俺のその態度がどうにもお気に召さない様子の妹は、何を思つたか自らの身体に巻かれているバスタオルに手を掛け…………つて、ちょっと待て。……まさかとは思うが――

「わたしの方から見せてあげちゃうんだからくくツ!!」

「うええツ!? ちょ、おま――